

---

# インフィニット・ストラトス～死神と呼ばれるIS～

神食いの王

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜死神と呼ばれるIS〜

### 【Nコード】

N1222R

### 【作者名】

神食いの王

### 【あらすじ】

「世界で唯一ISを使える男」織斑一夏。しかし、ISを使える男は彼だけではなかった！日本に来たその少年は死神と呼ばれるISを持ったエジプトの代表候補生。さあ、死神と疫病神のお通りだ！！

## 死神のお仕事

「さあ〜と、ここら一帯は片付いたか・・・」  
そう言つて少年は自身のＩＳを解除する。

その少年は腰まである茶髪を三つ編みにし、黒い服を身にまっとうている。

少年の周りは何かの研究施設だったらしいが、今はその面影すら無い。あたり一面破壊しつくされ、今でも偶に爆発音が聞こえる。

「さつさとトンずらするか・・・っと、その前に・・・あ、『カトル』か？こっちは終わったぜ！！」

『ああ、『デュオ』ですか。御無事そうだなによりです・・・それでどうでしたか？』

お下げの少年は通信機で自身の仲間に通信を送るとかえつてきたのは少年の声が聞こえた。通信越しの少年は三つ編みの少年の無事に安堵すると、直ぐに調査の結果を聞いてきた。

「ダメだ。どうやらはめられたみたいだが、待っていたのは無人機20機、そう簡単に尻尾を掴ませてくれねえ見てえだ。」

お陰で施設もスタボロだ、とおどけた風に言つた三つ編みの少年の顔は心底残念そうであつた。

『そうですか・・・残念です』  
通信越しの少年もとても残念そうな声で落ち込んでしまった。

「ま、まあ！今回ダメでも次があるって！！な！？」  
そんな少年の様子にお下げの少年は慌てて励ました。

『フフ、ありがとうございます、デュオ。それでは一度戻つてきてください。また新しい任務です。』

そんなお下げの少年に励まされたのかカトルと呼ばれた少年は微笑しながら帰還命令を出した。

「うっへ〜また任務かよ。あ〜わかった、わかった。今からそつちに戻るよ！！それにそろそろこの国の軍の奴らが来たしな」

『ええ、では待ってます』

そう言って通信が切れると三つ編みの少年はため息をついた。

「ハア〜まったくカトルの野郎、少しは休ませろってんだ。っと、いけね。こんなことやってる前にさっさと逃げねえと」

そして三つ編みの少年「デュオ・マックスウエル」は自身の首に下げている黒いロザリオに手を当てて、

「さあ、行くぜ相棒。『タナトス』!!」

自分のISの名を呼ぶと黒い粒子が少年を包み込む。そして、粒子の放流が終わるとデュオの姿は何処にもなかった。

## 死神のお仕事（後書き）

申し訳ありませんが「インフィニット・ストラトス」自由の翼、大空に舞う」は更新を停止させていただきます。理由としては最近になって気付いたのですがキラとフリーダムを使ってる人が結構多いため・・・

なので、作者がガンダムシリーズでキラとフリーダムと同じくらい好きな機体とキャラのデュオとデスサイズヘルカスタムを使いたいと思います。

楽しみにしてくれていた読者に大変申し訳なく思います。

各種設定、追加設定、(前書き)

好きな物にプリンを追加と設定を色々修正

## 各種設定／追加設定

デュオ・マックスウエル 16歳

性別 男

容姿 上の上

イメージキャラクター デュオ・マックスウエル（新機動戦記ガンダムW Endless Waltz）

瞳 ブラウン

髪型（色） 茶色の三つ編み

特技 ハッキング、IS戦闘、プログラミング、楽器演奏

好きな物 海、ハーモニカ

人 家族、仲間、友達

食べ物 日本料理、プリン

嫌いな物 孤独、人の死

人 命を粗末にする奴、身内を傷つけられる事

食べ物 なめこ

所属 IS学園1年1組

エジプト代表候補生

ウィナー家専属IS乗り

専用IS タナトス 死神

資格 各種運転免許

性格

陽気で社交的であり気のいい性格で神出鬼没な少年。しかし、身内の者を傷つけられたりすると、冷酷な殺し屋に変わり敵を殲滅する。カトルとは幼馴染みで幼い頃から子供とは思えない戦闘力でカトルのボディガードをしている。

顔が広く、シャルロットや楯無、ナターシャやイリスと公流があ

る。（他にも色々あるがあまりすぎて把握しきれない。）  
趣味で始めた楽器演奏だが今では社交場でも披露しても恥ずかしくないほどの腕前になっている。  
ハッキングのプロフェッショナルで様々な情報通な所もある。（因みに東とはハッキング仲間がよくネットで色々な国にハッキングをにかけているが直接的な面識はない）  
IS戦闘では自らを「死神」と称しておる（実際、デュオのISの名前と形状で本当にそう思われている）。

カトル・ラバーバ・ウィナー 16歳

性別 男性

容姿 上の上

イメージキャラクター カトル・ラバーバ・ウィナー（新機動戦記ガンダムW Endless Waltz）

瞳 黄金

髪の色 金

特技 バイオリン演奏、料理、絵画

好きな物 音楽、デュオをからかう事、ライオンを始めとした動物全般（物？）

人 家族、仲間、友達

食べ物 母親の手料理

嫌いな物 人の悲しむ顔

人 命を軽く見る者

食べ物 お酒（食べ物？）

所属 ウィナー家財団御曹司

ウィナー家財団副社長

専用IS 無し（適正なし）

性格

穏やかで心優しい性格。芸術のセンスは天才的で美術館に展示されるほど。

幼い頃からウイナー家の跡取りとして育てられ、周りが大人だらけで友達と呼べる人がいなかったが、デユオと出会い幼馴染みで唯一、一人の少年として接してくれる数少ない友達で親友。

ISの適性は無いが経済やIS開発面といった様々な面でも天才的な才能を発揮し、史上最年少で副社長の地位にまで上り詰めた。

現在はデユオと共に『亡国機業』を追っている。なお、追っている理由は今のところ不明である。

< IS >

タナトス  
死神

デユオの専用機で第四世代IS。開発者、設計者共に不明。

悪魔のような翼と死神の様なフォルムをしており、周りから『黒い死神』と怖れられている。待機状態黒いロザリオ。

外見は「ガンダムデスサイズヘル（EW版）」に似ている。

隠密強襲型ISで既に第二形態セカンドシフトしている。単一仕様能力はISの八

イパーセンサーすら騙す事が出来る『ハイパージャマー』。『ハイパージャマー』は姿を消すだけでなく体温、音といった全てのセンサーを無効にするだけでなく、『ハイパージャマー』の出力を調整すれば幻覚を作りだしたり、特殊な力場を無効にしたりできる。一見すると万能のようにみえるが『ハイパージャマー』を使用中は防御力は皆無に等しく、もし『ハイパージャマー』作動中に攻撃を受けてしまうと場合によっては一撃で戦闘不能になってしまう。更に『ハイパージャマー』は連続使用が出来ず、一回発動すると次に発動するまでには数十秒のタイムラグがある。

< IS 武装 >

ビームシザーズ

タナトスの主武装。自身の伸長ほどある大鎌でビーム刃の後ろにはバーニアが付いており、斬る力を倍加する。またビーム刃の形を変えてビームランスに変える事も出来、ビーム刃を圧縮して飛ばす事も出来る。

バスターシールド

棺桶をイメージした楯。楯としても使えるし、楯の先端からビーム刃が発生し射出したり、そのまま剣として使う事も出来、攻防一体の武器。また、誘導性に優れており、ロックした相手を追尾する事も出来る。ただし、連射不可で一発限り。

アクティブクローク

普段は外套の様に体の胴体前後面を覆っているが展開すると悪魔の翼のような形のウイングに変わる。アクティブクロークは防御として使えて装甲の表面を特殊な電磁フィールドが覆いビーム兵器を無効化する能力を持つ。しかし、アクティブクロークの電磁フィールド以上のビーム攻撃や許容量以上の実弾の攻撃を受けすぎればアクティブクロークは強制的に解除される。

ダークネスフィンガー

タナトスの両掌に装備されていて、タナトスの全武装の中で最強の威力を持つ。ただし、バスターシールドの様に連発はできず、出力を抑えても二発しか撃てない。(ただし、これは片腕で数えてなので、両手を合わせると四発撃てるが、四発目でシールドエネルギーがゼロになる。)ダークネスフィンガーミニステリアス・レイディの原理を言えばタナトスの両手には楯無の霧纏の淑女同様に破壊用のナノマシンが仕込まれており、それを開放する事によって破壊的な威力を持つ。

<企業>

ウイナー財団

国際IS委員会のスポンサーで幹部の一人。世界屈指の大実業家であり、由緒正しき家柄。主に第三世代ISの部品や武装等の開発、生産等を主にしている。また、ISの他にもエジプトの企業の殆どを取り仕切っている。

得た利益の殆どは孤児院や国際IS委員会に援助したり、自然保護にも力を入れている。

## 各種設定〜追加設定〜（後書き）

パルマフィオキーナは止めてダークネスフィンガーにしました。色的に考えて・・・

## 死神と若き獅子、死神、日本に渡る

IS、正式名称<インフイニット・ストラトス> 宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。総機体数は世界で467機。 とある事件を切欠に「パワードスーツ」として軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。十年経った現在では世界各国の軍に第2世代機が標準配備され、第3・第4世代機の研究開発が進んでいる。

その戦闘能力はそれまでの主力であつた戦闘機や戦車をも凌ぎ、世界そのものを変貌させた。

しかし、そのISの唯一の欠点、それは女性にしか扱えない事。これにより緩やかに男尊女卑から男女平等に変わっていた世界は急激に女尊男卑が当たり前となつた。

### エジプト空港

「まったく、嫌な世の中になつたぜ」

空港に着いたデュオの第一声がこれだ。このエジプトの地でもその女尊男卑の影響がでている。今ではISを使ったテロ等結構耳にしている。

「ま、俺には関係ないけどね。んな事より相変わらずあちい」。

干物になつちまうぜ」

この炎天下の中、全身黒ずくめでいる方がどうかしているが、デュオはそんな事はお構いなしで額に着いた汗をぬぐつた。

「迎えはつと・・・いたいた」

ゲートとより少し離れた所にシルバーのリムジンが止めてあつた。デュオはそのリムジンの中に入り込むとリムジンは音もなく発進した。

ウイナー財団本社へ副社長室へ

広い副社長室の大きな机で金髪の少年がパソコンを操作しながら事務をやっていた。

事務仕事が一段落し、金髪の少年が椅子に寄りかかるとノックがして間もなく、

「カトルへ今帰ったぜ」

重厚な扉を開けデュオは疲れたように部屋の主、カトルに帰還したことを告げた。

「あ、おかえりなさい、デュオ。長旅御苦労さまでした」

「まったくだぜ、アイツ等がカナダにいるって情報つかんで行って見たら待ってたのは無人機だけ、やってらんねえっての」

そっぴいなながらデュオは部屋に備え付けられている高級そうなソファーにドカッと座ると疲れたようにもたれかかった。

「お疲れ様です。今飲み物入れますね？」

「カトル様、それはわたくしめが・・・」

「ありがとう、ラシード。デュオは紅茶でよかったよね？」

「さっすが親友、よくわかってんぜ！」

「フフ、ありがとう。ラシード、紅茶を二つ」

「ハッ」

カトルの傍に控えていた屈強な男、ラシードが慣れた手つきで紅茶を入れカトルとデュオにそれぞれ配った。

二人はラシード入れた紅茶を飲み一息つく。

「で？一体次の任務ってのは何なんだ？」

前置きなしてデュオはカトルに尋ねた。カトルは紅茶をテーブルに

置き、

「その話をする前に、ラシード」

「ハッ、これを・・・」

そう言つてラシードはデュオに新聞を渡した。

「ん？なにに、『世界で唯一ISを使える男、織斑一夏』だと？

おいおい・・・」

「ええ、理由は分かりませんがデュオ、貴方と同じ男でありながらISを使える存在が現れました。」

自分以外でISを使える男という事実には驚いたが何より注目すべき点は、

「『織斑』つて千冬の姉御の弟か、こいつ？」

「ええ、そして彼は昔誘拐されています」

「マジか？」

「はい。」

デュオは探るような眼でカトルに聞いてきたが、カトルは真摯な目で答えた。

「なるほど、つまり俺にこの織斑一夏つて奴を探ればいいの？」

「いいえ、違います。」

「あん？」

カトルの否定の言葉にデュオは疑問の声をあげる。

「違つていうんなら、じゃあ何なんだよ？」

訳が分からずにカトルを睨むとカトルは苦笑しながら降参のポーズをして、

「アハハ、そう睨まないでください。織斑一夏の事はただの建前で本当はそろそろデュオに表舞台に立つていただこうと思ひまして」

「ハア？」

「ラシード、アレを。」

「ハッ」

デュオが呆然としているとカトルに言われラシードが封筒とスーツケースを持ってきて手渡された。

「『IS学園入学案内』だと・・・？」

「ええ、それでそっちが制服です」

カトルがそう言った後、ラシードがケースを開けるとIS学園の制服が綺麗に折りたたまれていた。

「ええっと、カトル？話が読めないんだが・・・」

「つまり、デュオに長期休暇を与えますのでその間に高校生活を楽しんでください。」

「ハア！？長期休暇！？」

「ええ。」

笑顔で言ったカトルにデュオは驚愕した。

「ちょ、ちよつと待てよ、カトル！長期休暇って俺はそんなのだした覚えないぜ！！」

「僕が出しました」

「いやいや、そんな事より俺が日本に行ったらお前の警護はどうすんだよ！？」

「ラシードやマグアツク隊の皆が守ってくれますし」

「まてまて！それよりもアイツ等の情報だつて未だつかめてねえつてのに・・・」

「だからです」

デュオの言葉にカトルは真剣な顔になり、続けて、

「この所デュオ、君は働きすぎです。奴等の行方がつかめないで焦る気持ちは分かります。ですが、その所為で君が体を壊すような事はやめてください」

「カトル・・・」

カトルは悲しむような瞳でデュオを見つめ、傍に控えるラシードがかなり怖い目でデュオを睨みつける。

「あー！わかった、わかった！！行ってやるよ日本に！！」

「デュオ！！」

観念したように頭をかきながらデュオは了承する。ぶっちゃけ、ラシードの顔が怖すぎた方が強いが、まあ、あえて理由は語るまい。

「それで、何時日本に行けばいいんだ？」

「はい！夕方の飛行機で日本に発ってください。荷物などはもう此方でまとめておりますので、後はデュオだけです」

「って！事後承諾かよー！もし俺が断ってたらどうしてたんだ！？」

「でも、断らなかつたでしょ？」

「うっ・・・」

カトルの一言にデュオは言葉に詰まり半ばやけくそ気味に

「あーもう！負けだ、負けだ！ちつくしょく。」

そう言いながら、部屋を出ていこうとするデュオにカトルはクスクス笑いながらいかにも今思い出したかのように、

「フフ、ああそつだ。向こうには『楯無さん』もいるから会ったらよろしく言っってくださいね？」

『楯無』という単語にデュオは固まりギギギツ、と壊れた玩具の様に首を回しカトルの方に振り向く。

「え？た、楯無？楯無ってあの『更識楯無』？アイツが？いるのか？IS学園に？」

「はい。」

その言葉にデュオはサアツと顔を青ざめ、ガタガタと震え全身から嫌な脂汗が湧き出てきた。

「か、カトル？まさかと思うけどアイツに俺が行くって伝えたりは・・・」

「安心してください。」

デュオはカトルのその笑みに安堵する。流石は親友、俺の事はよくわかってんぜ。そう言おうとしたデュオにカトルは、

「もう連絡しましたから」

「！！！？」

ダッ！！

ガシイイ！！！！

脱兎の如く逃げようとするデュオにラシード他数名のマグアナック隊が取り押さえる。

「い、嫌だー！ー！」

「ええい！大人しくしろデュオ！」

「お前らアイツに会ったことねえから、んな事いえんだよ！！アイツに会ったら・・・」

ジタバタともがいていたデュオは突然、止まるとガタガタと震えだした。どうやら過去に何かあつたらしい。

「大丈夫ですよ、デュオ。向こうには千冬さんもいますし、襲われる事はないと思います（多分）」

「なに？千冬の姉御もいんのか！？それなら・・・いやいや、アイツならそれすらいくぐる可能性が・・・」

片手で顔を覆いブツブツと今までの経験をもとに導き出される答えを出していると、カトルが呆れたように、

「何でそんなに嫌がるんですか？嫌いなんですか？楯無さんの事」

「いや、別に嫌いってわけじゃねえし。人としてはむしろ好きだぜ？だけど・・・」

「だけど？」

「アイツが俺を見る目が偶に肉食獣のそれに変わってな？」

「なら大丈夫ですね。ラシード」

「ちょ！？オイ、離せ！カトル！！全然大丈夫じゃねえ！！」

そのままデュオはラシード達に引きずられて部屋を後にした。

「フウ。」

デュオが出ていったドアを見つめた後、カトルはため息をつきソファーにもたれかかった。

本当は自分もデュオと一緒に学校に通いたかった。しかし、彼は

S操縦者で自分のボディガード、自分はISの適性が無く大財閥の跡取り、身分差は誰が見ても明らかだ。しかし、あの黒衣の少年デュオはそんな自分に普通の友達のように接してくれる。

普通なら許されないが、カトルはデュオの明け透けな態度がとてもし心地よかった。何より自分の事を親友と呼んでくれる事が何よりも嬉しかった。

だから、いつも自分を守るために傷ついているデュオに少しでも楽をさせようと、自分なりに頑張っていた。しかし、デュオは戦う事を止めない。自分が頑張れば頑張るほど彼も必死に戦うだろう。だから、偶には彼に戦闘とは無縁の学園生活をプレゼントしても罰は当たらないだろう。

自分は彼の上司だから。

「ん？」

ふと時計を見ると結構時間が立っていた。空も日が沈み始めてきた。どうやら、結構な時間物思いに耽っていたようだ。

「さって、残りの仕事を片付けよう!!」

そう自分を奮起し、カトルは仕事に取り掛かった。

死神と若き獅子、死神、日本に渡る、（後書き）

デユオはどっちかというギャグキャラに近いです。  
そして次回から原作に入ります。

## 死神とIS学園〜白騎士との出会い〜

IS学園校門前

校門前でIS学園の制服を着て長い茶髪を三つ編みにした少年デューオがどんよりとした雰囲気で校門前に立っていた。

「ハア〜遂に来ちまったぜ。飛行機の関係で遅れが出た時はラッキー！って思ったけど、結局変わんないし、むしろどうせだったら遅れない方がよかつたんじゃね？」

ハア〜とまたため息をした後、心底嫌そうにIS学園を睨みつけるのと、諦めたように学園の中に入っていった。

「カトルの奴〜俺よりまずお前の方が休息が必要だろうってんだ」  
中に入るまで永遠とカトルに対する文句を口にしていた。

「えっと、それでは皆さん一年間よろしくお願ひします」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ここ、一年一組で副担任の『山田真耶』がクラスのみんなに挨拶をしたが、誰一人返事をする者はいなく一人の生徒に釘つけになっていた。

それがこのクラスでたった一人の男、『織斑一夏』である。一夏は周囲の視線が気になるか、とても居心地悪そうに下を向いていた。

「え、えっと！じゃ、じゃあ自己紹介に入りますね。出席番号順におねがいします」

そんなクラスの雰囲気を感じ取ったのか、真耶は多少どもりながらもクラスの自己紹介を始める。

そんな中でもクラスの視線は一夏に釘つけで一夏はとても生きた心地がしなかった。

そして、

「織斑君？織斑一夏くんっ」

「は、はい！？」

気まずさと緊張から真耶に呼ばれているのを気付かず反応が遅れ声  
が裏返ってしまった。

周りからクスクスと笑い声が聞こえて、ますます落ち着かない気分  
だ。

「あ、あの、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？で、  
でも次の自己紹介は織斑君の番なんだよね。えっ、えっと自己紹介  
してくれるかな？だ、ダメかな？」

「あ、いえ、わ、わかりました自己紹介ですね、っていつかそんな  
怯えないでください」

怯えたようにこちらの様子をうかがう真耶に一夏は戸惑いながらも  
自己紹介を始める。

「えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏は何の変哲もない普通の挨拶をしたが、クラスの『え？それで  
終わり？』的な視線が一夏の全身に突き刺さった。

「以上です」

ガタタっと思わずっこける女子。どんだけ期待してたよ。

「あ、あのー」

背後から声が掛けられる。どうやらあれではダメだったらしい。

そこへ、

スパアン！！

「いつて〜〜！！」

あまりの痛さに一夏は蹲り、この痛みに懐かしさを覚え恐る恐る振  
り向くと、そこには黒いスーツに同色のタイトスカートを来た美人、  
『織斑千冬』が右手に出席簿を握り、左手に長い茶髪を三つ編みに  
したIS学園の制服を着た少年を引きずって立っていた。

「げえ！ギルガメッシュ！！」

スパアン！！

また、千冬の出席簿が炸裂した。今度はさつきより痛そうだ。

「誰が黄金の英雄王だ、馬鹿者」

突然の自身の姉、千冬の登場に一夏が混乱している中、千冬は茶髪の少年を引きずりながら真耶の方へ向く。

「お、織斑先生。会議はもう終わられたんですか？それとそちらの生徒は……」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけて悪かったな。それとこの馬鹿者はコッソリ教室に忍び込もうとしていたのな」

ほら、起きろ。と茶髪の少年を頭を出席簿で叩いた。ひでえ〜。

「いつて〜な、千冬の姉御。もう少し優しい起こしかたねえんすか？」

「お望みなら永遠に起きないようにしてやるぞ？それと、織斑先生だ」

パンン！！

少年のおどけた様な態度に千冬は底冷えするような声で答え、少年の頭に出席簿を炸裂させた。

「ほら、ついでだ。さっさと自己紹介をすませろ。」

「つつ〜。たく、相変わらず人使いが荒いんだから……」

「何か言ったか？」

「い、いえ！なんも言っていないっす！！」

千冬がまた出席簿を構えようとしたのを見て、三つ編みの少年、デュオは慌てて立ち上がり、

「え〜自己紹介が遅れました。俺はデュオ、逃げも隠れもするが嘘だけは言わない、デュオ・マックスウエルだ。よろしく！！」

デュオは人懐っこい笑みでクラスに挨拶をすませると、一夏の隣の空いている席に座る。

「おめえが、千冬の姉御の弟の織斑一夏だろ？」

「あ、ああ。そうだけ。えっと、マックスウエルでいいの？」

「デュオでいいぜ。マックスウエルって長いだろ？」

「なら俺も一夏でいいぜ」

「おう、よろしく」

そう言ってお互いに握手をすると突然デュオが、

「グスッ」

「えー？おいおい、どうした！？」

いきなり目元を覆い泣きだした。握手していきなり泣かれるとは思わず一夏は慌てながらデュオに問いかける。

「い、いや、あの姉御と暮らしてて、一体、今までどんな辛い人生を過ごしたのかを考えると・・・うう！」

「は？」

「喧しいわ、馬鹿者共」

スパパァン！！

「っつてっつて！！！！」

二人のやり取りを見ていた千冬はまたまた二人の頭に出席簿を炸裂させた。

「フン、まあいい。それではこれにてSHRを終了する。諸君らはこれからISの基本的知識を半月で覚えて貰う。その後実習だが、基本動作は半月で覚えろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんとという鬼教官、これで学園の制服ではなく迷彩服を着ていたらここは軍の訓練所に早変わりだ。

痛みに耐えながらデュオはそんなくだらない事を考えていた。

「……おい、一夏。無事か？」

「無理、っていうかさつきからクラスと廊下の視線がすっげーいてえ」

「あーまあ、確かに……」

そう言っただけで周りを見渡すと教室ではクラスメイトの廊下では2、3年の先輩の視線が俺と一夏の二人に集中している。

（なんつうか、ここまで露骨に注目を集めてるといっそ清々しいな。）

今の状況にそんな感想を抱いてると、

「ちよつといいいか？」

「え？」

「あん？」

「……箒？」

「……」

って知り合いだよ。

いきなり一夏の名を呼んだのは長い黒髪をポニーテールにし、少スキつそうな眼をしたどこか日本刀を思わせる雰囲気を出す少女が一夏の前に立っていた。

「廊下でいいか？」

突然の事で一夏が反応に遅れてると、箒と呼ばれた少女が廊下に向かいながら、

「早くしろ。」

「お、おう。じゃ、デュオ。行ってくるわ」

「おう。行って来い」

手をひらひらと振りながら、一夏を見送ると一夏は箒と共に廊下に出ていった。

「ぶあゝあ、さってと……」

俺一人でこの視線を受けんのはキツイし・・・

「寝よ」

机に突っ伏すとそのまま眠りに入った。

余談だがこの後授業をしに来た千冬の姉御に出席簿喰らったのは言うまでもない。

二時間目終了のチャイムと共に一夏は机に突っ伏した。心なしか頭から湯気が出ている。

「おい、どうした一夏。」

「・・・ああ、デュオ。どうしたって、今の授業、専門用語の羅列で全然理解できなかった」

「・・・マジ？」

「マジ」

目を見開いて信じられない様に聞くデュオに一夏は真剣に答える。

「事前に資料配布されたじゃねえか、あのぶ厚いの・・・」

「アー、それなら古い電話帳と間違えて捨てた」

「アホだろ・・・」

「うつ・・・面目ない・・・」

デュオの呆れたような視線が堪えたのか一夏はとてもいたたまれない気持ちになっていった。

「ハア、仕方ねえ。今度ノートと一緒にそれも渡してやるよ」

「マジか!? サンキューデュオ!!! やっぱ持つべきものは友達だよな!!!」

「一週間、食券を奢りな？」

「・・・」

喜ぶ一夏のテンションがデュオの一言で一機に急降下した。

「ちよつと、よろしくて?」

「あん?」

「へ?」

そんなやり取りをしていると、唐突に後ろから声を掛けられたので振り向くとそこには長い金髪でいかにもお嬢様な雰囲気醸し出した少女がいた。

「訊いてます?お返事は?」

「あーなんでしょか?」

「あ、ああ訊いてるけど・・・なんの用件だ?」

「まあ! なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも栄光なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら?」

(あゝ、思い出した。確かこいつはイギリスの代表候補生の『セシリア・オルコット』だったな。家はイギリスの名門貴族だったけど典型的なお嬢様だな)

デュオが事前に調べておいた情報と照らし合わせていると、

「悪いな、俺達は君が誰か知らないし」

(知ってるけどな)

だが、ここはあえて知らないふりをしておこう。なんか面白そうだし・・・

「わたくしを知らない?このセシリア・オルコットを?イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!」

おーおーかわいそうに、完全に一夏のペースじゃん。

「あ、質問していいか?」

「フン。下々のものの要求に応えるのが貴族の務め、よろしくてよ」「代表候補生ってなに?」

は?

「っていかどうした、デュオ?腹なんか抱えて?」

「ぶっくくくく、い、一夏?ま、マジで、い、言ってるの?」

「おう。」

「あつはつはつはつは!!!!」

堪えきれないといった感じでデュオは大声で笑い出した。一夏は訳が分からずにデュオを見ていると、

「あ、あ、あ……」

「『あ』?」

「あなた、本気で言ってますの!?!」

すごい剣幕でセシリアは一夏に詰め寄った。

「おう。知らん」

「アハハハハ!!!!」

「……貴方は何時まで笑ってますの!?!」

何時までも笑っているデュオにセシリアは苛立ちをぶつけるかのようにならぬ。怒鳴る。

「で、代表候補生って何?」

「ひひひひ……えつとだな、こ、国家代表IS操縦者の候補生、お前にもわかりやすく言えば昔の千冬の姉御の立場になる前、一応エリートって事になるな」

やっと笑いが収まったのか、一夏の問いにデュオは苦しそうに答えた。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくするだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただけ?」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの?」

「ぶふつ、つくつくつく……」

そんな二人のやり取りにデュオはまた吹き出し、腹を押さえて必死に笑いを抑えた。

つていうか、今のクラスの空気の中笑えるところの男案外すごいのかもしれない……。そうクラスの女子は感じていた。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に

入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っただけでもう一人の方も全然知的さにも欠けるし、ホント期待外れですわ」

「俺に何か期待されても困るんだが・・・」

デュオは未だこみ上げる笑いと格闘中で応える余裕がない。

「ふん。まあでも、わたくしは優秀ですから、貴方達の様な人間にも優しくしてあげますわよ」

それが優しくする者の態度か、と言うツツコミはあえて言わないでおこう

「ISの事でわからない事があれば、まあ……泣いて頼まれれば優しく教えて差し上げてもよくなってよ。何せわたくし、入試の実技試験で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

やけにに唯一、を強調するセシリアに「夏は一つ疑問に思う事があった。

「入試つてあれか？ISを動かして戦う奴」

「それ以外にないでしょ」

「あれ、俺も倒したぞ」

「は・・・？」

「デュオはどうだった？」

「あーっと、確か勝ったぜ？」

「何故に疑問形？」

「いや、一々負かした相手を覚えんのがめんどくせえだけだ」

デュオ達がそんな会話をしていると固まっていたセシリアがようやく再起動して、

「わ、わたくしだけと聞きましたが・・・」

「女子だけって落ちじゃないのか？」

「ドンマイ！」

ピシッと空気にひびが入る音が聞こえた。

「あ、貴方達、教官を倒したっていうの！？」

「だから、そう言ってんじゃねえか」

「た、たぶん」

「多分！？多分ってどういう事かしら！？」

「えーと、落ち着けよ、な」

「これが落ち着いて」

丁度その時チャイムが鳴った。

「くっ！また後できますわ！逃げないことね！よくって！！」

そう言っただけでセシリアは自分の席に戻っていった。

「入学早々厄介なお嬢様に目を付けられたな、一夏？」

「お前もだろ？デユオ」

ハアと二人揃ってため息をつき次の授業の準備をした。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

1、2限とは違って教壇に立っているのは真耶ではなく千冬であった。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと、千冬が今思い出したかのように話を始めた。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。因みにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいる。」

ざわざわと教室が色めきだつた。一夏はまだ訳がわかっておらず、『クラス長』と言う単語で理解し、めんどそうな役職と言う事はハッキリと理解できた。

「はい！私は織斑君を採用します！！」

ほら呼ばれたぜ、一夏。ってなんだその「このクラスには織斑って二人いるんだ。」って顔は。このクラスに織斑はお前と千冬の姉御だけだぞ。

「わたしはマックスウエル君がいいと思います！！」  
「ゲツ」

おいおい、クラスメイトAよ何でそこで俺の名前出しちゃうわけ？  
つうか一夏、何『デュオが代表やるのか』って顔してやがるお前も呼ばれてんだよ。

「織斑とマックスウエル・・・っと、他にはいないか自薦他薦問わないぞ。」

「お、俺！？」

ようやく現実に戻ってきた一夏が勢いよく立ちあがった。

(つていうか名前が拳がった時点で気付けよ・・・)

「織斑、席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？いないならこのまま投票で決めるぞ」

「い、いや、ちよっと・・・」

「納得いきませんわ！！」

まだ、駄々をこねる一夏の声を遮って後ろからセシリアが立ち上がって異議を唱えた。

「そのような選出認められません！大体実力から行けばこのわたくしが代表に選出されるのは必然ですが、物珍しいという理由で運だけの男が選ばれるなど論外ですわ！そんな屈辱の一年間をわたくしに味わえとおっしゃるんですか」

「ひでえー言われようだなオイ」

「ハア、オルコット。確かに織斑は大した実力は持っていない」

「おいおい」

そんなセシリアの態度に千冬は呆れながら、話し始めた。

「だが、マックスウエルの実力は心配する必要はないぞ」

「はい？それは、どういう・・・」



未だ固まっているセシリアに問いかける。

「はっ！そ、そうですね。わたくしもクラス代表に立候補いたしますわ！！」

固まっていたセシリアは千冬の呼びかけに再起動し、高らかと宣言した。

「セシリア・オルコットと・・・もういないか？いないならこれで締め切るぞ。」

そう言っただ冬が周りを確認して、誰もいない事を確認すると締め切った。

「では、この三人からクラス代表を決める。異論はないな？」

「ちよ、ちよっと待ってよ！俺はそんなのやらない」

「くだい、一度選ばれたんだ。覚悟を決めろ」

「ぐう・・・」

取り付く島もない。そこへ背後から、

「織斑一夏、デュオ・マックスウェル！！」

「ん？」

「なんだ？」

セシリアがビシツと二人を指さしながらこう宣言した。

「クラス代表を掛けて決闘ですわ！！」

この一言が原因で『IS学園の黒い死神』の伝説が流行るのをセシリアはまだ知らない。

死神とES学園〜白騎士との出会い〜（後書き）

千冬との関係は何時か書きます。

死神と学園最強く久々の再会、貞操の危機！？そして、死神の強さの秘密く

く放課後く

「ふいふやつと終わったぜ」

デュオはため息をつきながら寮に向かっていた。あの後一夏が決闘を了承した所為で流れるに自分も受ける羽目になってしまった。

（他の国の代表候補生と戦っても大丈夫か？後で文句とかこねえよな？）

そんな事を考えながら、指定された自分の部屋に着くと鍵を開けようとして、ハタと気づいた。

（カギが開いてる？この部屋の住人は俺だけのはずだろ？じゃあ、一体どうして・・・）

デュオはゴクリと唾を飲み込みドアノブに手を掛け、恐る恐る開けると、そこには・・・

「あっ！帰ってきたの、ダーリン。もう遅かったじゃないか」  
ボタン！！

（オケイ、落ち着け。今は幻覚だ。アイツがこの部屋にいるはずがない。・・・よし！）

そして、もう一度ドアを開けると、

「も〜！！いきなりドアを閉めるなんて失礼だよ？デュオ。」

「何でいんだよ楯無！！」

デュオはガックシと膝をつきながらこの学園の生徒会長にして『学園最強』の異名を持つ『更識 楯無』を見た。楯無は扇子を開きながら朗らかな笑顔でデュオを迎えた。

何故かスク水エプロン姿で・・・

「っていうか、何でスク水エプロン！？そしてどうやってここに入ってきた！？」

「え〜久々の再会だから、インパクトのある衣装で来たんだけど・・・嫌だった？」

そう言つて上目使いでこちらを見る楯無に、デュオは

「むしろ、大好きです！！つて違うわ！？俺が聞きてえのは、どうやってここに入ったのかつて聞いてんだよ！？」

「そこは、ホラ。針金でちよちよと・・・。」

「思つきし不法侵入じゃねえか！？」

「大丈夫！私、生徒会長だし！！」

「むしろ、一番やつちやいけねえ立場じゃね！？いいのか、この学園。こんな奴が生徒会長で！？」

「えへへ〜そんな褒めないでよ」

「今のをどこをどう取つたら褒めた事になる！？」

頬を染めながらイヤン、イヤンつと悶える楯無にデュオは、

(ダメだこいつ・・・早くなんとかしないと・・・)

「つたく、相変わらずだな、楯無？」

「そう言つデュオこそ、相変わらずだね？」

二人は互いに握手しながら笑いあつた。

「それより聞いたよ？早速イギリスの代表候補生と試合するらしいじゃない」

「幾らなんでも情報速くねえか？」

「本音がデュオとおんなじクラスだからね」

「あ〜そう言えばいたな。クソツ情報のソースはアイツか。」

本音とは本名『布仏 本音』そして本音の姉『布仏 虚』。この二人の家系『布仏』は代々コイツの家『更識家』に使えていて、昔で言つたら王様と家臣？ツと言つ間柄だ。と言つコイツの家も裏工作を実行する暗部に対する対暗部用暗部「更識家」の当主であり、『17代目の楯無』。その実力はこの学園最強の実力者にしてロシアの代表である。

「で？それだけの為に来たのか？」

「そうだよ？」

探るように楯無を見ると、彼女は人を食つたような笑みを浮かべながらデュオに言う。

「それだけなら、さつさと着替えて帰った帰った。生徒会長が男の部屋に二人つきりとか、スキャンダル以外の何物でもねえぞ？」

「え、私はそれでもいいよ？」

「お前はよくても俺がよくねえ。それに俺はシャワーも浴びてえし、飯も作んねえといけねえから、お前にかまってるらんねえよ」

「あ、ご飯なら私が作つといたよ？」

「なに？」

ホラッと指さす先には部屋の備え付けのテーブルに豪華な日本料理が並べてあった。

「……………」

「ね？大丈夫、味の心配はしなくていいよ。花嫁修業はバッチリしたから」

エツヘンッと胸を張る楯無。ってというか胸を張るとその豊満な胸が揺れて……ゴホンゴホン……！！

「じゃあさつさとシャワー浴びるか」

「お背中流しましょうか？」

「ば、馬鹿野郎！？な、何言ってるやがる！？」

猫撫でしたような甘い声に不覚にもドキツとしたが、なんとか理性を保ち拒否する。

「いいか、絶対は言ってくんなよ！？」

そう釘をさしデュオはシャワールームに入ってしまった。

「入ってくんなくていったらどうが……」

「あ、アハハ、ゴメンゴメン。どうしても我慢できなくてね」

「お前な……」

まったく悪びれもしない楯無にデュオは怒りを通り越してあきれた。その後、デュオがシャワールームでシャワーを浴びていると、突然バスタオルで身を包んだ楯無が入ってきてデュオはかなり焦り混乱した。

慌てて彼女を追いだそうとした時に誤ってバスタオルを引っかけてしまい取れた先には・・・先ほどのスク水ではなくマイクロビキニを着ていた。

「いくらアレは水着に分類されるとはいえ面積少なすぎるだろうが・・・第一、着てなかったらどうすんだよ？」

「んゝ美味しく頂いちゃう？」

「お前な、もう少し自分を大事にしるよ」

楯無が用意した料理を口に入れながらデュオは彼女にそう言うが、

「大事にしてるよ？こんなこと言うのはデュオだけだもん」

「／／／／／」

真顔ですごい事言う楯無にデュオは顔を真っ赤に染めてそっぽを向いた。

「ゝゝゝ」

そんなデュオの反応がお気に召したのか、楯無は鼻歌交じりにご飯を口に入れた。

そんなこんなで初日は穏やかに過ぎていった。

かに思えた。

夜、デュオは就寝しようとしてベットに入ったがそこである事に気付いた。

「おい、一応聞くぞ。なにしてやる」



「おう、おはよってどうしたんだデュオ！？そんなげっそりした顔して!？」

「ああ、いや、昨日、忍び込んだ猫に貞操を狙われかけてな・・・」  
「は？」

「ああ、いや、何でもねえ。ただ、千冬の姉御が駆け付けてこなかったら、マジでヤバかった・・・」

「どうやらあの後、騒ぎを聞きつけた千冬がデュオの貞操を守ったようだ。」

「まあ、何の事かわからないが・・・それよりどうして昨日、みんなお前がエジプトの代表候補生で言ったらあんなに驚いたんだ？まあ、彼が驚くのも無理はない。同じ代表候補生のセシリアがいてもあんなに驚きはしなかったのだから、

「あゝそれはだな、俺の国エジプトは『完全実力主義』だからだ」  
「??？」

意味がわからないようで一夏は首を傾げている。

「簡単すぎたか、一夏、国際IS委員会は知ってるな？」

「おう、国のIS保有数や動きなどを監視する所だろ？」

「そうだ。そこで、ISの代表の選出なんかもやってる。が、俺の所属国、エジプトではその選出を自国で独自にやってんだ」

「へ〜」  
なんとなくわかってなさそうな一夏にデュオはひとまず置いておいて、

「そこで、エジプトの選出方法はまず、1対1のIS戦闘のドーナメントをしその優勝者が代表候補生になる」

「ふんふん」

「こっからが一番大変だ。その後一年間自身のISを肌身離さず持っている事と月に行われる大体50人、多い時には100人のバトルロワイヤルで生き残る事だ」

「100人!?そんなにISあんのかよエジプト!」

「んなわけねえだろ。各国からIS操縦者を募集して、そして期日

までに集まった選手とバトルロワイヤルすんだよ。因みにその場合は何回でも出場可。」

「いいのか？他の国のIS操縦者が代表候補生になっても？」

「エジプトは強ければどの国の出身でもいいんだよ。言つたら？」  
「完全実力主義」だつて。俺だつて生まれはアメリカだぜ？」

「へへそうだったんだ。……ん？ちよつと待てよ。もしお前が負けた場合どうなんだ？」

「負けたらその時点で代表候補生の称号を剥奪されんだよ。因みに一度負けたらその年はもう参加資格を失つちまうんだ」  
「な！？」

一度でも負ければ資格剥奪、それはとてつもないプレッシャーになる。しかも百人でバトルロワイヤルと言うと、つまり自分を抜いて99人ものIS操縦者と闘わねばならないのだ。

「しかも、大会が無い時でも24時間、俺を狙う奴がいるからな、正直最初の2カ月は気の休まる暇がなかったぜ」

「マジかよ……」

エジプトの過酷な代表選出に一夏は驚愕していた。つまり、こいつは代表に選ばれてから今まで一度も負けなしで代表候補生の座を守り抜いてきたというのだ。

「まあ、その所為で今までコロコロと代表候補生が変わつちまっただけだな。」

さてつと言つてデュオは空の食器を持って立ち上がった。

「え！？デュオ、もう食い終わったのか！？」

「あたりまえだろ？お前が食うの遅いんだよ。っていうか、次は千冬の姉御の授業だぞ？急いだ方がいいぜ」

「し、しまつた〜！！」

デュオは手を振りながら食堂を後にし一夏は急いで飯を食うも結局遅刻してしまい、千冬の出席簿の餌食になった。

死神と学園最強、久々の再会、貞操の危機！？そして、死神の強さの秘密（後

楯無のキャラってこんな感じかな？

## IS学園の黒い死神くクラス代表決定戦く

何だかんだでこの一週間特に問題なく（相変わらず女子の視線が気になるが、最近では慣れてきた。）過ごし、（偶に楯無が夜這いに来るがそれも何とか撃退し。）遂にセシリアとクラス代表を掛けて試合が行われる。

ビット搬入口

「おつ！来たか、一夏。つと篠ノ乃もいんのか。」

ビット搬入口に到着すると、デュオが一夏のは違うISスーツを着て先に待っていた。

「デュオ？何でお前がここにいるんだ？」

「おいおい、何でつて今日は俺も試合すんだぜ？だからお前よりひと足先についても問題ないだろ？」

「あ、そっか。」

一夏が納得していると、ビット搬入口がゴゴンツと重厚な音を立て開いた。そして、

そこには、『白』がいた。

何者にも侵されず、何者にも汚されない、純白の鎧が主を待っていたかのようにそこに鎮座していた。

「ヒュッ」

デュオの口笛が鳴り響いたがそれすら打ち消すほどそのISは存在感があった。

「これが・・・」

「はい！織斑君の専用IS『白式』です！」

「なにをしている、体を動かせ。直ぐに装着しろ。時間が無いから初期化と最適化は実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ。いいな？」

そうして一夏は導かれるように白式に触れるとあれ？と不思議そう

に声を出したが、それも直ぐに止め何かを理解したかのような顔になる。

「背中を預けるように、ああそつだ。座る感じでいい。後はシステムが最適化する。」

一夏は千冬の言う通りに座り、白式に体を委ねる。

そして・・・一夏と白式が繋がった。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

（あゝあ、姉御の奴本当は心配でたまんねえくせに必死に我慢してんな。まったく素直じゃねえな）

千冬の素直になれない心配のし方にデュオは苦笑しながら見ていると、

「箒。」

千冬との会話が終わり、一夏はピット・ゲートに進む最中、何か言いたそうな箒に声を掛けた。

「な、何だ？」

「行ってくる。」

「あ・・・ああ。勝つてこい。」

そして一夏は戦場アリーナ・ステージに舞い上がった。

一夏がアリーナ・ステージ飛んでいったのを確認すると、デュオは意地の悪い笑みを浮かべながら箒に近づいた。

「いやゝ青春だねゝ篠ノ乃？」

「な！？な、何を言っている！？」

「知ってんだぜゝこの一週間、毎日放課後に一夏と剣道場で稽古し

「てたんだって？」

「な、な、な、何故それを!!?」

デュオの言葉に篤は顔を赤くし動揺する。

「おい、マックスウエル。」

「ん？なんすか？」

更に追撃しようとしたデュオに千冬が声を掛けてきた。

「お前、織斑にISの操縦を教えていなかったのか？」

「そ、そうだぞ！一夏は本当はお前に頼もうとしていたがお前は何時も休み時間になるといないし、放課後もいつの間にか帰ってるから、私が教えてやったんだ!!・・・本当はこのまま私が（ボソ）・・・」

「あゝそう言えばそうだったな。」

二人の質問に（片方はポロッと自分の欲望が出た）デュオはバツが悪そうに頭をかいて顔を反らした。

「い、いや。この一週間は色々調べもんがあつて俺自体忙しかったんだよ。て言うより、姉御も知ってたんだろ？俺の戦い方は特殊でIS初心者の一夏には教えらんねえって・・・」

「ああ、まあ確かにそうだな。」

デュオの言葉に千冬は納得したようでもそれ以上追及しなかったが、篤と真耶は納得がいかない様子だった。

「あの、織斑先生？前々から思っていたのですが、マックスウエル君とは知り合いなんですか？」

意を決して真耶が千冬に二人の関係を問う。

「ん？ああ、コイツとは四年前からの付き合いでな何度かあつてい  
る。」

「そうだったんですか？」

「ああ、詳しい話は・・・それよりも、試合が始まるぞ。」

そう言つて千冬がリアルモニターに視線を移すと、丁度セシリアが一夏に先制攻撃を加える所だった。

「さあつて、実力が上の者にどう向かつて行くか・・・魅せてく

れよ、一夏？」

「……………」

デュオの呟きはリアル・モニターに釘付けな筈と真耶には届かず千冬だけには届いていた。

〈原作通りなので割愛〉

結果的に言うと一夏は負けた。

最初はセシリアの攻撃に手も足も出なかったが、時間が経つにつれ一夏のセンスが発揮され追いつめたかに思えたが、セシリアの『ブルー・ティアーズ』の「ミサイル弾道型」の直撃を喰らい負けたかに思えたか、直前で白式の武装『雪片二型』の能力であわや逆転か！？に思われたがシールドエネルギーが尽きて結果セシリアの勝ち。

その光景を今まで見ていた千冬とデュオは、

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者。」

「いやさ、別に期待はしてなかったんだぜ？でもよお、あそこまで追いつめておいて結果は自滅？幾ら今日でISを動かすのが二度目だからってアホかお前は。」

「まったくだ。武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身を持ってわかつただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを

起動しろ。いいな。」

「……はい。」

二人からの口撃に一夏は真っ白になりながら正座していた。

「つうか、ISに慣れてないんなら量産型のISを使って慣れればよかつただろ？それぐらい申請すれば出来るし、アーリーナも使用許可を姉御に頼めばできんだろ。」

「その通りだ、織斑。お前はこの一週間一体何をしていた。」

「い、いや！ちゃんとISについての勉強とか剣の修行とか……」

「言い訳すんな。」「負けては意味がないだろう。」

「……はい……」

必死に言い訳をしようとした一夏に二人の一言で直ぐに小さくなってしまった。

「あ、あの〜織斑先生、マックスウエル君？もうそれぐらいでいいんじゃないあ……」

流石に見かねたのか真耶が二人に止めるように言うが二人は、「甘いつすよ、山田先生。今の内に叩きこまないとまたおんなじミスしそうっすから。」

「そうだ。二度とこういうことが無いように、しっかり叩きこまなければならん。」

と、まだ一夏を叱る気にいるようだ。そろそろ一夏の口から魂見たいな物が出てきそうだ。

「で、でも、オルコットさんの準備が終わりましたし、マックスウエル君は試合の準備をした方が……」

この時一夏には真耶が神様に見えたかもしれない。そんな救われた表情で真耶を見ていた。

「ああ、そうだったな。仕方ねえ、千冬の姉御。今日の所はこれ位でいいんじゃないっすか？」

「フム、まだ言いたいことは沢山あるが、それはお前の試合が終わってからでもいいか。」

（まだあんのかよ!?!）

しかし、二人の会話を聞いた一夏はこの説教がまだ続くと思われて直ぐに絶望に顔を染めた。

リアル・モニターを見るとセシリアが準備をして待っていた。

「さあつてと、レディーを待たせちゃいかねえし行くとしますか。」

「織斑、何時まで座っている。さつさと立たんか。」

「ひ、ひでえ。」

デュオは体をほぐす様にストレッチすると自身の首に下げてる黒いロザリオ、『タナトス』に手を添え、

「さあ、行くぜ相棒！『死神』！！」

自身の愛機の名を叫ぶと彼の全身を黒い光りの粒子が包み込み、一秒もしない内にISが展開された。

そして現れたのは白式の純白と対照的な『黒』

一切の光を通さず、全てを飲み込みこむような『漆黒』

黒い悪魔の翅の様な外套が彼の首から下を包み込み、漆黒の装甲が手足を覆った。その右手には灰色のロッドが握られており、左手には棺桶を思わせる盾が装着されていた。顔には目元から上を覆うような黒いバイザーが装着されていた。

「……」

そして何より、そのISより発せられる禍々しいオーラがそのISをより一層、凶悪さを醸し出している。

「そいじゃま、姉御。」

「なんだ。」

デュオのISの雰囲気呑み込まれている一夏達をしり目にデュオは後ろを振り返らずに千冬に話しかけた。

「行ってくるぜ。」

「ああ、精々長引かせよ？」

「りよ〜かい。それじゃあ、今から斬って斬って、斬りまくる！！」  
そう言っただュオはセシリアの待つアリーナ・ステージに舞い上がった。

「織斑。」

「ハッ！な、なんだよ、千冬姉。」

デュオを見送った後、千冬は未だ固まっている一夏に声を掛けた。

「織斑先生だ。まあいい、アイツの戦い方をよく見ておけ、アレが本物の代表候補生の力だ。」

「え？」

「な、なんですかの！？そのISは！！！」

デュオはアリーナ・ステージに着くなりいきなりセシリアの避難する声が聞こえた。

「いきなりなんだよ。これが俺の専用IS『死神』だ！！！」タナトス

「これが、ISなんですか？なんて、禍々しい・・・それに・・・死神って・・・」

セシリアもデュオのタナトスから発する禍々しいオーラに吞まれていたが、直ぐに気を取りなをして、

「フン、例え死神でもわたくしと『ブルー・ティアーズ』で粉碎してあげますわ！！・・・それに今のこの気持ちをハッキリさせないと・・・」

セシリアは自分を奮起するようにブルー・ティアーズの主武装『スターライトmkII』をデュオに突きつけた。後半なんか小声で呟いた気がしたが、今は気にしないでおこう。

「いいね！そうこなくっちゃ。そんじゃあセシリア？」

「なんですかの？」

デュオの気軽な問いかけにセシリアは不審そうに返事をする。

「心の準備はいいか？」

「な!？」

底冷えするような低い声でデュオは犬歯をむき出しにして、セシリアに突進した。

「クッ!！」

一瞬怯んだものもセシリアはスターライトmkIIIをデュオに向けて放ったが、

バシユウ・・・

「な!？」

スターライトmkIIIのビームがタナトスの悪魔の翅の様な外套に当たった瞬間、ビームが弾かれた。

警告、敵ISの武装に特殊な電磁フィールドを確認。ビ

ーム兵器は無効化される模様

「そんな!？」

「他所見してんじゃねえよ!！」

「!！」

ハイパーセンサーからの報告にセシリアは愕然としてみると、突進してきたタナトスが主武装のビームランスをセシリアに突きつけた。セシリアは間一髪かわしたかに思えたが・・・

バリアー貫通。ダメージ60。シールドエネルギー残量39

8。実体ダメージ、レベル小。

(かわしきれなかった!?)

よく見れば自身のISの装甲に一筋の傷跡が残されていた。

「クッ!」ブルー・ティアーズ!！」

セシリアはやけくそ気味にビット型『ブルー・ティアーズ』を四機射出しデュオに向かわせた。

「うお!？あぶねえ!」

流石に四機のビットによる多方向同時攻撃では自身のISの武装の一つ『アクティブ・クローク』では耐えきれない。なのでデュオは

迫りくるビームを時にはかわし、時には『アクティブ・クローク』  
で受けてセシリアとの距離を徐々に詰めていった。  
（千冬の姉御になるべく長引かせろって言われてんからな。まあ、  
ビット攻撃を使用するISと闘うのは初めてだからいい経験にはな  
るか・・・）

そう考えながら、デュオはどうやって倒すかシナリオを描いていた。

「すっげ〜なあ、箒。なんだよあの装甲、なんでセシリアのビーム  
を弾くんだ？」

「わ、私にだってわからん！一体どうやって・・・」

二人の戦闘を見ながら一夏は箒に尋ねるが箒も訳がわからず答えに  
窮していた。

「アレはマックスウエルのISの本体を覆っている外套の様な追加  
装甲『アクティブ・クローク』の能力だ。」

そんな二人の後ろから千冬がモニターから目を離さず解説してきた。

「『アクティブ・クローク』？」

「ああ、マックスウエルのIS『タナトス』の追加装甲『アクティ  
ブ・クローク』は装甲に特殊な電磁フィールドを発生させ、ビーム  
を弾く事が出来る。」

「すっげえー！！」

「そんなものがあるなんて・・・」

「無論、弱点もある。電磁フィールドの許容量のビーム攻撃を受け  
ればアクティブクロークは強制的に解除されるし、実弾は弾けない。  
」

「それでも十分強いような・・・」

真耶の呟きを千冬は黙殺し、それに、

「それに、あれはタナトスの力の一部でしかない。第一デュオはま

だ本気にすらなっていない。まったく、長引かせるとは言ったが・・・」

遊んでどうする・・・  
そう呆れた様のため息を吐く千冬に一夏達は驚愕した。

「さあ！そろそろ、ギアを上げるぜえ！！」

「な！？」

デュオの動きが突然俊敏になり自身のビット攻撃が一発も当らなくなり、セシリアは驚愕した。

「なら、これはどうですか！！」

「い！？」

そしてセシリアは今までのビット型ではなく『ミサイル弾道型』を突っ込んでくるデュオに向けて発射した。

ドッガアアアン！！

ミサイルはタナトスの胴体に直撃し大爆発を起こした。

「ふ、ふふふ。やはり、その装甲、実弾は無効化できない様ですね！」

巻き起こる爆炎にセシリアは勝利を確信し、煙が貼れるの待つ。が、  
「え？」

煙が晴れた先には、何もなかった。

「そ、そんな！？ど、どこに、何処に行っただんですの！？」

ハイパーセンサーで周囲を索敵するが写るのは青空と地面とアリーナのみ。デュオとタナトスの姿は何処にもない。

「ハイパーセンサーでも写らないなんて、まさか、しん・・・」  
「おいおい、勝手に殺すなよ。」

「!!!」

突然オーブンチャンネルが開き、デュオの声が響き渡った。

「ど、何処にいますの!?!」

「おいおい、よく探せ。俺はここだぜ?」

セシリアは周りを見渡すが何処にもデュオの姿はない。

「こんな言葉を知ってるか、セシリア・オルコット?」

「クッああああ!!」

混乱したセシリアはスターライトmkIIIIをあらぬ方向に乱射し始めた。

「『死神に魅入られた者は、最後に着く足はない。』お前はもう死神に魅入られちゃった。」

警告!!! 上空にIS反応あり!!!

「!?!」

ハイパーセンサーの報告で上を見ると空を背にデュオが急降下し始めた

バサッ!!

降下中にアクティブクロークが展開しその悪魔の翼を開き、タナトス死神の主要武器『死神の鎌』ビームシザースを振り上げて舞い降りてきた。

「うらああ!!」

ザンッ!!

「キャッ!!」

振り下ろしたビームシザースはブルーティアーズのスターライトmkIIIIを両断し破壊する。

「もういつちよお!!」

更に返す刀でセシリアの胸を切り裂きシールドエネルギーを大幅に削る。

「これで、ラスト!!!!」

「調子に乗らないで!!!」

止めを刺そうとするデュオにセシリアは全力で後退し、全ビットを射出して一斉放火した。

ブウン……

「な!?!」

しかし、ビットの攻撃があたる瞬間、タナトスは陽炎のように揺らめき、攻撃が通り過ぎると同時に消えてしまった。

「後ろだ。」

「!?!」

後ろから声を掛けられ慌てて振り返ると、ビームシザーズを振り下ろそうとしているタナトスが目に入り、セシリアは自身の負けを悟った。

「試合終了、勝者、デュオ・マックスウェル」

ポカッ!!

「つて~~~~~!!」

「やりすぎだ、馬鹿者。」

試合を終え一夏達の待つピットに戻ってきたデュオを待っていたのは千冬の鉄拳だった。

「~~~~~な、何すんだよ姉御!?!」

「当然だ、それと織斑先生だ。」

ドガッ!!

「~~~~~」

痛みに悶えながらデュオは千冬に文句を言つと千冬はさも当然の様

にいいまた鉄拳をデュオの頭に落した。

「何故『ハイパージャマー』を使った？お前なら使わなくても勝てただろう？」

「い、いや、どうせ勝つならインパクトのでかい方がいいかな？っと思ひまして……」

ドガツ！！！！

「~~~~~」

「そんな理由で使うな。今後私の許可なく試合中使用する事を禁ずる。いいな？」

「い、いやですね、姉御？」

「わかつたな！？」

「は、はい……」

千冬のアマリの剣幕にデュオは弱弱しく返事をするほかなかった。

「あ、あの〜織斑先生？」

「ん？なんだね、山田先生？」

二人の会話がひと段落したのを見計らって真耶が千冬に話しかけてきた。

「あの『ハイパージャマー』って言うのは？それとマックスウエル君が消えたのとどうい関係が？」

見ると一夏と篤も同じ疑問を持ったらしく千冬とデュオを見ていた。

「ハア……この事は他言無用だぞ。」

千冬は大きなため息をつき念を押す様に三人を睨みつけると、語り始めた。

「『ハイパージャマー』とはコイツのIS『タナトス』の単一仕様ワンオフ仕様能力リテイ。その能力は使用者とISの反応をISのハイパーセンサーですら騙す事ができる最強のステルス機能だ。」

「……な！？」「」

ISのハイパーセンサーですら騙すステルス機能。その言葉に三人は驚愕した。

「そ、そんな！ISのハイパーセンサーを騙すほどのステルス機能

なんて・・・そんなのありえませんか!!」

「そうです!そんなものが存在するわけ・・・」

「信じるも信じないも今お前たち目の前に写っているのが現実だ。」  
千冬の一言に声を荒げていた二人は押し黙った。

「続けるぞ?『ハイパージヤマー』には出力を調節する事によって  
実体ある幻覚をを起こすことも可能だ。もちろん、ハイパーセンサ  
ーでも騙される。」

オルコットがそうだったようにな・・・と続ける千冬に三人は  
もう言葉も出なかった。

「すごい・・・」

そう、その一言に尽きる。

しかし、渦中のデュオは未だに痛み悶えていて四人の話を全く聞  
いて無い様子だ。

「それよりも、さっきも言った通り今言った事は他言無用だ、わか  
ったな。」

「・・・は、はい。」

千冬の視線に三人は怯えるように返事をした。

「よろしい、今日は遅いのもう帰るように。織斑は明日放課後、  
残れ。白式について説明する事があるからな。」

「あ、はい。そんじゃ、帰ろうぜ筈?」

「あ、ああ。」

そう言つて一夏は筈を伴つて部屋を出ていった。

「あの、織斑先生。後片付けは私が行いますので・・・」

「いや、折角だが私がやっておこう。丁度今日は職員会議もない。  
それにマックスウエルに話す事もあるからな。」

「は、はあ?わ、わかりました。それでは先に失礼しますね。」

「ああ。」

そうして、真耶が出ていったのを確認すると、蹲っているデュオに  
視線を向け、

「何時まで芝居をしている?」

「い、いや〜。結構本気でいたいんすよ?」

千冬の言葉にデュオはムクリと起き上がり、体に着いたほこりを払うと千冬に向き直った。

「それで、なんなんすか?俺だけ残らせた意図は?」

「なに、お前に一夏の訓練の相手をしてもらいたくてな。」

「あん?」

千冬の言葉にデュオは怪訝な顔をした。

「何で俺に頼むんだ?姉御、自分で言うのもなんだが、俺の戦い方は結構邪道だぜ?」

「わかつている。だが、この学園中探してもお前ほどISの戦闘経験が多い物は他にいない。」

「いや、俺より姉御の方が経験値は上じゃん?」

「私は教師だからな、一夏に直接教えるわけにはいかん。それにもう私は引退した身だ、現役のお前には敵わんさ。」

「よく言っぜ、今でも俺はあんたに勝てる気がしねえっての……」

睨みながら千冬を見ると千冬は苦笑しながら「そういうな。」といった。

「ハア〜……ま、他らなぬ姉御の頼みだ。OKわかった。」

そう言うとデュオは意地の悪い笑みを浮かべ、ただしつと付けたし、

「今度、飯奢ってくれよ。姉御?」

その言葉に千冬は一瞬目を丸くしたが、直ぐに微笑をし

「ああ、わかった。」

こうして、一夏の知らぬ間にISの家庭教師が決まった。

IS学園の黒い死神〜クラス代表決定戦〜（後書き）

やっとセシリア戦終了。

今月はマジ、忙しいからこれが今月最後だな。

死神と授業と就任パーティー〜中国娘来日〜

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

「はい?」

セシリアとのクラス代表決定戦から翌日、朝のSHRで教壇に立った真耶が喜々としながらそう宣言した。

一夏は周りが騒いでいる中、真耶の言葉に思考が停止してしまい、しばらくして

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合に負けたんですが、それに最後に勝ったのはデュオのはずなんですけど、何で俺がクラス代表に選ばれているんですか?」

「それは」

「それは、俺が辞退したからだ。」

真耶の言葉を遮りデュオは頬杖をつきながらダルそうに言った。

「何で?」

「何でって、こう見えても俺は多忙な身なんだよ。クラス代表なんて役割を押しつけられたらこっちの行動が抑制されるし、自由に動けねえからな」

頬杖をつきながらヒラヒラと手を振るデュオの姿に一夏は何かを我慢するようにプルプルと震えていると、

「で、本音はなんだ、デュオ。」

「そりゃあ、クラス代表になって四苦八苦する一夏を見て楽しむ・

・はっ!?!?」

「やっぱりかああああ!?!?!」

「うおおおおお！？」

千冬の誘導にデュオはまんまと乗ってしまい、振り上げた一夏の拳をギリギリかわす。

「あぶねえだるうが！？」

「やかましい！一発殴らせろ！！」

「喰らうかあ！！」

迫りくる一夏のラッシュをデュオは紙一重でかわす……無駄にハイレベルである。

ドツガガッ！！！！

「ぐあつ！？」

「止めんか、馬鹿者共。」

更にヒートアップしようとした二人の頭に千冬の鉄拳が振り下ろされた。

「~~~~~ち、千冬姉！！」

スパアン！

「~~~~~」

「織斑先生、だ」

千冬が来た事で一夏が千冬に問い詰めようとしたが、千冬の出席簿アタックを喰らい、痛みに悶えてしまう。

「~~~~~そ、それよりも、だったら、俺に直接勝ったセシリアがクラス代表じゃ……？」

「それは、わたくしも辞退したからですわ！」

突然、後ろから席を立つ音が聞こえ後ろを振り向くとセシリアがポーズを取っていた。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは当然の事。何せ貴方はIS初心者の上、相手がわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。」

「ぐっ」

そう言われると一夏は何も言い返せなかった、何せ実際負けたのは事実だし。

「まあ、あの時はわたくしも大人げなかつた事を反省しまして・・・  
一夏さんにクラス代表を譲る事にしましたの。幸いマックスウエル  
さんもクラス代表を辞退すると聞きました、それならわたくしも、  
と。」

「そう言うこと〜」

「ちつくしよおおおおお！！！」

後ろで高らかに宣言するセシリアと自分の隣でデュオのイイ笑顔で  
一夏は絶望に打ちひしがれた。

四月も下旬、遅咲きの桜が丁度散った頃、デュオ達はグラウンドに  
て千冬の授業を受けていた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、  
オルコット、マックスウエル。試しに飛んで見せる」

千冬言葉にデュオとセシリアは即座にISを展開した。しかし、  
普通のISの光の粒子の色は白なのに対してデュオのISの光の粒  
子の色は黒。まるで闇が彼を飲み込むように展開される光景を見て、  
その場にいたクラスの者達に動揺が走った。

やがて、一秒もたないうちに彼の全身に悪魔の様な漆黒の鎧がそ  
の翼で首から下を隠して浮遊していた。

「織斑、何を呆けている。さっさとISを展開しないか」

「は、はい！」

タナトスから発する禍々しいオーラにクラスの大半が飲まれている  
中、千冬の叱咤に一夏は再起動しすぐさま白式を展開し始めた。

そして、千冬は一夏も白式を装着し終えたのを見て、

「よし、では飛べ」

その言葉と共に黒と青の閃光が空に舞い上がり、上空で制止した。

一夏もそれに遅れて上昇してきたが、二人に比べてはるかに遅かった。

「なにを遊んでいる。基本スペックでは今の状態のタナトスやブル  
ー・ティアーズよりも上なんだぞ」

一夏の飛び方があまりにお粗末なので地上から千冬の叱責が通信越しで飛んできた。

「んな事言ったってさ、角錐をイメージってのが分かんないんだよなあ。そもそも、なんでこれで飛べるんだ？なあデュオ、何かコツとかないわけ？」

一夏は隣で並走するデュオに教えてもらおうとしたが、

「あゝまあ、最初は誰だっつてそんなもんだ。俺の場合は最初っから飛べたし、ようは慣れたな。」

「マックスウエルさんの言うとおりですわ、一夏さん。イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索した方が、建設的ですよ。」

「そういうことだ。ようは慣れた、慣れ」

「んな事言ったってなあ」

「なら説明してさしあげましょうか？ 反重力力翼と流動波干渉の話になって長くなりますが」

「ごめんなさい。結構です」

「そう、残念ですわ」

ふふつとセシリアは全然残念そうに見えない笑みを浮かべていると、「一夏っ！いつまでそんな所にいる！早く降りてこい！」

いきなり通信回線に箒の怒声が響き、下を見ると箒が真耶のインカムを奪っていた。後ろで真耶がワタワタしているのが印象的だ。

「丁度いい。織斑、オルコット、マックスウエル、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解。そんじゃ、お二人さん？おつさき」

千冬の指示を聞いてデュオはいち早く反応し、地表へ急降下していった。

バサッ！

急降下していく途中にデュオはアクティブクロークを展開し地表十センチで完全停止をした。

「っと、ん？どうしたんだお前ら？いきなり黙り込んで？」

自分が着地した途端、周りが静まり返ってしまいデュオは不思議そうに周りを見渡した。

皆が黙り込むのも無理はない。何せアクティブクローク見た目は完全に悪魔の翼なのだ。それを空中で展開して、地上へ降下してきた様はまるで悪魔が地上に舞い降りたようにしか見えないのだから。

「あら、皆さんどうしましたの？」

続くセシリアも降りて来た時の異様な空気に疑問を思ったが、誰一人それに応えるものはいなかった。

「気にするな、大した事ではない。次はお前だ、織斑。さつさと降りてこい！」

千冬が上空に向かって通信を送ると、ギョッッ！！

ドオオオオオオン！！！！

「……確かに早く降りてこいと言ったが、誰がグラウンドに穴を開けると言った。」

「……すみません」

「アハハハハ！！！！ってイッテエ！？」

千冬は呆れた目で一夏を見下ろしながら、隣で爆笑しているデュオに拳骨を落とす。

「まったく……では次に武装を展開しろ。織斑、何をそんな所でぼろっと浮かんでいる。さつさとならばんか」

「は、はいっ」

やっと地面から脱出で来た一夏は休む間もなく千冬に叱責されデュ

オの横に並ぶ。

「では、織斑、武装を展開しろ」

「は、はいっ」

そう返事をした後、一夏は左手で右腕を握りしめ光りの粒子が手のひらから放出され、ゆっくりとだが像を結び形として形成され雪片二型が形成された。

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

しかし、千冬は褒めるどころかキツイ言葉を一夏にあびせた。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

そうしてセシリアは左手を肩の高さまで上げ、横に突き出すとその手にスターライトmk?が握られていた。

「流石は代表候補生と言ったところか。だが、そのポーズは止める横に向かって展開させて一体誰を撃つ気だ。正面に展開するようにしろ」

「で、ですがこれはわたくしがイメージをまとめる為に必要な

」

「直せ。いいな？」

「・・・はい」

不満そうな顔をするセシリアだが千冬の一睨みで納得させる。

「ハア、デュオ。手本を見せてやれ」

「了解」

返事をした瞬間、黒い光の粒子が長い棒状の形をしたかと思えば灰色のロッドがデュオの前に現れそれを手に取った。

「流石だな。いいか、織斑、オルコット、これが正しい武装の展開だ。よく覚えておけ」

「いや、姉御にそんな褒められんと照れるぜ」

千冬に褒められ？デュオは手を頭の後ろに回し本気で照れている。

（あれ、褒めてんだ）

「セシリア、近接用の武装を展開しろ」

「え？あ、は、はい」

千冬に言われセシリアは直ぐに武装を展開しようとしたが、スターライトmk?の様に直ぐには展開できず光りの粒子が彼女の手の中で漂っていた。

「クツ」

「まだか？」

「も、もう直ぐです・・・ああ、もう！『インターセプター』！」千冬の催促にセシリアは武器の名前をやけくそ気味に叫ぶとその手にショートブレードが現れた。

「・・・何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらえるのか？」

「じ、実戦では近接の間合いには入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「ほう、織斑との対戦で初心者に簡単に懐に入られ、マックスウェルには特殊装甲があつたにしてもいとも容易く懐に入られ、負けたのはどこの誰だ？」

「そ、それは・・・あの・・・」

セシリアはごによごによとまごついた後、一夏の方をキツと睨みつけた。

「まったく、専用機持ちと言ってもこれでは話にならないな。マックスウェル、この中で一番ISを使えるのはお前なのだからしっかり指導してやれ。いいな？」

「へい」

バシンツッ！

「返事はい、だ。馬鹿者」

「・・・はい」

「よろしい。では、今日の授業はここまでだ。織斑、グランドを片付けておけよ」

その言葉を聞き一夏は絶望したような顔になったのは言うまでもない。

夕食後、食堂、

「それでは、織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう〜！」

パン、パパン！

一人のクラスメイトの音頭であらかじめ配られていたクラッカーが一斉に鳴らされた。

「……………」

しかし、クラスが盛り上がってる中一人だけテンションが低い奴がいた。そう、今回のパーティーの主役の一夏である。

「おいおい、どうしたんだ、一夏？主役がそんな顔してたら盛り上がんないぜ？」

「デュオ……なら変わってくれるか？」

「ムリ」

イイ笑顔で断られ一夏はガックシと肩を落として落ち込んでしまった。

「人気者だな、一夏」

「……本当にそう思うか？」

「ふんっ」

箒は不機嫌そうに鼻を鳴らすとそっぽを向いてお茶を啜った。

そんな二人の様子を見てデュオはニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべ、一夏はそんな箒の態度に訳がわからないといった感じだ。

「はいはい。新聞部です。話題の二人の新生にインタビューに来ましたー！」

突然の新聞部の登場でまた場が無駄に盛り上がった。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部の副部長やってるの。」

はいこれ、名刺」

そういつて、薫子は一夏に名刺を渡すとキョロキョロと周りを見渡し、

「あれ？もう一人の男子のデュオ・マックスウエルくんは？」

「え？デュオなら隣に……つていねえ！？」

隣を見たらいつの間にかデュオの姿は無く、代わりにノートの切れ端が座っていた所に置いてあった。

「えつと……『後は任せた』つてあの野郎！覚えてやがれー！  
ー！！！」

ノートの切れ端を握りつぶし一夏はここから消えたデュオに向かって絶叫した。

「ふう〜あぶねえ、あぶねえ。楯無の言った事が本当なら、あの二年にかかわらない方がいいよな〜」

食堂から逃げ出したデュオは自分の部屋に向かっていた。

「それにしても一夏の奴。何で、アイツ等の好意に気づかねえんだ？普通気付くだろう……」

まあ、あれはあれで面白いからいいんだが……と呟いていると、自分の部屋が見えてきた。

「そついや、ここ最近カトルに連絡してなかったな……丁度いいから連絡すつか」

デュオは部屋に入ると、自身の携帯を取り出し、親友に電話を掛ける。

プルルル……ガチャッ

「もしもし、カトルか〜？」

『デュオ？珍しいですね、君から連絡するなんて……何かあった

んですか？」

久々に聞いた親友の声は変わりない優しさに満ちた声をしていた。

「いや、別に何かあったってわけじゃねえんだけどよ……ってそっちは今、工作中か？」

「いえ、今しがた仕事が片付いたので、これから食事をしようと思っていた所です。」

「あゝそっか……ってまた、仕事してたのかよ。俺に長期休暇出すくらいなら、まずお前が休めよな」

「フフ、ありがとうございます。デュオはそっちに行っても変わって無くて安心しました」

デュオの呆れた様なそれでいて気遣うような言葉にカトルは嬉しそうに感謝の言葉を述べた。

「まあゝな。ていうか、こっちに楯無だけじゃなく、千冬の姉御がいた事に驚いたがな」

「ああ、やっぱりそちらにいたんですね。千冬さんは……」  
「やっぱりって……カトル、まさか知ってたのか？」

「確証はありませんでしたが、弟の一夏くんがいるのでしたら可能性としては十分にありえましたし、彼女ほどの人がIS学院で教員をしていたとしても不思議に思いません」

「あゝ確かに、姉御の性格ならあり得るわな。っとそうだ。そういや、俺以外にも代表候補生がいたぜ」

「え？デュオ以外にですか？」

「おお。しかも、あのオルコット家の一人娘、セシリア・オルコットだ。」

「セシリア・オルコット……確かイギリスの名門貴族オルコット家の一人娘でイギリス代表候補生でしたっけ……まあ、IS学園には世界各国から来ますからね何ら不思議ではありませんけど……」

「そうそう、そいつ。そのイギリスの代表候補生と一夏が入学早々、決闘をしてな。しかも、流れるに俺にまで決闘を申し込んできた

んだよ」

『え？デュオにもですか？デュオ、何か気に障る事を言ったんですか？』

デュオの言葉に驚き、不信がるようにデュオに問いかける。

「おいおい。今回は完璧、俺に非は無いぜ？」

『今回はって自覚あったんですね。そうですね。……でも、流石に他国の代表候補生と問題になった場合、貴方の身に危険が降りかかります。気を付けてくださいね？』

「おいおい、安心しろって。んなへマしねえよ。心配すんなって！カトルの心配そんな言葉にデュオは安心させる様に陽気に返す。

『ならいいんですが……っとラシード、どうしました？……ええ、わかりました』

「カトル？忙しいのなら、また掛け直すぞ？」

『いえ、そう言う事ではなく先ほど入った情報で、デュオのいる学園に新しい、代表候補生が転入するらしいです。』

「ああ？代表候補生ってどこの国のだ？」

『はい、中国の代表候補生で名は』

そうしてしばらくして、カトルとの通信を終え、デュオはシャワーを浴びて就寝した。

（翌日）

「よお、一夏！おはよ～す」

「おはよう、裏切り者」

朝、廊下でばったり会った一夏に挨拶するといきなりそんな言葉を言われた。

「おいおい、いきなり御挨拶だな。昨日の事まだ寝に持ってんのかよっ」

「うつせー！昨日お前が消えた後大変だったんだぞ！？」

「ははっ！まあ、悪いとは思ってぜ？今度なんか奢ってやるから機嫌直せよ」

「まあ、そこまで言うなら・・・」

そんな会話をしながら教室に着くと、

「織斑くん、マックスウエルくん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「おはよっす」

「おはようって、転校生？今の時期にか？」

今の時期に入学ではなく、転入という形でIS学園に来るといふ事は

「うん、何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

いつの間にかセシリアが何時もの様にポーズを取りながら登場した。「別にこのクラスに入るわけではないだろう？騒ぐほどの事ではあるまい」

いつの間にか篠ノ乃の奴も一夏の隣に立っていた。

「どんな奴なんだろうな」

「む・・・気になるのか」

「ん、まあな」

「ふん・・・」

一夏のそんな態度は篠ノ乃的に気に入らなかつたらしく、鼻を鳴らしてむくれてしまった。

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

（あゝあ、素直じゃねえな。もっと、「他の女子なんか気にせず、私を見て！」みたいなセリフを・・・無理か）

そんな言葉を言う篠ノ乃を想像できない。

「そう！そうですわー夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的

な訓練をしましょう。相手ならこのセシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。」

「あーその件なんだが、オルコット。一夏を鍛えるのは俺がやる事になった」

自信満々に宣言するセシリアに申し訳なく言う。

「な!?!ど、どうしてですのっ!?!」

出鼻をくじかれたセシリアがこっちにくっついてかかってきた。

「いや、昨日千冬の姉御が言ってただろ?当面は俺が一夏に基本的な事を叩きこんで来月のクラス対抗戦の出来次第で俺が鍛えるか否かを決めるらしいぜ?」

「そ、そんな事」

「あ、因みに文句なら姉御に言ってくれよ?俺に言っただって無駄だからな」

「~~~~~!」

俺の言葉に納得がいかないのかセシリアは声にならない叫びをあげた。

「まあ、その事は置いといて、中国の代表候補生か・・・」

(昨日のカトルの報告通りか・・・)

「何か知ってんのか、デュオ?」

周りが騒いでる中、俺の呟きに隣の一夏が反応した。後ろで篠ノ乃も聞き耳を立てているが気にしない。

「ん?ああ、中国の代表候補生は操縦者はともかくISは割かし有名なんだぜ?」

「そうなのか?」

「ああ、何でも第三世代ISで燃費と安定性を第一に設計されてる物なんだ」

「へ〜それってすごいのか?」

「ああ、従来ISはどれも燃費が悪いし、安定性に欠けてるんだよ」

「ねーねー!でもさ、今の所専用機もっているクラス代表は一組と四組だけだから、余裕だよ」

話に割って入ってきた一人のクラスメイトに一夏は返事をしようとした時、

「その情報、古いよ」

突如、教室の入り口から声が聞こえてきた。

クラスが一斉にそちらを向くと髪をツインテールにした小柄の少女が片膝を立ててドアにもたれかかっていた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないか」

「おまえ、鈴……？鈴なのか？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。ファン・リンイン今日は宣戦布告に来たってわけ」

鈴音はフツと軽く笑いながらツインテールを揺らしてみせる。

「なにカッコつけてんだ。すげえ似合わないぞ」

「んなつ……！？なんて事言うのよ、あんたは！」

（あ、こっちが地なのか）

「おい」

「なによ!?!」

（あ、馬鹿……）

バシッ!!

いつの間にか鈴音の背後に立っていた千冬が彼女の頭に強烈な出席簿攻撃が炸裂した。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ、さつさと自分の教室に戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「は、はいっ！」

千冬の登場に怯えながら、ドアから退いた鈴音はまた一夏の方を向くと、

「また来るからね!逃げないでよ、一夏!」

「さつさと戻れ」

「は、はい！」

そうして鈴音は自分の教室に逃げるように戻っていった。

「これはまた、面白くなってきそうだな……」

その後彼女との関係を問い詰めようとした篠ノ乃とセシリアを筆頭としたクラスの女子が千冬の出席簿の餌食になったのは言うまでもない。

死神と授業と就任パーティー〜中国娘来日〜（後書き）

先月と今月はバイトとサークル活動でマジ忙しい・・・ああ、体が二つあれば・・・  
やっと鈴登場。

このままのペースでいくとシャルが登場するまで何時になるのかな

## 死神と中国娘／死神との地獄の特訓の始まり

昼休み

「夏達よりひと足先に食堂に向かった俺は食堂で食事を取っていた。いや、今日はまた、一段と面白くなっていたな。」

「何せ今日の午前中の授業だけである特定の二人が何度も怒られていたのだ。」

「ふん。そんなに可愛かった？その中国代表候補生」

「ああ、アレは確かに美少女ってレベルだが如何せん胸がなぐって楯無！？」

「ハロハロ。」

いつの間にか楯無が自分の隣で食事を取っていた。その隣では虚が静かに飯を食っていた。

「何時の間に来たんだよ……っていいの？憧れの生徒会長サマが男と一緒に飯食ってて……」

「やん そんなつれない事言わないでよ、デュオ。大丈夫だよ、そんな事気にしない気にしない」

「いや、まあ、お前がいいならいいんだけどよ……」

（相変わらずコイツは全然読めねえな……）

「それよりデュオ。君、織斑くんのコーチをやるんだって？」

「情報早すぎだろって、本音か……ああ、姉御に頼まれてな。ま、俺自身一夏には興味があるからな。」

そう、あの時セシリア自身が油断していたのを差し引いても一夏はかなりのセンスを秘めている。

「ん、でもデュオって他人を鍛えるのって初めてじゃなかったっけ？」

愛用の扇子を口元にあて楯無は考えるような仕草をしながらこちら

に問いかけてきた。

「ああ、だから俺自身結構楽しみにしてんだぜ？初日はどついつ風にやっかな」

「フフツ」

「あん？なんだよ急に笑って？」

「フフツゴメンゴメン。今のデュオ、すごい楽しそうにしてたから」

「ん？そうか？」

自分じゃ変わんないような気もするけどな

「ちよつと妬げちやうな〜一夏くん・・・」

「ん？何か言ったか？」

「ベツつになにも言っていないよ、デュオ！」

そう言った楯無はトレーを持って立ち上がる。

「つて早ツ！？もう食い終わったのかよ！？」

「デュオ、おつそいぞー。それじゃ、またねー！」

そうして楯無は虚を従えて食堂から出ていった。

〜放課後〜

「おつ！篠ノ乃丁度いい所にいたな」

放課後、アリーナに向かう途中バツタリ篠ノ乃と出くわした。

「マックスウエル？何か用か？急いでいるのだが・・・」

そう言う篠ノ乃は確かに何やら急いでいるようだ。

「いや〜実はお前に頼みたい事があったな」

「だから、なんだ？」

「いや、今日の一夏の最初の訓練なんだが、お前との模擬戦を入れようと思ってるな」

「え？」

俺の言葉に篠ノ乃は意外そうに眼を見開いた。

「いやな？俺がやるのもいいんだが、武器が違うし間合いも俺の方が広いだろ？それに比べてお前は一夏と同じ剣を使ってるって聞いたからな、ISを使ってるの剣術はどれ程のもんか、まだ見てねえから何とも言えないがとりあえず接近戦をお前と俺の交互で担当して、全体の動きは俺がやるって形にしたいんだが・・・」

俺がそう言っていると篠ノ乃は未だ呆然としていた

「って聞いてんのか？無理そうなら俺が全部やっても」

「やる！！」

「うおっ！？」

俺が言いきる前に篠ノ乃が勢いよく声を張り上げ詰め寄ってきた。

「そ、そうか。じゃあ、はいこれ」

「これは・・・」

「そ、IS打鉄の申請許可書。アリーナの使用許可はもう取ってるから、心配すんな」

そう言ってる篠ノ乃に許可書を手渡し俺はその場を後にしようとして、「それと、アイツの事が好きならもつと素直になんないんだめだぜ？あいつは天然記念物並みの鈍感なんだからさ」

「な！？な、なにを！？わ、私は一夏の事など・・・」

「あつれゝ俺は一言も一夏の事なんて言っていないだけだよ」

「~~~~~！！！！！！！！？」

俺の言葉を聞き篠ノ乃は面白いくらい顔を真っ赤にしプルプルと肩を震えてしまった。

ポント

「ま、がんばれよ？俺は個人的にお前を応援してるからよ？」

俺は篠ノ乃の頭を手をおきあやす様に言葉を紡ぐ。

「え、あ・・・ありがとう・・・」

「おっ、どういたしまして。んじゃ、俺はちょっと野暮用があるから先に始めといてくれ、そう時間はかかんねえからよ」

そう言った後、俺はその場を後にした。

「おいゝす……って何この修羅場？」

野暮用を済ませ、第三アリーナに来てみるとそこは修羅場でした。なにいきなり訳のわからん事を言っている、と思うかもしれないが俺だって訳がわからない。

とりあえず今言える事は一夏を巡って篠ノ乃とセシリアが口論していて、一夏は一夏で訳がわからんといった顔をしている。

「あ、デュオ。遅かったじゃないか。」

「あゝそれについては悪かった。っで、何でこんな事になってんだ？」

「実は」

どうやら、セシリアと一緒にISの訓練をやるうと誘われアリーナに来た所、篠ノ乃が打鉄を装備した状態で待っていて、その後どちらが一夏を特訓するかで揉めているらしい。

「あゝったく、ホント女心って言うのは難しいぜ」

「??？」

「あー何でもねえよ。さて、と……オイ其処の二人！！ちよつとこつち来い！！」

少しドスを利かせた声で叫ぶと、二人はおもしろいぐらい吃驚してこちらに振り返った。

「あー各々言い分はあるだろうがとりあえず今は全部却下だ。」

何か言いそうになった二人に先制で黙らせると二人は口をつぐんだ。

「さて、んじゃあ篠ノ乃には前もって話したが、一夏の訓練に対して篠ノ乃は接近戦を主に教えて俺は接近戦とISの基本的操縦技術とその応用技を教える。」

「ああ」

「それで、セシリアは俺達の中で唯一射撃主体だから中距離への対処法を重点的に教えてくれ」

「わかりましたわ」

（ま、ここにセシリアがいるのは嬉しい誤算だな。本当はここにシヤルがいてくれたら言う事なしなんだが・・・いねえ奴の事を言ってもしょうがないか・・・）

ここにはいない心優しい少女の事を考えても意味がないのでその考えを直ぐに捨て、頭を切り替える。

「それじゃ、一夏？」

「ん？なんだデュオ？」

「心の準備はいいか？」

「へ？」

その後、アリーナ内で一夏の悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない。

その後、一夏が鈴音との約束を覚えておらず、怒らせビンタを一発もらったという話はその次の日に聞いた。

一夏が鈴音を怒らせた翌日、生徒玄関廊下前に張り出された紙にこう書いてあった。

『クラス対抗戦日程表』

『一回戦                    一年一組織斑一夏 対   一年二組鳳鈴音』

どうやら、一夏の受難はまだまだ続くらしい・・・



死神と中国娘〜死神との地獄の特訓の始まり（後書き）

今回は少し短め・・・

次回はクラス対抗戦に行きます

## 死神とクラス対抗戦へ乱入者には死をお届けしますへ

一夏が鈴音を怒らせて数週間が経った。その間鈴音の機嫌は最悪でそれも日に日に悪くなっている。

ていうか、一夏の奴はアレから鈴音の奴に謝りに行かずずっと放って置いているらしい。

(謝りにいけよな・・・)

「うん確かに一夏くんは男としてそれはどうかと思うねへ」

「だろ?・・・所で楯無」

「ん?なにかな、デユオ?」

「何で俺は生徒会の仕事を手伝ってんだ?」

そう、何故か俺は放課後、布仏姉妹に拉致られここ生徒会室にいる。

「いやへクラス対抗戦が近づいてきて、人手が足んないのだよ」

「OK、人手が足んないのは理解した。だがな、お前なら呼べば幾らでも手伝ってくれる奴がいるだろ?」

「極秘資料を一般生徒には見せられないよ」

「俺も一般生徒だぜ?」

「デユオはいいのー」

イイ笑顔で言い切った楯無に俺はこれ以上抵抗するのを飽きられめた。

「ったくよへお前って奴は・・・まあ、いまさら何言ってもしようがねえか」

「あ、それとさーデユオ?」

「なんだ?」

なんとか今の現状を納得しようとしている中、楯無が思い出したかのように問ってきた。

「来週のクラス対抗戦。織斑くん勝てるの?」

「・・・鈴音のIS『甲龍』は近接パワー型。しかも、死角がなく砲身の見えない『龍砲』。おまけに今の鈴音の状態は一夏に対

して結構容赦が無くなってるみてえだからな、ハッキリ言って勝てる見込みは低いな」

「そう・・・でも期待はしてるんでしょ？」

口元を扇子で隠しながら楯無は探るような眼でこっちを見てきた。

「ああ、アイツはセシリア戦でも見せた成長の早さ、それに姉御も何か一夏に教えたらしいしからな」

「ふ〜ん」

千冬の名前が出て楯無が面白くなさそうな顔をしたが今は無視しよう。

「それに・・・」

「それに？」

「アイツには勝利の死神が憑いてんだぜ？そう簡単に負けるか」

その言葉に楯無は一瞬目を見開き、その後にフツツと微笑して、

「『勝利の女神』じゃなくて？」

「んな大層なモンがアイツにつくかったの、死神で十分だ」

「フツツそっか」

そう言うのと楯無は微笑みながら事務処理に移った。

そして、その日は生徒会で過ごした後自室に戻った。

余談だが、今日一夏達がアリーナに行くのと鈴音が先回りしており、何だかんだで口論に発展し一夏が鈴音に「貧乳」と鈴音の逆鱗に触れてしまい激怒し。手加減も容赦もなくぶっ潰すと宣言して言ったらしい。

その時の事を後日一夏に聞いた時問答無用で一夏を殴った俺は悪くない。

クラス対抗戦当日〱第二アリーナ観客席〱

アリーナの中には既に一夏と鈴音が向い合っていた。

「おおっといたいた。どうやら試合には間に合った見てえだな」

少し遅れてきたデュオが箒とセシリアの二人を見つけ声を掛けてきた。

「マックスウエル、何処に行っていた？もう試合が始まるぞ」

「そうですね！クラスの大事な試合に遅れるなんてどういってもりですの！？」

席に着くと、二人からの非難の声があがった。

「わりーわりー。ちよつと調べ事があつてな。ま、二人にとっちゃ愛しの一夏の大事な試合だから真面目に見ろつてか」

意地の悪い笑みで二人に問うと、二人は面白いぐらいに顔を真っ赤に染め、

「な、ななななな／／／／／な、なにを！？い、愛しのなど／／／／／そ、そんな不埒な事を！！？わ、私はただお前が遅くなったのを聞いただけで・・・」

「そ、そうですね！い、愛しのだなんて／／／／／そんなまだ、デートもしてないのに・・・」

「あーもうわかったから。からかって悪かった。ホラ、もう試合が始まるぜ？」

二人の態度にお腹いっぱい、とでも言うようにデュオは一夏達の方に向き直った。二人は未だギヤイギヤ喚いていたが開始の合図を聞くと慌てて試合に目を向けた。

試合は予想通り一夏が押されていた。砲身と砲弾の見えない『甲龍』の『龍砲』。その衝撃砲に一夏は苦戦を強いられた。しかし、一夏は千冬から教わった『瞬間加速<sup>イグニッションブースト</sup>』を使つての奇襲をしようとした時……  
奴らが現れた。

ズツドオオオオオオン！！！！

深い灰色をした装甲、手が足のつま先まであり首が肩と一体化している。そして何より目を引くのは『全身装甲<sup>フルスキン</sup>』。そしてそのISにつき従うかのように黒い二機のISが佇んでいた。その二機も『全身装甲<sup>フルスキン</sup>』だが、明らかに最初の二機とは形状が違った。

まず、一機目は角ばったフォルムに黄色の一つ目。最初の一機と同じように首と肩が一体化しており、その手に持つビームライフルを一夏達に向けている。

二機目は一機目と違い丸い曲線のフォルムで黄色い一つ目に肩と首が一体化しているが、その肩の部分が大きく所々凸凹している。そして目を引くのはその手に持つ巨大なビームカノンが最初の一機同様一夏達にその砲身を向けている。

「な、なんだ!？」

「あ、あれは!？」

「……………」

アリーナの観客席でデュオ達は突然の乱入者に驚いていた。周りの

生徒はすっかり浮足立ってしまったている。

「チッおい、篠ノ乃、オルコット。急いで姉御にISの使用許可をもらって来い。俺はその間にみんなを落ち着かせてみる。」

「わかりましたわ!」

「ああ!」

デュオの言葉に箒とセシリアは急いで千冬達のいるピットに向かった。

「……行ったか」

デュオは箒達が行ったのを見送り、一人人の波に消えていった。

「さあ、行くうぜ、相棒?」

ピット内

「先生!わたくしにIS使用許可を!直ぐに出撃できますわ!」

ピット内に入ってきたセシリアは何故かコーヒーを無理やり真耶に飲ませようとしていた千冬に向かって言ったが、

「そうしたいのは山々なんだがな、これを見る」

そう言った千冬は端末の画面を数回叩き、セシリアがその画面を覗き込むと、

「遮断フィールドがレベル四に設定……?しかも扉がロックされて  
あのISの仕様ですよ!」

「そのようだ。これでは避難する事も救援にもいけんな。所でデュオはどうした?」

苛立たしげに画面を叩いていた千冬がふと気付いたかのようにセシリアに問いかけた。

「え？マックスウエルさんなら生徒を落ち着かせるからと言っておりましたか？」

「なに、アイツが？・・・アイツがそんな事を言うなどありえん。昔っからアイツは進んで危険に首を突っ込むし、平気で他人を巻き込む。そのアイツが、そんな事をするか？」

本人が聞いたら傷つくであろう酷い言われようだが幸いその本人はここにはいない。

「ん？セシリア、その肩にはりついてる紙はなんだ？」

「え？」

考え込んでいた千冬はセシリアの金髪から覗く白い紙に気付く。セシリアは慌てて自身の背中に手を伸ばしはりついていた紙に手に取り開いてみると、

「こ、これは！？い、何時の間に・・・」

「貸してみる」

「え？は、はいっ」

セシリアから手渡された紙を受け取るとそこにはこう書かれていた。

『さあ、盛大なパーティーの始まりだぜ！！』

「・・・ハア、まったく。アイツらしいな」

その内容を見た千冬は先ほどまでの苛立ちがウソのように消え、逆に安心したかのように椅子の背もたれに寄りかかった。

「あの、先生？一体これはどういう意味ですか？」

手紙の意味がわからないセシリアは千冬に問うが、千冬が応える前に、

「あれ？・・・え！？お、織斑先生！何者かが学園内のシステムにハッキングを掛けてます！！す、すごいスピードで学園の、それもアリーナのシステムを掌握して言ってます！！」

「な！？ま、まさか、新手ですかの！？」

真耶の言葉にセシリアが驚愕する。が、

「落ち着け。山田先生、そのハッキングは気にする必要は無い」

「え？気にする必要は無いって一体どういう・・・？」

未だ疑問を抱いている真耶に千冬が諭すように、

「どうやら、奴等は死神に魅入られたみたいだ。ゆえに奴らの運命は地獄だな」

「死神って・・・まさか!？」

死神という単語にセシリアは気付き千冬の方を見る。

それと同時にアリーナ内を映すリアルモニターの方でも変化があった。

## 第二アリーナ内

「クソッ!!」

アリーナ内で一夏達は苦戦していた。三機の連携もさることながら三角頭のISと丸くごついISの正確無比な狙撃。灰色のISの機動力。そして、

「ああ、もう!またアイツね!!」

鈴音の龍砲や一夏の雪片二型は悉くゴツイ方のISの三枚の円盤から発生する防御フィールドで防がれていた。

この三機、互いが互いをカバーしている。ゴツイ方と三角頭のISにどうやら近接兵器は積まれていないみたいだが、近づこうとすると、灰色のISがその機動力で邪魔をし逆に灰色のISの方に向かうとゴツイ方が防御し三角頭が攻撃する。さつきからその繰り返しだ。しかもこの三機どうやら無人機らしく体にかかるGなどお構いなしな起動をしてくる。

一夏達はどうかして活路を開けないかと模索していると、

「一夏あつ!!」

キーンとハウリングしながらアリーナ内に箒の音が響き渡った。

「男なら、男ならそれぐらいの障害乗り越えなくてどうする!!」  
発信源を見てみると箒が中継室で息を切らしながらマイクを片手に持っていた。

(マズイ!)

今ので三機が箒に興味を示したらしくその内の一機、三角頭が箒に向かって行った。

「箒、逃げろー!」

叫びながら一夏も三角頭の後を追うが間に合わない、鈴音からの援護も他の二機阻まれて期待できない。

三角頭がビームライフルの銃口を箒に向ける。箒はその光景をただ見ているだけ、一夏はその後ろから追いかけるが追いつけない。が、ピタッ

ビームライフルのエネルギーも充填して後は発射するだけと思われた三角頭が急に止まった。それも、銃口を箒の方に向けたまま時間が止まったかのように・・・

「?どうしたんだ?」

一夏はその様子に不信に思いながら、ある程度距離を保ちながら様子を見てみると、

ズズズズ

「な!?!」

三角頭が肩から腰にかけて斜めに真っ二つに切り裂かれた。瞬間、ドッガアアアン!!!

「うお!?!」

三角頭は爆発と共に地面へ落下していった。

「一体何が・・・?」

「おいおい、一夏。騎士なんだからちゃんとお姫様を守んなきゃダメだろ?」

「!?!その声は!?!」

聞き覚えのある陽気な声を聞き一夏は周囲を見渡すが、その姿は見えない。しかし、

ブウウウン……

「そんなんじゃ、死神がお仕置きしちゃうぜ？」

居た。一夏の目の前にその悪魔の様な翼を広げ、死神は自身の武器である死神の鎌を構えた状態で一夏の目の前に現れた。

「デユオ！」

「よっ！一夏。楽しそうじゃねえか。俺も仲間に入れてくれよ」

死神の少年、デユオはバイザー越しでもわかるくらい人懐っこい笑顔を一夏に向た。

「一体どうやって……」

「なあに、ちよつとシステムにハッキング掛けただけさ」

「ハッキングって……」

あまりにも軽い口調で飛んでもない事を言うデユオに一夏は絶句してしまう。

「んな事より、こわい奴らが睨んでんぜ？」

そう言われて一夏は後ろを振り返ると、二機のISは二人を正確にはデユオを見て明らかに敵意をデユオに送っていた。

「おい、一夏」

「なんだよ？」

「鈴音と一緒にここは引け」

「はあ！？」

突然のデユオの言葉に一夏は驚愕した。

「何でだよ！？」

「何でって、エネルギーも残りすくねえだろ？何より消耗した状態でアイツ等と闘っても足手まといになるだけだ。俺は灰色の方はともかく、ゴツイ方と三角頭とは戦い慣れてんだよ」

『足手まとい』その言葉が一夏とハイパーセンサー越しで聞いた鈴音に重くのしかかった。

「言い方は悪いと思うが、今言ったのは事実だ。」

二機を見つめながら言うデュオは一夏の方を振りかえり、安心させるような笑みを浮かべ

「一夏、確かに今のお前は弱い。が、これから成長すればいいじゃねえか。だから、今はまだ耐える。この悔しさをバネに強くなれ」

「デュオ・・・ああ、わかった。」

デュオの言葉に一夏は納得し、鈴音も一夏の後を追って後退していた。

『一夏、よく目に焼き付けておけ。これがISの高み。俺や姉御、それに数少ない者が見せる領域だ』

一夏がさつていく中プライベートチャンネルでデュオのそんな言葉を聞いた。

「さあつてと・・・わざわざ待っててくれたのか？機械のくせに中々気が効くじゃねえか」

デュオの皮肉交じりの言葉に二機はそれぞれの武器を彼に向ける事で応えた。

「そうだな、さつさと始めるか」

デュオも自身の武装『ビームシザー』を構えた。

「てめえらに前置きも何も要らねえな・・・最初っからクライマックスでいくぜー!!」

デュオはそう叫ぶとスラスターを噴かせ二機に突進していった。

「!!!!」

突進していくデュオに対しゴツイ方のIS『ビルゴ』は自身の左肩に付いている三枚の円盤『プラネイトディフェンサー』を展開し、右腕に装備されている『ビームカノン』をデュオに向けて発射した。

「んなモン効くかよ!!!!」

しかし、放たれたビーム砲はタナトスのアクティブクロックによって弾かれ、何事もなかったかのようにビルゴへと接近していった。

「死ぬぜえ！俺を見た者は、皆死んじまうぜえ！！」

そう叫びながらデュオはビルゴに向かってビームシザースを振りかぶるが、灰色のISが横から接近してきたので目標を変え、ビームシザースに取り付けられているバーニアを噴かせ、加速をつけた状態で灰色のISに向かって薙ぎ払った。

ザンツ！！

「！？」

灰色のISも咄嗟にかわすが、かわしきれず左腕を斬り飛ばされてしまった。

「おっと、ためえも逃がさねえよ！！」

バシユツ！

距離を取ろうとする灰色のISを蹴り飛ばし地面へ叩きつけた後、自身と距離を取ろうとしていたビルゴにデュオは左手に装備されている棺桶の形をした盾『バスターシールド』をビルゴに向けて発射した。

射出されたバスターシールドの先端部からビーム刃が発生し螺旋を描きながらビルゴに接近していったが、ビルゴはそれを軽々と避け、デュオに向かってビームカノンの砲口を向けた。

「それで、避けたつもりか？」

「？・・・！！？」

デュオの言葉に不審に思ったビルゴだが、背後から接近する熱源を感知し慌てて振り向くと確かにかわしたはずのバスターシールドが背後から迫ってきた。

「！！」

ビルゴは慌ててビームカノンの照準をバスターシールドに合わせ撃ち落とした。撃ち落とした際爆発の煙で確認は取れないが、

「そっちはっか気にしてんじゃねえ！！」

確認し終わる暇を与えず、デュオはビルゴに向かってビームシザース

スを振りかぶり圧縮したビームスラッシュを放った。

「！！！」

しかし、ビルゴはプラネイトディフェンサーを展開し迫りくるビーム刃を防御しながらビームカノンの砲口を向けた。が……ドスッ！

「！！！？」

いきなり背中からの衝撃、そしてその後にはギャリギャリと嫌な音を立てて自身の背部ボディを削られる音。この時、もしビルゴに人間らしい感情があったら大いに混乱しただろう。何せ、先ほど撃ち落としたはずのバスターシールドが自身の背中を穿っているのだから……

「終わりだ」

「！！？」

自身になにが起こったのか処理できないでいると瞬間加速で接近したデュオがビームシザースを振り降ろそうとしていた。

「死神様のお通りだあ！！！」

ザンッ！！

一閃。デュオがビルゴとすれ違った際、ビルゴの四肢は切り裂かれ首は飛びバラバラになって地面へ墜ちていった。

「最後は、てめえだ！！！」

やっと浮上してきた灰色のISは自身に加速しながら迫りくるデュオにビームを乱射しながら距離を取るがデュオはそれらをすべて縫う様に避け敵との距離をつめていった。

「おらおら！死神と疫病神のお通りだ！！！」

お返しとばかりにデュオから繰り出される斬撃の嵐に灰色のISはなすすべなく切り刻まれていき、そして、

「もらったぜ！」

ズバッ！！

右腕も斬り飛ばされ灰色のISはまるでデュオに恐怖しているかのように背を向けて逃走を図ろうとした。が、

「逃がすと思つてんのか？」

「!？」

灰色のISが背後を振りかえった瞬間、首が飛び両足も切断されバラバラになりながら地上へ墜ちていった。

「ま、こんなもんか・・・」

墜ちていく無人機にデュオはつまらなそうに呟いた。

「姉御、こっちは片付いたぜ」

『ああ、確認した。遮断フィールドも元通りに直ったみたいだ。ご苦労だったな』

「いいつてことよ」

デュオはプライベートチャンネルを開きピット内にいる千冬に連絡を取っていると遠くから一夏達が向かってくるのが見えた。

「それじゃあ、姉御。ガラクタ共の解析お願いできるか？」

『ああ、まかせえておけ。それぐらいは此方にもできる』

「そいつは助かる。・・・ん？・・・な!？」

ふと、こちらに向かってくる一夏の背後から光りの反射を確認したデュオはハイパーセンサーで確認してみると最初に自分が沈めた三角頭『トールラス』がビームカノン（おそらく自分のだろう）を一夏達の方え向けていた。

「あの野郎、まだ動いて・・・!?一夏、鈴音!!後ろだ、避ける!!!」

デュオは一夏達に叫びながら、自身もタナトスのスラスターを噴かせ全速力で向かうが、一夏達が近づいてきていたといても如何せん距離が離れており、幾ら自分の最高の相棒でも間に合わない。

一夏達もデュオの言葉に後ろを振り向いたが、それと同時にトールラスはビームカノンを発射した。その反動でトールラスは自壊したが、ビーム砲は生きており、真っ直ぐ一夏達の方え向かって行った。

（くそつたれえ!!!）

ビームは一直線に鈴音の方へ向かっており、突然の事で鈴音は反応できない。

当る。誰もがそう思ったが、ビームと鈴音の間に白い影が割って入った。

「いち」

ドッガアアアンー!!

一夏の名を叫ぼうとした瞬間、閃光が走り爆発が起こった。

死神とクラス対抗戦〜乱入者には死をお届けします〜（後書き）

地震がヤバいです。テレビをつけると地震の話で持ち切り……作者の方は大丈夫でしたが、予断は許されない状態です。次回は千冬お姉さまとのデートの話をしようと思います。

## 死神とブリュンヒルデ　死神の休日、千冬編

一夏が鈴音を庇いビームの直撃を受けた後、一夏は奇跡的に助かった。もつとも彼のIS『白式』の防御力が高かったおかげで一夏自体ほとんど無傷である。

しかし、流石に直撃を喰らったので一夏の意識は無く、今は安静の為救護室で横になっている。

　　↓IS学園屋上↓

学園の屋上でデュオは一人壁に寄りかかりながら座り込み、夕焼けを眺めていた。

（クソツ……）

しかし、空の穏やかな夕焼けとは違いデュオの心境は穏やかではなかった。

（あの時、俺は完璧に油断していた。らしくねえ、普段ならこんな事は無かったはずだ……平和な日常が俺の感覚を鈍らせた？いや、そんなはずは……）

デュオが思考に耽っていると唐突に屋上のドアが開いた。

「こんな所にいたのか、デュオ」

「姉御……」

今あまり合いたくない人の一人、千冬が屋上にやってきた。

「一夏は？」

「安心しろ。先ほど目が覚めた。数日は打撲に悩まされるだろうが問題は無い」

「そっか……」

しばらく、二人の間で沈黙が続いたが耐えきれなくなりデュオが一夏の容体を聞いてみたが、無事なのを聞きデュオは安堵し、また沈黙が続いた。

「デュオ」

「……なんすか？」

今度は千冬から沈黙を破り、夕焼けを見ながらデュオに話しかけてきた。

「すまなかつたな」

「……何で謝んすか？」

いきなりの謝罪に訳がわからないとばかりにデュオは夕焼けから視線を外し千冬を見上げる。

「お前の起点で敵ISから、生徒を守る事が出来た。お前のおかげで敵ISのコアを回収する事が出来た。しかし、本来はそれは私たちが教師がする事だった。生徒であるお前に頼り切ってしまった。すまないと思っている」

「そんな……むしろ、謝るのはこっちですよ。俺の油断で一夏に怪我を負わしちまった……」

「あれはお前の所為ではない。それにそれを言うなら私も気が緩んでいたのだ。お互いさまさ」

「でもよ……」

苦笑しながら千冬は言い放つがデュオはまだ納得いかない様子でいた。

「まだ納得いかないか？」

「……ああ」

「やれやれ、お前は昔っから酷い失敗をする時の落ち込みようは半端ではないな」

「性分なんでね。出来ればこんな姿姉御に見せたくねえんだけど？」

「だったらさっさと立ち直れ」

「姉御が慰めてくれるならいいんだけどな」

ガツンッ！

「~~~~~いつて~~~~!？」

「殴るぞ？」

「殴ってから言うなよ!？」

段々といつもの調子に戻ってきたデュオに千冬は嬉しそうに口元を綻ばせた。

「デュオ、今日は本当に助かった。ありがとう」

「……」

「なんだその意外そうな顔は？」

まさか千冬が素直にお礼を言うとは思わずデュオはすごい意外そうな顔で千冬を見返した。

「い、いや、まさか姉御が素直に礼を言うなんて天変地異の前触れしか」

「余計な御世話だ」

ガツン！！

「~~~~~!!!?」

「まったく……」

痛みに悶えるデュオを見ながら千冬はため息を吐いて屋上を後にしようとした。が、

「あ！そうだ、デュオ」

「つつ~~~~な、なんすか？」

デュオは痛みに悶えながらも千冬の方を振り返ると何やらそわそわと視線を動かしている千冬がいた。

「あ、あのだな。あ、明日は丁度日曜日だろ？」

「ん？ああ、そうっすね」

それがどうしたんだろう？と思いつつ千冬に視線を向けるが今度は夕焼けの所為かやけに顔が赤い。

「そ、それでだな、あ、明日私も非番でな……そ、それである時のお前の約束を果たそうと思ってだな／＼」

「あの時？……ああ、あれか！」

デュオは一瞬何のことかわからなかったが直ぐに思い出し、

「まさか、姉御からデートのお誘いが来るとわねえ」

ドゴンッ……！

「~~~~~!!!?」

「う、うるさい馬鹿者／＼／＼！」

照れ隠しであるう千冬の拳がデュオの頭に落された。

「と、とにかく、明日は予定を開けておけ！いいな／＼／＼！」

「あ、姉御！ちょっと待ってくれ」

「な、何だ！？」

屋上から走り去ろうとした千冬にデュオが慌てて引きとめ、懐からUSBを取り出した。

「これ、今まで俺がアイツ等と闘ったデータが入ってる。因みに三角頭が『トラス』、ゴツイ方が『ビルゴ』だ。灰色の方は俺も初めて見るが・・・」

「そ、そうか、わかった。では、またな」

千冬はデュオからUSBを受け取り、今度こそ屋上を後にした。

「・・・さーて、と。うじうじしても始まんねえ！明日は姉御とデートだし、今日は早く帰って寝るかあ！！」

翌日、商店街

「しっかし、日本の商店街ってむこうとは違うんだな。いや、当たり前なんだが・・・なんつうか、活気が違うというか・・・」

商店街の中心にある時計台の下に黒い革ジャンの下に赤いTシャツを着てに同色のジーパンとスニーカーと履き、ほぼ黒一色の服装に腰まである茶髪を三つ編みにした少年、デュオが商店街を見渡しながらそんな感想を口にした。

「しっかし、姉御。遅いな、何かあったのかな？」

携帯の時計を見ながら呟く。と、

「待たせたな、デュオ」

「いやいや、そんなに待って、ない……」

声のする方へ振り返ったデュオは千冬の姿を見て言葉を無くした。それもその筈だ、何故なら普段スーツ姿しか見ない千冬が今は私服姿で（それも少し化粧をして）自分の前にいるのだから。もし、ここに一夏がいたなら仰天していただろう。

「ど、どうした？ やっぱり変か？」

「……ハッ！ そ、そんなわけねえぜ、姉御！ た、ただ、私服姿がすっげえーにあっててだな……」

「そ、そうか／＼／」

そう言って顔を赤らめる千冬にデュオは内心で吐血した。

（ゴフツ！ な、なんつう可愛さ……普段の凜々しい姉御もいいがこういう可愛い姉御もまた……ハッ！ これが日本で言う『ギャップ萌え』か！！）

日本の文化恐るべし！！ つと内心で間違った日本の文化を理解しながらデュオは時計台を見て丁度お昼時だったので、

「それより姉御。先に飯食おうぜ？ その後、俺の買物に付き合ってくれよ？」

「あ、ああ。そうだな」

そう言って二人は並んで商店街に向かって行った。

とある和食店

「いや、やっぱ、日本の食文化には驚かされるぜ！」

「相変わらずの日本好きだな、デュオ」

二人はテーブルを囲いながらそれぞれの出された食事を楽しんでいた。因みにデュオはヒレカツ定食、千冬はざる蕎麦だ。

「当たたり前だろ、姉御！向ここの料理も美味いがやっぱり日本の料理は一味違うんだよね」

「そうか」

楽しそうに食べるデュオに千冬もまんざらではなく若干嬉しそうに蕎麦を食べていた。

「しっかし姉御？今日休んで大丈夫だったのか？」

「何故だ？」

食事也大分落ち着き、食休みに入った時デュオが唐突に話しかけてきた。

「先日の襲撃の件だよ。まさかもう昨日の今日でやる事が溜ってんじゃないねえのか？」

「ああ、その件か。安心しろ、お前が寄こしてくれたデータで思ったより捗った。後は上が処理するだろう」

「ならいいんだがよ……」

「そう心配するな。今日休みが貰えたのもお前のおかげだ」

「そっか」

その言葉に満足したデュオはお茶を一口飲むと席を立ちあがり、

「そんじゃ、デートの続きといきますか、姉御？」

「その言い方は止める……」

その後二人はショッピングモールに向かい、それぞれの服を買ったり、サーティーンでアイスを買ったりなど傍から見れば年の離れたカップルの様であった。

その後二人は別々で学院に戻った。

その夜

「ね、デュオ？今日、誰と、何処へ行ってたのかな？おねーさんに教えて？」

「そ、それはな？え、えっと・・・て言うか楯無？気の所為かもしんないんだが、お前からすごい瘴気が出てんだが？」

夜、帰宅したデュオを待っていたのは満面の笑みの楯無であった。確かに満面の笑みであるが、目が笑っていない。それに何時も持っている扇子も何故か黒一色だ。

「それが、なに？」

「い、いえ、何でもないです。はい」

デュオはあまりの恐ろしさに思わず敬語になってしまう。

「そう言えば、今日、織斑先生非番だったんだよね？」

「ギクツ！！！」

「それにある生徒と帰宅はバラバラだったけど、手に持っていた荷物の袋は同じメーカーの袋だったな」

「（滝汗）」

「そう言えば今日、虚が街中である生徒と教師を見かけたと報告がわかった、わかった！！！」

ここまで来るとごまかしはきかないと判断したデュオは白旗をあげた。

「なにが望みだ？」

「べつについでただ、おねーさんもデュオとデートしたいな？」

いつの間にか扇子が代わっていて、『もし断れば・・・』と書かれていた。

「ああ、わかったよ。でも、そうになると結構後になっちゃうぜ？もう直ぐ『学年別個人トーナメント』が始まるからな」

「ん、いいよ、いいよ、デュオとデートできれば それじゃ、約

束だからね？お休み」  
デュオの了承を得ると楯無は嬉しそうに扇子をいじりながら、部屋を出ていった。  
「ハア」。・・・なんか、一気に疲れたぜ」  
脅威が去ったデュオは部屋に備え付けられているシャワーを浴びそのまま眠りについた。

翌日

「ふあゝあ。ねむ・・・」  
朝、SHRが始まる前何時もより早く来たデュオはすごく寝むそうであった。周りが騒がしくても逆にそれが眠気を煽っているようだ。  
「おはよ、デュオってどうしたんだ？酷い寝むそうじゃないか？」  
「おお、一夏か。いや、何か今日は一段と眠くてな」  
「あゝ確かに週明けの月曜日って何かだるいよな」  
二人が他愛もない会話をしていると、真耶と千冬の二人がやってきた。

「おはよう諸君。今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用するので授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまで学校指定の物を使うので忘れないようにな。忘れた者は代わりに学校指定の水着で授業を受けて貰う。それすらないものは、まあ下着でも構わないだろう」

（いや、構うだろ！！）

この時、確実に男二人の考えがシンクロした。

「では、山田先生、HRを」



死神とブリュンヒルデ、死神の休日、千冬編、(後書き)

自分にはこれが限界です。

それと次回はスーパーシャルタイムだぜ！！

## 死神と二人の転入生と金の姫君現る

「シャル！？なんだってお前が、ここにいんだ！？いや、そんな事より、何で今まで連絡してくれなかったんだよ！？」

「デュ、デュオ、落ち着いて、ね？」

「いや、そんな事より！何でお前がお「わー！！わー！！」」  
「スパアン！！」

「ぐっ！？」

「まだHR中だ質問なら後にしろ」

「で、でもよ、姉御」

「ドガッ！！」

「返事は、はい、だ。それと織斑先生と呼べ」

「は、はい」

千冬に殴られ幾分か冷静さを取り戻した俺は渋々ながらも自分の席に戻った。

「それでは、デュノア。挨拶をしろ」

「はい」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事が多いでしょうがみなさんよろしくお願いします」

（『シャルル・デュノア』だあ〜？）

「こやかに自己紹介するシャルに俺は自分でもわかるくらい不機嫌になっただけだった。」

「お、男・・・？」

「はい。こちらでは僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を」

「きゃ」

「はい？」

「きゃあああああああー！！！！」

今一瞬ソニックウェーブがおきたのかと思った。

「男子！三人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！」

「美系！織斑くんやマックスウエルくんとは違った守ってあげたくなる系！！」

「地球に生まれてよかった~~~~！！」

（これは、後で問いたださないとな・・・）

周りが騒ぎたてる中俺はこの後どうシャルと話す時間を設けるか考えていた。

「あー騒ぐな。お前ら静かにしろ」

面倒くさそうに千冬がぼやくが周りの喧噪にかき消されてしまった。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから」

山田先生が注意で少しだが騒ぎが収まった。そして、シャルの隣にいるもう一人の転校生に注目した。

その人物の第一印象は『軍人』の一言に尽きるだろう。長い銀髪に小柄な体、しかし全身から放つ気は歴戦の軍人のそれだ。何より目を引くのは左目を覆う眼帯だ。

そして・・・

（こいつ、俺と似た匂いがする？まさか、コイツも俺と同じか？）

「挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。織斑先生と呼べ」

『教官』と呼ばれた事で千冬は面倒くさそうな顔をしながらラウラと呼ばれた少女に注意した。

「了解しました」

（姉御を教官と呼び、軍人と言ったらコイツ、ドイツ軍のIS配備特殊部隊『シユヴァルツエア・ハーゼ』所属か？）

確か前、姉御が一年間ドイツで軍の教官をやっていたと言っていたが、それと関係している？

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「・・・・・・・・・・」

他にはないのかとクラスメイト達が沈黙していると、ラウラからそれ以上紹介は無かった。

「あ、あの以上・・・・・・・・ですか」

「以上だ」

(あゝあ、かわいそうに・・・・山田先生泣きそうだぜ)

「！貴様が」

突然ラウラが一夏の顔を見た瞬間つかつかと近寄っていきそして、バシッ！

「・・・・・・・・」

「う？」

「は？」

ラウラがいきなり一夏を平手で引つ叩いた。

いきなり叩かれた一夏も隣にいた俺も周りのクラスメイトですらなにが起きたかわからなかった。

「いきなりなにしやがる！」

「ふん・・・・・・・・」

一夏の文句を無視しラウラはそのまま自分の席に着いた。

(おいおい・・・・・・・・)

幾らなんでもご挨拶過ぎねえか？

「あーゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人は着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同のIS訓練を行う。解散！」

クラスの重い雰囲気を感じ取ってか千冬が咳払いをして今日の予定を話した後、教室から出ていこうとした。

「マックスウエル。顔見知りならデュノアの面倒を見てやれ。織斑では頼りないからな」

「えっと・・・・・・・・りよ、了解」

「ひでえ・・・・・・・・」

姉御、その心遣いが目にしみるぜ・・・・・・・・。それと一夏、ドンマイ。久しぶり、デュオ。それと君が織斑くんだね？初めまして、僕は

「おっと、シャル。今は挨拶は後回しだ。さっさと移動するぞ女子が着替えるからな。一夏、行くぞ」

「おう」

シャルが一夏に挨拶するのを遮り俺はシャルの手を取りそのまま教室を出た。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびに移動だから慣れてくれ」

「う、うん」

移動しながら、一夏が補足説明をしているが、シャルの何故か返事は齒切れが悪い。

「?トイレか?」

「トイ・・・っ違うよ!」

「そうかそれは何より」

そんな会話をしながら俺達は階段を下りて一階へ。結構速いペースでアリーナに向かっているのだが、やはり日本の女子高生は侮れないらしく。

「ああっ! 転校生発見!」

「しかも織斑君とマックスウエル君と一緒に!」

ほら、早速きやがった。

「織斑君の黒髪やマックスウエル君の茶髪ロングもいいけど、金髪もいいわね」

「しかも瞳はエメラルド!」

「きゃああっ! 見て見て! 手! 手繋いでる!」

「日本に生まれてよかった! ありがとうお母さん! 今年の母の日は河原の花以外の花をあげるね!」

いや、花以外のものを買ってやれよ・・・

「ったく、付き合ったらんねえぜ。よっつ!」

「ひゃっ!?!」

「きゃあああああ!?!」

俺は走りながらシャルをお姫様抱っこし、そのまま空いてる窓へ向かった。途中、何故か周りの女子が狂喜した歓声が上がったが気にしない。

「一夏！俺達は先に行ってるぜ！後から来いよ！」

「は？ちよ、デュオ」

「バツ！！」

窓枠に足を掛け一気に跳躍すると木々を飛び越えながら一気にアリーナに向かった。

途中、「マックスウエル君が攻めでデュノア君が受け！？」とか「二人で禁断の愛の逃避行！？」とか「お前は忍者の末裔か！！？」とか聞こえたが気にしない。たら気にしない。

アリーナ更衣室に着くまでお互い無言だった、アリーナ更衣室に着きシャルを降ろす。

「ほら」

「あ、ありがとう／／／／。デュオ／／／／」  
シャルを下ろすと何故か顔が真っ赤になっていた。

「？おい、どうしたんだ？顔が真っ赤だぜ？」

「な、何でもないよ／／！」

「そ、そうか。それよりさっさと着替えちまおうぜ？後ろ向いてやるから」

「う、うん。ありがとう」

そう言ってお互い無言で背中合わせに着替える。何故そんな事をするかというのは後で説明しよう。

そして着替え終わると、

「何も、聞かないの？」

突然シャルが訪ねてきた。後ろを振り向くとISスーツに着替えたシャルが悲しそうにこちらを見てきた。

「聞かなくても大体見当はついてる。が、それをお前の口から言わない限り俺から聞こうとは思わねえよ」

「そう……」

そのまま、シャルは悲しそうに拭いてしまった。つたく……

ポンツ

「ふえ？」

「んな悲しそうにすんじゃねえ。お前のそんな顔見たくねえし、似合わねえよ」

手をシャルの頭の上に置き優しく撫でながら、諭す様に言う。

「うん」

「だ、だからな、そんな悲しい顔すんじゃねよ。お前は笑ってる方が生き生きしてんだからよって、何笑ってやがる!？」

自分でも顔が赤くなるのを察しながら言葉を繋いでいくが、途中でシャルがクスクスと笑っているのに気付き怒鳴ってしまった。

「フフツありがとう、デュオ。お陰で元気になったよ」

「フ、フン！そーかよ!」

欠々に見た見たシャルの笑顔に訳もなく顔が赤くなってしまふのを感じながら俺は自分のニヤケ顔を悟られない様にそっぽを向いた。

更衣室を温かい空気が包んでいると、

バンツ!

「ん？」

突然、更衣室のドアが開き二人でそちらを見て見ると汗だくで息も絶え絶えな一夏がいた。

「ぜえーぜえー」

「よっ！遅かったな、一夏？」

「遅かったな、じゃねえよ！なんだよ、アレは!?!木々を飛び移る

とか、お前は忍者か!？」

「あんなもん訓練次第で身に着くぜ？」

「身に着くかー!!!」

「んな事よりさっさと着替えろよ。もうお前だけだぜ？」

「ああ! そうだったー!!!」

そう叫ぶと一夏は上着を脱ぎ捨てて着替え始めた。

「あ、そうだ。自己紹介が遅れたな。俺は織斑一夏。よろしくな」

「う、うん。よろしく一夏。僕の事もシャルルでいいよ」

シャルは一夏を直視しない様に一夏から視線を反らしながら会話をしている。

「フーか、さっさと着替えろよ一夏。ISスーツ着るのに何分かなだよ？」

「んな事いったて、これ着るとき一々裸になんきやなんねえから、引っ掛かってさ」

「引っかかって?」

「おう」

一夏の引っかかったの発言にシャルはみるみる顔を赤くしてしまった。その態度に一夏は不信がるが、まあ、鈍感なこいつは気付かないから安心か。

「よつと。・・・よし、行くうぜ」

「おう」

「う、うん」

そうして俺達は更衣室から出てゆき、第二グラウンドへ向かった。

「それにしても、デュオとシャルルのISスーツ着やすそうだな。

どこのやつ?」

「俺はワイナー社製の完全オーダーメイドでシャルが」

「デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはフランクスだけど、

殆どがフルオーダー品」

「ん? デュノア? どこかで聞いたような・・・」

「お前それ本気で言ってるのか? 枯れてるとは思っていたが、脳ま

で老化が激しいとは、末期だな」

「んだと！」

「デュ、デュオ。えっと一夏も落ち着いて？これは僕の家で作ったものだよ。父がね、社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きなIS関係の企業だと思う」

「へえ！じゃあシャルルって社長の息子なんだ。道理でなあ」

「うん？道理でって？」

「いや、なんつうか気品っていうか、こういうところ育ち！って感じがするじゃん。納得したわ」

「いいところ・・・ね」

（ハア、馬鹿野郎が・・・）

一夏の『いいところ』という発言でシャルがまた複雑な表情になってしまった。

ガツン！

「！????????????????な、デュオ！いきなり何しやがる！」

「無駄話してねえでさっさと行くぞ。姉御の授業で遅れたらシャレになんねえぞ」

「そ、そうだね。行こう、一夏？」

「ああ、そうだな」

そう言っただけで走り出した俺の後に続くようにシャルと一夏がついてきた。一夏はまだ納得していないようだ、仕方無い。折角元気になったのにまたあんな顔をさせた一夏が悪い。

「遅い！」

デュオ達が第二グラウンドに着くと早速千冬のお叱りお受けた。

「ぼうつと突っ立ってないでさっさと列に並べ！」

「……は、はいっ！」

デュオ達は千冬に言われるまま、一組の一番端の列に並ぶ。

「ふいゝさすが姉御。おつかねえぜ」

「ボクも流石に今のは怖かった」

デュオは額に着いた汗をぬぐいシャルルはその隣で苦笑していた。

一夏は列に並んだ早々セシリアに絡まれており、更には一夏後ろにいた鈴音にも絡まれていた。

「あの二人。今姉御の授業だってわかってんのか？」

「んー気付いて無いみたいだね」

セシリアと鈴音の二人の普通にしゃべる声と違いデュオとシャルルは小声で話していた。

「あ、早速姉御に叩かれたぜ」

「い、痛そう」

そんな二人の様子を呑気に見ていた二人だが、その後喋ってるのがバレ千冬の出席簿の餌食になったのは言うまでもない。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」  
「はい！」

グラウンドに一組と二組の元気のよい返事が響いた。

「つて〜姉御の奴も少し手加減つてのを知ってほしいぜ」

「あ、アハハハ、しょうがないよ。授業中に無駄話してたのは僕たちなんだし・・・」

ゲツソリしながら呟くデュオにシャルルは苦笑しながらも慰める。

「今日は戦闘を実演してもらおう。丁度活力あふれんばかりの十代女子もいるいる事だしな。・・・鳳！オルコット！」

「な、何故私まで!？」

「専用機持ちは直ぐに始められるからだ」

完全なとぼつちりを喰らったセシリアは異議を唱えるが千冬の言葉に鈴音と共にブツブツと文句を言いながら前に出た。

「お前ら少しはやる気を出せ。・・・アイツにいいところを見せられるぞ?」

二人のやる気の無さにあきれた千冬が二人に聞こえるように小声で呟く。するとたちまち、

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね!専用機持ちの!」

あら不思議、二人のやる気がMaxになりました。

「流石は姉御。アイツ等のやる気が出るポイントを押さえてやがる・

・・・

「は、ハハハ、なんとというかわかりやすいね?」

「??」

千冬の言葉を聞いていたデュオとシャルルは呆れと苦笑をし、一夏だけは訳がわからず首をかしげていた。

「それで、相手はどちらに?わたくしは別に鈴さんとの勝負でも構いませんが?」

「ふふん。こつちのセリフ。返り討ちよ」

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は」

キイイイン・・・

「ん?この音は?」

「あああーっ！ど、どいてくださいー！！」

「デュオ！」

グイッ！

「うお！？シャ、シャル！？ど、どうし

」

ドカーン！

突然シャルルに引つ張られたデュオは何事かと問うが応えるより先に衝突音を聞き一夏の方を見るとIS装備状態の真耶がこちらでもIS装備状態の一夏を押し倒していた。

そしてよく見れば一夏の手が真耶の豊満の胸を鷲掴みしていた。

「あ、あの野郎っ！な、なんて羨ましい・・・！」

「デュオ？」

「はいっ！何でもありません！！」

デュオは今の状態の一夏を見て本音がポロリと漏れたが後ろから底冷えするようなシャルルの声にビシッと直立不動で敬語でしゃべった。

そうしている間にも嫉妬に狂ったセシリアと鈴音が一夏に向けて攻撃するが真耶が巧みな射撃で二人の攻撃を撃ち落した。

「へえ」

「うわ〜」

デュオとシャルルはその射撃をみて感嘆の声をあげた。

「あの体勢であそこまで見事な、それも自然な動作で射撃をするとはな。試験の時は手加減でもしてたんか？あの先生？」

「さあ？僕は分からないけど、少なくとも代表候補生レベルだよね」  
周りがシーン静まり返っている中、デュオとシャルルの声が一際グラウンドに響き渡った。

「その二人の言うとおりだ。山田先生はああみえて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔の話ですよ。それに代表候補生どまりでしたし・・・」  
先ほどまでの落ち着きのある雰囲気は消え、何時ものぼやくとした雰囲気に戻った真耶は千冬に褒められたのが恥ずかしいのかずれた

メガネを直しながら顔を赤く染めていた。

(ていうか、ああみえてもって若干貶してるよな)

「さて小娘共何時まで呆けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちなら直ぐに負ける」

千冬に『負ける』と言われた二人は気に障ったのかその瞳に闘志を滾らせた。

「では、始め！」

千冬の号令と共にセシリアと鈴音は空中に飛翔し、それを確認してから真耶も飛翔した。

「さて、今の間に……そうだな。丁度いい。デュノア、山田先生が使ってるISの解説を試してみる」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながらシャルルがしつかりした声で解説を始めた。「山田先生が使っているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないものです。安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェア持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替え(マルチロール・チェンジ)を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サイドパーティーが多い事でも知られています」

「ああ、いったんそこまでいい。……終わるぞ」

切りのいいところで千冬がシャルルの説明を終わらせると同時に空中が終わる事を告げる。

真耶の巧みな射撃でセシリアを誘導し、鈴音とぶつかった所をグレネードで止めを刺す、見事な試合運びだ。

グレネードの直撃を喰らい地面に落ちてきた二人は早速お互いの失敗を罵り合った。

そんな二人を見てデュオは呆れたように頭を抱え千冬の前に一歩躍り出た。

「姉御くちよつといいか？」

「なんだ。それと織斑先生だ」

何時までもいがみ合ってる二人にあきれた目をしていた千冬がデュオに呼び出されそちらを向いた。

「了解。んじゃ、織斑先生？次は俺が山田先生とやっていいですか？」

「なに？」

突然のデュオの申し入れに千冬は目を細めいがみ合ってた二人を含めクラス中が一斉にデュオに視線を送った。

「いや、代表候補生のレベルがあんなもんだと思われちゃあ、こつちとしてもよろしくないんでね」

そう言つて悪戯を思いついた子供の様な笑みをしながら千冬にいう。  
「……」

千冬は何か考えるような仕草をした後、

「いいだろう。ただし、『例のアレ』は使つなよ？」

「了解」

千冬の許しが出た瞬間、瞬間展開でタナトスを起動しアクティブクロークを開き空中に飛翔した。

ここに元日本代表候補生とエジプト代表候補生の試合が決まった。

死神と二人の転入生、金の姫君現る。(後書き)

遂にキターー!!!シャルロット登場!!!

ISのヒロインズの中で一番好きなキャラです。

死神VS副担任(死神と昼食)(前書き)

この小説に出てくるシャルは若干黒いです。

## 死神VS副担任(死神と昼食)

「さーてと、そんじゃあ山田先生？連戦になりますけどいいっすか？」

「え？あ、はいっ。大丈夫です」

空中に上がったデュオは真耶に尋ねると彼女も準備はいいようだ。

「そうかい。・・・んじゃあ、心の準備はいいか？」

「へ？・・・！？」

ビームシザースを構え突撃するデュオに真耶は距離を保ちながら射撃で牽制してきた。

「さすがにやりますね！試験の時は手加減してたんすか！？」

迫りくる銃弾をビームシザースの柄の部分で弾きながら距離をつめようとしたが一向に距離がつかまらない。

(くそっ！なんとしても距離をつめてえが、射撃が的確すぎてつめられねえ！しかもこっちの遠距離武器はバスターシールドとビームスラッシュのみ、さあってどうすっか・・・)

試しにビームスラッシュを飛ばしてみるがあっさりかわされてしまった。

次の手をどうすか考えている間にも真耶からの射撃が的確にデュオを狙い美味しく考えがまとまらない。

(考えても埒が明かねえ！こうなったら・・・)

「突撃あるのみ！」

「え！？」

イグニッション・ブースト

考える事を放棄したデュオは瞬間加速を用いて真耶に突進してきた。真耶も一瞬呆気にとられたがすぐさま気持ちを切り替えし、デュオの足を止める為的確に射撃を繰り返す。

「アクティブクローク！！」

「な！？」

デュオの一声で先ほどまで開いていたアクティブクロークが閉じ完

全ではないが銃弾を弾いた。まさかビームシザーで弾く事を止め  
アクティブクロークで防御しながら突進してくるとは・・・

「貰ったぜ！」

「な!？」

そこでデュオは思いもよらない行動に出た。

バサッ!

追加装甲でもあるアクティブクロークをパージし、真耶の視界を封  
じたのである。

「閉じる！」

「え!？」

しかも、デュオの一声でアクティブクロークが閉じ真耶の体を覆う  
ように拘束してきたのだ。

真耶を拘束してデュオはそのまま一気に距離をつめ、ビームシザー  
スで切りかかろうとしたがある事に気づき止まる。

「チエックメイト、といてえ処だがこっちの負けか・・・」

「え?・・・あっ!」

デュオがあと一押しで勝てると思いきや、思ったよりダメージを受  
けすぎてしまい、彼のISのシールドエネルギーがゼロになっ  
た。

「いや、あんなこと言って結局負けちゃったぜ」

「そんな事無いですよ、マックスウェル君。本当に危なかったです  
あの後、真耶を拘束していたアクティブクロークを解除し地上へ降  
りながら真耶と話していた。

「いや、でも負けは負けだ。慰めも励ましもいらねえっす」

そうして地上へ降りた後もデュオは申し訳なさそうに笑いながらク  
ラスの前に立った。

「わりい、負けちまった」

「いやいや、凄かったぜデュオ！」

「本当にすごいよ、マックスウエル君！」

「さすがエジプト代表候補生！」

しかし、周りからは賞賛の声が上がり苦笑しながらその声に応えた。  
「あーそこまでしておけ、お前ら。マックスウエルも元の場所に  
戻れ」

「了解」

パンパンと千冬は手を叩きながらクラスん皆を制し、デュオに元の  
場所に返るように施す。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。  
以後敬意を持って接するように」

そう言った後千冬は一呼吸おき、

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、マックスウエル、ボ  
ーデヴィツヒ、鳳だな。では八人グループになって実習を行う。各  
グループリーダーは専用機持ちがやる事。いいな？では分かれる」  
千冬が言い終わるや否やニクラス分の女子が男三人に詰め寄ってき  
た。

「織斑君。一緒に頑張ろう！」

「マックスウエル君、分かんないところ教えて〜」

「デュノア君の操縦技術みたいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループに入れて！」

その状況を見かねてか、千冬は眉間を指で押さえながら低い声で告  
げた。

「馬鹿者共が……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！  
順番はさっき言った通りだ。次にもたつくようなら今日はISを背  
負ってグラウンド百周させるからな！」

(IS背負ってグラウンド百周って普通に死ぬだろ……)

鬼教官の一言で三人に詰め寄っていた女子は蜘蛛の子を散らす様に  
グループに入っていく、あっという間にグループが出来上がった。

流石にIS背負ってグラウンド百周は効いたのだろう。

「最初からそうしろ。馬鹿者共」

その様子を見て疲れたようにため息を漏らす千冬が印象的だった。

「ふいー終わった終わった」

「ああ、マジしんどかったぜ」

午前の実習が終わり、デュオと一夏は訓練機を専用のカートに載せて運んで行った。(因みに一夏は強制的だがデュオは自発的に運んで行った)

「まあ、いいや。デュオ、シャルル、着替えに行こうぜ。俺達はまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしな」

「え、ええつと僕はちよつと機体の微調整をしてからいくから、先に着替えててよ。時間がかかるかもしれないから、待ってなくていいから」

「おーわかった。んじゃ、シャル？俺達は先に行ってるぜ？」

一夏が待とうか？という前にデュオが一夏の肩を掴み引つ張りながら更衣室に向かって行く

「って、おいデュオ！待ってなくていいのか？」

「大丈夫だろ？それにさっさと着替えねえと飯食う場所も無くなっちゃうからな。シャル、後でちゃんと来いよー」

「うん、わかった。ありがとう、デュオ」

「気にすんな」

「って、わかったから押すなよ、デュオ！」

事情を知っているデュオの気遣いにシャルルは申し訳なさそうにお

礼を言うとデュオと一夏は更衣室に向かった。

昼休み〜屋上

「どういう事だ」

「ん？」

IS学園の屋上で箒の押し殺したような声に一夏が疑問の声をあげた。

「天気がいいから屋上で食べるって話だったろ？」

「そうではなくてだな・・・！」

ちらつと箒が横を向くとそこにはセシリアに鈴音、申し訳なさそうなデュオにシャルルがいた。

「折角の昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが・・・」

（いや、篠ノ乃は『屋上で一夏と二人つきりで食事』がしたかったんだろうが・・・）

悔しそうに箒が唸ってるのを見てデュオは気付いてやれよと思ったが直ぐに無理だなと諦めた。隣のシャルルも申し訳なさそうに苦笑していた。

「はい一夏。あんたの分」

「おお。酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。あんた前に食べたいって言ってたでしょ？」

（素直じゃねえな）

（ねえ、デュオ。もしかして彼女も？）

（そ。一夏ラヴ）

鈴音の様子をみてデュオとシャルルは小声でひそひそと話していた。

因みに彼らの弁当も鈴音と同様で食堂で買ってきたものだ。

「コホンコホン。一夏さん、わたくしも今朝たまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういう物を用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

そういつてセシリアはバスケットを開くとそこにはサンドイッチがキレに並んでいた。・・・見た目だけは・・・

「お、おう。後で貰うよ」

セシリアのサンドイッチを見た一夏は若干引き気味になってしまう。

「?どうかしまして?」

「い、いや!何でもない」

「ぶ、ククククッ」

「?デユオ、どうかしたの?」

「い、いや、あ、あのな?」

必死に笑いをこらえながら顔をシャルルの耳元に寄せると、

(あのセシリアのサンドイッチ。一見うまそうに見えるけど、実はかなり不味いんだよ)

(え?そうなの?)

(ああ、しかも一夏の奴断れないからそれからずるずると引きずってるんだ)

(ウワッ)

「お二人とも何をコソコソしているんですの?」

「い、いや、何でもないぜ。な、シャル!」

「え!??う、うん何でもないよ!」

「??」

二人の必死の言い訳にセシリアは不思議そうに首をかしげたが追求せずまた一夏の方に向き直った。

「それにしても、僕が同席してもよかつたのかな?」

「何言つてんだよ、シャル。久々にあったのに、んな連れない事いってこなしたぜ?」

「そうそう、男同士仲良くしようぜ。色々不便があるだろうが、ま

あ協力していこう。わからないところがあつたら何でも聞いてくれ。

デュオに

「って人任せかよ!？」

「ばっか、面倒見ろって言われたのはデュオだろ？」

「それはそうだが、何か釈然としない」

二人のやり取りにシャルは微笑しながら、

「フツッありがとう。一夏って面白いね。デュオも改めてよろしくね」

「おう、改まなくてもいいんだけどな」

そんな会話をしている中、箒だけが先ほどだんまりを決め込んでいる。

「どうした？腹でも痛いのか？」

「違う・・・」

「そうか。ところで箒、そろそろ俺の分の弁当をくれるとありがたいのだが」

「・・・」

一夏がそう言うのと箒は無言で弁当を差し出した。

そんな態度に一夏は返事に困りながら弁当の包みをとくと、

「じゃあ、早速・・・おお！」

弁当の中は見るからにうまそうなおかずがバランスよく並んでいた。

「これはすごいな!どれも手が込んでそうだ」

「どれどれ・・・へえ、コイツはすげえじゃねえか！」

デュオも渡された一夏の弁当を覗いてみるとその美味しそうなおかず后感嘆の声をあげた。

(コイツは篠ノ乃が一歩リードかな?)

お弁当の勝負で言ったら間違いなく箒が優勝だろうとデュオは確信した。

そして、一夏は箒の弁当だけ唐揚げがない事に気づきそれを訪ねると、

「わ、私はダイエット中なのだ!だから、一品減らしたのだ。文句

あるか？」

「ダイエツト中？いや、篠ノ乃。お前がする必要があんのか？むしろこの中で一番胸がおおき　　グハア！？」

最後まで言い切る前にシャルが拳で黙らせた。座った状態で見事なボディーブローである。

「……」

「デュオ、女性の胸に関してはあまり触れないでおこうね？」

そのシャルの意外な行動に一同が黙ってる中、シャルが暗い笑みを見せながらデュオに問いかける。

「い、いや、実際本当の事をだな？「何か言ったかな？」何も言っていないです！ハイッ！！」

痛みに悶えながらも言い訳しようとしたデュオにシャルは更に笑みを深めて問いかけると直ぐに姿勢を正して敬礼した。

「まったく。え、えつと何かな？」

デュオの態度にあきれていると一夏達の視線に気づきシャルは困ったように問いかける。

「い、いや、シャルルって何時もそうなのか？」

「へ？何時もって……ち、違うよ！こんなことするのはデュオだけだよ！」

「そ、それはそれで酷いような……」

「ああもう！デュオからも何か言っつてよ！」

シャルは必死に言い訳するが一夏達が若干引いているのに気付き慌ててデュオに振る。

「あん？あんなもん普通だろ？友達同士のじゃれあいって日本じゃやんねえのか？」

「い、いや、それはやるが、じゃれあってたのか？」

疑いの眼差しで見てくる一夏にデュオは何をわけのわからん事をつとでも言いたげの目で

「あたりまえだろ？て言うかこんな事で一々目くじら立てるほど、俺達の中は浅くねえって」

そう、デュオにとってたかが腹に一発食らったからと言ってどつてことはないのだ。むしろ、全然気にしない。

「そ、そうか。まあお前らがそれでいいなら、いいんだけどよ……」

「あまりにもあっけらかんと言うデュオに一同は押されそのまま納得した。」

「そ、それにしても二人はそんなに仲がいいんだな」

「ん？まーな。そう言えばこうやって飯食うのって初めてじゃね？」

「そうだね、何時もは家の中で食べてたから……」

「ここにカトルがいればな」

「そう言えばカトルは元気にしてる？」

「ああ、元気元気。相変わらずのワーカーホリックだ。それでいて俺には長期休暇だしてここに通わせえるは本当、アイツの考えてる事はわかんねえよ」

「アハハ、カトルらしいよね」

そうして二人の世界に入ってしまった、一夏達は何やら入り込めない雰囲気のまま昼食を食べた。

因みに部屋は予想通りデュオとシャルが相部屋になった。

その時の一夏の無念そうな顔は記憶に新しい。

死神VS副担任(死神と昼食)(後書き)

まだまだ、シャルのターンは続くよ！

死神と金の姫君　お前は俺が守る

「ほら、入れよ」

「う、うん・・・」

夜、デュオはシャルと共に自分達の部屋に入った。

だが、どういう訳か二人の表情は妙にギクシャクしている。

「先にシャワー浴びていいぜ？俺は後から入るからよ」

「う、うん、ありがとう。じゃあ先に入るね？」

そう言っただけでシャルがシャワールームに入っていくのを見送りデュオは一息ついた。

「フウ・・・さって、と・・・どうしたもんかね」

そしてデュオはベットに横になり少しの仮眠をとった。

「デュオ、あがったよ。デュオ」

「ん？おお、そうか・・・」

シャルの声で目を覚ましたデュオはシャルの方を向くとそこには湯上りで頬を上気させた女の子がいた。

「？どうしたの、デュオ？」

「い、いや、な、何でもねえんだノノノじゃ、じゃあ俺もシャワー浴びてくるぜ！」

これ以上湯上りのシャルを直視すると理性が本格的にヤバくなると悟りデュオは一目散にシャワールームに入っていった。

（目覚めの一発になんつう強力なモンを見ちまったぜ。お陰で目が覚めちまった・・・）

シャワーを浴びながらデュオは赤くなつた顔を手で覆いながらそんな事を考えていた。

「ふうふうさっぱりしたぜ。ん、どうしたシャル？顔真っ赤にして・・・」

「う、ううん／＼な、何でもないよ!？」

シャワーから上がり寝間着に着換えたデュオはベットに腰掛けるシャルに問うとシャルは顔を赤くしながら何でもないをアピールする。「ふうんならいいんだけどよ・・・んじゃ、話す気になっただろ？聞かせて貰うぜ、シャルル。いや、この場合はシャルロットと言えばいいか？」

金髪の少女『シャルロット・デュノア』が少し悲しげに応えた。

「止めてよデュオ。そんな他人行儀の言い方は、何時も通りシャルでいいよ」

「そうかい。まあ、俺としてはその方がいいしな。んじゃ、シャル？どうして男の恰好でここに転校してきたんだ？まあ、大体察しはつくが・・・」

「うん、デュオの想像通り。僕が男の振りをしてIS学園に入った理由は、実家の方、デュノア社の社長である僕の父から命令されたからなんだ」

「やつぱりか・・・」

『父からの命令』その言葉を聞いたデュオはギリツと歯を食いしばった。

何故実の親が娘のシャルにそのような命令を下すのか、普通ならおかしい話だが、理由は簡単だ。シャルは、シャルロットは愛人から生まれた子なのである。

「まあ、理由は大方察しがつくな。最近のデュノア社はウイナー家が支援していると言っても第三世代型開発から遅れて経営難に見舞われているからな」

「うん、いくらISのシェアが世界三位だからって、所詮リヴァイヴは第二世代型。第三世代型の開発に乗りきっても圧倒的にデータや時間が不足しているんだ。それにフランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッションプラン』から除名されちゃってるからね」

「幾らウイナー社がバックに着いてるからと言って、樂觀はできねえ。いつウイナー社が手を切るかも分かんねえんだ、第三世代型の開発は急務だな。それでお前が男装してきた理由はさしずめ広告か」

「それだけじゃないんだ・・・」

悲しそうに眼を伏せるシャルにデュオは察したのか、

「なるほど、そして俺と一夏のIS『死神』と白式のデータとりか・・・まあ、俺と一夏のISは企業からしたら魅力的だろうな。『ハイパージャマー』然り、『雪片二型』に『零落白夜』然り。何より第四世代型、のどから手が出るほど欲しいな、そりゃあ」

「ごめんね・・・」

みるとシャルは肩を震わせ必死に涙をこらえていた。この心優しい少女の事だ親友を裏切ってこんな事したくはないし、知り合ってよくしてくれた一夏を騙すような事はしたくないのだろう。

「つたく・・・」

ギョツ・・・

「ふえ？」

突然、デュオがシャルを抱きしめた。

「謝るんじゃないよ、シャル。むしろよく話してくれたな、辛かったろ？」

「な、なんで？ぼ、僕は君や一夏を騙して」

「んなモン、手前のくそつたれな親父に命令されてやったことだろ？お前の所為じゃねえよ」

「で、でも、女だつてばれたら僕は本国に戻されちゃう」

「俺が守つてやる」

「え？」

真剣なまなざしでシャルを見つめるデュオに一瞬シャルは言葉を無

くす。

「この学園にいる間、俺がお前を守ってやる。学園を出た後でも俺やカトルがお前を全力で守ってやる。だからここにいる」

「ほ、本当に？」

「おいおい、俺の事を忘れたのか？俺は」

デュオは茶目つ気たつぷりに笑いながら、

「逃げも隠れもするが嘘だけは言わない、デュオ・マックスウェルだ(だよ)」

「ぷっ・・・あはははは！！」

見事にハモったのが受けたのか二人は声を大にして笑った。

「アハハハ、やっぱりシャルはこうでなくちゃな」

「フフフ、な、何が？」

「笑った顔が一番可愛いつてことさ」

「えっ！？／＼／＼あう／＼／＼」

デュオの一言に先ほどまで笑っていたシャルが一気に赤面し恥ずかしさでふいてしまった。

「ん？どうした？のぼせたのか？」

「な、なんでもないよ！？」

「そ、そうか・・・」

シャルの剣幕に押され、デュオはそれ以上追及するのを辞めた。

「フフ、でもありがとう、デュオ。お陰ですっきりしたよ。まだ皆に言う勇氣はないけど、デュオが守ってくれるでしょ？」

「おう、任せとけ！」

笑顔で言うデュオにシャルは満足そうに微笑んだ。

「さてと、デュオ？まだ髪を乾かしてないよね？昔みたいに僕が乾かしてあげるよ」

「ああ？いいよ、もうガキじゃねんだからほっときゃあ勝手に乾くって」

「ダメ！折角の綺麗な茶髪なんだからしっかりケアしないと！」

「でもよー」

「ダメ、決定事項です！ほら、こっちきて」

「はいはい。わかりましたよ、お姫様」

「フッフ」

渋々シャルの前に寄ってくるデュオにシャルは笑いながらデュオの髪にドライヤーをかけていく。

「なんだか、こっちやってると昔を思い出すね？」

「あーそうだな。昔は風呂上がり髪を梳かしてくれるのは何時もカトルん家の使用人だったけ？」

「うん、そしてデュオは何時も使用人さんから逃げていたよね」

「そうそう、そして何時の頃だったかシャルも髪を乾かしたい！っとか言ってたよな。最初の頃は酷かったぜ。あっちこっち髪が跳ねるんだからよ」

「む、昔の事だよ／／今はそんな事は無いでしょ？」

「そうだったかー？確か14の時に失敗してたような記憶が・・・」

「も、もう！デュオのイジワル！はい、お終い！」

「お、サンキュー。んじやいい時間だし。もう寝るか」

そう言っただけの備え付けの時計を見るともう直ぐ就寝時間だ。

「う、うん／／そうだね・・・ね、ねえ、デュオ？」

「ん？どうした、寝ないのか、シャル？」

デュオがベットに潜ろうとしたらシャルが声をかけてきてそちらを向くと顔を赤くしながら、しかし何か決心したような顔でこちらを見てきた。

「あ、あのね？きよ、今日だけは、一緒に寝て欲しいんだ／／」

「は？」

一瞬、何を言われたのかデュオには理解できなかったが、直ぐに再起動し、

「ちよ、おま、な、何言っただけか！？」

「きよ、今日だけ！今日だけでいいから・・・ダメかな？」

「~~~~／／！！？」

小首を傾げて上目使いでこちらを見てくるシャルにデュオは一気に

オーバーヒートした。

(な、なんつう強力な必殺コンボを……！楯無なら耐性があるが、まさかシャルがこんな手でくるとは……!!い、いや、これは多分、今日は不安だからという意味に違いない！そうだ、coolになれデュオ！)

「ま、まあ、いいんじゃないね？」

「ほ、本当？じゃ、じゃあ、お邪魔します」

顔を赤く染め布団に潜りながら答えるとシャルも顔を赤くしながら布団にもぐってきた。

「……」

「……」

電気が消え背中合わせのまま二人は一言も喋らなかった。

(き、気まずい……マジで気まずい。それにさっきから心臓の音がうるせえ！ええい、静まれ！俺の心臓！)

軽く危ない考えだがデュオにとって真剣なんだから仕方ない。と、ゴソツ……ピト……

「!?!」

突然シャルが体の向きを変えデュオの背中に寄り添うように近づいてきた。

(お、おおおおお落ち着け俺！KOOLにじゃなくってCOOLになるんだ!?)

ギュツ……ムニユ……

「!?!?!?!」

今度は背中から抱きついてきた。それと同時にシャルの胸がデュオの背中に押し当る。

(ぐ、ぐおおお!?!まずいぞ、どうすんの俺!?!どうすんの!?!?こ、こんな時はら、ライフカードを出して選ぶべきなのか!?!ああ、でも背中に当たる二つのふくらみが……!?!?!?!?)

誰か、たすけてくれ……!?!?!?!?!?

次の日、デュオが寝不足で千冬の出席簿を喰らったのは言うまでも

ない。

ただ、本能に任せてシャルを襲わなかった彼の理性に乾杯。

シャルがIS学園に転校してきて五日、大分周りにも慣れてきたようだ。そして今デュオはアリーナで一夏の練習を見ていた。しかも今日は何時ものメンバーだけでなく、シャルもいる。

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を理解してないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかってるつもりだったんだが・・・」

「一応じゃ意味がねえ、射撃武器ってのは近接武器と違って種類によって細かな違いが出てくんだよ。まあ、射撃武器は近接武器とは違ってその担い手の技量もろに出る事は無いんだがな・・・」

デュオはベンチに腰掛けながら一夏に釘をさす。

「うーん、デュオの言うとおりだね、なんて言うか知識として知っているだけって感じかな。さっき僕と闘った時もほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うっ・・・、確かに。イグニッション・ブースト瞬間加速も読まれていたしな・・・」

「て言うより、戦闘での駆け引きが圧倒的にダメだな。馬鹿正直すぎるし、太刀筋なんかも直線的だから俺や篠ノ乃、鳳なんかにあっさり読まれちまう。確かにお前の剣速は速いだけで軌道が丸わかりだから簡単に読められる」

「そうだね。一夏のISは近接戦闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しなきゃいけないよ。特に一夏の瞬間加速はイグニッション・ブーストデュオと違って直線しかないから反応できなくても軌道予測して攻撃す

れば当るからね」

「というより、お前は瞬間加速は使えてもまだ使いこなしてねえ。熟練したIS乗りは直線だけじゃなく自由に軌道を変えられるからな」

「そうなのか？」

「ああ、少なくとも姉御はそうだった」

「まあでも、普通は瞬時加速中にあまり軌道は変えない方がいいよ。空気抵抗や圧力の関係で機体に負荷がかかって最悪の場合骨折しちゃうから」

「まあそうだな。普通なら、な・・・」

「？」

何やら一瞬デュオの表情が暗くなったが直ぐに何時もの調子に戻り、「まあ、お前の欠点がわかったんだから後はお前がどう克服するんだ。ああ、射撃武器のデータなら昔俺が使ってたのと今があるからそれを参考にするといいぜ？」

「マジか！？サンキュー、デュオ！」

「まあ、最近まであまり時間が取れなくて訓練に付き合ってたらんなかったからな、その埋め合わせだと思ってくれや」

「だとしても、助かるぜ！」

「いや、流石にあんな説明じゃ可哀相すぎるからな・・・」

そう言っただュオは箒、セシリア、鈴音の三人を見て気の毒そうに一夏を見た。

そう。二人の、特にシャルルの説明は分かりやすかった。今までの三人は、

『こっずばーっとやってから、がきんっ！ずがんっ！どかんっ！と聞いた感じだ』

『なんとなくわかるでしょ？感覚よ、感覚。・・・はあ？何でわかんないのよバカ！』

『防御の時は右半身を斜め上に前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

ハッキリ言おう、この説明でわかる奴は素直に病院へ行つて来い。そして、肝心のデュオは何をやっていたのかというと、てっきり三人がちゃんと説明しているものだとばかり思っていたので、最後の締め模擬戦を担当していた。

『ISなんざ数乗ればなれるからな！いくぜー夏あー！』

といった感じでその後一夏を何回も模擬戦をして一夏の実戦を担当していた。（因みに幕達の説明を聞いた時のデュオはそのあまりの説明のなさに立ちくらみを起こしてしまうほどだった）

「ふん、私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく説明してんのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不安だと言うのかしら」

「ハッキリ言っぜ、ダメコーチ共。あんな説明幼稚園児でもわかる奴はいねえよ」

ギヤーギヤーと文句を言ってくる自称一夏の専属コーチ共にデュオはキツパリと言い切った。

「じゃあ、一夏。射撃武器の練習の練習でもしてみようか。はい、これ」

ギヤーギヤーと騒いでいる四人をしり目にシャルは一夏に五十五口径アサルトライフル『ヴェント』を手渡した。

「え？他の奴の装備って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾アンロックすれば、登録している全員が使えるんだよ。うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃つてみて」

「お、おう。ってなんかやけに年季が入ってるな、これ」

よく見たらヴェントには所々細かい傷が入っていた。

「うん、それは昔、デュオが使ってたんだ」

「へえーそうなのか？」

「うん、まだデュオが専用機を使って間もない頃、ラファール・リヴァイヴを使ってた時期があつてね。その時の武装の一つだよ」

「へー以外だな。アイツがりヴァイヴ使ってたなんて」

そう言つて一夏は未だ第達と口論しているデュオに目をやる。

「まあ、その話は後でデュオに聞いた方がいいよ。それより、一夏？」

「ん？なんだ、シャル、ル！？」

振り返つた先には黒い笑みを浮かべたシャルルがいました。

「それ、結構気に入ってるんだ。壊したりしたら、タダじゃおかないよ？」

「（コクコク！！）」

黒い笑みを浮かべながら無言の圧力をおくるシャルに一夏は黙つて頷いた。

「ん、なら改めて練習しようか？」

「お、おう」

一夏は練習する前にかなり汗をかいていた。その汗の量は先ほどシャルと模擬戦をやつた以上だった。

一夏がシャルと射撃練習をやっていると突然アリーナ騒がしくなった。

「ね、ねえ、ちよつとアレ・・・」

「うそつ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でトライアル段階だつて聞いたけど・・・」

「あん？」

シャル達の訓練を見ていたデュオがそちらに目をやると、そこにはドイツの代表候補生、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』がいた。

「おい」

突然、ISの開放回線オープンチャンネルの音が響いた。間違いなくラウラが一夏に向けて放つたものだ。

「・・・なんだよ」

一夏もそれがわかつているのか嫌々ながら返事をした。

「貴様も専用機持ちだそうだな。丁度いい私と戦え」

（おいおい、いきなりだな）

飛翔しながら、とんでもない事を言ってくるラウラに一夏は興味がないとでもいうように

「いやだ。戦う理由がない」

「貴様にはなくとも私にはある」

（まあ、コイツの理由は大体分かるな、一夏が攫われた所為で姉御の二連覇がおじゃんになっちまったんだからな。さしずめその逆恨みか？）

「貴様がいなければ教官は大会二連覇の偉業を成しえただろう事は容易に想像できる。だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

（ビンゴ。にしても一夏の存在全否定とか、こりゃあ、姉御も厄介な奴に惚れられちまったもんだ）

まあ、誰だつて自分の尊敬する人がどこの馬の骨とも知らない奴の所為でその経歴を傷つけられれば誰だつて怒りもする。

「また今度な」

（あ、バカやるー！）

それは火に油だと悟ったデュオは一夏とラウラの間に入るべく自身のISに手をかけた。

「ふん。ならば　　戦わざるを得ない状況にしてやる！」

言うや否やラウラは左肩に装備された大型の実弾砲が火を噴いた。

「！」

ドガギインッ！

「おいおい、こんな密集空間でんなモンぶつ放すんじゃないよ、ポ―デヴィッヒ」

「そうだね、ドイツ人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホットなのかな？」

「貴様ら・・・」

一夏の前にデュオとシャルが割り込みデュオがバスターシールドで弾き、シャルが右腕に六十一口径アサルトカノン『ガルド』をラウ

ラに向けた。

「ふん、どこの馬の骨ともわからぬISにフランスの第二世代型アンティークのときで私の前に立ちふさがるとわな」

「未だに量産化の目処が立たないドイツの第三世代型ルキーよりは動けるだろうし、デュオのISは君のなんかより別格だよ」

(コエ……)

互いに涼しい顔で睨んでるがシャルの隣にいるデュオはわかる。間違ひなくシャルは怒っていると。

それはそうだろう、誰だつて好きな人をバカにされればキレる。それぐらいシャルロットにとってデュオは特別なのだ。もしこの場に楯無がいたらアリーナが血の海に変わる事間違ひない。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』  
一触即発の空気の中、突然アリーナのスピーカーから声が響いた。  
どうやら騒ぎを聞きつけ担当の先生が駆け付けたみたいだ。

「……ふん、今日は引こう」

興が削がれたのか、はたまた問題になつて千冬に迷惑をかける事を避けたいのか、どちらにしろラウラはその場を去つていった。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かったよ」

「ていうかアレぐらい自力で弾けるようになれ」

「うっ……すみません」

先ほどまでの雰囲気霧散し何時もの人懐っこい笑みで一夏に尋ねる、シャルに一夏はどもりながらも応えるがその隣で呆れた口調でいうデュオに落ち込み気味で応える。

「今日はもうあがるつか。閉館時間だからね」

「おう。そうだな。あ、銃サンキュ。いろいろ参考になった」

「それならよかった」

そう言つてシャルは手渡された銃を大事そうに抱えた。

「んじゃ、悪いがお先に失礼させてもらうぜ」

「ん？どうしてだ？」

「ちょっと野暮用でな、先に帰らせてもらっぜ」

不思議そうに尋ねる一夏にデュオはそっけなく返すとそのままアリナを後にした。

「?どうしたんだ、アイツ」

「.....」

その後ろ姿を見送っている中、一夏は不思議そうにシャルは心配そうに見ていた。

「くっそ、流石は姉御が一年だけとはいえ教えていただけはあるな」  
憎々しげに呟きながらデュオは先ほどラウラの攻撃を弾いた左腕を水道で冷やしていた。

「流石はドイツ軍が自慢するシュヴァルツエア・レーゲン。バスタールシールドで弾いたのはミスだったかな？」

見るとデュオの左腕は青痣が出来ていた。

「あゝあ、シャルになんて言おうかね」

「なにを言うんだ？」

「そりゃあゝって姉御!？」

突然後ろから声を掛けられ、慌てて振り向くとスーツ姿の千冬が立っていた。

「な、何でここに？」

「なに、仕事が終わり今から寮へ帰るところだったんだが、その腕はどうした？」

「え!?!い、いやゝちよつと失敗して？」

「質問を質問で返すな。まったく、大方ラウラとやり合ったのだろ

う

「な、なんで、それを・・・？」

いきなり正解を言い当てたのでデュオは驚愕するが、

「この学園でお前に手傷を負わせられるのは数えるほどしかいないからな。大体予想はつく」

ガックシと肩を落とすデュオを見ながら千冬は何か考える仕草をした後、

「デュオ」

「ん、なんすか？」

「ついてこい」

「へ？」

言うや否や千冬は身をひるがえしてそのまま歩いていったので、デュオは慌ててついていった。

そしてついた場所が救護室。

「そこに座れ」

今は担当の先生がいないのか、救護室には人の影がなかった。

「あー姉御？これは一体どういう事でしょう？」

「左腕を出せ」

質問に答えなく千冬はデュオに左腕を出すように言う。

「・・・はい」

渋々デュオが左腕を出すと、千冬が治療を始めた。

「・・・」

「・・・」

しばし無言の沈黙が続いたが、千冬が仕上げに包帯を巻き終わると、「ほら、できたぞ。お前ならこんな事をしなくても直ぐに治ると思うが念のためだ」

「サンキュー、姉御」

「ああ、今日はもう遅いから寄り道せずに寮に帰れよ」

「りょーかい」

そう言った後、巻かれた包帯を見てデュオは照れ臭そうにお礼を言

うとそそくさと救護室を後にした。

この時、デュオは知らなかった。一夏の部屋にボディースープがなくデュオの部屋に借りに行こうとしたら、丁度シャルルが入浴中でばったり出くわしてしまった事を、デュオはまだ知らない。

死神と金の姫君　お前は俺が守る　（後書き）

最後がなんか微妙になってしまった・・・

## 死神と黒ウサギ〜ファーストバトル〜

(いや〜まさか姉御直々に包帯を巻いてくれるとは、今日は色々あったがついてるぜ)

スキップでもしかなないほどご機嫌のデュオはそのまま自身の部屋に着くとドアを開けた。

「おっす、シャル。遅くなって悪かった・・・な？」

ドアを開けるとそこにはバスタオルに身を包待ったシャルルことシャルロットとそれを見て固まっている一夏がいた。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

痛い沈黙が三人の間に流れる。

「シャル」

「う、うん」

「とりあえず何か着てくれ」

「へ？あ！う、うん！」

デュオの言葉にシャルは自分の今の恰好に気付いたのか慌ててシャルームに戻っていった。

「・・・」

「・・・」

シャルが戻るとまた沈黙が走ったが、

「とりあえず座れば？」

「・・・ああ」

デュオの言葉に一夏は素直に従った。

「あ、上がったよ・・・」

「お、おう」

「そうか」

シャルが着替えを終わって、部屋には部屋にはデュオとシャルに夏が向かい合って座っていた。

「さーて、何から話すか・・・」

デュオはまさかこんな早くばれるとは思っておらず、何も対策を考えていなかった。

「デュオ・・・」

「ん、どうした？」

デュオはどうしようか考え込んでいると隣にいるシャルから声を掛けられ、隣を見ると何かを決心した表情のシャルが此方を向いていた。

「僕が話すよ」

「おいおい、大丈夫なのか？」

「うん。デュオのおかげで吹っ切れたし、なにより・・・」

「なにより？」

「何かあつたらデュオが守ってくれるでしょ？」

そう言つてデュオに笑顔を向けるシャルは無垢な子供の笑顔の様に可愛かった。

「ノノノ、そうか。じゃあ！ちよつと俺は飯でも取ってくるからよ、その間に話してくれ！」

「え、あ！？デュオ！」

シャルのその笑顔を間近で見たデュオは顔を赤くしながら慌てて部屋を出て行ってしまった。

「デュオ・・・もう！」

「は、ははっ」

足早と出ていったデュオを見送ったシャルロッドと一夏は再び向い合うと、

「一夏、僕はね

」

結論からい言えば、まあ原作と同じと言えば同じなのだがいくつか相違点がある。

まず一つは、当たり前だが一夏がシャルロットにフラグを立てなかった事。

もう一つは・・・

「よかつたな」シャル」

「うおっ!?!」

「ひゃっ!?! デュオ!?!」

デュオがタナトスのハイパージャマーを使って部屋に隠れておりビームシザースを一夏の首にあててた事だ。

「っていつかデュオ!なんだこれは!?!」

自身の状態を確認しながら一夏はデュオにくっついてかかった。

「あん? そりゃあお前、もしお前がシャルを裏切ったり泣かせたりしたら即、首を刎ねれるようにだな・・・」

「んな、物騒な!?! そこまでするか!?!」

「何言つてやがる、お前とシャルとじゃあ天と地ほどの差があるんだぜ? むしろ、正体がばれた瞬間首を刎ねなかった事に感謝してほしいぜ」

「怖いわっ!?!」

「でゆ、デュオノノもうそこら辺にしておきなよノノ」

さりげなく自分の事を大切に思ってくれていると言ってくれたのでシャルは顔を赤くしながらデュオに言う。

「? ああ、そうだな。命拾いしたな、一夏」

「なんだろう、助かったのに釈然としない・・・」  
デュオはシャルの態度にいささか疑問に思ったが、ISを解除しながら笑顔で一夏に言うで一夏は納得してないのか苦い顔で応えた。  
「そいじゃ、飯でも食いに行こうぜ？腹が減っちゃまってよ」  
「そうだね、僕もお腹ペコペコだ。一夏も来るよね？」  
シャルはデュオの言葉に時計を見ながら一夏を誘うと、  
「ん？ああ、そうだな。シャワーは後で浴びればいいか」  
そして三人は部屋を後にし、そのまま食堂へ向かった。  
（とりあえず、色々予想外があつたがまあ、一安心だろう）  
食堂へ向かう道中、デュオは談笑しながらそんな事を考えていた。

最近、学園で妙な噂を耳にしている。それは『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる』なんてモノだ。ハッキリ言つてなんだそりゃあ？な話だがクラスの女子だけでなく全学園の女子がその噂を信じているのだからどうしようもない。

（つたく、篠ノ乃の奴どうせだつたらばれない様に約束をしるよな・・・）

噂の真相は単純で篠ノ乃と一夏の約束をしていたのを数名が聴きそこから尾ひれがつきこうなつてしまったのである。

（まったく、シャルの事が一段落したと思つた矢先にこれかよ・・・）  
俺は疲れたように頭を押さえた。

（しかし、男子便所の場所をもうちょっと多くしてくれないもんかね〜不憫で仕方ねえ）

これ以上一夏達の事を考えるのを止めて、頭を切り替える。と、

「なぜこのような所で教師など！」

「やれやれ・・・」

(ん?)

切り替えた矢先に何やら聞き覚えのある声が曲がり角から聞こえ、気になったので気配を消して覗いてみると、そこには・・・

(ん? アレは姉御と・・・ラウラじゃねえか)

千冬とラウラが向い合っていた。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

(おいおい、一応ここは姉御の生まれ故郷だぜ?)

転入して以来、あそこまで感情的になるラウラは自分が知る限り初めてだ。いや、一夏と相對した時は憎しみや嫉妬の色が出ていたが、今は必死さや懇願がでている。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここでは貴女の能力は半分も引き出せません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒などは教官が教えるにたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションか何かと勘違いしている。そのような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど」

「そこまでしておけよ、小娘」

「っ・・・!」

(こ、コエ~~~~)

凄味のある千冬の声で一瞬にしてラウラが黙ってしまった。かく言う俺も千冬から感じる気に若干怯え気味だ。

「少し見ない間に偉くなつたな。十五歳にしてもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は・・・」

間接的に聞いている俺でさえ千冬から放つ気に怯え気味なのに直接当てられているラウラにはたまったものではないだろう。

( やっぱり、あの人には勝てる気がしねえ・・・ )

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「・・・・・・・・」

ぱつと先ほどまでの雰囲気霧散させ千冬がラウラを急かすとラウラは無言のまま足早に去っていった。

「その男子。何時までそうしているつもりだ？」

( ばれてたか・・・ )

「いや、流石は姉御。何時から気付いてたんで？結構自信があったんすよ？」

「気付いたのはラウラと話している最中だ。途中までは完璧だったかな。それと、織斑先生だ」

「いいじゃねえっすか。今ここに居るのは俺と姉御の二人だけなんですから」

バシンッ！

「~~~~~!!!?」

「戯けた事をぬかすな、問題児。さっさと教室に戻れ」

「あ、姉御の愛が痛い」

ガツンッ!!

「~~~~~!!!?」

「ふざけてないで、いいからさっさと行け」

「りよ、了解・・・」

出席簿次は拳が頭に振り降ろされた。果てしなく痛い・・・

「ああ、それとデユオ」

「ん？なんすか？」

「廊下は走るな・・・とは言わん。ばれない様に走れ」

「・・・ハハッ！了解！」

一瞬何を言われたかわからなかったが、その意味に気付き笑いながらその場を後にした。

放課後〜第三アリーナ〜

放課後一夏達より遅れてやってきたデュオは目の前で繰り広げられている戦闘に驚いた。

目の前には一夏、鈴音、セシリアの三人相手に圧倒しているラウラとその光景を離れた場所で見ている篤とシャル。

（おいおい、来てみたらそこは混沌カオスでしたっけ？ 幾らなんでもこれはねえだろう・・・）

目の前の状況に頭を抱えながらも流石にヤバくなってきたので自身のISを起動し瞬間加速イクニッション・ブーストで一夏達の前に移動する。

「よお、楽しそうじゃねえか。俺も混ぜてくれよ」

「デュオ！」

「貴様・・・」

デュオは軽口を叩きながら一夏達を守るように立つとラウラに向かってビームシザーズを突きつけた。

「一夏、ワリイがセシリア達を連れて下がってる。コイツは俺がやる」

「な！？でもよ・・・！？」

一夏はデュオに反論しようとしたが、彼から迸る闘気に押され押し黙る。

「悪いが巻き込まない自信がねえからよ。ちょっと離れて手当てしてくれや」

「あ、ああ・・・」

「逃がさん！」

一夏がセシリア達の方へ向かおうとする中、ラウラは逃がすまいと大型カノンを発射した。

「おいおい、お前の相手は俺だぜ？」  
ザンツ！！

デュオは迫りくる砲弾をビームシザーで両断すると、そのままラウラに向かって突進した。

「ふん、量産機に負けた雑魚がいきがるな」

自分に向かって突撃してくるデュオにラウラは自身のISの能力『アクティブ・イナードナル・キャンセラー A I C』を発動した。

「！？こいつは・・・！？」

「フン、終わりだ」

「デュオ！！」

ラウラは肩に装備されている大型レールカノンの砲身をデュオに向け、その様子を見たシャルは悲痛の声を上げた。

（コイツはA I C。ISに搭載されているP I Cを発展させたものか！厄介な物を作ってくれたな。だがな・・・）

『ハイパージマー』出力調整。A I C中和領域を

算出。オールクリアー

「死神にそんなもんは効かないぜえ！！」

「な！？」

先ほどまで停止結界により動きを封じられていたデュオはレールカノンが発射される前に加速しラウラに迫ってきた。

「ボサツとしてんじゃねえよ！」

「くっ！」

迫りくるビームシザーにラウラはプラズマ刃で受け、一旦距離を置くべく離れる。

「馬鹿な・・・何故、停止結界が効かない！？」

「お前知らないのか？死神は狙った獲物を刈り取るまで決してとまんねんだよ」

「ふざけた事を・・・」

何故デュオに停止結界が効かないのか、それはデュオのISタナトスに搭載されている『ハイパー ज्याマー』が原因だ。ハイパー ज्याマーによる干渉でラウラのAICを中和し無効化している。

「さあて、どうするウサギちゃん？尻尾巻いて逃げるかい？」

「貴様・・・いいだろう、死神。地獄へ叩き落してくれる」

「はっ！やつてみる！」

そう言つて二人はビームシザーとプラズマ刃を構え互いに加速して激突しようとした瞬間、

ガギンツ！！

「・・・やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「姉御！？」

「千冬姉！？」

二人が激突しようとした時にいきなり影が割り込みデュオとラウラはその陰に気付き加速を中断した。

そこには何時ものスーツ姿でIS用近接ブレードを持って二人の間に横やりをしてきた。

「模擬戦をやるなどは言わん。

が、アリーナのバリアーま

で破壊する事態になられては教師として黙認しかねん。この決着は学年別トーナメント付けて貰おうか」

「教官がそう仰るなら」

「ま、姉御がそう言うならしゃーないわな」

千冬の言葉にデュオとラウラが同時にISを待機状態に戻す。そして、互いに向かい合い、

「死神、名乗れ」

「おいおい、人に名を訪ねるときはまず自分から名乗れって言われなかったか？つてそう言えば転校していた時に名乗ってたか・・・。俺は、デュオ。デュオ・マックスウエル。逃げも隠れもするが嘘だけは言わないデュオ・マックスウエルだ」

「!?!?..そうか、貴様が・・・。フン、ならマックスウエル、先ほども言つてたように地獄へ叩き落してくれる。」

デュオの名前を聞いた瞬間、ラウラが一瞬目を見開いたが、直ぐに元に戻り宣戦布告をしてきた。

「ああ、楽しみにしてるぜ？そう言うお前も死神に魅入られたんだ、覚悟はできてんだろ、ウサギちゃん？」

背中を向けたラウラに対し、デュオは好戦的な笑みで挑発してくる。

「まったくお前は・・・」

そんな二人の様子に千冬は疲れたように眉間を指で押さえながらため息を吐くと気を取り直して、アリーナ内にいるすべての生徒に向けていつて来た。

「では、学年別トーナメントまで私闘を一切禁止する。解散！」

まるで銃声の様に千冬が手を叩く音がアリーナに響き渡った。

死神と黒ウサギ〜ファーストバトル〜（後書き）

ラウラのフラグをデュオに立てるべきか、それとも原作通り一夏に立てるべきか・・・悩みどころだ。

## 死神と学年別トーナメント〜決戦前夜まで〜

「……………」  
「……………」

場所は保健室。第三アリーナの件から一時間が経過したところである。ベッドの上ではセシリアと鈴音が打撲の治療を受けて包帯を巻かれてベッドの上に座っていた。

「おい、何時までむくれてんだよ。お前ら」

呆れたように言うデュオの言うとおり二人は先ほどからむっすーとした表情であらぬ方向を向いていた。

「別に助けてくれなくてもよかつたのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

そんな二人にデュオはやれやれつといった感じで呆れ、隣にいる一夏を見る。

「お前らなあ……………。はあ、でもまあ、怪我が大したことはなくて安心したぜ」

「こんなの怪我の内に入らな　　いたたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっている事態無意味　　つつつつ

！」

「馬鹿だろ、こいつ等」

真顔で尋ねるデュオに一夏も肯定するように頷いた。

「バカつてなによバカつて！バカ！」

「あなた達の方がよっぽどバカです！」

酷い反撃だ。しかも、口に出したデュオより肯定した一夏に向けていつているようである。そんな怒り心頭の二人にデュオと一夏はどうしたもんかと顔を見合わせる。

「好きな人にカツコ悪いところを見られたから恥ずかしいんだよ、

二人は」

「ん？」

「おっ！シャル。お帰り」

「ただいま」

シャルが頼まれていた飲み物を買ってきてくれた。一夏には何を言っていたのか聞こえなかったらしいがデュオにはバツチり聞こえていたらしく、はっは〜んといやらしい笑みを浮かべながら二人に向き直った。

「ななな何を言ってるのか、全っ然っ分かんないわね！こここここれだからヨーロッパ人ってこまんのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわね！」

「はいはい。ツンデレ、ツンデレ」

顔を真っ赤にしながらかまくし立てる二人にデュオは呆れた様子であしらった。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましたましようっ！」

そういつて二人はひったくるように飲み物を受け取るとごくごくと飲みだした。

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってたし、しばらく休んだら」

ドドドドドドドドツ・・・！！

「な、なんだ？何の音だ？」

「地震？いや、違う！」

突然の地鳴りにデュオと一夏は慌てたように立ち上がった。どうやら廊下から聞こえるようでだんだんと近づいて来る。

ドッカーン！

保健室のドアが吹っ飛びました。比喻ではなく本当に。そして、そこから雪崩込むように女子が押し寄せてきた。

「織斑君！」

「マックスウエル君！」

「デュノア君！」

雪崩込んできた女子は一瞬でデュオ達を取り囲みホラー映画のように手を伸ばしてきた。

「な、なんだなんだ！」

「うおおお！？ちよ、待て！どうしたってんだ！？」

「ど、どうしたの、みんな・・・ちよ、ちよと落ち着いて」

「・・・これ！」「・・・」

そう言っただけで女子一同が一斉に出してきたのは学内の緊急告知文であった。

「なにになに・・・？」

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかったものは抽選により選ばれた生徒同士で組むものとす。締め切りは』

「ああ、そこまででいいから！」

そして、先ほどと同じように伸びてくる手。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「私と一緒に大会に出よう、マックスウエル君！」

何故いきなり学年別トーナメントがタッグ戦になったのか、デュオには心当たりがあった。

（学校行事を変更できるほどの人物・・・楯無か？いや、それとも姉御？）

しかし、そこまで考えて直ぐに目の前の問題をどうするかを考えを切りかえる。

隣ではシャルが困ったように苦笑している。

「ワリいな。俺はもうシャルと組むって約束してんだ」

と言ってシャルと肩を組みながら笑いかけるとデュオとシャルに伸びていた手がピタッと止まった。

「その代わり、一夏がまだフリーだったはずだぜ？な、シャル？」

「う、うん／＼／」

「な!？」

隣にいるシャルに問いかけるとシャルは顔を真っ赤にしながら答え、その隣にいた一夏が驚愕の声をあげた。

(悪いな、一夏。俺とシャルの為に死んでくれ)

心の中で黙祷を捧げながらデュオは意地の悪い笑みで一夏に笑いかけた。

「デュオ、てめ、って、ひいつ!？」

ギラッ!

デュオに詰め寄ろうとした一夏はまるで獲物をとらえた肉食獣な瞳で睨んでくる女子生徒達に悲鳴を上げる。

「織斑君、私と組んで!」

「いや、私と!」

「いいえ、私と!」

「織斑君と合体したい!」

「いや、最後のはおかしいだろ!？アク リオンか!？創聖なのか

!？あ、ちよ、まっ !？」

アッーーーーー!!!

あっという間に獲物しちかは肉食獣ごうじの群れに飲み込まれてしまった。

しかし、天は彼を見捨てなかった・・・

「ほ、箒っ!?!」

保健室から連れ去られそうになった一夏は保健室の外でキョロキョロと拳動が不審な箒を見つけ死に物狂いで女子生徒の魔の手から逃れ箒の前に辿り着く。

「い、一夏!？ど、どうしたというのだ?い、いや、丁度いい・・・

い、一夏、もしパートナーが決まっていなのなら私と

「箒!俺とペアになってくれ!」

「え・・・?」

自分が言いきる前に一夏が言いきった。その言葉に箒は目を見開き顔を真っ赤にした。

「え？い、いや。わ、私でいいのか？」

「頼む、俺は、お前じゃないとダメなんだ！！（精神と肉体的な意味で）」

「で、でも・・・」

「おれは、お前がいつ！！（幼馴染み的な意味で）」

ボンツつと篝の顔が真っ赤になり頭から煙が上がった。この時デュオは思った。これ、傍から見れば告白じゃね？つと・・・

「そ、そそそそうか／＼／＼！私がいいんだな！！そうか、そうか／＼／＼なら、私とペアを組むぞ、一夏！」

「ああ、助かるぜ！」

そんな二人の様子を見ていたデュオはフツと黒い笑みを浮かべながらこう思った。

（計画通り）

とある黒いノートを持ったキラ君ばりの笑顔に隣にいたシャルは若干引き気味だ。

「一夏っ！」

「一夏さん！」

周りの女子も最後の獲物いぢかを逃してしまい意気消沈になりながら保健室から去っていくと、それとは逆に鈴音とセシリアが一夏にくっついてかかった。

「あ、あたしと組みなさいよ！あたしだって幼馴染みでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

先ほどの痛みなど忘れているかのごとく二人は一夏を締めあげんばかりに詰め寄った。恋する乙女、恐るべし。

「だめですよ」

「あ、山田先生・・・」

突然、一夏の後ろから声が聞こえて一夏は慌てて後ろを振り向くとそこには真耶が立っていた。

「おふたりのISの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠

陥を生じますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

「ダメージレベルCってそんなに酷かったんすか？」

「はい、かなりひどい状態です」

若干驚きながらデュオは真耶に問いかけると真耶は真剣な目で答えてきた。

「うっ、ぐっ……！わ、わかりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！不本意ですが！トーナメント参加は辞退します……」

（まあ、こればかりはどうしようもねえよな）

「わかつてくれて先生嬉しいです。ISに無理をさせるとそのツケはいつか自分で支払う事になりますからね。肝心な所でチャンスを失うのは、とても残念なことです。あなた達にはそうなってほしくありません」

「まあ、修復不可になってなかったのが不幸中の幸いだな。もし、修復不可だったら色々問題になってたしな」

「はい……」

「わかつていますわ……」

そんな四人の様子に一夏は何で二人が大人しくなったのか未だ理解できないでいた。

「一夏、IS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三項だよ」

「『ISは戦闘経験を含むすべての経験を蓄積する事で、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の可動も含まれ、ISのダメージレベルCを超えた状態で稼働させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまつたため、それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある』っだ。お前、姉御の授業ちゃんと聞いてたのか？」

シャルがわからない一夏にいうがそれすらも思い出せないようなので代わりにデュオが答えた。

「お、おお！そうだった！流石デュオ！」

「いや、それぐらい覚えとけよ。一夏」  
能天気な礼を言う一夏にデュオは疲れたように言う。その隣でシャルは励ます様に肩を叩いた。

「それで、私に何の用だ？」

「いや、姉御に頼みたい事があつてな」

保健室で一夏達と別れたデュオは千冬のいる寮長室にいた。

「頼みたい事？」

「ああ、ていうか、姉御の部屋ってなんだかい匂いが「黙れ、変態ノノノ!!」」

ドゴオツ!!

「グフアア！」

部屋の匂いを嗅ぎながら感想を述べるデュオに千冬は顔を赤く染めながら幻の左をデュオの鳩尾に打ち付けた。

「な、ナイスパンチ・・・」

「ふ、フンツ!!ノノノで、頼みたい事はなんだ？まさか、ただ私の部屋に入るための口実ではあるまい？」

腹に走る痛みに悶えながらデュオは千冬にグツと親指を立て、そんなデュオに千冬は少し頬を染めながら訪ねてきた。

「い、いやね、姉御？学年別トーナメントの際、ハイパージャマーの使用を許可してほしいんだ」

「なに？何故だ？」

デュオの申し出に千冬は目を細めて問いかけた。

「最近の一夏も大分成長してきたし、俺も感覚が鈍りそうだからな。それにもしラウラと当たった時ハイパージャマーを封じられた状態じゃあ結構キツイ」

いくら、タッグ戦といってもな・・・と言葉をつづけた。しかし、千冬は珍しく焦った表情でデュオに詰め寄った。

「そんな事は聞いて無い！何故よりによって学年別トーナメントなんだ？お前も知っているだろう？その日には各国政府関係者、研究員、企業エージェントなど様々な者達が顔を出す。もしハイパージャマーに気づかれたら、いや、そんな事はどうでもいい。もしお前の体や出自の事を調べられたら」

「覚悟の上だ」

心配する千冬の言葉を遮りデュオは学園に来てから一度も見せた事のない覚悟のある表情で千冬を見据えた。その眼差しに千冬は一瞬息を呑んだ。

「確かに俺の事を調べちまったら、俺の体や出自の事に行きつくだろうな」

「なら」

「でも、安心してくれよ、千冬。俺の悪運は天下一だぜ？」

そう言っただけで安心させるように笑いかけるデュオの笑顔はとても儂く淡いものだった。

「デュオ・・・」

その笑みを見た千冬はそれ以上何も言えなかった。

「それによ、実を言うとカトルにはもう話は通してるんだ。だから、後はアイツが何とかしてくれるって！」

「そ、それを先に言わんか！馬鹿者！！」

ドゴンツ！！

「ぐおっ！！？」

続けていったデュオの言葉に千冬は鉄拳をデュオの頭に落した。

「~~~~~！！？あ、姉御、照れ隠しにしても流石に酷くね？」

「うるさい！この大馬鹿者がっ！まったく心配するこっちの身にも

「だな・・・」

「ん？すまねえ、姉御。最後あたり声が小さくて聞き取れなかったんだけど？」

「な！？な、ななな何でもない／＼／＼！！！」

「そ、そうっすか」

顔を真っ赤にしながら答える千冬にデュオはこれ以上聞くとヤバいと悟り追求を止めた。

「フン、そこまでするんだ。精々軽く優勝ぐらいはしろよ？」

気を取り直した千冬は腕を組みデュオに向かって不敵な笑みを向けた。

「任せてくれよ、姉御。俺は負けねえよ、そんで優勝賞品は姉御のキッスがいいな」

「臍物をぶちまける」

「どくはあ！！」

ニヤニヤと笑いながら言うデュオに千冬は黄金の左足でデュオの体をサッカーボールのように蹴り飛ばした。

「んで？俺に何の用だ、楯無？」

「いやゝ悪いね、デュオ。わざわざ呼び出しちゃったりして」

学年別トーナメントを明日に控えデュオはシャルと練習をしようとした矢先、虚に呼ばれ生徒会室に来ていた。

「いや、構わねえよ。今日は戦略の確認とかだけだったからはやめに上がるうと思ってたしな・・・」

「ぶ〜ん、仲がいいんだね〜デュノア君とは・・・」

「まあ、付き合いで言ったお前より長いからなって、どうした？」  
「べつに〜」

デュオの説明に楯無は不機嫌そうに明後日の方向を向き、不貞腐れ  
てしまった。

「おいおい、んなおこなよ？」

「怒ってないよ〜っだ」

（怒ってんじゃないよ〜っだ）

子供のように拗ねてしまった楯無にデュオは呆れながら苦笑した。

「で？俺をわざわざ呼んだ理由はなんだ？まさか、これだけの為に  
呼んだ訳じゃねえだろ？」

「うん。まあ、そうだね。カトルくんから聞いたんだけど、デュオ。  
学年別トーナメントにハイパージャマーを使うってホント？」

「カトルの奴・・・」

疑いの目で見てくる楯無にデュオは頭を抱えながらここにはいない  
バラした親友に向かって恨み事をはいた。

「その反応からするにホントだったんだ・・・。本気？いくらウ  
イナー家がIS関連で世界に絶大な影響を与えてるといつてもその  
力は絶対じゃない。もし、それより大きな力、ファントム・タスク亡国企業のような奴  
らが君の体の事に気づいたら、いくらデュオだってタダじゃ済まな  
いよ？」

心配そうにデュオを見つめる楯無は普段の彼女から想像も出来ない  
ほど弱弱しかった。

「ったく、姉御にも言ったが心配すんなって」

「でも・・・」

ポン・・・

まだ心配そうにこちらを見てくる楯無にデュオは頭に手をおき安心  
させるように優しく撫でた。

「大丈夫だって、俺がウソをつくわけないだろ？大丈夫だ」

「デュオ・・・。うん！そうだね〜なんだって逃げも隠れもするが  
嘘だけは言わないデュオ・マックスウエルだもんね！」

「お！わかってんじゃねえか、楯無」

そう言つて二人は可笑しそうに笑いあいあつた。

「さて、じゃあついでに頼みたい事があるんだけど」

「わかつてるよ。私達『更識』も動くから」

「さつすが、楯無。助かるぜ、んじゃまたな」

「あ、デュオ！まつて」

ひとしきり笑いあつた後、デュオが生徒会室を出ようとした時突然楯無が呼び止めた。

「ん？何　　うむっ!？」

「ん・・・」

チユツ・・・

デュオは呼ばれて振り向くといきなり楯無がデュオに飛び付き、唇を奪つた。

数秒だろうかそれとも数分だろうか、とにかく二人はキスをした体制からしばらく動かないでいた。

「ぷっはあっ！」

「ハア、ハア。た、楯無／＼／＼お、お前／＼／＼」

やがて、息が続かなくなつたのか二人は離れて息を整えながら互いに顔を赤くしながら見つめ合つた。

「えへへ、また奪つちやつたね。デュオの唇」

「な、何で／＼／＼」

「勝利のおまじないだよ？明日優勝できますよ！につて。それともディーブの方がよかつた？」

「ば、バカ野郎！な、ななな何言つてやがる！！じゃ、じゃあな！！！」

小首をかしげながらへつと下を出す楯無にデュオは動悸が激しくなるのを感じ、慌てて生徒会室から出ていった。



死神と学年別トーナメント〜決戦前夜まで〜（後書き）

今回は少し遅くなってしまいました。

デュオの秘密については後ほど・・・

## 死神VS白騎士の学年別トーナメント一回戦

黒化シャルロットさま誕生の後、デュオは何とか生きていた。かろうじて……

「こりやまた、結構な数だな」

「ああ、すごいなこりやあ……」

デュオと一夏は更衣室のモニターを見ながら観客席の様子を見ていた。千冬の言った様に各国政府関係者、研究員、企業エージェンなど様々な面々が観客席に座っていた。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ来ているからね。一年には今のところ関係ないけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労な事だ」

シャルの説明に一夏は興味のないように相槌を打ったがデュオはそんな一夏にため息をつきながら言ってきた。

「なに呑気な事を言ってるやがる。これはある意味お前の品定めにも来ている連中もいるんだぞ？」

「なに！？そうなのか！？」

「うん、確かにそうだね。デュオはエジプトの代表候補生として登録しているけど、一夏は専用機持ちでありながらどこの国の代表候補生でもないんだ。結果次第では引き抜きつつてもあるかもね」

「マジかよ」

「はっはっはっ。がんばれよ一夏」

シャルの説明に一夏はガックシと肩を落としデュオはそんな一夏に笑いながら背中を叩いた。

「もちろんデュオもだよ？」

「ん？なんでだ？」

シャルの言葉にデュオより先に一夏が反応を示した。

「デュオは代表候補生になって今まで名前だけしか情報がなかったんだ。どんなISを使うのか、どこの企業のISを使っているのか、一切情報がなかったからね。多分、これを期にデュオのISを暴こうと思ってる人たちもいると思う」

「ま、そんな簡単に俺の秘密は暴かれないだろうけどな」

「何処からくんだよ、その自信」

あっけらかんと言うデュオに一夏は呆れながら言っているとデュオは自信満々に胸を張り、

「そんなの簡単だぜ、死神は謎が多いんだよ」

茶目つ気たっぷりに笑うデュオに一夏は呆れ、シャルはクスリと笑った。

「さて、準備も出来たし行こうぜシャル。じゃ、一夏また後でな」

「おう、またな」

「あ、待ってよデュオ」

そう言っただュオとシャルは箒と待ち合わせをしている一夏と別れ、対戦相手を確認しにいった。

そして、そこで思いもよらない事がおきた。

モニターに次の対戦相手はこう映し出されていた。

『Aブロック一回戦、織斑 一夏、篠ノ乃 箒ペアVSデュオ・マックスウェル、シャルル・デュノアペア』

まさかの初戦が一夏、箒ペアであった。

「まさかいきなり一夏達が相手とはな・・・」

「うん。ビックリしたよ」

対戦相手の確認をしたデュオとシャルはAブロックの一回戦なので直ぐに選手控室で対策を練っていた。

「しかも、ラウラの奴もAブロックそれもおそらく当るとしたらAブロック決勝」

「うん、彼女の実力は一年で最強クラス。間違いなく決勝に進むね」「つまりだ、この試合に勝った方がラウラとあたる」

どーしたもんか、と考えていた二人だがやがてフツと笑い。

「ま、こうなったら仕方ねえよな、シャル？」

「うん、一夏達には悪いけど負けてあげるつもりはないもん。全力でやろう、デュオ」

そう言った後、二人は立ち上がり一夏達の待つ会場へ向かった。

「頼りにしてるぜ、親友？」

「任せてよ、親友」

お互いの顔を見合わせて笑いあい二人はアリーナに向けて歩いていった。

「よお、一夏。さっきぶりだな」

「ああ。まさか一回戦からお前達とあたるとはな・・・」

ISを起動した状態でデュオとシャル、一夏と箒は向い合っていた。「そっぴや、模擬戦は何度もやったが正式な試合は初めてだったっけ？」

俺ら

「ああ、あの時の俺と思うなよ、デュオ？」

「ハッ！抜かせー！！」  
そう言つてデュオはビームシザースを一夏は雪片二型を構えた。隣のシャルをみると同じ臨戦態勢に入り一瞬目配せを送るとシャルもわかつたように頷いた。

そして、幼馴染みペア同士の試合がはじまる。

『試合開始』

「うおりゃあ！」

「らああっ！！！」

イグニッション・ブースト  
開始と同時に二人は瞬間加速を用いて接近し互いの得物をぶつけ合  
わせた。

「はっ！いい打ちこみだな一夏！」

「そりゃあ、毎日しごかれてるから、な！」

「おっと」

横に振るつた雪片をデュオは軽くかわしお返しといわんばかりにビ  
ームシザースで薙ぎ払つた。

「ははっ！いいぜえ、一夏！ならこつちもギアをあげるぜえ！！！」

「う、おっ！！！」

デュオの言葉通りデュオの一撃一撃が速く重くなっていき、ISで  
保護されている腕でも段々と痺れていくのを感じる。

「おらおら！さっきまでの勢いはどうしたあ！？」

「くっ……！！！」

デュオの嵐のような攻撃に一夏は段々と雪片でさばけなくなり徐々  
にシールドエネルギーが削られていった。

「うおおっ！！！」

「おっ！？？」

このままじゃ負けると思ったのだろう、一夏は『零落白夜』を発動  
しデュオのビーム刃を切り裂き、反撃に出た。

「貰ったぜ、デュオ！」

「……一夏、忘れてるかも知れねえがこれはタッグ戦なんだぜ  
？」

上段から斬りかかろうとする一夏に体制を崩されてピンチのはずのデュオは冷静なまま一夏に言い聞かせるように呟いた。

「うおおっ!!」

「つまり」

「ブウン……」

「なっ!？」

雪片二型がデュオを切り裂こうと瞬間、デュオは陽炎のように揺らぎ消えてしまった。

「ど、どこに!？」

「つまりは」

「こういう事だぜ(よ)!!」

声のした方を見ると箒にデュオが後ろから斬りかかっている所だった。

「なっ!？後ろからだど!？」

突如、後ろから走った衝撃に箒は驚きながらも後ろを振り返ると、そこには先ほどまで一夏と戦っていたデュオがいた。

「くっ!」

「おっと、俺ばかり見てていいのか？」

「なにっ!？」

「箒、あぶない!」

振り向きざまに近接ブレードを振るった箒の一撃をデュオは軽く受け止め、一夏の声で後ろを振り向くとそこにはアサルトライフルを構えたシャルが箒に狙いを定めていた。

「ほら!他所見すんな!!」

「あっ!」

シャルに気を反らした一瞬の間をつきデュオは箒の手から近接ブレードを弾き飛ばすと、シャルに向かって蹴り飛ばした。

「いったぜ、シャル!」

「がっ!」

蹴り飛ばされた箒に向かい、シャルは五十五口径アサルトライフル

『ヴェント』を連射し、箒のシールドエネルギーをゼロにした。

「箒!!」

「他人の事なんて気にしてていいのか一夏？」

「くっ!!? デュオ!」

「僕もいるよ!」

「シャルル・・・!」

箒が落とされ一人になった一夏にデュオとシャルルが接近してきた。そして・・・

『試合終了。勝者、デュオ・マックスウエル、シャルル・デュノア  
ペア』

あの後一人になった一夏は必死に抵抗するも二人のコンビネーションにより、雪片二型は手から弾き飛ばされ、シールドエネルギーも一気に減り、最後はデュオのビームシザーによる一撃で敗れ去った。

こうして、Aブロック一回戦はデュオとシャルルの幼馴染コンビが勝利した。

死神VS白騎士の学年別トーナメント一回戦（後書き）

今回は短かった。

次はいよいよラウラと対戦！フラグを立てるべきか立てないべきか  
作者は今も迷っています。

死神VS黒ウサギ、同じ人に憧れているのにどうしてこんなに違うのだから、

パルマフィオキーナからダークネスフィンガーに変えました。

死神VS黒ウサギと同じ人に憧れているのにとっしてこんなに違うのだらう

「ま、今回は俺達に譲るんだな。一夏？」

「ああ、負けは負けだ。でも、負けんなよ？」

「つたりめえだ。優勝トロフィーを教室に飾ってやるよ」

試合終了後、デュオと一夏は互いに笑いあいながら拳を打ち付けた。

「んじゃ、おれは次の試合があるから」

「おう、がんばってこいよ」

「まかせろ」

そっいいながら去っていったデュオだがシャルと合流する途中、意外な人物と鉢合わせた。

「……………」

「よお、ラウラ。何の用だ？」

ISスーツを着たラウラが腕を組んで待ちかまえていた。

「ふん、いい気なものだな。あの程度の雑魚に勝ったからといって浮かれ気分とはな」

「はっ！一夏の事を雑魚とはドイツの軍人さんは観察眼を養う訓練はしなかったのか？」

「フン！死神といわれているからどれ程の実力かと思えば、期待外れだ」

「おーおー、言ってくれるぜ。この前どっかのウサギちゃんはその死神に追いつめられてなかったっけ？」

ああ言えばこういう、そんな二人の雰囲気はその場の空気が一気に氷点下までに下がった感覚がした。

「……………」

「……………」

無言。ただ無言のまま二人は自身のISに手をかけながら、

「死にたいようだな」

「地獄に連れてって欲しいみたいだな」

「止めないか、馬鹿者ども」

一触即発の雰囲気の中、それに割って入るように千冬の声が廊下に響いた。

「姉御……」

「教官……」

「まったく、生徒から連絡があつて何事かと駆けつけて見れば、これか。デュオ、ラウラ。お前達には私闘を禁止するという私の言葉を忘れたのか？」

「チツ」

「……」

千冬の責めるような言葉を聞いて二人は顔を背ける。

「死神」

「あん？」

「Aブロック決勝まで這いあがつて来るんだな。来ればの話だがな……」

「ハンツ！その言葉そっくりそのまま返すぜ、ウサギちゃん！」

背を向けたままラウラはデュオに言い放った後、そのまま去っていった。

「それじゃあ、姉御？俺もこのあと試合なんで……」

「ああ」

そういつて、デュオは千冬に背を向けてその場を後にした。

結論からいえば予想通り、デュオとシャルのコンビネーションの前に並みの操縦者では太刀打ちできず、とんとん拍子でAブロック決勝まで勝ち進んだ。対するラウラもパートナーが活躍する暇もなく、自分一人の力で決勝まで勝ち進んでいった。

そしてついにAブロック決勝戦が幕を開ける。

「……………」

「……………」

デュオとラウラは無言のまま向い合い、試合が始まるの待っていた。

「デュオ……………」

「シャル、ワリイがコイツとは一対一でやらしてくれねえか？」

「え？なんで…………？」

デュオの突然の申し出にシャルは困惑した。

「なあゝに、何時までも過去に囚われているウサギちゃんに説教をしようと思つてね」

「…………もう、そこまで言うんだつたら絶対勝つてよ？」

デュオの人懐っこい笑顔にシャルは何を言っても無駄と悟り呆れながらも信頼した笑みで言ってきた。

「任せるつて。それと、ありがとな」

『試合開始』

シャルに礼を言った瞬間試合開始の合図が鳴り、それと同時にデュオはラウラに向かって行った。

「うらあつ！」

「ふんっ」

接近しながらビームシザーを構えたデュオにラウラは右腕をあげ停止結界を発動したが、

「前にも言っただろ、死神にそんな物は聞かねえつてな！」

「チィ！」

ハイパージャマーの出力を調整しラウラの停止結界を無効化しながらラウラとの距離をつめ、ビームシザーを振るった。

「最初っから、クライマックスでいくぜー！」

「調子に乗るな、死神が！」

ガギンツ！！

プラズマ刃とビーム刃が激突し、火花をあげながら鏖競合った。

「このっ！！」

「おおらあ！！」

一撃の威力と近接武器のリーチ、更には変幻自在な攻撃をしてくるデュオと手数ของ多さと破壊力にまさるラウラ。両者の実力は今のところ互角に思えた。が、

「くっ・・・！」

「おら、おら、死神様のお通りだ！」

手数で勝るはずのラウラが押され始めてきた。手数で劣るデュオだが、リーチでは圧倒的に勝っているためビームシザーズとビームランスを使い分け嵐の様な攻撃でラウラを懐に入らせなかった。

「フツ！！」

「うおっ！？」

近接戦闘ではデュオに分があると悟ったラウラは一旦距離を取り、ワイヤーブレードからの中距離攻撃に切り替えた。

「くそっ！」

更には距離を取りつつ右肩のレールカノンからの砲撃、これでは近づけない。

ワイヤーブレードとレールカノンの波状攻撃にデュオは徐々に押され始めてきた。

（一瞬でもあのワイヤーに捕まったら、レールカノンの餌食になっちまう！かといってバスターシールドじゃあ当る前にワイヤーに絡めとられちまう！・・・こうなったら・・・）

何かを決意したデュオはその瞬間、思いもよらない行動に出た。

ガシィッ！！

「なっ！？」

「捕まえたぜ！」

ラウラは驚愕の声をあげた。それもそうだろう、デュオはワイヤーブレードを掴み自身に絡みつけたのだ。

「おらっ！こっちにきやがれ！！」

「うわっ！？」

つかんだ瞬間、デュオは渾身の力でラウラを自身のもとへ引っ張った。急激な力で引っ張られたラウラは体制を崩されデュオのもとへ強制的に引っ張られた。

「でやあ！」

「このっ！！」

引っ張られてきたラウラは自身に向かってビームシザースを振るうデュオに対し、自らもプラズマ刃を発動し応戦した。

ギヤリリイッ！！

すれ違いざまにビーム刃とプラズマ刃がお互いの装甲を削り、会場にいやな音が鳴り響いた。

「逃がすかつ！」

「！！！」

「うおっ！？」

お互いの攻撃がかすれて威力が半減し互いに大したダメージは与えられなかったが、デュオはすぐさまラウラとの距離をつめようとスラスターを噴かせたが、ラウラは落下しながらもレールカノンを発射しデュオを牽制。自身もなんとか体制を立て直し、デュオの腕に巻きつけてあるワイヤーを切り離れた。

「.....」

「.....」

会場の歓声を余所に二人は互いに無言で睨みあった。見るとシャルがラウラのパートナーを撃破したようだ。

「やっぱりな、俺とおまえは似ている」

「なに？」

不意に笑いながらデュオが言った言葉にラウラは疑問の声をあげた。「なにをふざけた事を言っている？」

「ふざけてなんかいねえさ。俺もお前も同じ人を慕い、尊敬し、あの人と並び立ちたいと思う気持ちがある。」

違うか？と問うデュオにラウラは答えなかった。ここで言うあの人とは千冬しかありえないからだ。

「ハツキリ言つて、俺はお前の事は結構気に入っているし、認めている。姉御の事を尊敬する気持ちもわかるしな・・・」

けどな、と続けたデュオは先ほどまでの笑みを止めバイザー越しでもわかるほど怒っていた。

「それだけに気に食わねえ。てめえがあの人を　織斑千冬を連

れ戻しに来た事が何よりも気に食わねえ！あの人があの人をの道を行っている、そこに俺達が横から茶々を入れていいはずがねえ！！」

「!?!?」

そう、デュオがラウラを気に入らない理由はそれだった。デュオにとって千冬は目標であり自身の目指す高みであり、何時か背中を任せたいと言わせた存在。ラウラにとっての千冬は自らの師であり、理想の姿であり、存在理由でもあり、自らを重ね合わせたいと思つた存在。

デュオは決して千冬と自分を重ね合わせようなどと思わなかった。それは、デュオは千冬にはなれないし、千冬はデュオにはなれないから。ラウラは決して背中を任せて貰えるようになりたいとは思わなかった。それは、ラウラにとって千冬は最強の象徴であり、自身と重ね合わせて千冬の様になると考えていたからだ。

「おれは、あの人に完璧さを要求しねえ。例え経歴に傷がつこうが、何であろうが、それすらも織斑千冬っていう、一人の女性じゃねえか!!」

「・・・まれ・・・」

そう、デュオはラウラ見たいに千冬に完璧さも神聖さも要求しなかった。デュオにとっての織斑千冬は厳しく、厳格で鬼のように怖い時もあるが、それ以上に一人の女性として見ていた。

「だから、そんなあの人をの人生を縛りつけるようなマネをするため

えが！姉御を尊敬しながら、彼女の人生を勝手に決めつけようとするためえが！俺は何よりも気に食わねえ！！！！」

「だまれ、だまれだまれ、だまれええええ！！！！！！！！」

怒りに身を任せたラウラはプラズマ刃を構えてデュオに突撃を仕掛けてきた。その姿はまるで駄々をこねた子供のようにだった。

「みせてやる！これが俺と相棒タナトスの切り札！」

そう言つて、デュオはビームシザーズを収納し自身の右腕に装備されている切り札を起動した。

『ダークネスフィンガー』発動。出力安定

ISが報告すると同時に、デュオの右腕、正確には掌から闇色の光が噴出し、それがデュオの手全体を包み込んだ。

警告！敵IS接近！！

「うああああっ！！！」

「あめえ！！！」

冷静さを欠いたラウラはプラズマ刃をデュオに突き立ててきたがデュオはそれをバスターシールドで弾き、ダークネスフィンガーを発動した右腕を振りかぶった。

「くらえ！ダークネスフィンガー！！！！」

「ガッ！？」

ダークネスフィンガーを発動した右腕をラウラの腹部に喰らわせ、ISの絶対防御ごとラウラを掴みあげた。シールドエネルギーを一気にゼロになつていくのを感じラウラの意識はそこで途切れた。

しかし、この後に起る異変はこの場にいる誰もが驚愕する事を今はまだ誰も知らない。

(わたしは )



死神VS黒ウサギと同じ人に憧れているのにどうしてこんなに違うのだろうか

まさかのデイスティニー武装・・・デュオのあの武装は前から考えていたけど、やっぱり名前はダークネスフィンガーにした方がよかつたかな？（色的に）

さて、いよいよシャルロット&ラウラ編もいよいよ終わりに近づいていました。

デュオにラウラフラグを立てるべきなのか、立てないべきなのか作者は今もお迷っている・・・

死神の本気、ラウラフラグが立ちました。(前書き)

最後のセリフを変えました

## 死神の本気〜ラウラフラグが立ちました〜

（わたしは・・・こんな・・・こんな所で負けるのか、わたしは・・・！）

デュオのダークネスフィンガーを喰らいながらラウラはしだいに朦朧としていく意識の中、そんな事を考えていた。

（わたしは負けられない！負けるわけにはいかないのだ・・・！）  
ラウラ・ボーデヴィツヒ。という名前、識別上の名前。しかし、最初につけられた記号は 遺伝子強化試験体C・〇〇三七。人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた。そう、生まれた時からラウラは光りというものは存在しなかった。あるのは暗い闇だけ。その闇の中にラウラはいた。

ラウラは兵器として優秀であった。当たり前だ兵器として生まれ、兵器として育てられ、兵器として育てられたのだから。いかに人体を攻撃するかという知識、どうすれば敵軍に打撃を与えられるのかという軍略。

ただ、そんなラウラにとって予期せぬ事態が起きた。世界最強の兵器 IS が現れたのだ。

そしてその適合向上の為に行われた処置『ヴォーダン・オージユ』がラウラに異変を起こした。

『ヴォーダン・オージユ』  
疑似ハイパーセンサーと呼べるそれは脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況化における動体反射の強化を目的とした、肉体へのナノマシン移植を指す。そして、その処置を施した目を『越界の目』と呼ぶ。

危険性は全くない処置のはずだったが、しかしラウラはその処置で左目は金色へと変質し、常時稼働状態になってしまった。

その所為で彼女は今までの部隊でトップの座から転落し、隊員からは『出来損ない』の烙印を押されてしまった。

しかし、そんな彼女に一筋の光がさした。それが、織斑千冬だ。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一か月で部隊最強の座に戻るだろう。何せ私が教えるのだからな」

その言葉に偽りはなく、千冬の教えを忠実に実行しただけで、千冬の言とおおり一か月でIS専門の部隊で彼女は最強の座へ舞い戻ったのだ。

最強の座へ戻ったラウラは安堵よりも千冬に対する憧れの方が圧倒的に強かった。その強さに。凜々しさに。堂々とした様に。自らを信じる姿に、焦がれた。

初めてラウラはこうなりたと思った瞬間であった。

そして、そんなある日、ラウラは唐突に聞きたくなった。

「どうしてそこまで強いのですか？どうすればそこまで強くなれますか？」

そしてその時初めてラウラは千冬の少し優しい笑みを見た。

「わたしには弟と、そして出来ない弟子のようなものがある。」

「弟と弟子・・・ですか」

「ああ、あいつを　弟の方な？アイツを見ていると、わかる時がある。強さとはどういうものなのか、その先に何があるのかをな」

「よく、わかりません」

「今はそれでいいさ。そして、もう一人　出来ない弟子の方はそれなりに付き合いはあるが、アイツは基本底抜けのバカだが、例えどんな境遇にさらされようと消して諦めず、最後まで自分を見失わない。・・・本人には内緒だが、あいつはお前と同じ境遇でありながら光りという名の希望を捨てなかった。多分、本当に強いというのアイツの事をいうのだろうな」

「!!!？」

「だからもし、機会があれば日本に来るといい。弟子の方には会え

ないが弟の方には会えるし、運が良ければ弟子の方にも会えるかもしれないぞ？アイツは大の日本好きだからな。・・・ああ、それと一つ忠告しておくぞ。アイツ等は

優しく、どこか恥ずかしそうな笑み。それは

（それは、違う。わたしが懂れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのが貴女なのに）

だから許せない。教官にそんな表情をさせる存在が。

そんな風に教官を変えてしまう弟、そして、自分と同じでありながら光りに生きているこの男が。認めるわけにはいかない。

だから

（敗北させると決めたのだ。あれを、あの男達を、私の力で、完膚無きまでに叩き伏せて、教官こそが真の強さだと言う事を！）

だから、こんな所で負けるわけにはいかない。あの男はまだ動いているし、もう一人の男とはまだ戦ってすらいない。徹底的に破壊しなければならぬ。目の前にいるこの男を、教官を汚すもの全てを

（力が、欲しい）

その時ラウラの胸の奥底に何かが蠢いた。

『願うか・・・？汝、自らの変革を望むか・・・？より強い力を欲するか・・・？』

そしてラウラはこう答えた。

（わたしに、比類なき最強を、唯一無二の絶対を  
私によこせ！）

Damage Level.....D.  
Mind Condition.....Uplift.  
Certification.....Clear.  
《Valkyrie Trace System》.....  
boot.



それを見た瞬間、デュオは会場に轟くほどの怒声をあげた。隣にいるシャルも驚いていた。デュオがこれほどまでに怒っているなんて、数えるほどしかないのだ。

「らあああ!!!」

刹那、黒いISとデュオが激突した。速すぎて隣にいたシャルでさえ何時の間にも移動したのかわからなかったほどだ。

「ぐっ!!!」

一瞬の鏖競合いのあとお互いに弾き飛ばされたが、デュオは体制を立て直し、直ぐにビームシザーを構えた。

「デュオっ!」

「来るんじゃない!!!」

援護しようとしたシャルをデュオは一喝して止めた。気を抜けば一瞬でやられてしまう。何時もならここでハイパージャマーを使って裏をかき、惑わせ、時には正攻法で沈めていただろう。しかし、今のデュオはそんな事など一切考えていなかった。今はどうやって目の前の偽物をぶっ壊すかしか考えていなかった。

「離してくれ!今すぐアイツをぶっ飛ばさないといけねえんだ!!!」

「落ち着け、一夏!!!」

「一夏さん落ち着いてください!!!」

「いきなりどうしたっていうのよ!!!」

先ほどまでリアルモニターを見ていた一夏が、ラウラだった者の握っているものを理解し、アリーナに走りだそうとしたところを、箒、セシリア、鈴音の三人が今にも飛び出そうとしている一夏を必死に抑え込んでいた。

「落ち着け!一体どうしたというのだ、一夏!私たちにもわかるように説明しろ!」

バシィツと箒に叩かれ幾らか冷静さを取り戻した一夏は震える声で言葉を紡いだ。

「あいつ・・・あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけの物なんだよ。それを・・・くそっ！」

「お前は・・・いつも千冬さん千冬さんだな」

悔しそうに拳を床に打ち付ける一夏に箒は少しさびしそうに呟いた。「それだけじゃねえよ。あんな、訳のわからない力に振り回されているラウラも気に入らねえ。ISとラウラ、どっちも一発ぶん殴らないと気が済まねえ！」

「ワリイが、一夏。その役目は俺が貰うぜ」

突然、ISのプライベートチャンネルが一夏達のいる部屋に響いた。

「デュオ！今すぐ俺と代われ！」

「無茶言うんじゃないよ。それに、こればかりは代われねえ。コイツは俺がぶつ潰す」

「ふざけんな！その役目は俺だ！」

「黙ってる、ガキが！！」

いくら言ってもわからないとわかり、遂にデュオがキレた。その怒声に一夏だけでなく箒達ですら萎縮してしまった。

「キレてんのが、テメエだけだと思っな！！俺だって今の状況にムカついてんだよ！！！！」

「で、でもよ・・・」

「お前の分まで俺が叩きのめしてやる！わかったらそこで見てろ！！」

そう言ってデュオは一方的に通信を切ってしまった。

「デュオ、いくらなんでも言いすぎじゃない?」

「アレぐらいでいいんだよ」

「でも・・・」

「それよりシャル、あぶねえから下がってる。巻き添えくらっちまうぞ?」

「もう!・・・デュオ?」

「ん?なんだ?」

「無理、しないでね?」

そう言ってくるシャルの心配そうな声にデュオは、

「(泣きそうな顔しやがって・・・) 心配すんな、直ぐ終わるさ」

「うん・・・」

そのまま離れていくシャルを見送り、デュオは黒いISにビームシザーを突きつけた。

「さあつて、アイツ等にあんな啖呵切ったんだ。悪いが速効でけりをつけてやるよ!」

そう叫びデュオは、己の切り札の名を叫ぶ。

「タナトス!リミッター解除!フルドライブで一気にかたをつけるぞ!」

了解。リミッタ 解除。フルドライブ、スタンバイ

その返事と共に、自分の中で何かの鎖が切れる音がした。

そう、元々タナトスにはというよりハイパージャマーにはリミッターがされてあった。何故なら、リミッターをしなければ並みのISではタナトスに一撃すらあてる事も出来ない。それにより、リミッターを付け能力を落とした。が、そのリミッターを外す事でタナトス本来の能力が発揮される。

更にここで言うフルドライブとは・・・

「ハイパージャマーと瞬間加速イグニッションブーストの合体技、受けてみな!」

最強のステルス性能と幻術を生み出すハイパージャマーと瞬間加速イグニッションブースト

の合体。それにより何が起こるかというところ、  
黒いISも危険を察知したのかデュオに向かって切りかかってくるが、

「絶技」

「!?!」

雪片もどきがデュオに触れる瞬間、デュオの姿がかき消えた。刹那

インフイニット・イグニッションブースト  
「無限瞬間加速 死神地獄切り」

黒いISを空中へかち上げた瞬間、幾人ものデュオが黒いISに向けて四方八方から切り刻んでいった。それはまるで百人の死神が一人の罪人を取り囲みすれ違いざまに死神の鎌で切り刻んでいるかのように……

インフイニット・イグニッションブースト  
無限瞬間加速

デュオとタナトスの最終奥義であり最後の切り札。瞬間加速中にリミッター解除状態のハイパージャマーで質量のある自分の分身を創り出しそれと一緒に動き、攻撃する。もちろんリミッター状態のハイパージャマーではこんなこと出来ないし、質量のある幻影なんて創れない。

この技を使ってデュオはエジプト代表候補に慣れたといっても過言ではない。

「うおりゃあ!」

「ギ……ギ……ガッ!?!?!?」

徐々に黒いISの体に無数の傷がつき頭部のフルフェイスアーマーも剥がれてきた。

「コイツで」

突然、斬撃が止んだと思ったら黒いISの頭上で一人に戻ったデュオがビームシザーを振りかぶっていた。

「とどめだあ!」

ザンツ!!!

「ギ……ギ……ガ……」

黒いISが真っ二つに割れ、気を失うまでの一瞬である瞬間にデュ

オとラウラの目があつた。眼帯が外れあらわになった金色の瞳。その姿はまるで雨に打たれた捨てられた子犬の様な酷く弱弱い瞳にデュオは先ほどまでの怒りは消えてしまった。

「おっと・・・。つたく、あんな目で見られちゃあ、これ以上怒れねえじゃないかよ」

力を失つて崩れるラウラにデュオは抱きかかえて、地上に降りようとしている時にそれは起つた。

シールドエネルギー残量ゼロ。ハイパージャマーオーバーヒート

「へ？」

安全措置の為、ISを強制的に待機状態に移行します

「え、ちょ、それつてつまり・・・」

デュオが呟くと同時にタナトスが黒い光りと共に黒い口ザリオに戻つた。

「やっぱりかー！！！！？」

ISが消え重力に従つて地面に落下し、なんとかラウラだけは庇おうことに成功したデュオは背中から地面に落下した。

「ぐふっ！！？」

いかにラウラが小柄とはいえ一人分の重量が加わり落下した衝撃にデュオは肺の酸素と胃液が逆流する感覚がしたが、なんとか耐えた。「あゝスカツとしねえ、終わり方。俺つてカツコワリィ・・・ガクッ」

そう呟いた後、デュオは意識を手放した。

「一つ忠告しておくぞ。アイツ等にうちどちらかに会う事があれば、心を強く持て。アレらは未熟者のくせに、どうしてか妙に女を刺激するのだ。特に弟子の方は妙にモテるからな、油断していると惚れるぞ?」

そんな風に言う教官は酷く嬉しそうで、それでいて照れくさそうで、何だか見ているこつちがモヤモヤしそうだ。

この時はわからなかったが今ならわかる。あれはやきもちだった。それで、あんな事を訊いてしまったのだ。

「教官は惚れているのですか?」

「弟に惚れる姉がいるか?しかし、そうだな。弟子の方なら・・・  
・まあ、悪くはないな」

そう言った時の教官の顔は満更でもない様な顔で笑っていた。教官にこんな顔をさせる、その男達が　羨ましい。

そして、出会ってわかった、戦って理解した。

強さとは　何なのか。

その答えは無数にあるのだろう。

けれど、その答えの一つに強烈にであってしまった。

『強さなんてそんなもんいくらでもあるが、おれは、そうだな・・・  
守るべき者を守る強さだな』

守るべき物を、守る?」

『ああ、守るべき者さえしっかりと見据えてさえいればおのずと答えは出てくるものさ、強さってもやつはよ・・・』

守るべき者を見据える・・・?

『そうだ。そしていくらが強くたつて最後にそれらを見失わなつちまったら意味がない。だからそうならないようにに心を鍛えるだ。その力が間違わないようにな』

では、どうしてお前はそこまで強い?どうやったら強くなれる?

『俺が強い?おもしれえ事いうな。俺なんざ全然強くねえ、少なくとも、おれはまだまだ弱いさ』

その言葉に私はぼかんとってしまった。

『でもそうだな・・・どうしてここまでやれるかっていうと、光りの中に生きたことだな』

光りの中に生きる？

『ああ、暗闇の中で生きていた俺達にとって眩しいだけの存在かもしれないねえが、案外悪くねえぜ？そして、光りの中で見つけられるものもあるし、見つけたものもある』

光りの中で見つけたもの？

『そこから先は自分で行って確かめな。強さの秘密はそこに隠されてるかもしれないぜ？』

わたしにも見つかるだろうか？

『見つかるさ。経験者がいうんだ、間違いねえ。ま、死神が光りの中で生きてるなんざおかしな話だけどな』

ああ、確かにおかしいな・・・

『でも、もし、光りに入るのが怖い時は俺が手を引いてやるし、守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィツヒ。』

・・・

『なんたって俺は、逃げも隠れもするが嘘だけはいわない、デュオ・マックスウエルだからな』

その言葉を聞いて、私は　　ああ、そうか。これが・・・そうなのか。

ときめいて、しまったのだ。

早鐘の様な心臓の鼓動、コイツの笑顔を見た瞬間、体が火照ってきた。

ああ、わたしはコイツの前ではタダの十五歳の『女』何だと言つのを自覚してしまった。

デュオ・マックスウエル。

ああ、これは、確かに。

惚れてしまいそうだ。

死神の本気〜ラウラフラグが立ちました〜（後書き）

さんざん迷った結果、デュオにラウラフラグを立てる事にしました！  
後悔はしてない、だってラウラはシャルの次に好きなんだもん。ー  
夏に何てくれてやるか！

次回は遂にデュオの秘密に入ります

## 死神の秘密、金の姫君と黒ウサギの覚悟

「う、あ……」

ぼやっとした光が差し込みラウラは目を覚ました。

「目が覚めたか」

その声には聞き覚えがある。いや、ラウラにとって聞き覚えがあるところではない。どこで聞いたかとラウラは一瞬で理解できる。ラウラが敬愛してやまない教官こと織斑千冬がベットとの横に座っていた。

「私……は……?」

「全身に強い打撲と無理な負荷がかかったことによる筋肉疲労。しばらくは動けないだろう。無理はするな。」

千冬は、はぐらかすような口調で言ったがラウラ簡単に誘導されなかった。

「なにが……起きたのですか……?」

全身に痛みが走るのを感じながらラウラは上体を起こした。その顔には治療のため眼帯が外され、赤と金のオッドアイが真っ直ぐ千冬を見つめていた。

「ふう……一応、重要案件にである上に機密事項なのだがな。」

『VTシステム』を知っているか?」

「はい……。正式名称『ヴァルキリー・トレース・システム』……。過去のモンド・グロツソ部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれは……」

「そうだ。IS条約で現在のどの国家・組織・企業においても研究・開発・使用全てが禁止されている。それがお前のISに積まれている」

「……」

「巧妙に隠されているが、操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意思……。いや、願望か。それらが揃う

と発動するようになっていたらしい。現在学園はドイツ軍に問い合  
わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

千冬の言葉を聞きながらラウラはシーツを握りしめ俯き虚空を見つ  
めていた。

「私が・・・望んだからですね」

あなたに、なることを。

その呟きを聞いた千冬はラウラに向き直り、

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はいっ！」

いきなり名前を呼ばれラウラは驚きながら顔をあげた。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……………。私……………は……………」

千冬の問題にラウラは答える事が出来なかった。自分がラウラだと  
そうはつきり言えなかった。

「誰でもないなら、丁度いい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィ  
ツヒになるといい。なに、時間は山ほどあるんだ。何せ三年間はこ  
の学校に在籍しなければならぬからな。その後も、まあ死ぬまで  
ある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ……………」

「そして、何時まで盗み聞きしているんだ？その異常性欲者」

「ちょ！？誤解を生むような発言は控えてほしんすけど、姉御！  
！」

「なっ！？」

何時の間に行ったのだろうか千冬の発言と共にデュオがラウラが横に  
なっているベットとは違うベットの下から突然現れた。

「盗み聞きとは関心せんな、デュオ？」

「あ、イタツ！姉御、俺の頭からミシミシと聞こえちゃいけない音  
が！！？」

いつの間にか千冬はデュオの頭を掴み、片腕で持ち上げていた。

「まったく…………話したい事があるなら、話せ。私はまだ仕事が残

っているからな」

パツとアイアンクローからデュオを開放し千冬は保健室を出ようとした時またラウラに振りかえり、

「ああ、それから。お前は決して私にはなれんぞ。アイツの姉とコイツのお守は、こつち見えても心労が絶えないからな」

その言葉を最後に千冬は保健室を後にした。

「くくくつたく、姉御の奴。マジで頭が砕けるかと思ったぜ……」

「ん？どうした？」

「い、いや……」

不思議そうにこちらを見てくるデュオの顔をラウラは直視できずそつぽを向いてしまう。

「あゝかけていいか？」

「ああ」

気まずい雰囲気になりながらもデュオは先ほど千冬が座っていた椅子に座った。

「さて、と……何を話すかな……」

「何かを話に来たんじゃないのか？」

「それもあんだが、俺に聞きたい事があるんじゃないかねえのか？」

「……」

凶星をつかれラウラは少し沈黙し、再び言葉を紡いだ。

「以前、教官がお前は私と同じ境遇といていた。……その、差し支えなければ……その……話してもらいたいのだが……」

「」

「あゝその話か……」

自分と同じ境遇という言葉にデュオは露骨に嫌そうな顔をした。

「い、いやなら、話さなくていい……」

「ああ、別に話すのが嫌ってわけじゃねんだ。こつちもお前の過去については調べちまったからな……」

デュオは申し訳なさそうに言うと、仕方ないっといって話し始めた。

「ラウラ、『プロジェクトU』って言葉に聞き覚えはないか？」

「プロジェクトU？いや、知らないが・・・」

「まあ、知らないのも無理はないか・・・まあ、いや。とりあえずその『プロジェクトU』、正式名称『プロジェクトUアルティメット』  
TE』そして俺はその試験体？U-02。それがかつての俺の名だ」  
「『プロジェクトUアルティメット』？」

「まあ、簡単に言うなら何処かのバカげた組織が究極の兵士を創るために遺伝子を組み換えたり人体実験をした結果、俺が生まれただけだ」

「究極の兵士・・・」

「そう、そしてプロジェクトUで生まれた者の名を『Uアルティメット』  
TE CHILDREN』と呼ぶ。俺を含めた遺伝子操作を行った百人のチルドレンは人を殺すための技術、兵器の扱い、その他もろもろの戦争に役立つための知識、技能を学んだ。更には体内にナノマシンを埋め込み異常なまでの治癒速度、風邪にはかからないし、多少の傷は直ぐに治っちゃう。それにより老化が遅くなり、不完全だが不老長寿になっちゃった」

（まあ、他にもあけど・・・流石に言えねえな・・・）

「そして、ある一定時期になるとある事が行われた」

「ある事？」

「ああ、チルドレン同士で一对一の殺し合いだ」

「！？」

その時のデュオの顔をおそらくラウラは一生忘れないだろう。デュオの顔は能面のように無表情だったのだから・・・

「究極の兵士を作り上げる為には常に強い者だけいればいい。そのため毎月、同じ場所で制限時間を設け、時間内にそいつの持つカギを奪い合う。もし時間内に鍵を奪えなかったら、その時点で二人とも殺す。しかも、殺し合ってる場面を見せるんだから、そいつらの趣味がうかがえるよ」

ラウラは絶句していた。生き残るためには味方を殺さなければなら

ない、その過酷すぎる環境に、そして、その環境にしながらデュオは生き抜いた。つまり・・・

「そう、俺は自分が生き残るために俺と同じような境遇の奴を殺した。・・・俺の手は仲間の血で汚れちゃってる」

「そんな・・・」

「まあ、その話は今はいい。続けるぞ？そんな殺し合いの日々にISという兵器が登場した。そこで科学者達は俺達にISが乗れるか実験したんだ。『究極の兵士ならISにも乗れるかもしれない』ってな。そしたら、わずか数人だけが確かにISを動かせる奴らがあった。しかも全員男。そして、そこからISの操縦のカリキュラムが科せられ、それと同時に毎月行われた殺し合いが無くなった」

「そうなのか・・・」

「ああ、大方その時はもうプロジェクトも最終の段階になったんだろつよ。そして運命の日、あるシステムを取り入れた専用機の試運転が行われた」

「・・・どうなったんだ？」

「結果は大失敗。俺らの仲間の一人がISを暴走させ、施設は全壊、研究者達もおそらく全員死に、俺は気を失い気付いたらカトル

俺の親友な、の家にいてその時にこの相棒が首に下がってたんだ。

「そう言つてデュオは首に下がっている待機状態のタナトスを持ちあげながら、笑った。

「そこから、俺は『デュオ・マックスウエル』っていう名前を貰い、光りの中で色々な出会いをして、今の俺がある」

以上昔話終わりつとってデュオは立ちあがりそのまま部屋を出ていこうとした。

「もう行くのか？聞きたい事があつたのではないのか？」

「おおつと！そうだったな・・・。なあ、ラウラ。『ヒイロ・ユイ』と『ゼクス・マーキス』って名に聞き覚えはないか？」

「『ヒイロ・ユイ』に『ゼクス・マーキス』・・・いや、ないが、

「……」  
「ラウラがそう答えるとデュオはそっか……と少し落ち込み気味に苦笑する。」

「聞いたかった事は以上だ。んじゃ、怪我、早く治せよ?」

「あ、あの!」

「ん?」

突然ラウラが声をあげ、デュオは不思議そうに振り返った。

「辛くなかったのか? 同じ仲間を殺し、その罪を背負いながら光りの中で生きていくのは、辛くなかったのか?」

「辛くないわけないさ」

そう言ったデュオの顔は泣きそうで痛みにも耐え忍んでいるかのようだった。

「でも、それでも、俺は、俺が殺した奴等の事は忘れないし、アイツ等の分まで生きていかなきゃならねえ。生憎と死んで詫びようなんて考えはまったくない。死んだら何のためにアイツ等を殺してまで俺は生き残ったのかわかんなくなっちまうしな。……それに

いや、何でもない……」

そう言ってラウラに向き直ったデュオは優しく儂げな笑顔を向け

「だから、アイツ等が見れなかった光りの中で精一杯、生き抜いていく。それが、おれがアイツ等の前で誓った事だ」

そう言ってデュオは今度こそその場を後にした。

「ふふ……」

デュオが去った後、ラウラは人知れず笑いをこぼした。

(完敗、だな。私と同じ境遇でありながら、私以上の闇の底にいて自分から這い上がってきた。まったく、それでいて強さを見誤らない……勝てるわけがない)

だが、それでもラウラの胸を締めるのは悔しさよりも嬉しさの方が大きかった。

以前は嫌だったはずの敗北感が今では心地よい。

そう、ラウラ・ボーデヴィツヒの物語はここから始まったのだ。

ラウラと別れたデュオはそのままシャルの待つ自室に向かった。

「ただいま、シャル」

「あつ、おかえりデュオ。ラウラ、大丈夫だった？」

「ああ。まだダメージはあるが、もう平気だろう。あれならすぐに元気になるさ」

「そっか、よかった」

そう言つて心配そうに尋ねてくるシャルにデュオは苦笑しながらこたえたとシャルは安心したように微笑んだ。

（ホント、優しい奴だよ、お前は・・・）

「ん？どうかしたの、デュオ？」

「いや、なんでもねえさ・・・」

そういつて、デュオはベルトに腰掛けると疲れたのか、倒れこむように横になった。

「しっかし、疲れたぜ」。しばらくはトラブル事件はマジ勘弁」

「フフツ、デュオがんばってたものね」

「まゝな。フルドライブなんて久々に使ったから、体中あちこちいてえぜ」

そういつてデュオは体を伸ばすと骨のなる音が聞こえた。

「・・・」

「ん、どうした？シャル？」

隣を見るとシャルは何かを決心したような顔になっていた。

「あのね、デュオ。カトルと連絡を取りたいんだ」

「カトルと？まあ、それはいいけどよ・・・何でだ？」

「ちよつと頼みたい事があつて・・・」

「?まあいいけどよ、少し待つてる」

頼みたい事の内容がわからないが、とりあえず親友の頼みなのだからデュオはすぐさま上体を起こし携帯でカトルに電話する。

プルル、プルル・・・ガチャッ

「もしもし、カトルか?」

『デュオ?どうかしましたか?』

「いやよ、シャルがお前に頼みたい事があるって言うてきてよ・・・」

『

』シャルロットが?』

「デュオ、貸して」

「ああ、ちよつと待て。今、代わるからよ」

そう言つてデュオはシャルに携帯を貸すとシャルは簡単な挨拶をした後、またデュオの方に向き直り、

「デュオ、悪いけど席はをはずしてくれないかな?」

「それはいいけど・・・なんでだ?」

「ん、ちよつとカトルと内緒話をするんだ」

「ふん。そつか、じゃあ俺は先に風呂入ってくるぜ」

そういつたシャルにデュオはつまらなそうに相槌を返事を待たずにさつさと男子大浴場に向かつてしまった。

「・・・デュオ・・・」

『大丈夫ですよ、シャルロット。デュオはアレぐらいであなたを嫌いになりません。自分だけ仲間外れにされて拗ねているだけです』

「そうかな・・・」

寂しそうに呟いたシャルにカトルは自信満々に言い切った。

『彼が戻ってきたら、いっぱい彼に甘えるといいですよ。そうしたらデュオの機嫌も直ります』

「うん、ありがとうカトルノノ」

甘えるという言葉にシャルは頬を染めながらカトルにお礼を言う。

『いえいえ。それで僕に頼みたい事という?』

「うん。あのね」

「

結局、デュオは話の内容を訊けなかったが、カトルのいった様にシヤルが甘えてきてデュオは慌てながらも機嫌を直しそのまま二人は一緒に寝た。

そして翌日。

「なあ、デュオ。シャルルの奴どうしたんだ？」

「さあ？今朝、先に行つてて、食堂で別れたからな。何か忘れたんじゃないかと思うが・・・何だか嫌な予感がする」

それに昨日、シャルは寝る前にカトルに連絡していた。それがどうにも気になる。何を話してたのか聞いても「秘密っ」というだけ、その時はそれで引いたが今になって思えば何でもっと追究しなかったのかと後悔する。

それに、ラウラもない。もう事情聴取に行っているのか？

「み、みなさん、おはようございます・・・」

教室に入ってきた山田先生は、その、なんていうかとても疲れているた。

「今日は、ですね・・・みなさんに転校性を紹介します。転校生といいますが、既に紹介はすんでいるといいますが・・・」

転校生という一言でクラス中が騒がしくなった。それはそうだ、この前二人入り、更にもう一人来るといふのだから騒がしくもなる。

（ただ、何か胸騒ぎというか・・・そう、昔、カトルにはめられ

た時の感覚が・・・)

「じゃあ、入ってきてください」

(は?)

妙に、というかかなり聞き覚えのある声が聞こえた。

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしくお願ひします」

ペコリと可愛らしくお辞儀をするシャルロット。そう、女子の制服を着たシャルロットが目の前でお辞儀をしていた。俺を含めクラス全員がぽかんとしていた。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということですよ。はあぁ・・・また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります・・・」

(ご愁傷様です。なるほど、それで昨日、カトルに電話してたのか・・・)

「え?デュノア君って女・・・?」

「おかしいと思った!美少年じゃなくて美少女だったわけね」

周りがざわめく中、デュオはつい口が滑ったのか、

「そういえば、一夏の奴シャルの裸を見たな」

「デュオっ!!?」

それと同時にバシーンとドアが蹴破られたかのように開いた。

「一夏あっ!!」

そこにはツインテールを逆立て鬼のような形相でISを装備した鈴音が立っていた。なんつう地獄耳。

「死ね!!!」

「くっ!デュオバリアー!!」

そう言つて一夏は俺を掴み鈴音に立ちふさがるようになって何い!!!

「てめえ!一夏っ!!!死ぬなら一人で死にやがれ!!!」

「ふざけんなっ!元はといえばお前が原因だろうがっ!!!」

ギャーギャーと言い争っている間に、鈴音の衝撃砲フルパワーが発射。一夏は俺をおいて逃げだし、俺は逃げ遅れてしまった。

(あ、これは死んだわ・・・)

痴話喧嘩に巻き込まれて死ぬとか、我ながら惨めな最期だったな  
っと思っただが、何時まで経っても衝撃が来ないので目を開けると・

「・・・・・・・・」

ISを展開したラウラがいた。そのISは『シユヴァルツエア・レ  
ーゲン』だが、右肩に装備されていたレールカノンがなかった。

「た、助かったぜ、ラウラ。ていうか、お前のISもう直ったのか  
よ」

「コアはかるうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「そうなの　　むぐっ!？」

いきなり。いきなりラウラが俺を掴み、引き寄せると  
唇を奪った。

「!!!!!!???!???!??」

(え、何この展開。え?え?なんで?いきなりラウラがキス?え?  
え~~~~~!!?)

「お、お前を私の嫁にする!決定事項だ!異論は認めん!」

「嫁?婿だろそこは?」

周りが混乱している中、俺は今できる精一杯のツツコミを入れた。

「日本では気にいった相手を『嫁にする』というのが一般的な習わ  
しだと聞いた。お前は大的日本好きだから日本の習わしにならっ  
てお前を嫁にする」

どこのどいつだ、そんな間違った習わし教えた奴は、修正してや

!!!!?

バツとこれまでにない殺気を感じて振り返ると、そこにはにっこり  
と天使の笑みを浮かべたシャルロット。

しかし、俺は冷や汗が止まらなかつたし、震えも止まらなかつた。

何故なら天使の笑みを浮かべながら目は笑っていないし、その背に  
はどす黒いオーラが湧き上がっていたのだから。

しかも、ISを装備してその左手にはシャルのISの武装の中で最

強の威力を持つ69口径パイルバンカー、『灰色の鱗殻』。通称『

盾殺し(シールド・ピアース)』

「くそっ！こうなったら俺も一夏バリアーで対抗するしか……」  
そう言つて一夏の方を見たが、一夏は三人の鬼に囲まれていた。

「……一夏……」

「……何だ、デユオ……」

お互い逃げられない事を悟つたのかじりじりと壁に追いつめられていきながら呟いた。

「短い人生だったな……」

「ああ……」

ああ、ほら、四人の悪鬼がそれぞれの得物を構えた。

「は、ははははっ！！！！」

人は極限に達すると笑う事しかなくなるらしい。

ドッガアアアアッ！！！！

その日、ある教室で爆発音が響いたのと同時に、二人の人影がISもなしで空を飛んでいたのを複数の生徒が確認した。

死神の秘密〜金の姫君と黒ウサギの覚悟〜（後書き）

次回は臨海学校編に入る前に番外編をやります。

## 死神小話（前書き）

番外編を書くといいましたが、ネタがなく一つしかできませんでした。

ネタが思いつき次第また書きたいと思います・・・

## 死神小話

日本とは・・・

「おっ！あれはデュオとラウラじゃないか？」

夕食時、一夏は箒達と飯を食うため、どの席で食おうかと探している時、デュオとラウラを見つけた。「まったく！いいかラウラ。お前の仕入れてきた日本の情報は間違ってる！」

「そうなのか？だがクラリツサは日本とはこういうものだ・・・」

「んなわけねえだろっ！？どこの国に食事を口移しで食わしたり、着替える時に無理やり服を脱がそうとしたりする国があるってんだ！？」

瞬間、後ろのシャルから途轍もない邪気を感じた。近くにいたセシリアと鈴音も「ひいつ！？」と悲鳴をあげながら慌てて離れた。

「まったく、しょうがねえからラウラ。これを見て日本を勉強しろ！」  
ドンツと音を立てながらテーブルに置いたのは『日本の文化百選』  
「これであなたも日本通〜」というなんともいかがわしい分厚い本だった。

「なんだ、これは？」

不思議そうに尋ねてくるラウラにデュオは自信満々に胸を張りながら、

「昔日本に来た時に金髪のアメリカ人がくれたんだ。そこに日本の全てが入っているといっても過言ではねえ！」

(うつわ、ウソくさ・・・)

おそらくあの会話を聞いていたもの全員が思った事だろう・・・しかし、

「そうなのかつ！？」

そんなウソくさいものでも信じる者がいた。

「ああ！そして、日本では独自の積み上げてきたものがある！！そ

「それは」

「それは？」

「『萌え』だ!!!!!!」

「ガタツツ!!!!!!」

デュオの発言に全員がこけた。

「『萌え』？なんだそれは・・・？」

しかし、ラウラは意味がわかっていないのか首をかしげながら尋ねた。

「ああ、『萌え』というのは日本が独自に開発したものといわれ、それを極めれば全ての男性を虜に出来るとさえいわれたモノだ・・・」

「なんだとっ!?!それは本当かつ!?!」

「ああ!その金髪の兄ちゃんが言ってたんだ。間違いねえ!!」

自信満々に拳を握りながらいうデュオにラウラは顔を赤くしながら「そうなのか、ならそれでデュオを誘惑すれば・・・」と言っているが熱くなっているデュオには聞こえていなかった・・・

「まずは『萌え』について勉強だ。参考にこれをお前に貸そう・・・」  
そういつて出したのは日本の漫画が数十冊に数着のコスプレ衣装、そして秋葉原の地図だった。

「こ、これは・・・」

「ああ、これがその兄ちゃんから貰い受けた萌えの参考書だ。そして、萌えの聖域といわれる『秋葉原』の詳細の地図だ。俺も実は秋葉原に入ったことはねえんだ」

「なに?そうなのか・・・?」

「ああ、行こうとしても何故か姉御に止められてな」

「( )(千冬姉(さん、織斑先生)、GJ!!)( )( )」

昔の千冬に感謝を述べ、流石にこれ以上はマズイと思い一夏達は急いで止めに入りデュオとラウラの秋葉原行きは断念された。

そして、一夏と篝の懸命な説明により、デュオの間違った知識は正されたのであった・・・



## 死神小話（後書き）

番外編でやってほしいモノやネタなど提供してくれると嬉しいです。

## 死神の見る夢

「ごめんね、デュオ。手伝ってもらっちゃって」

「気にすんなよ、シャル。丁度暇してたところだったからな」

放課後の廊下、赤い夕日が差し込む中デュオとシャルロットは並んで歩いていた。ふたりは今月の学校行事である臨海学校について書かれているプリントを持っている。

「暇してたって……。今日はラウラ達と遊びに行くはずだったんでしょ？」

「あゝその事か……。いいんだよ、第一お前がいなくちゃ行ってもつまんねえからな」

「ふえ？」

「ま、好きな奴と長く一緒にいたいってことだな」

そういつてデュオはシャルロットの頭を優しく撫でた。その顔を若干赤く見えるのは差し込んだ夕日の所為だけではないようにみえた。

「そ、それって、幼馴染として／＼？それとも／＼／＼」

「おいおい、野暮なこと聞くなよ。もちろんこっちの意味で、だ・・・」

そういつてデュオはシャルロットの顎をクイツと持ち上げるとシャルロットを見つめてきた。

「デュオ・・・」

「シャルロット・・・」

二人だけしかいない廊下で見つめ合う二人。段々と近づいて来るデュオの顔。覚悟し目を瞑るシャルロット。そして・・・

「あ、れ……」

ぼーっとした頭で状況を確認した。場所はIS学園一年学生寮の自室。時刻は早朝六時半、廊下でもなければ夕日も差し込んでいない。

「……」

シャルロットはまだはつきりしない意識のままだったが、数回まばたきをしたところでやっと意識が覚醒した。

「夢……」

はああ……と深く深くその深さは深海二万マイルを軽く超えそうなほどのため息だった。

（ああ、せめてあと十秒くらいみていれば……）

それでも夢の名残かシャルロットは先ほどまで見ていた夢を脳内でリプレイした。その瞬間彼女の顔がボンツと爆発したように赤くなつた。

（が、学校の廊下でやるなんて……）

胸に手を当てて早鐘のようになる鼓動を確かめながらシャルロットはある事に気付いた。

（いや、大体デュオは僕の事をシャルロットなんて呼ばないよね……）

そう、そもそもデュオは彼女の事を『シャルロット』とは呼ばない。呼んだとしても社交場の時やふざけて呼ぶ位だし、昔は呼んでいたが長いので『シャル』と親しみを込めた、彼だけが呼んでいいあだ名だ。

「あれ？」

ふと、隣を見たシャルロットは寝ているはずのルームメイトがいな  
い事に気がついた。自分が女だと明かしたあの後、デュオとは別の  
部屋になり今はラウラと一緒に部屋だ。しかし、わかっていても隣  
に寝ていたデュオの姿を求めて隣のベットを見たがそこにはデュオ  
はもちろんラウラの姿もない。それも最初っからベットを使った  
形跡がない。

「……まあ、いいか」

それよりも夢の続きである。今すぐ寝付けばもしかしたら夢の続き  
が見れるかもしれない。そう考えたシャルロットはもう一度横にな  
った。

（でもせつかく夢なら、もうちょっとエツちな内容でも僕は全然構  
わな　　）

そこまで考えた瞬間、シャルロットは湯気が出るほど顔を赤くして  
なんとか高鳴る鼓動を沈めようと努力した。

ヒュオオオオオオオ……！！

（風の……音……？）

おかしい、自分は昨日寝るとき戸締りはちゃんとした。エジプトに  
住んでいたので大抵の暑さには体が慣れている。なので日本の夏の  
暑さぐらいで窓を開ける必要もない。しかし、何故かその風の音は  
とても優しい風の音だ。

「……どこだこころ？」

目が覚めるとそこは一面草原だった。蒼い空に若草の生い茂る草原、いくら自分が仕事で世界中を飛び回っていたとしてもこんな場所、自分は見た事はない。

「ん？」

気配がして後ろを振り返るとそこには自分以外の人がいた。しかしその格好はその場に似つかわしくなかった。自分と同じ全身黒ずくめで黒いフードに隠された顔は髑髏の様な仮面をしその手には巨大な鎌をもっていた。その姿はまるで……

「おいおい、死神が死神を迎えに来たのか？」

軽口を叩いたが何時でも戦えるように全身に力を入れたが、直ぐに止めた。なんとというか彼？彼女？まあ、どっちでもいいか、とにかくコイツからは殺気はおるか敵意すら感じなかった。むしろどこか懐かしいような、いつも一緒にいるような感じがする……

「、、、」

死神が何かを喋っている。しかし、まるで壊れたラジオの様によく聞こえなかった。

「ん？何を言ってるんだ？」

「……」

すると死神は仮面越しでもわかるぐらい悲しんでいた。なぜだが、自分はコイツが悲しむ姿を見たくなかった。

「なあ、んな悲しまないでくれよ」

そういつて、死神に手を伸ばそうとした時、

ゴウツ！！！！

突然、後ろから突風が吹き何事かと思い後ろを振り返ったがそこには何もなく、そして死神の方に視線を戻したら、そこには死神はいなかった。

「あり？」

不思議に思ってたあたりを見渡してもどこにもいなかった。そして……

「ん．．．ゆ、め．．．?」

窓から朝日が差し込み俺は目を覚ました。

「ふあゝあ。ったく．．．何だっただ、あの夢？」

今まで見た事はないし、何より現実味に欠けていた。ってまあ、夢なんだから当たり前なんだが．．．

「あいつ．．．なんだっただ？」

あの死神は一体何だったのだろうか？禍々しいかったが、でもどこか懐かしく優しい雰囲気だったあの死神は．．．

「んゝやっぱあれは死期を現わしてんのか？でも、なんか懐かしいっていうか．．．あー!!!もうっ!わけわかんねー!!!」

バリバリと頭を搔きながらベットから出ようと手をおいたとき．．．  
ふにゆ．．．

「ん？」

布団にしては柔らかすぎる感触が手に伝わってきた。それになんか生温かい。

「．．．．．」

手のおいてあるところを見るとやけに膨らんでるし．．．  
バツッと布団をはぎとると、そこには．．．

「ら、ラウラー!!!またためえかー!!!」

ドイツ代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒが丸まって横になっていた。何故か全裸で．．．

「ていうか、何で全裸!?せめてなんか着るよ!!!?」

唯一大事な所はラウラの長い銀髪で隠されているがちょっとでもずらしたら見えてしまいそうだ．．．

「ん……。なんだ……。朝か……？」

「ば、バカ野郎！何か隠せよ！！」

「おかしいことを言う。夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ」

「それは意味が違うし、なにより俺達は結婚していないから夫婦には  
って違うわ！服を着ろ！服を！！」

先ほどまでの夢の内容なんてぶっ飛び、今は目の前のコイツをどう  
するかで一杯だ。

「日本ではこういう起こし方が一般的だと聞いたぞ。将来的に結ば  
れる者同士の定番だ」

「誰がその間違った日本を教えやがったのわっ！？ていうか、俺の  
人生設計にお前と結ばれる事ははいっいえねえよ！？」

「安心しろ、今書きかえられた」

「えー」

俺の人生がラウラによって書き換えられました。

「しかし効果はてきめんだったようだな」

「あん？」

「目が覚めただろう」

「お陰さまでね！お陰で別の所までおきそうだわっ！？」

「ん？どれどれ……」

「止める！ズボンに手をかけるな！この小説が崩壊しちまうだろう  
が！！」

「ええい、大人しく私に貞操を差し出せ！！」

「女の子がそんなこと言っちゃダメ！肉食系女子は一人で十分だ！

！」

そういつてベットから飛びのきラウラと距離をとる。

「フツそれでこそ嫁だ！」

「せめて、服着ろや！？それでもなかったら下着でもいいからさ！」

その後、死闘の末なんとかラウラに服を着せることには成功したが、  
俺が着せる羽目になり理性と本能の狭間に苦しむ事になった。

「よお・・・一夏・・・」

「ん？デユオ、おはよ・・・って、どうした！？朝なのにそんな疲れた顔して!？」

あのトラブルから解放されたデユオはそのままラウラと共に食堂に向かいそこで一夏達にあつた。

「なあゝに、ちよつと猫と格闘をしてな・・・」

「は？」

疲れた様に笑うデユオに一夏は訳がわからないといった風に聞き返すがデユオは笑うだけで答えようとしない。

「まつたく、だらしがないぞ。それでも私の嫁か？」

「誰の所為でこんな疲れてると思つてやがる!？」

「？」

「なに不思議そうに首をかしげてる！！お前だよ！お・ま・え！！」

「なに？そうなのか？」

「朝の事はスルーか！？スルーなのか!？」

ボケるラウラにツツコミをいれるデユオ。この二人は漫才界の希望の星になれるかもしれぬ。

「わああつ！！ち、遅刻つ・・・遅刻するつ・・・!」

デユオ達が漫才を繰り広げている中、バタバタと慌ただしくシャルロットが食堂に駆け込んできた。

「ん？ああ、シャルか・・・。おはよつす」

「でゆ、デユオ。お、おはよう」

ラウラとの漫才がやつと沈静化したのか、シャルに気付いたデユオが自分の隣が開いている事をアピールしながら手招きをした。

「どうしたんだ？昔つから時間にしつかりしていたお前がこんなに

遅いなんて、風邪でも引いたか？」

「へっ！？う、ううん……。ち、違うよ。ちよつと……。その、寝坊……」

「寝坊？お前がか？珍しい事もあるんだな。明日は雨が霰か？」

「デュオ、その言い方は失礼だよ。その、二度寝しちゃって……。なに、二度寝？ますます珍しい。今日は雪か槍か？」

そういつてデュオは本気で今日の天気を気にし始めた。それぐらい彼にとって彼女が二度寝なんてするのが珍しかったのだ。

「う〜酷いよデュオ……」

「つてんな目で見んなよ。冗談だよ冗談」

顔を真っ赤にしながら涙目で上目遣いで見てくるシャルロットにデュオは内心ドギマギしながら両手をあげて降参のポーズをとった。

「しっかし、なんというか……」

「ん？ど、どうしたのデュオ／／？そんなに見つめられると恥ずかしいよ／／」

「い、いや、徐々に女の子らしい格好のシャルを見たからなくなんというか懐か　　ってあだっ！？ら、ラウラ！？てめっいきなり足を踏むんじゃねえよ！！？」

「フン！」

シャルロットを褒めるデュオが気に入らなかつたのかラウラはデュオの脚を踏みつけ食器を片づけそのまま食堂から出て行ってしまった。

それと同時に……

「うおっ！？今の予鈴じゃねえか！」

「うわぁ！ホントだー！！」

慌てて食器を片づけに行くが一夏達はすでに終わっていたらしく「お先に」と言い残し早々と食堂を後にした。

「ヤバいぞ、シャル！今日は姉御のSHRだ！」

そういつて死ぬ気で走り昇降口で内履きに履き替え、これでは時間的に間に合わないと考えたデュオは、

「シャル、近道するぞ！」

「ひゃつ!? でゆ、デュオっ／／!? そっちは教室とは逆方向だよ！」

デュオは内履きに履き替えたシャルをお姫様抱っこしあろうことがそのまま昇降口を出て外に出た。

「わかつてるって! だから」

「え？」

デュオは壁に足をかけると

「こっすんだよ！」

「ひゃあああつ!?!」

校舎の壁の僅かな凸凹に足をかけながら壁登りをしたのだ。

「黙ってる! 舌かむぞ!!」

「う、うん／／／／／／」

そして、窓の手すりに手をかけると運よく窓が開いておりそのまま中に飛び込んだ。

「ふ、セーフだな。シャル？」

無事に教室に辿り着き、なお且つ本鈴にもギリギリ間に合った。多少クラスの視線は感じるがまあ慣れていたのでシャルに笑いかけるが、

「アウトだ馬鹿者」

底冷えするような低い声が背中聞こえてきた。心なしか教室の気温が低くなり、季節は夏なのに寒気がする。

（あつれ〜おかしいな。なんか姉御の声が聞こえる・・・）

「わたしが声をかけているのに無視するとはいい度胸だな、マックスウェル。それに教師である私の前で堂々と校則を破るとは・・・流石が学年一の問題児だな」

「申し訳ありません、姉御、もとい織斑先生」

怒気が強くなりデュオは速攻で土下座した。その速さ神速の如し・・・

その後、一年一組に打撃音が二つ鳴り響いたのは言うまでもないだ

ろっ……

「くっそ〜姉御め。人の頭叩いてそのうえ教室掃除とか……」

「しょうがないよ、デュオ。元々遅刻した上にあんなことやっちゃったんだから」

放課後、デュオとシャルロットは遅刻した罰として教室掃除をやらされていた。

「でもよ、シャル。お前まで付き合わなくていいんだぜ？元々校則破ったのは俺なんだし」

「うっん、どの道僕もあのまま行けば遅刻だったし……。……。……。それにデュオと二人つきりでいたかったから……。」

「ん？なんかいったか、シャル？」

「な、何でもないよ／＼／＼！！？」

後半は小声で言ったためデュオの方には聞こえずシャルロットは慌てて取り繕い机を運ぼうとした。

「ん、ん〜！……お、重い……。」

「ばっか、シャル。こういうのは男の俺に任せとけって」

「だ、大丈夫だよ。これでも専用機持ちなんだから、体力は人並みに」

そう言っただけで言葉を続けたシャルロットだが机の重量に負け足を滑らしてしまった。

「おっと、大丈夫か？だから言っただけ、こういうのは俺に任せろって」

「う、うん。ありがとう……。」

後ろから抱きとめるような格好になり、それに気付いたシャルロットは顔を赤くしながら視線を泳がせた。

「つと、悪いな、シャル」

「あつ……」

離れたデュオにシャルロットは名残惜しそうな声をあげたが、デュオは不思議そうにシャルロットをみた。

「な、何でもないよ」

「そっか、んじゃ後は俺に任せろ」

そういつてデュオはシャルが運ぼうとしていた机を持ち上げ、運び出した。

(わ〜ど、どうしよう！よ、よく考えたら今朝見た夢とシチュエーションが似てる／＼)

夕焼けの空、誰もいない教室、二人つきり、場所と状況は違うが二人つきりというシチュエーションにシャルロットの心臓は早鐘の様に鳴り響いた。

(ど、どうしよ……。何か喋らないと……。うう、でも言葉が出ないし話題といっても昔の思い出とかだし……)

「ああ、そうだ。シャル」

「ひゃいつ!？」

考え事をしていたシャルロットはデュオが話しかけてきた事に裏返った声を出してしまう。

「プツクククク……」

「ああ、酷いいよ、デュオ！そんなに笑うなんて！」

「ククク、わ、悪い悪い。いやでも中々可愛い声だったぜ？」

「か、可愛い／＼!？つてそんなニヤケ顔で言っても嬉しくないよ！」

『可愛い』の一言にシャルロットは一瞬顔を赤くしたがデュオの意地の悪い笑みを見て今度は羞恥で顔を赤くした。

「ははっ！悪かったって、詫びに明日付き合ってくれ」

「へ?」

突然のデュオからの誘いにシャルロットはまた変な声をあげてしまった。

「そ、それって／＼／」

「いやよ、寝坊したお前が悪いとは言え、罰則を喰らったのは俺の所為だしな。それにお前、この町の地理詳しく把握してないだろ？道案内も兼ねてな。まあ、いい様によつてはデートだな」

「で、デート／＼／＼！？」

『デート』という単語にシャルロットは爆発したように顔を真っ赤にした。

「あり？やっぱ日曜は都合が悪いか？なんなら別の日でも」

「そ、そんな事はないよ！全然！！」

「そ、そうか。それならいいんだけどよ」

鬼気迫る様なシャルロットに押されデュオは押し黙った。

「それじゃあ、待ち合わせと時間は明日伝えるぜ」

「う、うん！そ、それじゃあ、いこつか／＼／＼？」

そして二人は掃除を終え教室を後にした。

しかし、二人は気付かなかった。このデートがある銀髪軍人の耳に入っていた事に・・・

## 死神の見る夢（後書き）

・ 次回はシャルロットとデーン！しかしやっぱりタダではないか  
・

死神と休日（臨海学校準備編）

「おーシャル。悪いな遅れちまってよ」

「う、うん。いいよ、僕も今来たところだから／＼」

「ん？そうなのか？」

そう言っただユオはシャルロットの服装に目をやった。夏によく似合うホワイトブラウス、その下にはスカートと同じライトグレーのタンクトップを着ている。ふんわりとしたティアドスカー트는その短さもあって、彼女の健康的な脚線美を十二分に引き立てている。「えっと、デユオ？どこか変かな？」

「ん？いやいや、んなことねあって。似合ってるし、可愛いぜ？」

「か、かか可愛いっ／＼！？ほ、本当っ／＼！？」

可愛いというデユオの言葉にシャルロットは顔を真っ赤に染め潤んだ目でデユオに聞き返す。

「ウソ言っただうすんだよ。本当、本当」

そういって、デユオは優しく彼女の頭をなでるとシャルロットはとても気持ちよさそうに目を細めた。

「さて、早速いこうぜ？ついでに臨海学校に必要なもんも買い揃えちまおうぜ」

「う、うん！・・・あっ」

「ん、どうした？」

背を向けて歩こうとしたデユオはシャルロットの声に気付き振り返るが彼女はもじもじとデユオの手と自分の手に視線を行ったり来たりしているだけであった。

「？・・・ああっ！」

最初は不思議そうに見ていたデユオであったがその意図に気付きシャルロットに向き直り、

「お手をどうぞ、お姫様？」

「う、うん／＼／＼」

芝居がかかった仕草で右手を差し出すとシャルロットは顔を真っ赤にしながらデュオの手を取り、そのまま手をつないで二人は歩いていった。

そんな二人を見つめる者たちがいた。

「うわ〜デュオの奴、かなりやるじゃない」

「そうですね。一夏さんもアレぐらい見習って貰わないといけませんわ」

「ん？なんでだ？」

「はあ〜」

「お前達、喧しいぞ。デュオに気付かれるではないか」

物陰に隠れた怪しい集団、もといストーカー集団が楽しそうに手をつないで歩いているデュオとシャルロットに視線を向けていた。

「ていうか、何で尾行なんかしてるんだ？」

「昨日、デュオがシャルロットをデートに誘った。故に尾行をしている」

心底不思議そうな顔をしている一夏にラウラは簡潔に答えた。

「いや、だから何で尾行なんかするんだ？デートってタダの買い物だろ？」

「はあ〜一夏。あんたは何もわかってないわね・・・」

「本当ですわね・・・」

「ムツなんだよ？」

鈴音とセシリアのバカにしたような口調に一夏は二人を睨みつけるが二人は無視し、ラウラに並んだ。

「それで、ラウラ。これからどうすんの？」

「うむ、まずはあの二人の動向を探り情報収集だ」

「なるほどそれで二人の関係の状態を見極めるのですね」

「夏は追跡トリオに若干戦慄しながらふと、ある事に気付いた。

「なあ、鈴とセシリアは何時の間にラウラと仲直りしたんだ？」

そう、以前の一件があつてこの三人は険悪な雰囲気だったはずだ。

なのに今は肩を並べて話すほど仲が直っている。

「ああ、それ？まあ、正直あの時の事は確かにムカついてるけど、

それとこれとは別よ」

「そうですね。相手は違えど女性として恋する者は手助けしたく

なっただけですわ」

うんうんと頷いている鈴音に対しラウラは若干頬を染めながら恥ず

かしそうに俯いた。

「へ？だれが？」

「……はあ」「……」

あまりの一夏の朴念仁ぶりに鈴音とセシリアだけでなくラウラまで

ため息をついてしまった。

「？どうしたんだ三人とも？」

「……なんでもない（わ）（ですわ）」「……」

「……？」

「それより、いくぞ。このままでは見失ってしまう」

こうして追跡者たちはデュオ達の後をつけていった。

「さつて、大体こんな所でいいか。シャル、お前は水着はもう買ったのか？」

「え？ううん、買ってないよ？」

俺は依然千冬と一緒に買い物に来たショッピングモール『レゾナン

ス」の二階に来ていた。とりあえず、シャルに駅とくつついているこのショッピングモールを教えて、二階で水着を買う事にした。

「それじゃあ、一緒に買うか」

「え……？そ、それって……デュオは……その……僕の水着姿……見たいの？」

「ん？まあ、そうだな。一緒に泳ぐのって何気に初めてだしな。丁度いいから泳ごうぜ？」

「そ、そうだね。じゃあ、新しいの買っちゃおうかな」

シャルが見つないだ手に力を込め、シャルは何度も頷いた。

「それじゃあ、ここで別れるか。水着は男子と女子で別れてるしな」

「あつ……」

つないでいた手を離し、男性の水着売り場に行こうとするとシャルは残念そうな声をあげた。名残惜しそうに自分の手を見てくるシャルに俺は、首を傾げた。

「どうした、シャル？」

「あつ、ううん。何でもないよ」

そうは言うが全然何でもない様には見えない。

(あゝそういう事が……)

シャルの仕草の意図に気付いた俺はシャルに背を向けながら、

「男の水着ってのは案外早く決まるからよ、買ったならそっちの水着も見てやるからそれまで我慢しろ」

「あ……うんっ!!」

そういつて俺は男性用の水着売り場に行き、水着を物色するがやはりというべきか、トランクスタイルの黒い水着(髑髏がワンポイント)に決まり会計を済ませて、シャルが待っているであろう女性用の水着売り場に行くと、案の定シャルが水着売り場の前で待っていた。

「悪いな、シャル。待たせちまったか？」

「う、ううん。全然、そんな事無いよ」

「そっか、じゃあ入ろうぜ？」

そう言つて、シャルの手を引いて女性用の水着売り場に入るととても素敵な光景が目の前に広がった。俺は訳もなくこの素晴らしい光景をみてドキドキが止まらな イタツ！

「デュオ？見とれてないで速くいこ？」

「了解です、シャル様。あの、だから、抓るのを止めてはくれませんか？」

「何か言つたかな？女性の水着で興奮するデュオ？」

「あ、いえ、何でもないつす。ごめんなさい・・・」

今思うがISが普及しなくても普通に女は男より強いのではないか・・・？

そうして、いつの間にか俺は水着を持ったシャルと共に試着室に入つていた つて!？

「ちよつとまで！おま、何時の間に俺は試着室なんかに!？」

「デュオ、大声出さないでよ。水着選んでくれるんでしょ？」

「いや、そうは言つたが何で俺まで試着室に入つてんだよ？そんな嬉しはずかしイベントは非常にうれし じゃなくつてけしからんぞつ!？」

「大丈夫だよ、時間はかからないから」

「そういう問題じゃ」

そういうがシャルは服に手をかけたので俺は慌ててシャルに背中を向けた。それと同時に服を脱ぐ衣擦れの音が聞こえ、女性特有の甘い香りがした。

（こ、これは！い、いくらなんでもヤバくねえか!？こんな所誰かに見られたら・・・マズイ!！ああ、でも！後ろを向いたら天国が!！いや、落ち着けデュオ!いくら幼馴染といつてもシャルは年頃の女の子!そして、俺は健全な思春期真っ盛りの男子!何ら問題はない つて俺はいつたい何言つてんだー!!!）

そうして理性と本能がせめぎ合つて（本能が圧倒的に勝っているが・・・）悶えていると、

「い、いいよ・・・」

「お、おう……」

もう着替え終わったのを確認し、嬉しいような悲しい様なそんな感情に陥っている中後ろを振り向くと……

「……………」

「……………」

ハッ!?一瞬意識が飛ばされちまったぜ。それにしても

密閉空間で二人つきり、生着替え、水着お披露目と三連コンボをした後の止めがこれか……

(シャル……成長したな。嬉しくて涙が出ちまうぜ……)

セパレートとワンピースの中間の様な水着、色は夏を意識した鮮やかなイエロー。しかも正面は胸をの谷間を強調するような作りになっている。それはもろに俺の

「あ、あの、一応もう一つもあつて」

「いや!それにしろ!!寧ろしてください!!」

土下座張りの勢いで頭を下げた。それは、もろに俺のハートを撃ち抜いた。

「じゃ、じゃあ、これにするね」

「お、おう。じゃあ俺は出てるからな」

そう言つて再び着替えが始まる前に試着室から出ようとドアを開けると、

「え?」

「えつ?」

「ええつ?」

なんとドアを開けると目の前に一組副担任山田真耶先生が、そしてその後ろに担任の姉御 織斑千冬先生がいた。

「…………とりあえず、デュオ。歯を食いしばれ」

千冬の拳が俺の顔面に当たるのとパニックに陥った山田先生の悲鳴がこだましたのはほぼ同時であった。



死神と休日（臨海学校準備編）（後書き）

今回は短めです。

死神と臨海学校、その一／臨海学校前夜に不穏な影／（前書き）

最近スランプ気味・・・

## 死神と臨海学校、その一／臨海学校前夜に不穏な影

「はあ、水着を買いにですか。でも、試着室に二人で入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「お、仰るとおりです」

「す、すみません」

ペコリと頭を下げるシャルに俺も習って殴られた頬を押さえながら頭を下げる。なんか最近謝ることが多い気がすると思えてきた。

「ところで姉御と山田先生はどうしてここに？」

なんとか話題を変えようと何故ここに千冬達がいるのか尋ねた。

「私達も水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくていいですよ」

確かに二人の手にはそれぞれ水着を持っていた。

「ところで、何時までついて着てんだお前ら？」

ギクツツという音が聞こえた様な気がしたが気のせいだろう。

「そろそろ、出てこようかと思ったのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていただけですわ」

「え？そうだったのか？」

柱の陰から一夏に鈴音、セシリアが現れた。しかし、ラウラがいなかった。あれ？

「ラウラの奴はどうしたんだ？てつきり一緒にいるかと思ったんだが・・・」

「あれ？そういえばいないわね」

「どこへいったのかしら・・・？」

「まあ、いねえならいねえでいいや」

アイツなら、放っておいても大丈夫だろうしな〜と考えていると、

「あ、あー。私ちよつと買い忘れた物があるので行ってきます。えーと、場所がわからないので鳳さんとオルコットさん、ついてきて下さい。それに、マックスウェルさんとデュノアさんも」

何かをひらめいた様な顔をした後、山田先生は有無を言わずあつという間に一夏と千冬覗いた俺達を連れていつてしまった。

「山田先生。ちょっと強引だったんじゃないやねっすか？」

「うー。やっぱりそうだったでしょうか？」

水着売り場に織斑姉弟を残しデュオ達は別の水着売り場で買い物をしていた。

「それで、ラウラ？いつまでついてくんだよ？」

「・・・バレていたか」

いい加減に気になったのか、デュオがラウラの隠れている柱の方を向くとラウラが観念したように柱の影から現れた。

「やっぱりラウラも来てたんだ・・・」

「(ま、これじゃデートどころじゃねえか・・・)しょうがねえ、山田先生。飯はもう食いましたか？」

流石にこの人数ではもうデートは無理かと悟りデュオは真耶に質問をした。

「え？いえ、まだですけど・・・」

「なら、これから飯でも食いにいきませんか？俺らも実は飯食ってないんすよ。もちろんラウラ達も一緒ですけど」

「え？」

デュオの突然の申し出に真耶だけでなく後ろにいたセシリア達も聞き返した。

「ま、流石にこのままお開きするのは味気なさすぎるんで、ここはひとつ元代表候補生である先生の経験談なんかを聞こうと思ってね。だめっすか？」

「ええ！いいいえ、ダメという訳では・・・」

「そういう訳だ、お前らもどうだ？飯ぐらい奢ってやるし、一夏の

愚痴や相談ごとぐらい聞いてやるよ」

「乗った（りましたわ）！！」

奢るといふ言葉に鈴音とセシリアはにべもなく了承した。

「ていうことで、悪いなシャル。この埋め合わせはちゃんとするか  
らさ」

「もーしょうがないな、デュオは。・・・約束だよ？」

デュオはシャルの方向に直ると申し訳なさそうに謝るとシャル口  
ツトはしょうがなしという風に腰に手をあて納得した。

「ほら、ラウラも。どうせ飯食ってねえんだろ？ちゃっちゃと行こ  
うぜ？」

「あ・・・」

そういつてデュオはラウラの手を引いて一緒に歩く。その様子を見  
ていたシャルロットは、

「むー」

「ん？つとシャル？」

「ラウラだけズルイ」

空いているデュオの手を握り口をとがらせていた。

「ムツなにを言う。シャルロットだって先ほど手をつないでいたで  
はないか。次は私の番だ」

「うー。でもなんかズルイ」

自分はアピールしないと気付かなかったのに対しラウラには自然と  
手をつないだ。そのことがシャルロットには不満であった。

「はいはい。お前からこれから飯食いに行くんだから睨みあうなって。  
可愛い顔が台無しだぜ？」

「え、あう／＼／」

「か、可愛い／＼／」

デュオの『可愛い』発言に二人は顔を真っ赤にしまい俯いてし  
まった。

「それじゃあ、先生達が待ってるしいきますか」

そういつてデュオは二人の手を引いて先を歩いている真耶達の元に

向かった。

結局この後、皆で食事を済ませた後流れ的に解散してしまった。

その夜

「ふ〜さつぱりしたぜ〜。ん？メールだ」

シャワールームから出たデュオは髪を乾かしながらパソコンにメールが届いていたことに気付いた。

「なにになに・・・『やつほ〜牧師〜 元気してた〜？』ってウサギじゃねえか」

メールの差出人はハッカー仲間のHNは『美少女ウサギ』だ。

「『暇だったらいつもの場所で今からチャットできない？待ってるから〜』ってそういえば最近やってなかったけ？」

因みに『牧師』とはデュオ自身のHNで本当は『死神牧師』だ。ここ最近デュオは何かと忙しかったのでウサギとは中々（ネット）会うことが出来なかった。そしていつもの場所とは自分達が隠れ蓑とするサイトのチャットである。

「どれどれ・・・っといいたいた」

早速デュオはウサギのいるサイトに入ると既にウサギはログインしていた。

『やつほ〜牧師。久しぶり過ぎてウサギちゃん嬉しくて涙が出ちゃう〜』

『よくいうぜ。そう言いながら色々な所にちよっかい出したくせに・  
』

『うやっ (+ | +) !? なんだばれてたのか』

『まゝな。それで何の用だよ? お前が俺に直接メールすんなんて  
余程のことがない限りないだろ?』

デュオとこのウサギはある事件から共にハッキングをして、亡国企  
業スケの情報を探っている。エジプトでのデュオに情報を送ってくれる  
のは大概彼女である。

『うん。ユーレイくん達がまた何かやるみたいなんだよ』

「なに?」

かきこまれた文章にデュオは驚愕した。

『それに確証はないけど、『ロームフェラ財団』も動き出したみた  
い』

『ロームフェラ財団』とは世界各国の有数の貴族がおり、格式や伝  
統を重んじており世界経済の中心を担っていた。

『あの財団がか? でも、あの財団は近いうちに解体されるはずじゃ  
なかったのか?』

そう、ISの普及により貴族主義であった財団はその波に乗れず自  
然解体されるはずであった。

『そうなんだけど……。最近新しく財団の当主が代わったの。』

その当主の力で財団は失っていた力を取り戻しつつある』

『新しい当主? そいつの名前は?』

『当主の名は『トレーズ・クシュリナーダ』。若いながらもその統  
率力とカリスマでもものすごい勢いで人脈を広げてる』

(『トレーズ・クシュリナーダ』? 聞かない名だし、財団の名簿に  
そんな名前なかったはずだ……)

(なるほど……。そいつが財団の切り札ってわけだな)

『わかった。こっちもそいつに探りを入れて見るわ』

『んゝわたしも色々調べて見るゝ……。おっと、もうこんな時間  
それじゃあ、牧師、ばいばいきゝん』

「バイキンマンかよ・・・」

『P、S近々私も外にでるから、もしかしたら会えるかもね？』  
そのメッセージを最後にウサギはログアウトした。

「会えるかもって、顔しらねえじゃん」

（まあ、アイツなら普通に会うかもしれないけど、流石に臨海学校中には会わないだろ）

そう考えながらデュオもログアウトしパソコンの電源を落とした。

「さって、明日も早いし寝るとするか」

そうしてデュオは眠りについた。

そして臨海学校が幕を開けた。そこでデュオは予期せぬ再会をするのだが、今はまだ誰も知らない・・・

死神と臨海学校、その一／臨海学校前夜に不穏な影／（後書き）

うん。やっぱりラウラフラグは立てるべきではなかったかな？  
今になって後悔している自分がある・・・のかな？

死神小話第二話 時系列はバラバラです (前書き)

今回は三本立てです。

## 死神小話第二話 時系列はバラバラです

デュオを治療した後のその後の千冬・・・

「まったくアイツは・・・痛いと言ええばいい物を言えないのは相も変わらずか・・・」

デュオが保健室から出ていったのを見て、千冬はため息を吐きながらも昔と変わらない彼に若干嬉しそうだった。

（それにしても、遠目で見ていてもデュオは引き締まった体をしていたな・・・）

そう、一見体が細い様な体をしていたデュオはその実かなり引き締まっていた。まあ、彼はULTIMATEで幼い頃から肉体作りをしていたから当然といえば当然だが・・・

（最後にあつた時はまだ少し子供っぽさが残っていたからな、今は大分大人びてきたし、これならいつか私を

「守って欲し

「そこまで考えた瞬間千冬の顔が真っ赤に染まった。

（な、なにを考えているんだ私は／／／！！？か、仮にもアイツは弟子の様なものだぞ！？そ、そそそそれなのに、まままま守ってほしいなどと／／／）

そこまで考えて、ふとISを起動したデュオが同じくISを起動した自分と背中合わせに笑い合っているビジョンが生まれた。

（け、結構いいかもしれん／／／・・・ハッ！？）

「ち、違う！違うんだー！！！」

頭を抱え顔を真っ赤にしながら悶える千冬はこの後、彼女を呼びに来た真耶が来るまで悶えていたという。

死神VS新聞部

放課後一夏達はいつものようにIS訓練をしようとアリーナに向かう途中、

「むっ！」

「?どうした、デュオ？」

何時ものメンバー（一夏、デュオ、篝、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ）でアリーナに向かう途中、突然デュオが何かを感じたらしくバツと身構えた。

「このプレッシャーは・・・」

「どうしたのデュオ？」

深刻な顔をしたデュオにシャルロットは心配そうに覗いて来るがデュオは何もない廊下を凝視したまま答えなかった。

「どうしたというのだ？」

流石にラウラも心配になってきたのかシャルロットと同じように顔を覗き込んだ。

「あー何時もの奴らね」

「ほんと、懲りないよなー」

一夏と鈴音はわかったのか呆れたように笑っている。篝とセシリアも苦笑していた。

「?一夏、デュオは一体どうしたの？」

「何か知っているのか？」

四人の様子にシャルロットとラウラは不思議そうに尋ねてきた。

「ああ、まあ見てればわかるよ」

「?」

一夏の言葉に二人は首をかしげると、

「見つけたわよ、マックスウエル君!!」

すると廊下の曲がり角から以前一夏を取材に来た新聞部副部長黛薫子と他数名の女子が現れた。

「やっぱりか!」

彼女の登場にデュオは後ろに向かって全速前進しようとしたがいつの間にかそこにも数名の女子が待ち受けていた。

「え？え？？」

「なんなんだ、こいつ等は？」

いきなりの状況にシャルロットとラウラは混乱しているが状況はさらに加速する。

「いい加減に諦めたらどうっすか！」

「嫌だね！この程度で諦めちゃあ新聞部の  
いえ、ジャーナリストの名折れ！！そっちこそいい加減諦めて、取材されなさい！！」

「それこそお断りつてんだ！あんたの取材にこたえてある事無いこと書かされちゃたまんねえからな！」

「大丈夫！面白く捏造するから！」

「どこが大丈夫だああ！！！！」

そう叫びデュオは窓を開け飛び降りようとするが、

「フツッ！甘いよ、マックスウエル君！！そのパターンは古いよ！」

「くっ！」

窓の下にも数名の女子が待ち構えていた。

「フツフツフ・・・もう逃げられないよ、マックスウエル君？さあ、大人しく取材されなさい」

すぐく悪い笑みをしながら黛と新聞部の女子は徐々にデュオに距離をつめてくる。

「しょうがねえ、この手は使いたくはなかったが・・・」

そういつてデュオは何やら制服の内ポケットをごそごそしだすと、

「あばよ、とつつぁん！！」

ポウッ！！

「な！？」

「え、煙幕！？ゲホッ！ゲホッ！」

床に煙幕を叩きつけ視界が真っ白に染まり黛達だけでなく一夏達にまで被害が及んだ。

「ゲホツ！ゲホツ！……って、ああー！ー！またいなくなってる！！」  
煙が晴れた後、視界が戻るとそこにはやはりデュオの姿が無くなっていた。

「くうっ！今日こそはと思っていたとに……皆、探すわよ！！」  
「……はい！！」「……」

そういつて彼女達はその場を後にした。

「えーと、一夏？今のって……？」

今一状況が飲み込めなかつたらしくシャルロットが一夏に尋ねて。

「ん？ああ。以前デュオが新聞部の取材をトンズらして逃げたんだよ。それでその時の新聞部の人が対抗意識を燃やしちまってな。それ以来、ああしてデュオを捕まえようとしているわけ」

「そ、それは、なんていうか……」

一夏の説明にシャルロットは何とも言えなくなり苦笑し、ラウラは何かを思いついたのか新聞部の去った方に歩きだした。

「ちよっと、ラウラ。何処へいくのよ」

「決まっている」

鈴の質問にラウラは胸を張りながらこう答えた。

「我が嫁を助けに行く」

「一応聞きますが、どういった手段ですか？」

嫌な予感がしたのでらう、セシリアはわかつてはいるが聞かなければならなかった。

「なに、嫁はアイツ等に困っているのだらう。ならば簡単な事だ、アイツ等を殲滅する」

「……アウトロー……！！」「……」

「な、なぜだ！？」

ISを展開して宣言したラウラにその場にいた全員が反対し、ラウラは訳がわからず理由を聞くが、

「何故も何もそれは流石にヤバいって！」

「そうだよ、ラウラ！それにそんな事したらデュオも怒っちゃう

つて!!」

「むう……」

「夏とシャルロットのデュオに怒られるの一言にラウラは思いとどまる。流石にデュオに怒られるような事をしたくはないらしい……」

「それに、そんな事をしなくても大丈夫だろう」

「何故だ？」

箒の言葉に疑問を持ち尋ねるが、すぐさま答えが出た。

「なにをやっているか、貴様ら——!!!!」

廊下中に千冬の怒声が響き渡った。

「な？」

「う、うむ……」

「夏の言葉と偶に聞こえる悲鳴にラウラは戦々恐々しながら頷いた。すると……」

「マックスウエル!またお前か——!!!!」

「ひい——!!今回は俺の所為じゃないっすよ——!!!!」

「黙れ!校内で煙玉を使っただろっがっ!!!!」

「何故それをつ!?!あ、や、まっ」

ギヤア——!!!!!!!!!!

「……………」  
響き渡るデュオの断末魔にその場にいた六人は、ある者は黙祷をさ  
さげ、またある者は十字を切った。

その後、食堂で『反省中』と書かれた札を首から下げて正座してい  
るボロボロな男子生徒と女子生徒数名がいたそうなの……

甘えるシャルロットつてめっちゃ可愛いよね……

「ふい〜さっぱりしたぜ〜」

「あ、おかえりデュオ」

風呂から上がった後、デュオは部屋に戻ると笑顔のシャルが出迎え  
てきた。

「おう、カトルとはもういいのか？」

「うん、もう大丈夫だよ」

「そっか……」

シャルの言葉にデュオは素っ気なく答えるとそのままベットに座り  
込みタナトスの整備を始めた。

（『彼が戻ってきたら、いっぱい彼に甘えるといいですよ。そうし

たらデュオの機嫌も直ります』( )

シャルはカトルの言った言葉を胸の奥で何度も反復し、やがて決心がつくとデュオの背後に回り込み、そして・・・

「えいつ！」

「うわっ!？」

抱きついた。

「シャ、シャルノノ!? な、なんだ!? どうしたってんだノノノノ!?」

いきなりの事でデュオは混乱しながらも後ろを向きシャルに聞いた  
さすが若干顔が赤い。

( や、柔かい胸の感触がー！ー！ー！ほんのり香るいい匂いも何とも言えな ハッ!? 変態か俺は!?!? )

シャルから感じる女性特有の柔かさと香りにデュオは顔を真っ赤にしながらか、悶えていた。

「あのね、デュオ・・・」

「な、なななななんだノノノ!?」

シャルが喋るたびに吐息がデュオの耳を擦り背筋がゾクゾクする。

「今日、とってもカツコよかったよノノノ」

(ぐっふあっ!?!?)

シャルはとても可愛らしい声と共に抱きつく力を強めデュオの背中に顔をうずめてきて、デュオは心の中で吐血をした。

「い、いいいや!べ、別に大したことじゃねえ」

「うっん、それからごめんね? 仲間外れみたいなことしちゃって・・・」

「・・・」

「はっ?」

(まてまて、何でいきなり話がそっちに飛ぶんだ?・・・ん? そ  
ういえばさっきシャルはカトルと電話してたんだよな?・・・て

ことは・・・)

「なあ、シャル?」

「ん?なに、デュオ?」



試みようとしたが、

「あゝシャル？そのだな、やっぱり別のに」

「ダメ？」

「もちろんオツケーだ！」

上目使い＋涙目＋甘えるような声〃（対男性用）最終決戦兵器

シャルの三連コンボにデュオは一瞬で撃沈し、一緒に寝ることを承したのであった。

その夜・・・

「~~~~~」

「~~~~~／／／／」

羞恥に震えるデュオの背中に抱きついて嬉しさに震えるシャルがいたそうだ。

余談だが、やはり今回もデュオの理性が勝利した。が、ほとんど一睡もしていないため寝不足になってしまったが・・・

更に余談だが、翌日シャルがシャルロットになる決意をして職員室に行った時、シャルロットが何故か肌につやが出ていた事に真耶は不思議に思ったが気にしなかった。



死神小話第二話〜時系列はバラバラです〜（後書き）

更新が遅くなってすみません。

今月から学校が始まり書く時間があまりとれないので更新が遅くなつてしまいました。多分しばらくは月に一、二回のペースになつてしまいます。

死神と臨海学校、その二丁水着は素晴らしいく(前書き)

やっと本編書けた・・・

死神と臨海学校、その二 水着は素晴らしい

「海っ！見えたあ！！」

バスがトンネルを抜けた時、クラスの女子が窓から見える海を見て声を上げた。今日は臨海学校初日、天候にも恵めて快晴で陽光が海面に反射しキラキラと美しく光り、潮風がとても心地よい。

「おー！やっぱり海を見るとテンション上がるよなあ」

「う、うん？そうだねっ」

一夏は通路を挟んだ隣にいるシャルロットに話を振るが彼女はどうにも上の空だ。シャルロットの隣に座っているデュオは大口を開けて寝ていた。

「???どうしたんだシャルロット？」

「えっ!？な、なんでもないよノノノ?」

そういつてシャルロットは左手首に巻かれたブレスレットを大事そうに撫でていた。

「あれ?そういえばそのブレスレットどうしたんだ？」

「え?こ、これノノノ?これはデュオがプレゼントしてくれた物なんだノノノ」

「へーそうなんだ。アイツがね」

以前までしていなかったブレスレットに気付いた一夏が聞くとシャルロットはとても嬉しそうに答えた。

そう、このブレスレットは先日デートの際にデュオがお詫びのしるしとして買ってあげたものだ。

「羨ましいですね。シャルロットさん・・・」

「ん?セシリア、今なんかいったか？」

「い、いえ、何でもありませんわ・・・」

一夏の隣にいるセシリアは羨ましそうにシャルロットを見ているが一夏はその理由がわからずにいた。

「・・・・・・・・」

「ラウラ、どうかしたのか？」

その後ろの席では箒がさつきから隣で一向に喋らないラウラ、喋らないかと思えば挙動不審になって時折キョロキョロと周囲を見ていて不思議に思い声をかけてきた。

「！？な、なんだ！？なんでもないぞ！なんでもない・・・」

「そ、そうか・・・」

ラウラは箒に声をかけられたことに異様なまでに驚き、今度はブツブツと独り言を呟き始めたので箒は若干引きながらもそれ以上の追及を止めた。

「が～～～～ムニヤムニヤ・・・」

そんな周りの様子など露知らずデュオは鼾をかきながらグースカと寝ていた。

「デュオ、ついたよ。デュオ！」

「んん？ん、ん～～ふあ～あ・・・シャルか・・・オハヨ・・・」

「うん。おはよ、デュオ。ほら、起きて！旅館についたよ！！」

「わかつたって～」

未だ眠そうなデュオをシャルロットは引つ張りながらバスから降りそうとするがデュオ自身あまり動こうとしないので中々進まない。

「パァン！！」

「あだっ！？」

「なにをもたもたしているか」

二人の様子を見ていた千冬が痺れを切らしてデュオの頭に出席簿を炸裂させた。

「つつ～～～！！・・・姉御～もうちっと、優しく起こせないんす

か？」

「ほう・・・例えばどういった様にだ？」

「そりゃあ、姉御のキツスで「一生寝ている」「ごぶあぁ！」

デュオが最後まで言い終わる前に千冬はガゼルパンチをデュオに喰らわせそのままバスを降りた。

「つて〜、姉御〜容赦ないぜ〜」

「デュオ・・・」

「ん？どうした、シャル・・・ル!？」

殴られた個所をさすりながらデュオはシャルロットの方へ振り返ると、夜叉がいた・・・

「ど、どうしたんですか、シャルロットサン？か、顔が怖いですよ〜?」

「・・・デュオ・・・少し頭冷やそうか？」

「へ?・・・いや、ちよつとまで!いや、待つてください!!!お願い、お願いですから・・・!!アアーーーー!!!!?」

バス内にデュオの断末魔が響き渡った。

「いつて〜シャルの奴、少しは加減をしてほしいぜ。危うく死神に会うところだった・・・」

黒化シャルロットさまの降臨によりデュオはボロボロの状態で一夏の隣に立っていた。

「大丈夫かよ、デュオ？」

「この状態の俺を見て大丈夫に見えるか？」

「は、ハハハハっ」

ジト目で問いかけてくるデュオに一夏は目を反らしながら苦笑した。「そういえば俺らの部屋ってどこなんだ？部屋割りにも書いてなかったけど？」

デュオの視線に負けたのか一夏は慌てるように話のすり替えにかかった。

「さあな。大方、ここの従業員とおんなじ部屋なんじゃね？」

「そうなのか？まあ、廊下で寝ろって言われるよりましか」

「ちげえねえ」

「ね、ね、ねー。おりむ〜マック〜」

そういつて二人で笑いあつてるとなんとものほんとした声が二人に声をかけてきた。

「ん？どうした本音？」

声のした方を振り返るとそこには相変わらず眠たそうな顔をした本音が異様に遅い移動速度で二人に歩み寄ってきた。

「マック〜達の部屋ってどこなの〜？一覽に書いてなかったー。遊びに行くから教えて〜」

その質問に周りの女子が一斉に聞き耳を立ててきた。心なしか目が異様に血走って見える・・・

「さ〜な〜俺達も知らされてないし、さっき一夏とも話してたんだがここの従業員と同室なんじゃね？」

周りの視線に一夏は怯みデュオは苦笑しながら周りの視線を受け流して答えた。

「織斑、マックスウエル。お前らの部屋はこつちだ。ついてこい」  
そんな中千冬からの呼び出しがかかった。

「えーっと、織斑先生。俺達の部屋っていったいどこなんでしょうか？」

「黙ってついてこい」

千冬の後ろについていきながら一夏は疑問に思った事を口にしたが千冬はその疑問をバツサリと切り捨てた。綺麗な旅館内を見ていた一夏だが沈黙に耐えられなかったのか隣を歩いているデュオに小声

で話しかけた。

(デュオく助けてくれって・・・なにニヤニヤしてんだ?)

(ん? なにっておまえ、これから天国パラダイスが待ってるって考えただけで嬉しくなるじゃねえか!)

(パラダイス? そりゃあ、夏に海で泳げるのは気持ちいいけどな)。デュオって海は初めてなのか?)

「はあ〜?」

これから来るであろうパラダイスにテンションを上げるデュオは一夏の一言に一気に下がってしまった。

(おいおい! 一夏くんよお! おまえ、それ本気で言ってるのか!? 夏に海っていつたら、女子の水着姿じゃねえか!!)

(はあっ!?! いやいや、まてまて! なんてそうなんだよ!?!)

一夏の問いにデュオは大げさにやれやれと首を振りながら呆れた。

(おいおい、一夏くん? ここを何処だと心得る? 天下のIS学園だぜ?! しかも、生徒全員のレベルが高く、教員は姉御を筆頭に美女揃い!! この状況を黙って見てるのか? 否! 断じて否!! ここで動かずして何が男か!? そうさ! ここで俺達は男になるのさ!!) 力強く力説するデュオに一夏は圧倒されるが彼の後ろを見てその顔が真っ青になった。

「ん? どうした、一夏?」

一夏の様子を変に思ったデュオは一夏に尋ねるが一夏はガクガクと震えた指で後ろを指さした。

「ほう、随分と面白い事を考えているようだな?」

「!?!?!?!?」

全てを凍らせる様な低い声を聞きギギギツ・・・と壊れた口ポツトのように首を回すとイイ笑顔の千冬が出席簿をもって立ち止まっていた。

「デュオ、途中から声に出てたぞ」

「・・・マジ?」

「マジだ」

「丸聞こえだ馬鹿者」  
そして、出席簿が振り下ろされた。

「おおー、すげー！」

あの後、一夏は千冬の一撃により沈んだデュオを引きずりながら自分達に割り振られた部屋に入ると、感嘆の声を上げた。二人部屋だが三人で寝ても十分にお釣りがくる広さに窓一面に広がる海、中々良い部屋だ。

「おい、デュオ！起きろって、凄いで！」

「んんんなんだよ一夏く？・・・っておおっ！？スツゲー！！！」

一夏に揺すられデュオは気だるそうに目を覚ましたが、目の前の光景に直ぐに覚醒し子供のようにはしゃいだ。

「一応、大浴場も使えるが男のお前達は時間交代だ。本来なら男女別になっているが何せ一学年全員だからな。お前達二人のために残りの全員が窮屈な思いをするのはおかしいだろう。よって、一部の時間のみ使用可だ。深夜、早朝に入りたければ部屋を使え」

「わかりました」

「りょーかい」

二人の返事を聞いた後、千冬は続けて、

「それから、今日は一日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ。ただし、はめは外しすぎるなよ？マックスウエル」

「って俺だけ名差しかよ！！？」

「えっと、織斑先生は？」

「スルー！？」

デュオのツツコミを一夏と千冬は無視し、千冬は一夏の質問にフツと苦笑しながら、

「私は他の先生と連絡なり確認なりした後は

まあ、軽く泳

ぐぐらいはしよう。何処かの弟がわざわざ選んでくれたものだから  
な」

「はいはい。ツンデレ、ツンデレ」

「喧しい」

ガツンツ！

「あだっ!？」

余計なひと言を言ったデュオに鉄拳をくらわした後、千冬は真耶に  
呼ばれて部屋を後にした。

「さつて、と……ん？デュオ。早く行こうぜ」

一夏は水着を持って部屋を出ようとするが、デュオが用意もせず海  
を眺めていて動く気配がなかったので声をかけた。

「ん？ああ、俺はもう少し海を見てからいくから先に行っていていいぜ。  
俺も後から行くからよ」

「ん？そっか、わかった。早く来いよ」

「おう」

デュオは一夏を見送るとそのまま視線を海に戻した。

「海、か……本国むくにじゃあ見れない代物だな……ん？」

ヴーヴーヴー……

キラキラと陽の光りに照らされて輝く海を見ながらデュオは感慨に  
耽っている、カトルから極秘のメールが届いた。

「カトルからか……頼んどいた『ロームフェラ』と『トレーズ・  
クシユリナーダ』に関してか」

そういつて、メールの中身を見て見ると公式発表されている物だけ  
でそれ以外はあまり詳しい情報は載っていないかった。

「それにしても、このトレーズって奴はどんだけ規格外だよ。篠  
ノ乃束並みの頭脳に千冬の姉御並みの武術、そして並みの軍人以上  
の戦術眼。俺が言うのもなんだが化け物だなコイツは……。それ  
にしても何だつて最近になってISの部品を調達してんだ？」

送られてきたメールで唯一わかる事はトレーズの規格外なまでの天  
才っぷりとそのトレーズが最近ISの部品を調達している事だけだ。

「それにしても・・・これはマズイか・・・」

トレーズによつて力を取り戻しつつある『ロームフェラ財団』はこのままいくと欧州を確実に自分達の支配下に置く。そうなるトシャルの実家であるデュノア社、セシリアのオルコット家にどういった影響が出るかなんて火を見るより明らかだしな・・・それに、もしそのまま中東にまで手を出すとあっちゃあ・・・)

「一度、探りに入った方がよさそうだな」

そしてデュオはメールの内容を暗記し終わったのでメールを消去し、水着と着替えを持って脱衣所に向かった。

(別にデュノア社がどうなるうが知ったこっちゃねえが・・・)

「だけどな・・・」

そう言葉を紡ぎ正面を向いた時のデュオの目にはある覚悟が宿っていた。

(もし、シャルやカトルに手を出すようなら・・・ロームフェライや、トレーズ・クシュリナーダ・・・)

「生まれてきた事を後悔させてやるよ・・・」

水着に着替え終わり浜辺についたデュオを待っていたのは・・・

「よお、シャル。それと・・・何処のミイラだ？」

水着姿のシャルロットと全身にバスタオルを巻き付けた謎のミイラだった。

「あ、デュオ。遅かったね、探してたんだよ？」

「おう、そうなのか？悪かったな。・・・で、そいつは？」

水着姿のシャルロットを目に焼きつけながら、俺は謎のミイラに不

審な目を向けた。

「え〜と・・・ほら、出てきなつてば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める」

ん？今ものすごく聞き覚えのある声が聞こえた様な・・・まさかコレ、ラウラか？

「ほーら、せつかく水着に着替えたんだから、デュオに見て貰わないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがな・・・」

「もー、そんな事言つてさつきから全然出てこないじゃない。一応僕も手伝つたんだし、見る権利はあると思うけどなあ」

そついやあ、シャルとラウラは同室だったつけ？最初会つた時はあまりいい雰囲気ではなかったけど、今じゃ姉妹見たいみたいに仲がいいよなあ〜

「うーん、ラウラが出てこないなら僕はデュオと一緒に遊びに行こうかなあ。海で一緒に遊ぶのって初めてだし・・・」

「な、なに？」

「うん、そうしょ。デュオ、行こっ」

「お、おい！いいのかよ・・・？」

言うなり、シャルは俺の手を取り腕を絡ませ海の方へ誘つていく。ていつか、シャルさん。腕に胸があたってるんですが・・・

「ま、待てっ。わ、私も行こっ」

「その格好のまんまで？」

「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

そついつて、ラウラはバババツとバスタオルを脱ぎ捨て、水着姿のラウラが現れ

「グファツ！！！」

「うわっ！？デュ、デュオ！？」

「お、おい、どうしたっ！？何故いきなり吐血なんぞ？」

あ、ありのまま起つたことを言うぜ！

ラウラの水着姿が可愛すぎて吐血する俺。

こ、これだけじゃあわかんねえと思うがラウラの水着はラウラに似合う黒い水着だった。しかし！その水着はレースをふんだんにあしらって水着での面積が少なくぶつちやけセクシーランジェリーに見える。髪も普段のストリートではなく左右一対のアップテールにしている。しかももじもじと恥ずかしそうにしているラウラ。そしてそのギャップに吐血する俺……。

正直、ここまで破壊力のある可愛さは久しぶりだぜ……

「だ、大丈夫だ……。ただ……」

「「ただ……？」」

「ラウラ、ナイスギャップ萌え！たまんなく可愛いぜ……」

シャルと楯無で耐性が付いていたと思っただが、このラウラは全く別の角度から攻めてきやがるとは……。ラウラ、恐ろしい娘！

「せ、世辞などいらん……」

「世辞じゃねえよ。な、シャル？」

「うん。僕も可愛いって褒めてるのに全然信じてくれないんだよ？あ、因みにラウラの髪は僕がセットしたんだ」

「流石はシャル。いい仕事するじゃねえか」

「えへへ、でしょ？」

「それにしても……」

そういつて、シャルと笑いあいふとシャルの水着を見た。

「ん？どうしたのデュオ？」

「いや、ラウラもそうだがシャルも似合ってたぜ」

「えっ！？う、うん。ありがとう」

そういつとシャルは照れたのか髪をいじりながら視線を漂わせた。俺はそんなシャルをおかしく思いながら眺めていると、

「マック〜。マック〜も一緒にビーチバレーやろうよ〜」

こ、この異常なまでに間延びした声は……。本音かつ！？相変わらずの〜んびりした声だな。本音の後をみると一夏もいた。

？箒達がいねえが、どうしたんだ？

「うわ〜マックスウエル君。意外にいい体してる……」

「織斑君もそうだけど、マックスウエル君も結構鍛えてるよね」

「……じゅるり……おいしそう……」

ツ!? 誰だ、最後の奴!? 今いいようのない悪寒が走ったんだがっ

!?

「お、おう。わかったよ……んじゃあシャル、ラウラ行こうぜ?」

「うん」

「わ、私が可愛い……私が……可愛い……」

何かラウラがトリップしているが気にしないでおう。

その後、一夏達とビーチバレーをしていると、泳ぎに来た千冬を見てデュオが飛びかかりシャルロットとラウラによって撃沈されたらしいが、それはまた別の話。

余談だが、千冬はデュオに水着姿をべた褒めされ若干顔を赤くしながらデュオを沈めたらしいが、本当かどうかは定かではない。



死神と臨海学校、その二丁水着は素晴らしい〜(後書き)

少し加筆しました。

死神と臨海学校、その三つ旅行の夜は恋バナが定番らしい〜(前書き)

一か月ぶりの投稿・・・

死神と臨海学校、その三丁旅行の夜は恋バナが定番らしい

楽しい時間というものはあっという間に過ぎ、現在は午後七時半。

大広間を三つ繋げた大宴会場にてデュオ達は夕飯を食べていた。

「美味い！！やっぱ日本といったら刺身だろ」

「だよな〜しかも、昼も夜も刺身が食えるなんて豪勢なもんだ」

「ハハツ！確かにな〜流石は天下のIS学園だ！！」

宴会の席で一夏とデュオは上機嫌になりながら目の前の御馳走を食していた。

「フツツ確かにIS学園って羽振りいいよね」

そんな二人をデュオの右隣にいるシャルロットは微笑ましそうに笑いながら箸を進めていた。

因みに、現在宴会場にいる全員が浴衣を着ている。何故か知らないが旅館の決まりで『お食事中は浴衣着用』という事らしい。

「それにしても・・・セシリア、大丈夫か？」

「っ・・・う・・・だ・・・大、じよ・・・夫で・・・すわ・・・うう・・・」

刺身を食べて至福の時を過ごしていたが、一夏の隣でセシリアが先ほどから苦しそうだ。

因みに席順は一夏の左隣はセシリア、右隣はデュオでデュオの右隣はシャルロットといった感じだ。そして、先ほどからデュオにはラウラの一夏には箒と鈴の恨みの籠った視線がビシバシと突き刺さってきて、天然鈍感男の一夏は当然気付いていないが、気付いているデュオは先ほどから感じる視線を誤魔化すために無理やりテンションを上げていた。

「確かに、顔色が良くないぞ？」

「も・・・ん、だ・・・い、ありま・・・せんわ・・・」

ハッキリ言って全然問題ないようには見えないがそこは武士のもと

い乙女の情け、言わないでおいた方がいいだろう。

「一夏、女の子には色々あるんだよ」

「セシリアの為に聞かないでやってくれ」

「そうなのか？」

シャルロットの言葉に鈍感な一夏は不思議そうに聞き返してきたので、

「「そうなの（なんだ）」」

デュオとシャルロットが口を揃えて諭すように言つと一夏も納得し  
たらしくそれ以上言う事はなかった。

（ていうか、好きな奴がこんな鈍感男じゃあ箒達も苦労するだろう  
な〜）

そんな事を考えながらデュオは刺身の切れ端を一口口に入れた。

「ふ〜さつぱりしたな〜」

「ああ、料理は刺身で風呂は露天風呂なんて豪華絢爛だな」

食後の風呂。それも海を一望できるほどの広い露天風呂に入ってデ  
ュオと一夏は上機嫌で部屋へと戻っていた。

「あれ、姉御も風呂か？」

部屋に戻って見ると千冬の姿がなく、デュオが一夏に尋ねようとし  
た所、

「ん？なんだ、お前達だけか？女の一人や二人でも連れ込まんとは  
つまらん奴らだ」

「だから・・・はあ、もういいよ。それは」

「・・・・・・・・」

千冬の発言に一夏がため息をついている中、何故かデュオは反応を

示さない。

「ん？どうした、デュオ？」

不思議に思った一夏が尋ねるがデュオは顔を下に向け反応しない。  
が……

「ふ……」

「「ふ？」」

「風呂上がりの姉御萌ええええ！っていつか辛抱たまんねー  
ー！！！！」

風呂上がりの千冬の姿にデュオは理性の枷が一気に外れ、興奮して  
飛びかかった。

「フツ！」

「グツブアツ！？」

それすらも予想通りだったらしく、千冬は冷静に幻の左ストレート  
を叩きこみ一瞬でデュオの意識を刈り取った。

「ったく……少しも懲りん奴だな……」

「ハ、ハハハハっ……」

呆れたように気絶したデュオを見る千冬に一夏はただ苦笑するしか  
なかった。

確かに風呂上がりなのか千冬の長い黒髪はしっとり濡れていて艶  
がかかっており、弟の一夏でもドキドキしているのだから、デュオ  
にとつては理性が持たないのは当然だろう。

「な、なあ、千冬姉」

一夏は気を失ったデュオを見なかった事にし、千冬に話しかけたが  
ゴスツと鋭いチョップが炸裂した。

「織斑先生と呼べ」

「まあ、いいじゃんそれは。それよりさ、風呂上がりだし、久しぶ  
りに」

セシリアは困惑していた。夕食時、思い人である一夏に部屋に来て欲しいと言われ浮かれ気分になり、数多の障害（主にクラスメイト）が立ちふさがりつつもようやく部屋に辿り着いてみると、ドアの入り口にへばりついている女子二名を発見したのだ。

「鈴さん？それに篝さんまで。一体そこで何を  
「シッ！」

セシリアが言いきる前に鈴がセシリアの口を塞ぐ。いきなりの事で状況がわからないでいると、ふとドアの向こうから声が聞こえた。

「千冬姉、久しぶりだからちよつと緊張してる」

「そんな訳あるか、馬鹿者。 んっ！す、少しは加減をしろ・

」

「はいはい。んじゃあ、こじは・・・と」

「くあつ！そ、そこはやめっ、つうっ！！」

「ハッ！？なんじゃこりゃあ！！目が覚めたら姉御の悶える姿が目の前に！？しかも一夏が美味しいポジションにいるし！！ああっ！！？混ざりたいけど、手足が縛られて動けない！！これが放置プレイって奴なのかつ！？」

「でゅ、デュオ・・・見るんじゃ、あああっ！  
・・・  
・・・

「こ、これは一体なんですか・・・？」

「・・・  
」

「・・・  
」

口元をひくひくと震わせ、引きつった笑みを浮かべながら尋ねるセシリアだが彼女の問いにはただ沈黙で答えられた。

鈴も篝もズーンと沈んだ表情をしていて、さながら通夜の様である。

「じゃあ、次は  
」

「一夏、少し待て」

突然二人の会話が途切れた。三人はあれ？と思いドアに密着すると

バンッ！

「コッヘぶっ！」「」

突如として開いたドアに顔面を強打し、十代の乙女としてあるまじき声を漏らしてしまった。

そして、開け放たれたドアの先に立っていたのは、

「なにをしているか、馬鹿者どもが」

鬼教官、織斑千冬が立っていた。

あの後、三人は無謀にも逃走を試みようとしたが結果は当然捕まりあわや説教かと思いきや意外な事に入室が許され、なお且つ箒と鈴はシャルロットとラウラを呼びに行かされた。

そして残されたセシリアは一夏との約束通り（お互いの認識の違いはあったが・・・）、一夏にマツサージをもらっている。

「これくらいだったら平気か？」

「ええ・・・。気持ちいいです・・・。」

当初、一夏から部屋に来てと誘われたセシリアは部屋に誘われて気合を入れてきたが、そこは我らがキング・オブ・鈍感の一夏くん。

誘った理由はマツサージをするために呼んだのである。一夏からの誘いでもしやと期待に胸を膨らませていたセシリアはその一言で彼女は心の中で号泣した。

「姉御、いい加減にこれ、解いてくれませんか？」

「ダメだ」

そして、そんな二人を横目で眺めながらデュオは自身の手足を縛っている帯を解いてくれるように千冬に頼みかけるがにべもなく断ら

れてしまった。

「んなこといってもこの体制ツライんですけど・・・」

「お前を放っておくとなにを仕出かすかわからんからな、こつやっ  
て縛りつけておく方がいい」

「おれは猛獣かなんかつすか・・・？」

「違うな、ケダモノだ」

「ひでえ・・・」

バツサリと切り捨てられデュオは目から涙がちよちよぎれてきた。

「ふむ・・・」

千冬はそんなデュオを一瞥すると、静かにセシリアの近づいていき  
そして・・・

ムニユツ!!!!

「!!!!!!?!!?!!?」

いきなり彼女の尻を鷲掴みしたのだ。その表情は悪戯が成功した子  
供の様な顔だが、決して子供の様な愛くるしさはなく、ニヤリと雌  
豹を思わせる笑みだ。

(おおっ!!!)

いきなりの千冬の行動にデュオは先ほどまで落ち込んでいたのがウ  
ソのような反応をした。さらに・・・

ピラ・・・

「おー、マセガキめ。年不相応な下着だな。その上黒か」

「え・・・きゃあああつ!!?」

「ふおおおおおおつ!!!?!?」

デュオの位置からでは千冬が邪魔でセシリアの下着まで見えなく一  
夏の位置からではバツチリ見えたらしく顔を赤く染めながら視線を  
反らした。

「せ、せつ、先生!離してください!!」

真っ赤になりながらそう叫ぶと千冬はあっさり離れてなんとかして  
移動しようとしているデュオの所に向かった。

「やれやれ。教師の前で淫行を期待するなよ。コイツが喧しくなる

「からな」

「へぎゅっ!？」

その言葉と同時に千冬はデュオの背中に足を振り降ろし移動しようとするデュオを縫いとめた。

「い、い、いつ、インコ・・・っ!？」

「冗談だ。おい、聞き耳を立てている四人。そろそろ入ってこい」

ぎくっぎくっぎくっぎくっ。

「くくく・・・くくくくくくくく」

数秒の沈黙の後、部屋のドアが開き四人がゆっくり入ってきた。

「あ、姉御・・・そ、そろそろ足をどけてくんないかな・・・変な所に目覚めそう・・・っ!？」

「・・・・・・」

先ほどからグリグリと容赦なく踏みつける千冬の脚が何やらイケナイ扉を開きそうにデュオは早々に足をどけて欲しかった。

何だか、その扉を開いてしまうと人としての尊厳を失ってしまいうだったから・・・。

「・・・・・・スマン・・・」

流石にこれ以上はマズイと思ったのか、千冬は何とも言えない顔をしながら謝罪ながら足をどけた。

「い、一夏、マッサージはもういいだろう。ほれ、全員好きな所に座れ」

焦った様な千冬の指示におずおずと四人は各々好きな場所（といっても椅子とベットの二択）に座り、拘束をとかれたデュオは伸びをしながら場所を明け渡した。

「まあ、もう一度風呂にでも行ってこい。部屋を汗臭くされては困るからな。ついでにデュオ、お前も入ってこい」

「ん。そうする」

「りょうかい」

二人はタオルと着替えを持ち部屋を出る。出る時に、

「くつろいでいってくれ。って、難しいかもしれないけど」  
「ま、取って食われる訳じゃねんだから気楽にしろよ」  
「と言いついて。」

「……」

二人がいなくなり、部屋を沈黙が包み込む。こういう時デュオがいたならバカな事をやって場を盛り上げるだろう。しかし、今デュオはこの部屋にいない。

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした？」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」  
「まったく、仕方ないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ乃、なにがいい？」

いきなり名前を呼ばれた篤はビクツと肩をすくませる。そんな事いきなり言われたってすぐに言葉が出るわけがなく、困ってしまった。そんな事していると、千冬は部屋に備え付けられている冷蔵庫の中から清涼飲料水を五人分取り出してそれぞれ渡した。

「い、いただきます」  
渡された飲み物を手に取り、全員が同じ言葉を言うと飲み物を口にする。

女子の喉がごくりと動いたのを見て千冬はニヤリと笑った。

「飲んだな？」

「は、はい」

「そ、そりゃ、飲みましたけど・・・」

「な、何か入っていましたの!？」

「失礼なことを言うな馬鹿め。なに、ちよつとした口封じだ」

そういつて千冬は冷蔵庫から今度は缶ビールを取り出した(因みに銘柄は朝 ビール)。プシュツと景気のいい音と共に泡が飛び出し、それを唇で受け取つて、そのままゴクゴクと喉を鳴らした。

「・・・・・・・・・・」

全員が啞然としている中、千冬だけは上機嫌な様子でベツトに腰掛け啞然としている五人にニヤリと笑い

「おかしな顔をするなよ。私だつて人間だ。酒くらい飲むさ。それとも私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけで・・・」

「ないんですけど・・・」

「でもその、今は・・・」

「仕事中なんじゃ・・・?」

ラウラに至つては未だぼかんと開いた口からは何も出てこなかった。余程普段とのギャップに驚いているのだろう。

「堅い事を言うな。それに、口止め料はもう払つたぞ」

千冬の言葉に全員が自分の持つてゐる飲み物の意味に気付き「あつ」と声を漏らした。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

早くも二本目のビールを開け、また景気のいい音を響かせ一口飲むと千冬はこう言つてきた。

「お前らアイツのどこがいいんだ？」

アイツとはこの場合は一夏の事である。

「もつとも、デュノアとボーデヴィツヒはあのバカのようながな」あのバカというのは間違はなくデュオの事である。そういつた千冬の言葉にシャルロットとラウラは顔を赤く染めながら視線を反ら

した。

「わ、私は別に・・・以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「あたしは、腐れ縁なだけだし・・・」

「わ、わたくしはクラス代表としてしつかりしてほしただけです」

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

「・・・言わなくていいです！」

そんなツンデレ娘達をはっはっはと笑い声で一蹴するとまたビールに一口飲み今度はシャルロット達に視線を送る。

「で、お前らは？あのバカのどこがいいんだ」

他の三人も興味津津なのか二人に視線を送る。

「ぼ、僕は・・・僕にとつて初めてあつた時からデュオはヒーロだったから・・・いつもおちやらけているけど、肝心な時にはすつごく頼りになるところかな・・・。それに、久しぶりに再会した夜に守つてやるって言つてくれたから・・・」

そこまで言つとシャルロットは顔を赤く染めながら下を向いてしまった。

「ふむ・・・で、お前は？」

千冬はそこまで聞くと一瞬何かを考えるような素振りを見せて今度はラウラに尋ねた。

「つ、強いところが、でしょうか・・・」

「ふむ・・・」

ラウラの言葉に千冬は続けると視線で促すとラウラはポツリ、ポツリと言葉を紡いでた。

「わ、私と同じ境遇でありながら決して自分を見失わず、光りの中で生きている姿はとても気高い物だと思います」

そこまで言つとラウラは自分の言っていた事が恥ずかしくなったのかシャルロットと同じように赤くなって下を向いた。

「フツ・・・なるほどな」

そういつと千冬は二本目のビールを開け三本目のビールに手を伸ば

した。

「まあ、あのバカの事は置いて、アイツは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージも上手い。そうだろう、オルコツト？」

千冬の言葉にセシリアは顔を赤くしながらコクリと頷いた。

「という訳で、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

ええ〜・・・と心の中で突っ込む一夏ラヴァーズ。

「女なら奪うくらい気持ちでいなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

そう言つて、三本目のビールを開け今度はラウラとシャルロットの方に視線を向け、

「さて次はお前だが・・・デユノア、ポーデヴィツヒ。お前達はこれからアイツと一緒にいたいのなら覚悟を決める。中途半端な覚悟でアイツと一緒にいるのなら今の内に縁を切れ」

いきなりの言葉に二人は言葉を失い、すぐさま否定しようとしたが千冬の目がこれまでにないくらい真剣身を帯びていた。その姿は世界最強の名に相応しい姿だ。

「アイツの闇は思いのほか深い。どんな事実を突きつけられてもアイツの事を好きだと言うならいいが、そうでないなら早々に諦める。その方がアイツの為であるし、お前達の為でもあるかな」

そこまで言つとシャルロットとラウラの方を向き答えが出るのを待つ。

「ぼ、ぼくは・・・」

千冬の気にあてられたのかシャルロットは震える体を無理やり抑えつけないが言葉紡いだ。

「僕は、例え何があるうとデユオの傍を離れませんし、離れる気もありません。例えデユオが自分から離れていても絶対必ず見つけ出します。デユオに対するこの思いは誰にも負けるつもりはありません」

せんから」

彼女の体は確かに震えていた。が、決して目は怯えていなかった。

「わ、私も同じです。それに、嫁を支えるのも夫の勤めですから」  
対するラウラも決意に満ちた目で千冬を見返す。

「・・・フツそれならいいさ」

二人の目を見て千冬は二人の答えに満足そうに微笑するとビールを一口飲み、

「だがまあ、気をつけるんだな。アイツは意外とモテるし浮気する性質だ。それに強力なライバルもまだいるからな。精々アイツを繋ぎとめるんだな」

そう言って千冬は四本目のビールに手を伸ばした。

死神と臨海学校、その三つ旅行の夜は恋バナが定番らしい（後書き）

次回は天災、篠ノ乃束襲来！

## 死神小話第三話（前書き）

後書きにて新企画と重大発表予告があります

### 死神小話第三話

IS学園の七不思議のひとつ、その一、デュオ・マックスウエルの内ポケットの謎

〈IS学園寮食堂〉

時刻は放課後、夕飯を食べに食堂は学生で賑っていた。

「さうて、本日のデザートはプリン！いやこの艶、この色！いい仕事してるぜ！」

そんな食堂の一角でデュオはいつものメンバーで食事を終え、今は食後のデザートやティータイムを始めている。

「ね、ね、マック」

突然いつものようにのんびりした本音の声が食事を済ませ楽しみにしていたデザートの中のプリンを食べようとしたデュオを一組の癒し事、のほほんさんが待ったをかけた。

「ん？なんだよ、本音。俺の至高のプリンタイムを邪魔すんのか？」

（いや、なんだよ至高のプリンタイムって・・・）

ジト目で本音を睨みながら文句を言うデュオに一夏は内心でツッコミを入れていると、

「そうじゃないよ」

「じゃあ何だよ？」

相変わらずのんびりとした口調で否定する言う本音にデュオは疑問に思いながら問いかけると、

「ん」とね、食堂のデザートが売れ切れちゃったんだ。だから、

マック、アイス頂戴」

「随分とふてぶてしいな、オイ」

両手をデュオに向け差し出す本音にデュオは冷めた目で見つめ、同じテーブルに座っていた鈴とラウラ、箒は同意するように頷き、シヤルはアハハと苦笑しセシリアは呆れていた。一夏も呆れながら、

「あのな、のほほんさん。いくらなんでもアイスをもっているわけがほらよ」  
「ってあんのかよっ!？」

一夏は制服の内ポケットからアイス（しかもキンキンに冷えた）を取り出し本音に投げ渡したデュオに渾身のツツコミを入れた。

「え?」「」

「いや、え? つじゃねえよ!! 何でそんな所にアイス入れてんだよ! 普通溶けるだろ!？」

まくし立てるように言う一夏にデュオと本音は顔を見合わせてハッやれやれといった感じであからさまに呆れた態度で答えた。

「おいおい、一夏くんよ。お前、こんぐらいフツーだろ?」

「そうだよ。オリム、フツーフツー」

「んなわけあるか!」

何言ってるんだコイツとでも言いたげな目で見てくる二人に遂に一夏がキレた。

「なに怒ってるんだよ一夏。カルシウム不足か? ミルクでも飲むか?」

「いや、遠慮しとく。って今度は牛乳が出てきた!!?」

突然キレた一夏に心配に思ったのか、デュオはまた内ポケットに手をつ込むと今度は500mlの牛乳パック（これも程よく冷えている）を取り出し、一夏に手渡した。

「一夏さん、何をそんなに騒いでますの?」

手渡された牛乳にギャーギャーと騒ぎ出す一夏にセシリアは不思議そうに問いかける。

「い、いや、セシリア。聞いてくれよ、デュオの奴が「それくらい、家のメイドのチェルシーなら容易にできますわよ?」ってこっちもか!？」

何故か自慢げに言うセシリアに一夏は段々と自分が混乱してくるのがわかった。

「おーやっぱセシリアのこのメイドもこれ位できるよな?」

「はい、わたくしも最初見た時は不思議に思ったのですが、チェル

シーに「これはメイドの一般技能です」と言われて何故かとても説得力がありましたの」

「ま、こんぐらい使用人なら当然だよな」家の執事長のラシードは『使用人上等技能』も納めてるしな」

「僕のお姉ちゃんも『使用人上等技能』持ってるよ」

「あゝそういえばそうだったな」

「……」

3人の会話を聞き一夏は一瞬異世界に迷い込んだかのような錯覚を覚えた。それもその筈だ、三人の会話がまったくもって理解できない。それは周りも同じようで、箒に鈴、それにラウラまでも眩暈がするのか頭を抱えている。

（なんなんだ、何なんだコレ!?メイドや執事ってのは四次元ポイントでも常備してんのか?ドラ もんなのか?!）

「一夏」

段々と一夏の思考が混乱していく中、見かねたシャルが一夏に声をかけた。

「じゃ、シャルロット……」

まさかお前もか……?という目で見てくる一夏にシャルロットはシャルは苦笑しながら、

「何事も慣れが肝心だよ?」

「……うん」

とても達観した目で見つめるシャルに一夏はガックシと肩を落としデュオから貰った牛乳をチューチューと飲み始めた。

その後、『デュオ・マックスウエルの内ポケットの謎』が見事にIS学園七不思議の中に入ったのは言うまでもない。

特別な名

「そういえばデュオって何でシャルロットの事をシャルって呼んでんだ？」

とある休日、寮の食堂で昼食を食べていたら唐突に一夏がそんな事を聞いてきた

「あん？なんでってそりゃあ……何でだろうな？」

「いや、それはこつちが聞いてんだけど……」

今日は珍しく女性陣がいなく男二人で寂しく（または珍しく）昼食をとっていたのだが、突然そんな事を言われても……

「つーか、何でいきなりそんな事聞いてきたんだ？シャルがこつちに来てから毎日呼んでんじゃないかねえか」

「いや、それもそうなんだけどさ。この前ちょっと鈴と呼び方の話をしてた時……」

〈回想〉第二アリーナ〉

「そついえばさあ、鈴」

「なによ、一夏」

ISの訓練中、小休止中にふと不思議に思ったので隣で汗を拭いている鈴に話しかけた。（因みにこの時、箒とセシリアはデュオ&ラウラ組とタッグ戦をしていた）

「不思議に思っただけだよ」

「ああ」

「何で皆はシャルロットって呼んでるんだ？」

「……はあ？」

おい、なんだその、あんたバカア？みたいな顔は？

「わかってんじゃないの。で、突然何言ってるの？呼ぶも何もシヤ

ルロットはシャルロットじゃない」

「いや、言い方が悪かった。何でデュオ以外皆シャルロットって呼んでんだ？」

「は？」

おい、今度はなんだ。その、え？コイツ本気で言ってるの？みたいな目は、いくらなんでも傷つくぞ。

「ハア〜それを本気で聞いているなら、多分あなたには一生わかんないわよ……」

「おい、鈴。それは幾らなんでも」

「あれ、二人ともどうしたの？」

俺が鈴に詰め寄ろうとした時に、丁度飲み物を買ってきてくれたシャルロットがきた。

「はい、一夏は緑茶で鈴はウーロン茶だよ」

「あ、ありがとう」

「おう、ワリーなシャルロット」

ハイっといって手渡されたペットボトルのキャップを開け一口煽る。うん、いい具合に冷えた緑茶が体にしみわたるな。

「なに、ジジ臭い事言ってるのよ」

「なっ！？おま、鈴！ジジ臭いつて何だよ！？っーか、人の考えを読むな！！」

「ま、まーまー一夏、落ち着いて……」

もう一度鈴に食って掛ろうとしたが、シャルロットに止められ仕方なく矛を収める。

ん？そういえば、シャルロットもいるし丁度いいかな？

「なあ、シャルロット」

「ん？なに、一夏」

どうやら、シャルロットはデュオ達の模擬戦が気になるのか視線をデュオ達に向けたまま答えた。

「前から疑問に思ってたんだけどさ、なんでデュオはシャルロットの事を『シャル』って呼ぶんだ？」

「え？」

「ちよつ！？ば、バカ！！」

「いつてえ！！？」

ただ気になつたから聞いただけなのにいきなり鈴に殴られた。

「なにすんだよ！」

「あんた、バカア！？普通に考えたらそれが特別な呼び名だつて気付くでしょうが！！」

「そ、そうなのか？」

「ハア~~~~」

おい、何だその長い溜息は？

「ハア、まあ一夏だししょうがないか。ごめんねシャルロット」

「ア、アハハハ・・・いいよ別に。デュオ以外で呼ばれるのは初めてだったからちよつとビックリしただけだから・・・」

「そうなの？」

「うん。『シャル』ってあだ名はデュオと初めて会つた時につけてくれてね、それ以来ずっとそう呼ばれてるな」

そういうシャルロットははにかみながら昔を懐かしむように微笑していた。

〜回想終了〜

「てな事があつたんだよ」

「あゝあの時か・・・で？今話を聞く限りじゃあ、俺がシャルをシャルって呼ぶ理由はわかつたはずだと思うんだが、まだ何か聞きたい事があるのか？」

一夏は他にも聞きたい事があるようなので、聞いてみると、

「あ、ああ、そんでおれもシャルロットの事をシャルって呼ばうとしたんだけど」

く再び回想く

「じゃあさ、シャルロット」

「ん、なに一夏？」

丁度向こうの模擬戦も大詰めにさしかかった頃、一夏はシャルロットの方を向きながら、

「俺もシャルって呼んだぞドントッ!!」・・・い・・・いか？」

一瞬だった。一夏が言い終わる前にシャルは自身のISを部分展開させると灰色の鱗殻をグレイ・スケール一夏の顔スレスレに撃ち込んだ。その一連の動作、まさに神速の如く。

「な、なにを「ねえ、一夏・・・」ヒイツ!?」

いきなりの攻撃に、一夏は冷や汗かきながらシャルロットに文句を言おうとしたが直ぐにそんな気は失せた。

何故なら前髪で表情は覗えないが、シャルから感じる気が尋常じゃないほどす黒くなっているから。

「もし、またその名で呼ぶようなら・・・」

ワカッテルヨネ・・・?

「・・・!!!(コクコク!!!)」

一夏を見つめるシャルの瞳はハイライトが消え、どんよりとした暗さを帯びていて一夏は無言で激しく頷いた。

因みに、一夏の隣にいた鈴はあまりの恐怖に一夏の後ろでブルブルと震えながらしがみついていた

〈回想終了〉

「　　ってな事があつたんだ」

「.....」

(そういえば前にもそんな事があつたような気がすんな)

一夏の話聞いてデュオは冷や汗をかきながら既視感デジャヴを覚えたがなんとか振り払い、

「ま、まあ！なんだ？もうこの話はやめようぜ？」

「お、おう！何だか思い出ただけで気分が.....」

心なしか一夏の顔色が悪く見えんのは気のせいだろうか？いや、きつと気の所為だ。.....多分。

今日の教訓はシャルロットの事をシャルと呼んでいいのはデュオだけ

### 死神小話第三話（後書き）

「デユオと!」

「カトルの!」

「Q&Aコーナー!」

「で、カトル?何なんだこれは?」

「はい、なんでも作者が他の作品の後書きを見て『自分もなんかやりたい!』とか思ったらしくてこんな企画を立ち上げてしまったそうです」

「ハア・・・そんなのやる前にまず遅れ気味の更新をどうにかしろよ・・・」

「あ、それについての言い訳なんですがね?なんでもここ最近、作者は大学のテスト勉強にアルバイトなど多忙を極めているらしいんですよ。だからだそうです」

「おいおい、大丈夫なのかよこの小説。何だか先行きが不安になってきたんだが・・・」

「まあ、そこは長い目で見てやってください。夏休みになれば今よりはかなりましになるはずですから」

「ふ〜ん。まあ、いいけどさ〜・・・んで?これって具体的に何やんの?俺全然聞いてないんだけど・・・?」

「あ、それなら安心してください。ここに来る時に教えられましたから。・・・ええと、このコーナーでは『インフィニット・ストラトス』死神と呼ばれるIS』に関する質問やまたは死神小話でやってもらいたいシユチュエーションなどのリクエストや、次回予告などをやるらしいですね」

「ちょっとまって」

「?どうしましたデユオ」

「いや、次回予告や質問をするのには一向に構わねえんだけどよ、そんなに来るのかよ、質問やリクエスト?」

「.....」

「.....」

「まあ、来なかった時の為は僕らが勝手にやっちゃっていいみたいですよ?」

「オイオイ.....」

「それでは、今回はここでお開きという事で.....」

「ん?待てよカトル。前書きの方で重大発表予告とか言ってたけどあれは何なんだ?」

「ああ、アレですか?僕も詳しい事は聞いてないんですけど次の後書きで重大発表があるみたいですよ?」

「へ〜.....って、オイオイいいのかよそんな事言っつて、次の更新って絶対八月の中盤か終盤あたりだろ?今言っただ方がいいんじゃないかね?」

「まあ、それもそうなんですけど.....そこは作者の都合というものがあつらしくて.....」

「ハア.....なんか先行きが不安になつてきたぜ.....」

「次回は今度こそ天災、篠ノ乃束の襲来です!」

「次回も、よろしくな!」

死神と臨海学校、その四つ現れし天災ウサギ、土産にトラブルをどうぞ（前書）

#### 注意事項

最近指摘された事ですが私の小説を呼んでいる方々が他の作者様方にご迷惑をかけていると注意されました。

まさかそんな人はいないと思いますが、読者の方々は最低限のマナーを守ってください。

よろしく願います。

死神と臨海学校、その四つ現れし天災ウサギ、土産にトラブルをどうぞ

合宿二日目。今日は午前から夜中まで丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備が待っているのだから大変だ。

「ようやく全員集まったか。」

おい、遅刻者」

「は、はいっ」

千冬に呼ばれたのは意外にもラウラだった。珍しくラウラは寝坊して集合時間の五分遅れでやってきたのだ。

（あのラウラが、寝坊なんて珍しいな。何かあったのか？）

「流石に優秀だな。遅刻の件これで許してやろう」

ラウラの遅刻に疑問を思ったデュオは理由について考えていたがいつの間にか話が進んでいた。

「では、これより各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。では迅速に行動しろ」千冬の言葉に一同が返事をする。一年全員にも関わらずテキパキと作業を始めた。流石に千冬の目の前でバカな真似は出来ないようだ。

「ああ、篠ノ之お前は私達と共に来い」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた箒を千冬は千冬に呼ばれ、デュオ達と共に崖に囲まれた岩場に移動した。

（??なんで箒を連れ来るんだ？アイツは俺達と違って専用機持ちってわけじゃないはずだが・・・）

デュオは箒を連れてきた理由がわからず不審げに千冬を見てみると一夏がデュオの疑問を代弁するかのようにな、

「何で箒もいるんだ？」

と箒に問いかけた。

「それは、私が説明しよう。実は」

ズドドドドドドドドドドドドドッ！！

「ち~~~~~ちや~~~~~ん!!!」

千冬が説明しようとした時、足音が響き何処からともなく声がして声のする方を向くと謎の女性が崖を駆け降りてきた。

「……束」

千冬が呟くと同時に束と呼ばれた女性は駆け降りた勢いからそのまま千冬めがけてダイブしたが、

「やあやあ！会いたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめへぶっ!？」

「喧しいぞ束」

ミシミシ……

流れるような自然な動作で千冬は自身に飛びかかってきた束と呼ばれた女性の頭を片手で掴み、そのまま持ち上げた。しかも何気に指が頭に食い込んでヤバい音が聞こえる。

「ぐぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

なんとか千冬の拘束から抜け出した束はそのまま箒の方へ近づくと、

「やあ！」

「……どうも」

元気よく挨拶する束と違い箒は心なしか雰囲気若干暗く思える。

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おっきくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが」

「がんっ!!」

「殴りますよ？」

「な、殴ってから言ったあ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた!ひどい!箒ちゃんひどい!」

何処から取り出したのか箒は日本刀を取り出しセクハラ発言をした束を頭ぶっ叩いた。

(……いや、ちょっとマテ!どっから取り出したんだよその日本刀!?何処にも隠す場所なかったよな!?)

突然登場した束に山田先生が対応しているが、軽くあしらわれてい

るのをしり目にデュオは何処からともなく日本刀を出した筈に注目していた。(自分の事を棚に上げて・・・)

「おい束。自己紹介ぐらいしろ。うちの生徒が困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はるー。終わ  
り」

(!?!?・・・なるほど、コイツがそうか・・・)

周りが突然の事についていけずポカーンとしている中、デュオは注  
意深く束を観察し始めた。

(コイツが、”あの”篠ノ之束か・・・。イメージしてたの全然違  
うな。もつと陰険な女かと思っていたが・・・なんて事はねえ、  
陰険よりもつと質が悪いな。それに、何処となくあのおっさんとお  
んなじ匂いがしやがる・・・)

そういつて束を見つめるデュオの目は今までに見た事のないぐらい  
厳しい目で束を見つめていた。

「それで、頼んでいたものは・・・?」

「うつつつつ。それはすでに準備済みだよん。さあ、大空をご覧  
あれ!」

ややためらいがちに尋ねる筈に束は不敵な笑みを浮かべビシッと上  
空を指さす。それにつられて全員が上空を見上げると、

ズズーンッ!

「のわっ!?!」

突然それは激しい音と振動を伴って地面に突き刺さった。煙がはれ  
て金属製の箱が姿を現したと思っただら次の瞬間、箱が開きその中身  
があらわになった。

そこには深紅の『甲冑』が姿を現した。

しかし、それは『甲冑』等でなくISであった。

「じゃじゃーん!これぞ篝ちゃん専用機こと『紅椿』!全スペック  
が現行ISを上回る束さんお手製ISだよ!さあ、篝ちゃん今から

フィッティングとパーソナライズを始めようか！」

(新型のISだと!?それも全スペックが現行ISを上回るって・・・妹のプレゼントって言っても限度つてもんがあるだろうが・・・)

デュオは東の説明に驚愕半分、呆れ半分を感じながら視線を『紅椿』に戻した。

『紅椿』は一言で言うところと鎧武者。しかし、重装甲といった感じではなく女性用の甲冑といった感じで軽装で武器も腰にある二振りの近接ブレードのみ。それ以外武器らしい武器は見当たらない。

白式を『騎士』と例えるならこの紅椿は『武士』もののふといえるだろう。

「紅椿は近接格闘を基礎にした万能型に調整してあるから、直ぐに馴染むよ!後は自動支援装備もつけておいたからね〜!」

そう言いながら空中投影の空間パネルを六つ呼びだすと膨大な量のデータを更新していった。

しかし、陽気に教える姉と違い箒の態度は何処までもそっけない。

(まあ、仕方ねえか。篠ノ之東はISを発明後、消息は不明になりその間身内である箒やそのご両親はかなり叩かれたらしいからな・・・)

「後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いつくん、白式見せて。東さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。はい」

デュオは箒と紅椿を観察しているとどうやらいつの間にか終わったらしく今度は一夏に顔を向けた。そして呼ばれた一夏は何の抵抗もなく白式を展開した。

「データ見せてね〜。うりゃ」

そついうなり、東は白式にコードをぶすりと刺すと先ほどと同じように空間にディスプレイが浮かび上がる。

「ん〜・・・不思議になフラグメントマップを構築しているね。

なんたる?見た事のないパターン。いつくんが男の子だからかな?」  
フラグメントマップとは各ISがパーソナライズによって発展して

いくその道筋、人間でいうところの遺伝子である。

「東さん、その事なんだけど、どうして男の俺がISを使えるんですか？」

「ん？ん？・・・どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すればわかる気がするんだけど、していい？」

（笑顔でなんつう恐ろしい事聞いてんだよ・・・）

「言い訳ないでしょ・・・」

「にははは、そういうと思ったよん。んーまあ、わからない事はわからないでいいけどねー。自己進化するように作ったし、こういうこともあるよ」

何の解決にもなっていないのはご愛敬。

「因みに後付装備が出来ないのは何ですか？」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え……ええっ！？白式って東さんが作ったんですか！？」

「うん、そーだよ。って言っても欠陥機としてポイされていたのを貰って動くように弄っただけだねー。でもお陰で第一形態からワンオフ・アビリティ単一仕様が使えるでしょ？でねー、なんかねー、元々そういう機体らしいよ？日本が開発したのは」

「馬鹿たれ、機密事項をべらべらバラすな」

「ばしん！と千冬は束の頭を容赦なく叩いた。そこで、一夏達は二人のやり取りを見ていると途轍もない既視感を感じた。何故なら二人のやり取りはまるでデュオと千冬の掛け合いのようだったから・・・。

「まあ、その話はいいとし・・・」

そう言いながら束は一夏達を押しつけ、『二人目の男性IS操縦者』であるデュオの前に立った。

「やあ、やあ！君がデュオ・マックスウェル君だね！！」

「ん、ああ・・・」

（あれ・・・？）

デュオの素っ気ない反応に一夏をはじめデュオの幼馴染みのシャル、

それにデュオに好意を寄せているラウラは違和感を感じた。

普段のデュオなら間違はなく陽気に返事したり人懐っこい笑みを浮かべるはずなのだが、そういう反応は全然なくむしろ殺伐とした雰囲気醸し出している。

「君のIS『死神』<sup>タナトス</sup>を是非見しくれないかい？ 束さんもちろん興味津津なのだよ。もちろん？ 君の体？ の事もね」

「！？」

「「「「？？」」」」

「……」

この場で目の前で起きている事を理解しているのは一体何人であろうか？ 一夏と篤はあの束が他人に興味を持つという事に驚き、シャルとラウラは束がデュオの出生を知っている事に驚愕し、千冬は厳しい目でそんな二人を見ていた。

「イヤに決まってるだろうが」

それは、今までのデュオからは考えられないほどに恐ろしく冷たい声だった。

「……どうしてかな？」

「当たり前だろうが。どうして見ず知らずの赤の他人に俺の相棒をみせなきゃいけない。それにな……」

そういつてデュオはいったん言葉を区切ると底冷えするような眼で束を見つめ、

「生憎と俺はあんたみたいな<sup>マシフトサイエンティスト</sup>科学者は大っ嫌いだね。特にあんたは俺の知り合いの<sup>マシフトサイエンティスト</sup>科学者と同じ匂いがする……」

「ふーん」

冷たく言い切るデュオに束は激昂するのでもなく、興味を無くした用でもなく、口元に笑みを浮かべた。

「なるほど、おじーちゃんの言うとおりだね」

「??おじーちゃん? いったい誰の事だ?」

「ふふ、それはね・・・」

そういつて束は妖艶な笑みをデュオに向けながらこう言った。

「プロフェツサーG」

「なっ!!!??!??」

その名を聞いた瞬間デュオは目を見開き驚愕をあらわにしたが、それも一瞬で顔を伏せたと思っただら尋常じゃない殺気をその体から放った。

「?????!?!?」「????」

そこからは一瞬であった。デュオは一瞬で死神を展開すると、瞬時加速で一気に束に近づきビームシザースを束の首めがけて薙ぎ払った。

ガキインッ!!

「デュオ、てめえいきなり何しやがる!?!」

しかし、寸前の所を一夏が瞬時加速で二人の間に入りビームシザースを受け止めた。

「おい、デュオ! 聞いてんのか!?!」

突然のデュオの凶行に一夏は激昂するがデュオは先ほどから顔を伏せたまま黙っていた。

「おい！いい加減に「どうして……」「!?」  
いい加減無視を決め込むデュオに苛立つてきた一夏が全力で押し返そうとした時、不意にデュオが顔を上げた。その顔は今まで見た事のないほどの怒りに満ちていた。

「どうして、テメエがその名を知ってやがる!!?」

デュオは目の前にいる一夏の事などまるで最初っからいないかのよう  
に無視して束に向かい怒声を放つ。

「答える！篠ノ之束!!まさかテメエ……あのおっさんの居場所を知ってんのか!?!」

「おい、落ち着けてデュオ!」

「答える!!」

激昂するデュオに対して束はただ笑っているだけで何も答えようとしない。

「黙ってんじえねえよ!!篠ノ之束え!!」

「この……いい加減にしろお!!」

ズガンッ!!

「ぐああ!?!」

押し切られそうになった一夏は零落白夜を発動しデュオのビームシ  
ザースのビーム刃を切り裂き死神タネトスの装甲を切り裂きデュオを吹き飛ばした。

「デュオ!!」

シャルとラウラが吹き飛ばされたデュオに駆け寄ろうとするがデュオの発する空気が向かおうとする足を停めてしまう。

「テメエ……篠ノ之束え……!!黙ってねえでなんとか言え!!」

殺気に満ちた目で束を睨み震える手でビームシザースを構え直そうとするが、

バシンッ!!

「!?!」

「いい加減にしろ、デュオ」

いつの間近づくいたのか千冬がデュオに張り手を喰らわせた。

「グッ・・・あ、姉御・・・」

「織斑先生だ。頭を冷やせ、馬鹿者。お前らしくもない感情で行動する事に対して何も言う事はない。が、感情に流されるのは愚か者のする行為だ。お前ならわかってるだろう？」

「・・・」

千冬の言葉にデュオはしばらく黙っているとタナトスを解除し立ち上がると、

「すまなかつたな、姉御。お陰で頭が冷えた」

先ほどの殺気に満ちた空気が霧散ししいつも通りとはいかないまでも少しは落ち着いたらしい。

「ああ、それと織斑先生だ。それから束」

「んん？なにちーちゃん？」

千冬に呼ばれた束は先ほどの事など何も無いように返事をする。

「うちの生徒に妙な事を言うのはやめろ」

そういつて束を睨みつけるが束は微笑するだけで意に介さず篝の所へ向かって言った。

その後、篝の『紅椿』がインストールが終わり各種兵装を確かめているとその知らせは突然やってきた。

「た、大変です！お、織斑先生！！」

いつも以上に落ち着きのない様子で真耶が千冬の方へ駆け寄ってきた。

「どつした？」

「こつ、これを！」

渡された小型端末の画面を見て千冬表情が曇った。

「特命任務レベルA、現時刻を持って対策を始められたし・・・」

その言葉を聞いた瞬間、デュオは悟った。  
ああ、今回もすんなりといかないようだな、と。

死神と臨海学校、その四つ現れし天災ウサギ、土産にトラブルをどうぞ（後書

「デュオと!」

「カトルの!」

「Q&Aコーナー!」

「いう訳で第二回、Q&Aコーナー何ですけど……」

「質問、一通もきてねえじゃん」

ズーン……

「まあ、わかりきっていた事なんだけだよ」

「デュオ、そんな事言っではいけないよ。作者だつてもしかしたら、来るかもしれない!」って願望で企画したイベントなんですから」

「んな事言つたつてよ、来ねえもんはこねえじゃん」

「それを言つたら元も子もないですよ」

「まあ、そんな事より前回引つ張った重大発表って何だよ?まさかこの小説打ち切り?」

「デュオ、思つてもない事を言つたらダメですよ。……そうです、ね、じゃあ早速……」

「新連載として、『真剣で私に恋しなさい!』と『ゴッドイーター』の二つが始まります!」

「……は？」

「いやですから、新しく二つの小説をですわね」

「いやいや！誰もそんな事聞いてねえから！！新連載！？それも二つも！？正気か！！？」

「どうやら作者は本気らしいですよ？」

「あ~~~~頭痛くなってきた……」

「あ、でも安心してください」

「んん？なにを安心するんだよ」

「何でも新連載の一つ『真剣で私に恋しなさい！』の方は今秋に出すらしいですよ？」

「は？なんで？」

「さあ？そこは大人の事情らしいです」

「何にしても前途多難だぜ、この小説……」

「一応メインはこの小説で、サブは残りの二つらしいですよ？」

「ふ〜ん……まあいいけどよ。ところでどんな内容にすんだ？」

「はい。まずは『ゴッドイーター』の方ですが、これは前回の者を一新したものと考えていいそうです。ハーレムものではなくアリサ単独ヒロインとして書くつもりですね」

「ふ〜ん、まあ前見たくいきなり削除しなければいいけどな」

「痛い所をつきますね……。そして『真剣で私に恋しなさい！』」

の方は『戦国BASARA』とのクロスで主人公は伊達政宗の子孫だそうです」

「は？戦国BASARA？マジで？」

「本人はいたってマジだそうです。ついでにこの二つはもう頭の中で構想はできているみたいですよ？」

「さいでつか……」

「流石にツツコム気力もないみたいですね……。ではそろそろ、次回予告といきましょう」

「おう、では今回は最強の敵、『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』来襲！！そして新たな

敵が・・・」

「次回もよろしくお願いします!」

死神と臨海学校、その五、銀の福音鳴る時、閃光男爵が翔る（前書き）

緊急アンケート!!

えー突然ですがアンケートを取りたいと思います。

何のアンケートかというと、前回の話で新連載の話が出てきましたが、よくよく冷静に考えるととてもマズイ気がしてきたので、読者様の意見を聞きたいと思います。

- 1 ・予告した通り新連載やりな!
  - 2 ・もう、この作品一本にしね?
  - 3 ・この作品とゴッドイーターの二作品で!
  - 4 ・この作品と真剣で私に恋してる!の二作品で!
  - 5 ・むしろ今のまま現状維持・・・
  - 6 ・この作品とケンイチの作品の二作品で!（ただしその場合今あるケンイチの作品を削除し新しくします）
- 以上六つの中から選んでください。締め切りは今月一杯です。  
どうぞよろしく願います!!

死神と臨海学校、その五、銀の福音鳴る時、閃光男爵が翔る

（大座敷・風花の間）

あの後、姉御の指示により訓練は中止となり、俺達専用機持ち以外は自室待機という事になった。

「では、現状を報告する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の一室で俺達専用機持ちと教師陣が集まっていた。

部屋の照明を落としほの暗い室内に、ぼうつと大型の空間投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御化を離れて暴走。

監視空域より離脱したとの連絡があつた」

おいおい、軍用ISが暴走つてただごとじゃねえな。

俺は周りに視線を移すと一夏と篤おれたち以外は自体がどれほど重大か理解しているみたいだ。一夏と篤は専用機持ちと違ってそういう訓練を受けていない、一夏は専用機をもつてまだそんなに間もないし、篤に至つてはさつき専用機を貰つたばかりだ。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過する事がわかつた。時間にして五十五分後。学園上層部の通達により我々がこの事態に対処する事になった」

その話を俺達の前でするっていう事は・・・

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よつて、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらつ」

やっぱりか・・・。っていうか一夏、何でそんな慌ててんだよ？

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは拳手するように」

「はい」

早速手を上げたのはセシリアだった。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これは二カ国の最重要機密だ。消して口外をするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年間の監視が付けられる」

「了解しました」

そして俺達は開示されたデータをもとに相談を始める。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型・・・わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だね。しかもスペック上ではあたしの甲龍を上回っているから、向こうの方が有利・・・」

「つーか、厄介どころの騒ぎじゃねえよ。アメリカとイスラエルも厄介なモンを開発してくれるぜ。データ上のスペックは俺のタナトスと互角だが、正直言って俺とタナトスでも接近戦に持ち込んで勝てるかどうかわけんねえ。ていうか、接近戦に持ち込む前に撃墜される様な気が済んだけど・・・」

「この特殊武装が曲者って感じがするね。丁度本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからない。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二四五〇キロを超えるとある。アプローチは一階が限界だろ」

「う」  
ラウラの質問に姉御は淡々と答えた。

「つーことは答えはほとんど出てんじゃねえか。」

「一回きりのチャンス・・・という事はやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体であたるしかありませんね」

「それしかねーわな」

「そーいって俺達の視線は一斉に一夏にむいた。」

「え・・・？」

「一夏、あなたの零落<sup>れいらくびやく</sup>白夜で落すのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は」

「どうやって一夏をそこまで運ぶかね、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないといけないだろうから、移動をどうするかだね」

「しかも、目標の速度に追いつける速度がだせるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろ」

「だったら、俺のタナトスでいいだろう。武装に使うエネルギーをハイパージャマーと移動に注ぎ込めば相手に気付かれずにギリギリまで敵に近づける。それに臨海学校に来る前に本国から届いた隠密用強化パッケージ『ナイトメア』が届いたし、インストールも既に済ませてる。『ナイトメア』のおかげでハイパージャマーの性能も上がってるから俺を含めた三人までなら通常機動のまま姿を消す事も出来るからな」

「なるほど流石は私の嫁だな。では後一人は」

「ちょ、ちよつと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「……当然」

俺達五人の声が見事にはもった。

しかし、一夏の野郎……いい加減うつつうしいな。ここいらで活でも入れておくか……。

「一夏。怖いんならここからさつさと出てけ。邪魔だからな」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないのなら無理強いはいしない」

俺と姉御の言葉を聞いて覚悟が出来たのか、先ほどまでの腑抜けた感じが消え失せた。

「やります。俺が、やって見せます。それからデュオ！誰が逃げるか！！」

「へっ、そうこなくっちゃな！！」

覚悟に満ちた目でこちらを指さしながら言い放つ一夏に俺はじゃっか嬉しく思いながら答えると、

「それでは、作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度がだせる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。丁度イギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

ここで、『パッケージ』というモノの説明をしておこう。全てのISにはこの『パッケージ』、つまりは換装装備を持っている。パッケージとは単純な武装でだけでなく、追加アーマーや増設スラスターなどの装備一式を示しておりその種類は豊富で多岐にわたる。中には専用機だけの機能特化専用パッケージ『オートクチュール』というものが存在する。これを装備することで機体の性能と性質を大幅に変更し因みに俺の隠密用強化パッケージ『ナイトメア』もこの『オートクチュール』に分類される。

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「ふむ、それならば適任」

「待った待った。その作戦ちよつと待ったなんだよ！」  
姉御が言い終える前に場に似つかわしくないほど明るい声が待ったをかけた。

しかも、その発生源の天井を全員が見上げると篠ノ之束が逆さに生えていた。そこからとうつ！と掛け声と共に空中から一回転し着地すると、姉御に近づき何やら騒ぎたてた。

「・・・束、出ていけ」

篠ノ之束の登場に姉御は頭を押さえながらバツサリと切り捨てた。

「聞いて聞いて！　ここは断・然！　紅椿の出番なんだよっ！」  
「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！　パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ！　紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ほら！　これでスピードはばっちり！」

篠ノ之束が姉御に説明し始めると、メインディスプレイを乗っ取ったらしく福音のデータは紅椿のデータへと変わっている。

「説明しましょーそうしましょー。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型のISの装備なんだよ！」

・・・なんだと？

「はい、ここで心優しい東さんの解説開始。いっくんのためにね。へへん、嬉しいかい？ まず、第一世代というのは『ISの完成』を目標とした機体だね。次が、『後付武装による多様化』

これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』。空間圧作用兵器にBT兵器あとはAICとか色々だね。・・・で、第四世代というのが『パツケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いっくん理解できましたか？先生は優秀な子が大好きです」

「は、はあ・・・。え、いや、えーつと・・・？」

まあ一夏が混乱するのも無理はねえわな。世間では未だ第三世代の試作が出てきている段階だ。俺の死神は第四世代タナトスだが、これを知ってるのは一握りの人間だけだし・・・。

「ちつつちつ。東さんはそんじょそこの天才じゃないんだよ。

これくらいは3時のおやつ前なのさ」

コイツのこの軽い発言にはかなり苛立つ。自分が言っていることの重大さに対してこの無責任さはいかほどのものだ？

「具体的には白式の『雪片式型』に使用されてます。試しに私が突っ込んだんだ」

「コイツは流石に驚いた」

「コイツは流石に驚いた・・・。つーことは何か？『白式』も第4世代機つて事になるのか？

「それで、うまくいったのでなんとんと紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてあります。システム最大稼動時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ！」

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待ってください。え？ 全身？ 全身が、雪片式型と同じ？ それつて・・・」

「うん、無茶苦茶強いね。一言で言つと最強だね」

ここにいる全員、姉御を除いてだが、全員があっけに取られてしま

った。

「っていうより、最強・・・ね。その言葉がどれだけ重いか、わかってんのかこの女？」

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代機の目標である即時万能対応機リアルタイム・マルチロール・アクトレスつてやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

篠ノ之博士の様子とは全く別のベクトルのテンションで、周りはいんと静まり返っている。

「はにや？ あれ？ なんでみんなお通夜みたいな顔してるの？ 誰か死んだ？ 変なの」

この女、いい加減ふざけるのも大概にろよ・・・。  
各国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材の全てをつぎ込んで競っている第三世代型ISの開発。その、途方も無い努力がまつたくの？ 無意味？ と言っているのにも等しいのだから。こんな馬鹿な話はない。

これじゃあ、シャルやラウラ達のやってきた事が報われねえじゃねえか・・・。

ギリツと爆発しそうな怒りを歯が砕けるくらい噛んで必死に抑えた。

「束、言つたはずだぞ。やりすぎるな、と」

「そうだったけ？ えへへ、つつい熱中しちゃったんだよ」

「あ、でもほら、紅椿はまだ完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、いつくん。いつくんが暗いと束さんはいたずらしたくなっちゃうよん」

そんな顔にしたのはテメエだろうが・・・！

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすくらいは夕食前だよ」

なるほどな・・・。

「もついいよな？ 時間は限られてんだあんまり無駄にするわけには

いかねえからな・・・今回の作戦は俺と一夏、それに筈の三人で実行するって事でいいかい、姉御？」

俺の言葉に姉御は頷くと、

「ああ、作戦の内容はデュオのHJで二人を隠し、『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルに出来るだけ接近した所で織斑と篠ノ之が一気に対象に近づき、『零落白夜』れいらくひやくやで墜す。なにか異議のあるものはあるか？」

姉御が尋ねるがだれも異論がある様子はなかったのを確認すると、  
「よし、なら各自作戦を、た、大変です織斑先生！！」どうした、  
山田先生？」

姉御が会議をしめようとする途中山田先生が慌ててそれを遮った。

「たつた今はいった情報で、『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルの後方からアンノウンが・・・！？」

「なんだと!？」

山田先生の言葉に姉御だけでなく俺達にも動揺が走った。

それになんだ？この異様な胸騒ぎは・・・？

「先ほど突然リーダーに姿を現し、迎撃にむかったアメリカ・イスラエル連合の軍用IS一個小隊がわずか数十秒で壊滅した模様。その後、時速二七〇〇キロを超える速度で真っ直ぐこちらにやってきます」

「アメリカとイスラエルの軍用IS一個小隊をモノの数秒で壊滅だと・・・!？」

山田先生の言葉を聞いてラウラは驚愕の声を上げた。

まあそれも仕方ないだろう・・・。ラウラは現役軍人だ。アメリカとイスラエルの両軍のISを相手にしてたつた数秒で壊滅に追いやるなど普通は不可能だ。

「・・・」

姉御もそいつが余程の実力者だとわかったらしく目を険しくしている。

ま、しゃーないか・・・

「姉御、俺から一つ策がある」

「ええ!?」「」「」「」  
俺の一言に山田先生を含め一夏達が驚いているが、姉御は更に目を  
険しくしてこちらを見つめてきた。  
「……それはどういうものだ?」  
「どうやら、俺の言いたい事がわかったらしい。  
……へへっ流石は姉御だ……」  
「それは」

「本当に大丈夫なのかよ、デュオ?」  
作戦開始直前、一夏が心配そうに俺に尋ねてきた。

「なんだよ一夏。人の心配か半人前?」

「ああ、だつていくらなんでもこの作戦は……」

俺が言った嫌味を華麗にスルーし一夏は心配そうな目でこちらを見  
てきた。

「……」

「ゴツツ!」

「あだつ!?」

「なに一丁前に人の心配してんだ?十年早えーよ半人前」

いい加減視線が鬱陶しくなってきたので額を軽くコズいてやると、  
一夏は大げさにのけ反り若干涙目になりながら此方を睨んできた。

「イツテエーな、デュオ!なにすんだよ!」

「うるせー。男に心配されたかねえよ。それと涙目でこっちみんな、  
男の涙目は気持ちワリー」

「理不尽だ!!」

ま、コイツが心配するのもわかるけどな……。

今回の作戦というものは『俺がアンノウンを相手にしている間、一夏と箒が『銀の福音』<sup>シルバリオ・ゴスベル</sup>を撃破する』といった案外単純な作戦である。ただでさえ厄介な『銀の福音』<sup>シルバリオ・ゴスベル</sup>に更にはアメリカ・イスラエル連合小隊をモノの数秒で撃破するアンノウン。この二機を合流させるのは災厄のケースだ。コースから見ても確実に合流する事は自明の理。そこで、この二機を合流させないように俺がアンノウンを足止めし、その間に一夏達が『銀の福音』<sup>シルバリオ・ゴスベル</sup>を墜す。その後はシャル達がアンノウンを足止めしている俺の所に加勢にきてアンノウンを墜とすという内容だ。

え？何で最初つからシャル達と一緒に戦わないんだって？そりゃあ、万が一失敗した場合に俺一人の方が生存率が高くなるからに決まってるじゃん。まあこの作戦を言った時はシャルや真耶ちゃんに猛反対されたけどな……ついでに一夏も……。

でもまゝ結局は姉御の許可を出しちまってこの作戦が採用になっちゃったから結果オーライ？ってやつだ。

「？どうしたんだ、デユオ？そんな遠い目をして??」

「いや、この作戦終わったら寿司食いてえな〜っと思ってるな？」

「あゝなるほどな。ここの刺身は結構うまかったから寿司にして食べば更に美味しい！ってか？でも俺はどちらかといえば海鮮丼が食いたい」

「おおっ！一夏、中々趣味がいいな」

「何の話をしているのだお前達は……」

俺達が作戦を終わってからの事を話しあっていると箒が調整を終えて来た。

「ん？よう、箒。そっちの調子はどうだ？」

「ああ。すこぶる調子がいい。ふふっ今から待ちきれないな……」

「……」  
なんか、いつもの箒らしくねえな。良く言えば機嫌がいい。悪く言えば調子に乗ってる？おいおい、何だかかなり不安になってきたぞ。

今の幕の状態はかなり危ない、戦場ではこういう自分の力を過信する者から死んでいく。

「……………」

「……………(コクツ)」

一夏に目配せさせると一夏も気付いているらしくわかった様に頷いた。

「おしつ！んじゃあそろそろ時間だから先に行くぜ？」

「ああ、気をつけるよ？」

「だ〜から！心配すんのは十年早いっつの」

そういつて一夏に笑いかけると俺は首に下がっている黒い口ザリオ

タナトス死神に意識を向けた。

「さあ、行こうか。相棒」

そう呟くと同時に黒い粒子の光が俺の全身を包み込み、ものの数秒で相棒タナトスのISアーマーが展開された。ただし、そこにはいつもの装甲に加え、腰の側面の部分と背中に灰色の棺桶が計五個浮遊していた。これこそ、本国から送られてきた隠密用強化パッケージ『ナイトメア』だ。

これを装備する事によりハイパージャマーの出力が今までの倍アップする。リミッター状態でも解放状態と変わらない出力がだせるが、解放状態の時のテストが終わっていないので俺でもどうなるかわからない。

まあでも、解放状態はいくらなんでも使う事にはならないだろう……。

隠密用強化パッケージ『ナイトメア』とのリンク良好。ハイパージャマーの出力安定、ハイパージャマー発動  
そして俺は姿は完全に消え、そのまま飛翔した。

(そろそろ、アンノウンの予測接触地点だな・・・)

ハイパージャマーの出力を発動しながら飛行していると、突然オーブンチャンネルが開いた。

「姉御？どうしたんだ、もう直ぐ作戦予測地点につくんだぜ？」

『そんな事はわかっている。だが、織斑達が戦闘に入った。そちらから確認できるか？』

そう言われて周囲を探索していると、見つけた。どうやらここからそう遠くない位置にいるようだ。

「ああ、見えたぜ。結構近い位置にいるな」

『そうか、アンノウンの方はお前に任せる。だから、死ぬなよ？』

そういつてきた姉御の顔は何時もと変わらないが目はとても心配そうにしていた。

「ああ、生憎と俺は悪運は強い方だね、心配すんなって。・・・と、

奴さんを確認した。通信を切るぜ」

そういつて通信を切ると、視線を前に向けた。

海上をものごい速度で飛行してくる機体が真っ直ぐ一夏達の方へ向かっている。機体全体を覆うフードの所為でハッキリ見えないがどうやら進路はこちらに気付いてないようで真っ直ぐ一夏達の方へ向かっているの間違いないだろう。

(さあつて、それじゃあ挨拶代わりに奴さんのスラスターを潰してやるるか・・・って?!)

突然アンノウンは進路をこちらに変え右腕に装着されている武器を？こちらに？向けてきた。

そして・・・

ドウウンッ!!!!!!

「な、なんだと!？」

右腕から放たれた高出力ビーム砲が真っ直ぐこちらに向けて狙い撃つてきた。

慌てて、ハイパージャマーを解除しその攻撃を回避してアンノウンの方に視線を向けるとフードを取り去りようやく機体が見えてきたが、

「な、なんで……」

そのフードを取り去り露わになった機体に俺は見覚えがあった。

「なんで、ライトニング・バロン閃光男爵が……」

一夏の白式のような白をベースにした重騎士のようなISフレーム、普通のISでは考えられない様な背中の二機の大型スラスタ。そして、顔の半分を覆う以前とは形状が少し異なるが見覚えのある兜、いや仮面といった方がいいだろう。

まちがいねえ……

「おまえは……ゼクス!?」

俺が叫ぶと白い襲撃者　　ゼクス・マーキスは左手に装備されている盾からビームサーベルを引き抜くと、

「久しいな、デュオ!!」

その声と共にこちらに急加速してきた。

「!?!」

加速しながら向かってくるゼクスにこちらにもビームシザースを構えて応戦を試みる。そして……

ガッギーン!!

久しぶりの同輩との挨拶は刃と刃をぶつける事だった……。

死神と臨海学校、その五、銀の福音鳴る時、閃光男爵が翔る（後書き）

「デユオと!」

「カトルの!」

「Q&Aコーナー改め、『教えて、死神先せん!』」

「……で?何だよ前書きのアレは?」

「いえ、前書きにも理由があるように作者も夏の暑さにやられてしまつて、後から冷静に考えてとても無謀なことを考えたと気付いたようですな」

「んなモン当り前だろうが。だから俺はいつたんだぜ?正気か?つてよ」

「まあまあ、その事については作者も反省しているらしいですから……」

「まあいいけどよ。それよりコーナー名が変更されてるけど?」

「ああ、それはいつもでも『Q&Aコーナー』じゃありきたれてい  
るから、この名前の方が読者の印象がいいだろうと思って作者が……」

「いや、『教えて、死神先生!』って……これって俺の事か?」

「そつみたいですよ?」

「……はあく、つたく勝手なことじゃが……」

「ふふつまあいいじゃないですか。それより、何と質問が来ている

「んですよ!」

「マジか!?!」

「はい、マジです。という訳で前振りは無くしてこのコーナー初の質問者はこの世全ての悪さんからです!」

? ヒイロやトロワ、ゼクスに五飛の登場は??

「あゝこれね? この作品ってガンダムWのキャラって俺とカトル、それにラシード達マグアナック隊しか出てねーモンな。後はトリーズもまだ名前だけしか出てねーし・・・」

「というかこれって作者に向けてのものですよね?」

「まあいいんじゃない? 折角質問が来てんだし、んじゃあ俺が作者の代わりに応えるが、今回の話を読んだ通りゼクスが登場したぜ。後はヒイロとトロワ、それとその二人に密接に関係してた人たちを出すらしいぜ? 例えばヒイロだったらリリーナ、トロワだったらキヤスリンといった面子だな」

「あれ? 五飛は出さないんですか?」

「・・・アイツがいるとこの作品がかなり拗れるのが目に見えるからな」

「なるほど・・・という訳で五飛ファンの皆さん申し訳ありません」  
「すみませんでした」

「結局、質問はこれで終わりか」

「まあ、一つでも来ただけでも良かったじゃないですか」

「まあな」

「それでは次回の予告に入りますよ？」

「おう！次回は激闘するデュオとゼクス。そんな中デュオにある知らせが……」

「次回もよろしくお願いします！」

死神と臨海学校、その六〇墜ちる白、嘆く赤、決死の死神（前書き）

アンケートの途中経過を報告します。

現在

- 1 ・予告した通り新連載やりな！
- 2 ・もう、この作品一本にしね？ 二票
- 3 ・この作品とゴッドイーターの二作品で！ 一票
- 4 ・この作品と真剣で私に恋してる！の二作品で！ 一票
- 5 ・むしろ今のまま現状維持・・・ 一票
- 6 ・この作品とケンイチの作品の二作品で！（ただしその場合今あるケンイチの作品を削除し新しくします）  
といった感じです！アンケートに答えてくださった読者様に感謝を。そしてこの作品を読んでくださる読者様にも感謝を送りたいと思います。

アンケートの〆切は8月31日の24時までです。



「・・・」  
ハッキリ言ってこの時デュオは迷っていた。ゼクスの言う事は身に覚えがある。

「デュオ！この腐った世界を正すために私と共に来い！」

そういつてゼクスはビームサーベルを収納するとデュオに向かって右手を差し出した。

「・・・」

デュオは一瞬考えるように下を向きそれから何かを決意したかのようにつつくりとゼクスに近づいていった。

「デュオ・・・」

ゼクスもデュオの行動に安堵したのか自然と口元が綻んだ。

そしてデュオがゼクスの手を掴もうと手を伸ばそうとした瞬間、

「ッ!？」

バツ！

「オツラアツ!!」

ブオンツ!!

バスターシールドをダガーモードにしてゼクスに斬りかかったがゼクスはあっさりと回避してしまった。

「デュオ・・・!! 一体どういうつもりだ!？」

「ヘッどどういうつもりも何も・・・こういう事だよ!」

そう言う時デュオはビームシザーでゼクスに斬りかかっていった。

「ええいっ!!」

ゼクスもビームサーベルを展開すると斬りかかってきたデュオを迎え撃つ。

「バカな・・・貴様解っているのか!？そこにはいつか背中から撃たれるかもしれないのだぞ!？そのようなリスクを背負ってま

でそこにいると言っのか!? 最早、我々ULTIMATEに居場所  
などないというのに・・・!?」

「居場所がないって誰が決めたあ!!」

「!?!」

ガツギンツ!!

ゼクスは二機の大型ブースターを噴かせデュオを引き? そうとする  
がデュオの猛攻がそれを許さない。

「居場所がねえならつくりやいいだろうが!! テメエはそれすらし  
なかつたんじゃねえのか!?!」

「!?!? 知った様な口を

「それになあ!」

デュオの叫びに似た訴えにゼクスは仮面越しでもわかるぐらい苦虫  
を噛み潰したような顔をし、左手の盾に内蔵されているヒートウイ  
ップで薙ぎ払うがデュオはそれを難なくかわし、お返しといわんば  
かりにビームシザーズを振り降ろした。

「それぐらいのスリルがなきゃあ、人生面白くねえだろうが!!」

「ぐうつ! そ、そんな理由で・・・!!?!」

振り下ろされたビームシザーズをゼクスはシールドで受けながら後  
退し、デュオはビームシザーズをゼクスに突きつけ笑いかけた。

「そんな理由で充分だろ?」

「!?!?・・・そうか・・・」

デュオのその一言でゼクスは覚悟を決め、ビームサーベルを突きつ  
けた。

「ならば! 力づくでお前をつれていくまでだ!!」

「へっ! やれるもんなら・・・」

ゼクスはビームサーベルを構え背中の中核の大型バーニアスラスタ  
ーユニットを限界まで力を溜め、デュオもビームシザーズを構えス  
ラスターに力を溜める。

「やってみるお!!」  
瞬間、二人は溜めに溜めたスラスターの力を開放し、本日二度目の大激突をした。

「クソツ!」

ゼクスと戦闘になり、一体どのくらいの時間が立っただろうか……?

一夏達は無事だろうか……?

「戦いの最中に考え事とは関心せんな、デュオ!」

「うおわあっ!?!」

斬りかかってくるゼクスの攻撃をなんとかかわし、お返しといわんばかりにビームシザーを薙ぎ払うがゼクスはライトニング・パロン閃光男爵の2基の大型バーニアスラスターユニットで難なくかわしてしまう。

(クソツ! 相変わらずコイツの戦い方は無茶苦茶だぜ!)

ゼクスの戦闘スタイルはチェンジオブベース緩急飛行を使った高速戦闘。しかもコイツは最高速から急停止の往復ビンタといった強引なチェンジオブベース緩急飛行を平然と何回も何回も使っているのだからこつちとしてはたまったもんじやない……。幾ら、俺達アルティメットULTIMATEが常人より丈夫な体をしているからってこんな芸当が出来るのはゼクス以外出来ない。

(それに……)

ブウウン……

「ムッ!……そこかつ!」

「チィツ!」

ハイパージャマーで完全に姿を消したのにゼクスは的確に右腕に装備されているメガキャノンで狙い撃ってくる。

ハイパージャマーの故障か?

違う、作戦前のメンテナンス

に何の問題もなかった。

ゼクスのIS『ライトニング・パロン閃光男爵』の特殊装備か?

それは無い。

このハイパージャマーは何処の国にも技術提供されていないし、本国にも情報は入っていないのだから対抗策があるはずもない。なら何故か、それは……

（相変わらず、反則じゃねえのか！？アイツの予知能力は！？）  
そう、ゼクスに限らず俺達ULTIMATEには普通の人には絶対にあり得ない能力、一般的に言うなら超能力が使える。

これが俺達、ULTIMATEとラウラ達遺伝子強化試験体との絶対的な違いである。

まあでも、超能力とはいつてもただ単に体内に埋め込まれているナノマシンが突然変異を起こしてある機能に特化した能力、俺達はこれを特殊能力と呼んでいる。

ゼクスの特殊能力は人並み外れた超速思考から導き出される限りなく予知に近い未来予測的中率はかなり高い。というか、俺は外した所を見た事がない。

もちろん、俺にもゼクスとは違う超能力を持っている。が、今はそんな事はどうでもいい。

（問題はどうかやってコイツの予知能力を掻い潜るかだ……）  
「どうしてデュオ！動きが鈍くなっているぞ！！」

そう言いながらゼクスはメガキャノンを連射形態にこちらに向かって連射してきた。

「それはただの身間違いだな！それにしても俺の知っている閃光男爵とは随分と違うな！」

「フン、違うも何もこれは閃光男爵が『第二形態移行』した姿、閃光伯爵だ！！」

ヒートウィップで薙ぎ払ってくるゼクスの攻撃をなんとかかわす。  
「『第二形態移行』だと！？厄介なものになっちまいやがって……

！！」

（通りで俺の知ってる閃光男爵とは武装や装甲の形状が違ってるわけだ！スピードなんて俺が知ってた時よりかなり上がってやがる）

「先ほども言ったはずだ……」

「!?!」

ゼクスは急上昇しメガキャノンの砲口をこちらに向けてきた。

「ヤベエ!」

「戦闘中に考え事は命取りだと!!」

ズドオオン!!

「クソオ!!」

真上からくるゼクスの砲撃を紙一重でかわす。

ハイパージャマーを使った戦法が使えない以上、こちらに決め手となるものは無い。

「コイツは、マズイかもな・・・」

戦況は確実にこちらが不利、一夏達が援軍にやってくるのならまだ勝機はあるが流石にまだ無理か・・・。

「こうなりやあ、とことん付き合ってやるかあ!」

そう覚悟を決めるとバーニアを吹かしてゼクスに突撃し、ゼクスもビームサーベルで応戦した。

『デュオ! 応答しろ、デュオ!』

ゼクスと激しい剣劇を繰り広げていると千冬から回線が開いた。

「なんだ、姉御オ! 生憎とこっちは今、手が離せねえんだがなあ!」

「オオツ!!」

「!?!? っでりやあ!!」

今現在俺達は高速戦闘になり、一瞬も気が抜けない状態なのだ。そんな状態を姉御が気付いていないわけではない。

『そちらの状況も把握している。だが、今すぐそこから撤退し織斑達の救援に迎え』

千冬言葉に俺は災厄の展開が頭に過った。

「お、おい、姉御……。まさか……」

必死に動揺を隠しながら千冬に尋ねると、

『ああ、作戦は失敗だ。織斑が撃墜され、篠ノ之が動けない。こちらも救援に行きたいが白いトールラスが現れ足止めされている』

（最悪じゃねえか！？どうする！？今この状況でゼクスに背を向けたら確実に墜とされる！かといっては一夏達にも救援に行かねえといけねえ！！）

「どうした、デュオ！動きが鈍くなっているぞ！！」

「！？ツチイ！」

この状況をどうやって切り抜けるかと考えを巡らせていると、その隙をついたゼクスのビームサーベルが迫ってきた。

（やるっしかねえか……！！）

腹を括った俺はハイパージャマーを発動させた。

「なっ！？」

二人に分身した俺を見てゼクスは一瞬だが完全に動きを止めた。

（今だ！）

そして、姿を消した俺は更にもう一体姿を消した分身を創り出しその後、ゼクスに悟られぬよう一夏達の方へ全速力で向かった。

「！！これは実体のある分身……。本体は隠れて私に一撃を入れるつもりか！」

どうやらゼクスは？あの事故？が原因で予知能力ブレイクの能力が低下していたらしい。

（それに、思っていたより一夏達との距離が近い。これなら一気に一夏達のもとにいける！！）

そして俺は最大加速で一夏達の元に急行した。

「一夏っ、一夏っ、一夏あ！！」

美味くゼクスを攪乱し、一夏達の元へ急行しているデュオ時、箒は一夏を抱き抱えながら必死で一夏を起こそうとした。

最初は順調だった。銀の福音シルバリオ・ゴスベルをあと一步のところまで追いつめたが海上に密漁船が現れ一夏はその船を助けるため最大のチャンスを棒に振った。

箒は犯罪者など庇うな！といったが一夏はそんな箒を見て悲しかった。力を手にしたからといって弱者の事なんてどうでもいいというそんなの箒らしくないと、一夏のその言葉に箒は動揺し立ち止まってしまう、具現維持限界リミット・ダウンまで起ってしまった。

そしてそんな決定的隙を見逃すほど暴走した銀の福音シルバリオ・ゴスベルは優しくはない。具現維持限界リミット・ダウンしてしまった箒に向かつて銀の福音シルバリオ・ゴスベルは光弾を放った。が、その時一夏が箒と銀の福音シルバリオ・ゴスベルの間に割って入り自身の身を盾にして箒を庇った。

結果一夏は撃墜されISの防御機能を貫通した熱波に焼かれ火傷を負いISの操縦者保護機能によって気絶してしまった。

そして……

「一夏あ、一夏あ」

箒は撃墜され墜ちていく一夏を抱き止め戦意を完全に失いうわ言の様に一夏の名前を呼び続けていた。

「La……」

しばらく銀の福音シルバリオ・ゴスベルは興味深そうに二人のやり取りを見ていたがやがてつまなくなつたのか、光弾を一つ造り出し無造作に二人めがけて放った。

「あ……」

箒は迫りくる光弾をただ茫然と眺めていた。そして……

ドッガアアン！！！！

爆炎、具現維持限界リミット・ダウンしている状態の紅椿では万に一つの可能性で助

かる事は無い。が・・・

「どつちやら・・・」

「!?!」

「あ・・・」

煙が晴れる。そこには・・・

「ギリギリ、間に合ったみてえだな!!」

その悪魔の様な黒い翼を開き、背後に灰色の棺桶を従わせた黒い死神が箒達を守るように立塞がった。

『アクティブクローク』の電磁フィールドの許容量を超えました。『アクティブクローク』を強制解除します。

そう表示されると同時にアクティブクロークが開いた。

最大加速で一夏達の空域に向かい銀の福音の光弾をギリギリ『アクティブクローク』で防いだものの、ゼクスとの戦闘で『閃光伯爵のメガキャノンを防ぐのに使用しすぎたためでもあるが、一撃でアクティブクロークが解除されてしまった。それに・・・

(シールドエネルギーも残りすくねえからハイパージャマーを使ったらすぐにエネルギー切れになっちゃう。更に、後ろにいる箒はハッキリ言っただけで足手まといだ・・・)

「マズイか・・・」

状況は最悪。だが、ここにゼクスがいなければまだマシといった所っかつ!?!?

ズドオオン!!

「あぶねえ!!」

真横から迫りくる極太のビーム砲を慌てて後ろに回避する。目の前を通り過ぎるビームに俺は見覚えがあった。

(まさか!?!もうこっちに気付いたのか!?!幾らなんでも速過ぎるだろ!?!?)

「随分と小賢しい真似をしてくれたな、デュオ」

ビームの来た方向に振りかえるとそこには白き重騎士が先ほど何の変りもなく佇んでいたのだから。

「小賢しいってのは酷くねえか?アレも立派な戦略だぜ、ゼクス?」  
軽口を言うものの内心ではかなり焦っていた。銀の福音シルバリオ・ゴスベル一機だけならまだ逃げのびる事は出来た。だが、ゼクスまで来てしまったら・

(こりゃあ、覚悟を決めるしかねえか……)

「箒」

「な、なんだ、デュオ?そ、それより!一夏が」

「一度しか言わねえぜ、今すぐ一夏を連れてここから撤退しろ。殿は俺がやってやるからよ」

箒の言葉を無視し俺はそういった。

「なっ!?!何を言っているのだ!?!そんな事」

「馬鹿野郎お!!状況が理解できねえのか!?!このままじゃ三人共死ぬぞ!?!」

「っ!?!?」

俺の死ぬという言葉に箒は目を見開き顔色も悪くなっていった。

「早く行けえ!?!」

「!?!すまない……デュオ……」

その言葉と共に箒は一夏を抱えて旅館の方へ撤退していった。

「Laaaaa……!?!」

逃がさないと言わんばかりに銀の福音シルバリオ・ゴスベルが撤退していく箒達に向かって光弾を撃とうとしている。

「させるかあ!?!」

「っ!?!?」

エネルギーがチャージし終わる前に俺は瞬間加速を用いて一気に加速し、ビームシザースを振り降ろしたが、銀の福音はいとも簡単に避けてしまった。

「目標を変更。迎撃行動に移行」

オープンチャンネルからの機械音声と同時に銀の福音はこちらに向けて急加速してきた。

「私を忘れて貰っては困るな!!」

「ゼクス!? チイツ!!」

別方向からはゼクスが迫り完全に挟みうちの状況になってしまった。

「ゼクス、テメエ! 二対一とは随分と卑怯じゃねえか!？」

「フンツ! 生憎とこちらも手段を選んでるほど余裕はないのでな!

! 卑怯と罵られようと今は使命を優先させる!!」

「こなくそお!!」

迫りくる光弾、破壊的なビーム砲と空を切り裂くビームサーベル。

最悪とっていい二機の猛攻に俺は防ぎ避けるしかなかった。そして遂に……

emergency。シールドエネルギー残量0。具現

ツト・タウン  
維持限界

そのメッセージと共にビームシザースのビーム刃が消え、ナイトメアも光りの粒子となって消え、顔を覆っていたバイザーも消えた。

(状態は最悪。撤退するどころか、まともに動けるエネルギーもほとんど無え。対して、相手は二機とも健在、か……参ったね……)

悪魔の翼の様なアクティブブロークはボロボロ、死神の装甲も所々砕けたり、火花が走っていた。

(最後に残った武器は……コレしかねえか……)

今自分が持っている最後の切り札を確認したため息を吐いた。

これは出来れば……いや、絶対に使いたくはなかった。

(シャルやラウラが悲しむかなあ)。姉御は……どうだろ? 楯無は……看病と称して襲ってきそうだな)

使った後の事を考えて、もう一度ため息を吐き、苦笑した。

「最後に聞こう。投降する意思はないか？」

武装を解除しないまま、ゼクスが問いかけてきた。銀の福音シルバリオ・ゴスベルはとうとう上空で俺達の様子を覗っていた。

「無いね」

「・・・そうか・・・ならば!!」

そう断言するとゼクスは一瞬落ち込んだような素振りを見せたが、すぐさまビームサーベルを構え、

「気絶させてから連れ帰る!!」

加速して一気に迫りビームサーベルを振りかぶった。

（待ってたぜ・・・。そう来るのをよお!!!）

「なっ!?!」

ガシッ!!

ゼクスがビームサーベルを振り下ろす瞬間、俺は最後のエネルギーでゼクスに接近し両腕を拘束し更にアクティブクロークを閉じゼクスを拘束した。

代わりに俺もゼクスから離れられねえがむしろ好都合だ。

「は、離せ! デュオ、何のつもりだ!?!」

「決まってるだろ、ゼクス。お前を倒すためさ」

「何だと、貴様のISにもうそのようなエネルギーは・・・ハ

ッ!?!? ま、まさか、貴様・・・」

「そうさ、自爆って手がまだ残ってるんだよ」

自爆装置を作動させますか? Yes / NO

そのメッセージが表示されると同時に流石のゼクスも慌てだした。

「しょ、正気か貴様!?! いくら我々ULTIMATEアルティメットが人より頑丈であろうと自爆などしたら

「ああ、助からねえかもな。それに下は海、仮に爆発で助かったとしても海に落ちて溺れ死ぬだらな」

「そこまでわかっていて何故!？」

何故ってそりゃあ……

シルバリオ・ゴスヘル

「そりゃあ、銀の福音よりお前の方が厄介だからさ。一夏達なら銀の福音くらい倒せる。ただだよ、ゼクス。流石にお前の相手は一夏達には荷が重すぎる。だからよお!！」

ギツギギイイイ……

「ぬううう!!！」

更に拘束を強めゼクスの身動きを完全に封じようとする。ゼクスは此方の予想外の力に驚きながらも拘束を解こうともがく。

「俺と一緒に地獄に行こうぜ!!！」

Yes

瞬間、海上を巨大な爆発が起った。

「……………」

そして、その様子を銀の福音より、シルバリオ・ゴスヘルはるか上空の雲の中から監視している謎のISがいた。

そして、爆発を確認するとその？天使の様な翼？を羽ばたかせ爆心地に急降下していった。

死神と臨海学校、その六〇墜ちる白、嘆く赤、決死の死神（後書き）

「デュオと！」

「カトルの！」

「教えて、死神先せうい！！！」

「つておい！なんだよ今回の話！！！」

「??？何か変ですか？」

「変だろ！？普通ヒイロの役目だろうが！！なのに何で俺がやってんだ！？無事なのか俺！！？」

「まあまあ、無事ではないと思いますが、生きてると思いますが？主人公ですし……」

「つてなんだか説得力あるな……その言葉……」

「でしょ？では早速質問コーナーに移りましょう。まず最初の質問者はデュオ……偶々名前が同じですよ？デュオさんからの質問です」

？デュオの恋人さんは出るんですか??

「デュオの恋人というとWで言うヒルでさんですね。もちろん出ますよ」

「ここじゃあ言えねえが、ヒルデは俺やこの作品のストーリーにとつてかなり重要なポジションを担うけど、出番はまだ先になるみたいだぜ」

「そういう事です。では次はパクロスさんからの質問が二つです」

？デュオのISの名前はタナトスって元のモチーフのデスサイズへ

ルと名前が変わってますけど、これって他のW勢が参加した時も同様なことになるんですか？？

？最終的にデュオのヒロインは誰になる予定ですか？個人的には、シャルにしてほしいです。？

「あゝこの質問の答えはイエスだな。更に付け加えるなら俺のISのパッケージ『ナイトメア』はペルソナに出てくる『タナトス』の背後に控えている棺桶をイメージしたものだ」

「名前も一緒ですしね〜」

「他にもヒロヤトロワのウイングゼロやヘビィアームズ改カスタムも俺と同じ感じになる予定だ。実際ゼクスのツールギスも名前が違っただろ？」

「でも、武装は同じように見えましたか？」

「所々違うんだよ。まあ、そこは臨海学校編が終わってからのキャラ紹介を見るんだな」

「なるほど、最後のお楽しみってやつですね？」

「いや、それはちょっと違うんじゃないか？」

「で？二つ目の質問なんですけど・・・」

「・・・(汗)」

「結局誰にするんですか？」

「お、俺に聞くのか!？」

「当たり前じゃないですか。デュオに対しての質問でもあるんですか」  
「ら」

「い、いや、だけだよあゝ」

「まあ、実際作者もこのままハーレムendにしようかそれとも誰か一人に絞ろうか迷っているんですけどね」

「ってオイ!知ってたんなら教えてくれよ!!」

「ま、この質問に関してはまだ待つて欲しいだそうです」

「無視すんな!!」

「それでは次回の予告をしましょうか、デュオ？」  
「くうう！！わかったよ、やるよコンチクショー！！！」

「次回は決死の覚悟で自爆したデュオ、何とか一命を取り留めたものの重傷を負い危険な状態に陥ってしまった……。そこでデュオはある夢を見た」

「一方その頃、デュオと一夏を欠いたシャルロット達は銀の福音をシルバリオ・ゴスペル倒すために五人で勝手に飛び出してしまった……」

「次回もよろしくな！！！」

## アンケート結果発表

前回のアンケートの結果発表をしたいと思います。

前回のアンケートの内容は、

- 1 ・予告した通り新連載やりな！
- 2 ・もう、この作品一本にしね？
- 3 ・この作品とゴツドイーターの二作品で！
- 4 ・この作品と真剣で私に恋してる！の二作品で！
- 5 ・むしろ今のまま現状維持・・・
- 6 ・この作品とケンイチの作品の二作品で！（ただしその場合今あるケンイチの作品を削除し新しくします）

で、結果はというと・・・

- 1 ・予告した通り新連載やりな！
- 2 ・もう、この作品一本にしね？ 4票
- 3 ・この作品とゴツドイーターの二作品で！ 1票
- 4 ・この作品と真剣で私に恋してる！の二作品で！ 1票
- 5 ・むしろ今のまま現状維持・・・ 1票
- 6 ・この作品とケンイチの作品の二作品で！（ただしその場合今あるケンイチの作品を削除し新しくします）

という事で結果は2のもう、この作品一本にしね？に決まりました！！アンケートに答えてくださった読者の皆さまに盛大な感謝を。早速作業に入りたいと思います、では・・・

死神と臨海学校、その七、墜ちた死神は何を見る？（前書き）

今回はかなり遅くなってしまっして申し訳ありません。

やっぱりモチベーションをキープするのは難しく今回はかなり難しかったです。

ここらで気分転換に何か別の作品でも書こうかなとか考えてしまっうほです。

死神と臨海学校、その七、墜ちた死神は何を見る？

「デュオ！？しっかりして、デュオお！！」

「だ、ダメですよ！デュノアさん！！マックススウェル君は絶対安静なんです！！」

「デュオ・・・そ、そんな、まさか・・・」

旅館のある一室でデュオはベットに横たわっていた。酸素マスクをつけ体の至る所に包帯を巻き医療器具に囲まれ痛々しい姿で眠っていた。

その姿を見たシャルロットは取り乱し慌ててデュオに駆け寄ろうとする所を真耶に抑えつけられ、ラウラは信じられない物を目にしたかのように目を見開きへたり込んでしまった。

「デュオお！！目を開けてよ、デュオ！！」

バシッ！！

「あ・・・」

「落ち着け、デュノア」

真耶の制止を振り切ろうとするシャルロットに千冬が近づき頬を打ち険しい目で言った。

「マックススウェルなら大丈夫だ。見た目は派手だが命にかかわる様な怪我でなない」

「ほ、本当ですか教官！？」

千冬の言葉にラウラは驚愕しながらも聞き返した。

普通ならアレほどの怪我を追って無事ですむ筈もなく、かなり危険な状態だと一目でわかる。

「ああ、アイツの体は？特別？だからな」

そういった千冬の表情はどことなく悲しげであった。

「そういう訳でお前達は部屋に戻れ、デュオの看病も不要だ。今は

静かにしてやる事がコイツにとって一番の治療法だから」

「は、はい・・・」

「わかりました・・・」

シャルロットとラウラは心配そうにデュオを見た後部屋を後にした。

「あ、あの、織斑先生・・・」

二人が部屋から遠ざかったのを見計らい真耶が千冬に声をかけた。

「ん？何だ山田先生？」

「あの、やっぱりマックスウエル君を病院に連れてった方がいいと思います！」

真耶の言葉に千冬はまたか、といった感じでため息をこぼした。

「その話なら先ほども答えたはずだぞ？ダメなものはダメだ」

「で、でも！マックスウエル君の状態はかなり酷いんですよ！？全身に裂傷と火傷、更には肋骨を始めとした数か所が骨折しています！！特に胸から右腕にかけての傷は酷いなんてものじゃないんですよ！？普通なら病院で適切な処置をするべきなのに・・・」

千冬は涙目で必死で自分に訴えてくる真耶に内心嬉しく思った。心優しい彼女はデュオの状態を知ってこんなに必死に訴えてくる。

だが・・・

「君の言う事ももっともだが、病院に行くわけにはいかない」

「どうしてですか！？」

千冬の言葉に真耶は訳がわからないと言った風に問い返した。

「病院で万が一コイツの体の事を調べられたらどうする？君も知っているであろうがコイツは普通の人間じゃない。それが元でデュオが狙われる可能性が生まれる」

「あっ！？」

千冬の言葉に真耶は気付き目を見開いた。

「そうだ、ラウラと？同じであって同じではない？のだ。それに・・・」

「それに？」

聞き返す真耶に千冬は一瞬考えるそぶりを見せ、

「いや、何でもない。それより山田先生は少し席をはずしてくれないか？」

「え？い、いえ、でも……」

「なに、ほんの数分で済む私事だ」

「そ、それでしたら……」

失礼します、と行って真耶は部屋から出ていった。真耶が部屋から遠ざかるのを確認すると千冬はデュオが眠る布団の隣に座った。

「まったく、お前は最近は治ったと思ったたらまた無茶なことをやったものだな」

千冬は呆れながらそういつて未だ眠るデュオの頭を優しく撫でながら苦笑した。その笑みは夕焼けに照らされてとても美しかった。

(それにしても、あの時のあのISは一体……)

デュオの頭を撫でながら千冬はデュオが助かった経緯を思い返した。

〈回想〉

デュオがゼクスと銀の福音シルバリオ・ユクセルと戦闘している最中、千冬達のいる本部も白いトールラス三機に強襲されていた、が箒が一夏を連れてやってきた所を確認するとトールラス達は撤退していった。それと同時にデュオの信号が途絶えた。

「くっ！あの大馬鹿者が！！」

「織斑先生！？」

状況をいち早く理解した千冬が血相を変えて作戦本部を飛び出していき、真耶も慌てて後を追った。

二人が旅館の外に出ると、そこには……

「っ!?!」

「ええ!?!……て、天使?」

天使を髣髴とさせる四枚の翼をはためかせたISが羽の所為で顔はわからないが誰かを抱えながら浮遊していた。

突然の登場に千冬は目を見開き、真耶は呆然としながら言葉を紡いだ。

「貴様、何者だ」

千冬は真耶を後ろに下がらせ警戒するように身構え、謎のISを観察した。顔は白いバイザーが顔の大半を覆っている所為で確認できず、機体のカラーはほぼ白と青のツートン。そして、どこことなくデュオの『死神』<sup>タナトス</sup>と似ていた。

「……」

謎のISは千冬の質問に答えず、自身が抱えている人物をゆっくりと二人に差し出した。

「マックスウエル君!?!?」

「っ!?!?山田先生、急いで治療を!!早く!!」

「は、はい!!」

差し出された人物はポロポロで血まみれな状態のデュオであった。真耶は慌ててデュオを受け取ると脈を確認し急いで旅館内に入った。

「……私の教え子を助けてくれた様だな礼を言わせてもらう。ありがとう」

旅館内に入っついで二人を見送りしばらく身構えていた千冬は害がない事を悟ると礼を述べた。

「……」

「バサッ!!」

謎のISはそんな千冬を一瞥すると直ぐに背を向け飛び立ってしまった。

「……………」

千冬はその姿を一瞥すると、直ぐに踵を返して旅館内に入っていた。

〈回想終了〉

(フツ・・・今更こんな事を考えていても仕方ないか・・・)

そこまで思い出して千冬は苦笑しながら撫でていた手を離し部屋を出る為にドアの方へ向かい、デュオの方へ振り向くと、

「目が覚めたらたつぷり説教してやるからな」  
そういつて部屋を後にした。

千冬達がいる旅館から数百キロ離れた海底に一隻の移動する潜水艦がいた。

〈潜水艦内・ブリッジ〉

「艦長。敵影反応ありません」

船員の一人が艦長に向けて報告すると艦長と呼ばれた壮年の男は頷くと後ろにいる人物の方を向くと、

「なんとか撒けたようですね、ノイン大尉」

「ああ、なんとかな・・・」

『ノイン』と呼ばれた黒髪の麗人は組んでいた腕を解き艦長の隣まで行くと、

「だが、まだ油断はできない。引き続き警戒を怠らないでくれ」

「ハッ！・・・それで、ゼクス大佐の容体は？」

その言葉に艦長だけでなくクルー全員が心配そうにノインを見つめてきた。

「フツ・・・大丈夫だ。怪我も大したことはないし念のために医務室で治療を行ったに過ぎない」

周りの様子にノインは苦笑しながら答えると艦長を含めたクルー一同が安堵した。

「そうですか、それは良かった・・・」

「フフツ・・・さあ、お前達も仕事に集中しろ。現場から離れたからといっていつ襲撃されるかわからないからな」

「ハッ！」

「うむ。それでは後は頼む艦長」

「ノイン大尉、どちらへ？」

ブリッジを出ようとするノインに艦長は問いかける。

「ゼクス大佐の所とISの整備室の方に顔を出しておこうと思っ  
いてな。先ほどの作戦で少なからず損傷をってしまったからな」

「そうですね・・・では、ゼクス大佐によるしく言っておいては  
くれませんか？」

「フツああ、伝えておくよ」

そういうとノインはブリッジを後にした。

〈潜水艦内・医務室〉

「失礼します」

ノインが医務室に入ると顔の半分を覆うほどの仮面をつけ、それでも隠しきれないほどの長い金髪の男がベットで横になっていた。

「ノインか・・・くっ!？」

仮面の男　　ゼクス・マーキスがノインの姿を確認するとベットから体を起こした。

「ゼクス!？あまり無理をしないでください、ISの絶対防御があったと言っても消して軽い怪我ではないのですから・・・」

体を起こそうとするゼクスを助けながらノインは心配そうにゼクスの身を案じた。

「平気だ。この程度の傷、我々ULTIMATEなら直ぐに治るさ」アルティメット

「だとしてもです。今は安静にしてください」

「ああ、そうだな・・・」

心配そうに見つめるノインにゼクスは苦笑しながら壁に寄りかかり楽な姿勢を取る。

「それよりも私のISの状態は?」

「ええ、貴方のISライトニング・カウント『閃光伯爵』ですが、思ったほどダメージを受けたようでダメージレベルはC、しばらく戦闘は無理ですね」

「そうか・・・」

「???思ったより残念そうではありませんね?」

ゼクスの反応にノインは不思議に尋ねた。

「そう思うか?」

「ええ、貴方の同胞の説得に失敗し貴方も愛機も大きな傷を受けたのにかかわらず、むしろ嬉しそうに感じます」

ノインの言葉にゼクスは口元に笑みを浮かべながら、  
「デュオと戦って命があっただけでも今日の私は運がいい、機体の事は残念だが修理すれば直るのだろう?」

「ええ、ですがしばらく戦闘は無理ですね」

「ならば、少しの休暇と考えれば悪くわなかる?」

「・・・フツ、そうですね。閣下にもゼクスには休暇を与えるべきだと言われていましたし・・・」



面に広がる。

ボウツ！

「くうっ!!」

立ちこめる爆煙の中を飛び出したゼクスは辛うじて無事であったが  
ライトニング・カウント  
閃光伯爵の装甲には所々輝や火花が散っており顔の半分を覆うほど  
の兜も輝が入っていた。

「デユオは!？」

愛機の損傷を確認する前にゼクスは慌てて爆煙の外からデユオの生  
死を確認していると、

「っ!?! マズイ!!」

ISが強制解除され血で汚れたISスーツの状態で海面に落下して  
いくのを確認したゼクスは慌ててデユオの元へ急降下していった。

いくらデユオが普通の人間より頑丈なULTIMATEでもあんな  
アルティメット  
状態で海に落ちたら確実に死ぬ。それを理解しているからゼクスは  
急ぐのだが先ほどのタナトスの自爆の影響で思うようにスピードが  
でない。

(いかん!このままでは!!)

今の自分のISの速度ではどうあっても間に合わない、そうゼクス  
が考えていると、

警告!背後から未確認ISが接近!!

「なにっ!?!」

ゼクスは驚愕しながら後ろを振り返りそのISを確認すると目を見  
開いた。

そのISは天使のような四枚の翼をはためかせ、装甲は青と白のツ  
ートン。そして胸部装甲の中心には翡翠色の球体が埋め込まれてい  
た。

「あれは……まさか『破壊天使』!?!」  
ガブリエル

高速で降下してくるそのISはゼクスをあっさり抜いて、海面ギリギリの所でデュオを抱え込むとそのままの速度で海面スレスレを飛行していった。

「あのISに命知らずな無茶な操縦方法……やはりッ!？」

ゼクスはそのISの操縦者の名前を呼ぼうとしたが上空から殺気を感じそちらを向くと銀の福音シルバリオ・ゴスベルが攻撃態勢に入っていた。

「クツ……いかん!」

普段の状態なら難なくかわせるが消耗しきった今の状態では銀の福音シルバリオ・ゴスベルの広範囲無差別攻撃を避けきれない。

警告!! 右方向より高エネルギー反応!!

「なにっ!？」

ゼクスは慌ててそちらを向くと破壊天使が一丁のバスターライフルを銀の福音シルバリオ・ゴスベルに向けていた。そして……

ドオオウツ!!

その砲口から大出力のビーム砲が放たれた。

「!!!？」

流星にこれは予想外だったのか銀の福音シルバリオ・ゴスベルは回避するが一瞬遅れ防御するが防御ごとビーム砲に押し切られ上空に飛ばされてしまった。

「……」

破壊天使はそれを一瞬確認するとすぐさま旅館のある方角へ飛行していった。

「借りができたか……」

『ゼクス!!!』

「……ノインか？」

破壊天使を見送っていたゼクスにプライベートチャンネルが開きノインの心配する声が響いた。

『よかった……!! 未確認のISがそちらに降下していったので心配していたのです』

「私なら大丈夫だ。ただし、ターゲットには逃げられてしまったがな・・・」

口ではそう言っているがゼクスの口元は笑っていた。

『そうですか・・・こちらは妨害工作を無事に終了しました。部隊の損害はゼロです』

「わかった、では向こうが混乱している今のうちに撤退するぞ。場所を事前に打ち合わせていた所だ」

『了解しました』

そして通信が切れるとゼクスはそのままその海域を後にした。

そして去り際に、

「お前は相変わらずのようだな・・・『ヒロロ・ユイ』・・・」  
その言葉を残して・・・

く回想終了く

く?????く

ヒュオオオツ・・・!!

優しい風の音が聞こえた。

「・・・ん？」

頬を撫ぜる風を感じ俺は目を覚ました。

「ここは・・・？」

目を開けると一面に晴天の空が広がった。

俺は体を起こすと、そこは依然俺が夢で見た草原だった。蒼い空に若草の生い茂る草原、前見た光景と寸分変わらない場所が目の前に広がっていた。

「何で、俺はこんなところにいんだ？確か俺はゼクスに自爆を計つてそれから・・・」

そこまで思い返して自分の体を見るISスーツではなく以前千冬とデートに行った服装になっており怪我が一つもない事に気付いた。という事は・・・？

「あゝ死んじまったのかよ俺？ハアゝ・・・って事はここは地獄か？まさか天国つてわけじゃねえよな？」

今までの自分の行いを考えて決して天国に行けるとは思っていないが地獄にしてはとも安らぎを感じる場所だ。

それにしても・・・  
「んゝでもここは日本だし三途の川つて節の方が有効か？・・・ん？」

ふと後ろから人の気配がしたので後ろを振り向くと、

「・・・どうやら俺は地獄行き決定みたいだな？」

いつか見た死神が黒いローブをはためかせそこに立っていた。

死神と臨海学校、その七、墜ちた死神は何を見る？（後書き）

今回は『教えて死神先生』はお休みです。

そろそろメインヒロインを決めよっかな〜と考えております。アン

ケートは次回の更新で・・・

死神と臨海学校、その八く覚醒する白と、舞い戻る死神く（前書き）

今回、シャルロットとラウラがヤバい事になってしまった……。

## 死神と臨海学校、その八く覚醒する白と、舞い戻る死神く

デュオが死神と対面している時、箒は鈴による活によって再び戦意を取り戻ししつつある所に、黒い軍服を着たラウラが部屋に入ってきた。

「場所がわかった。ここから三十キロの離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたがどうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で見つけたぞ。まあ、あつたとしても嫁のIS死神のハイパー ज्याマーをしのぐ者などありはしないだろうがな……」

クククツと笑い声を洩らしているラウラに鈴と箒は身震いした。なぜならその眼は一切笑ってなどいないのだから……

「さ、さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備はできているのか」

鈴は顔を引き攣っているのを自覚しながらラウラを褒めるが、ラウラは意に介した風でもなく一蹴して訪ねてきた。

「当然よ、甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方はどうなのよ？」

「ああ、それなら」

ラウラがドアの方へ視線を送ると

「準備オツケーだよ。いつでもいけるよ」

「……」

「ど、どうしたの??せ、セシリア?」

笑顔のシャルロットにそれとは対照的に目が死んでいるセシリアに鈴と箒は否応がなく心配になってきた。

「うん……。僕にもわからないんだ。インストールしている時から変だつたんだ」

何でだろうねー と笑いながら尋ねてくるシャルロットに箒と鈴は戦慄した。何故なら向日葵のような笑顔のシャルロットだが、目が

まったく笑っていないのだから。

「それじゃあ、皆行こうか？」

「ま、待てっ！行くつて一体何処に・・・？」

「決まってるでしょ？」

可笑しいことを訊くね」と笑いながら箒の方を向くシャルロットに箒だけでなく隣にいた鈴ですら鳥肌が立った。

「僕の大事な大事な大事な大事な大事な大事な大事な大事なデュオにあんなひどい怪我を負わせた木偶人形を僕が許すわけないじゃないか。ホント可笑しいことを訊くな」

「まったくだ。私の嫁であるデュオにあんな目にあわせたのだ。生きてる事を後悔させるほどの生き地獄を味あわせブチブチのグチヤグチャのミンチにしてやらなければいけないのだから」

片や向日葵の様な笑顔のだがその眼は氷の刃のような憎悪を秘め、片や極寒の大地の如く無表情だがその眼は灼熱を思わせるような憎悪を秘めた目をした対照的な二人を前にして箒と鈴はどうしようもない悪寒が襲った。

「・・・」

箒達が銀の福音シルバリオ・ゴスヘルの討伐に向かっている中、デュオは黒衣の死神と対面していた。

「まったく、死神が死神に連れてかれるなんていい笑い話だぜ」

そう苦笑しながら肩をすくめてみるが死神はなんの反応もなくただ立っているだけで何の変化もない。

「・・・」

「ん？おーい、返事ぐらいしてくんね？無視されんのはあんま好きじゃねえからよ」

軽くおどけて見るがこれもまた無視、というか無反応。

(どーしたもんか・・・)

気まずい雰囲気か漂う中、優しい風だけが吹き抜けるだけだった。

「も わ ……」

「ん？」

死神が何か喋っている。しかも、以前聞いたような壊れたラジオの様なものではなく段々と聞き取れるようになってきた。

「もうしわけ」

そう、段々と壊れたラジオが直っていくように・・・

「申し訳ございません」

死神の声が聴きとれるようになったと同時に、一際強い風が背後から吹き抜け死神のフードを吹き飛ばし髑髏の様な仮面もいつの間にか取れて死神の顔があらわになった。

「 マジかよ・・・」

黄金の髪をなびかせルビーを思わせるような紅い瞳、街を歩けば十人中十人が振り向くほどの美女が目の前に立っていた。

思わず口笛を吹いた俺は悪くない。

「申し訳ございません・・・」

「あん？」

しかし、死神はその美貌を涙で濡らしまるで懺悔するように下を向きながら再度謝ってきた。

「申し訳ありません。私が至らなかつたばかりにご主人様マスターに酷い怪我を負わせてしまいました」

「はっ？ いやいや、ちよつと待て！？ ご主人様マスターって・・・も、もしかして、お、おまえ・・・た、死神タナトス、か・・・！？」

「はい、私は常に貴方の傍におり、貴方を守るものです」

マジかよ・・・ISってのは自我が存在するって話は聞いた事があるが、まさか本当だったとはな、しかも偉い美人さんだし・・・。「つーか、ここはどこなんだ？」

「・・・申し訳ありませんが今、それを教えることはできません」

死神は本当に申し訳なさそうに謝ってくるが別にそこまで気にする事はない。

「ふーん。ま、どこでもいいがな……。それよりお前は大丈夫なのか？」

「はい。幸いコアだけは辛うじて無事でしたので問題ありません。今は自動修復が行われており、もう間もなく完了する所です」

「そいつは何よりだぜ。やられっぱなしは趣味じゃないからな」

「……行かれるのですか？」

「ああ。アイツ等俺がいねえと危なっかしいからな。俺が傍で見えないとな？」

「……」

心配してくるタナトスを安心させるようにおどけて見せるが黙って下を向いてしまった。

「だからよ……」

「え？」

「俺と一緒に地獄へ行こうぜ」

「……」

そう、いまさら自分が天国にいけるなんて思っていない。所詮、死神には地獄がお似合いだ。だから……

俺の誘いにタナトスは目を見開いたが、直ぐに決意した眼をして、

「今度こそ……」

「ん？」

「今度こそ、最後まで貴方の力になります。もうあのような無様な事にはならないために。我が刃で数多の敵を切り裂き地獄の底まで貴方と共に参りましょう」

深紅の双眸を真っ直ぐとこちらに向け相棒は迷いもなく決意を秘めた目でこちらを見つめ誓いの言葉を口にした。

「ああ、これからもよろしくな！相棒」

「はいっ！」

そう言っタナトスて右手を差し出すと相棒は嬉しそうに笑い握手をした。そ







（旅館）

シャルロットとラウラの暴走に戦闘が混戦状態に入って間もない時に真耶は慌てたように作戦室に向かって行つた。

「お、織斑先生！！た、大変です！！」

「ん、どうした山田先生？また何かあつたのか？」

慌てて作戦室に入ってきた真耶に千冬は頭を押さえない衝動を抑えながら訊き返した。先ほど五人の専用機持ちが無断で出撃して自分達はその戦況を見守っていた。真耶は一夏とデュオの様子を見る為に一旦部屋を離れていたのだ。

「そ、それが、織斑君が・・・！！」

「なに、一夏に何かあつたのか！？」

「ひうつ！？は、はい・・・そ、それが・・・」

千冬の形相に真耶は委縮するが意を決して言葉を紡いだ。

「ど、何処にもいないんです！！」

「なに？」

真耶の言葉に千冬は一瞬理解できなかつたが、次の瞬間部屋を飛び出していた。

「あ！織斑先生！？」

真耶の制止の声も今の千冬には全く入らず真つ直ぐ一夏の休んでいる部屋に向かつた。

バアンツ！！

「・・・・・・・・」

一夏が横たわっていた布団はもぬけの殻だった。布団を触ってみるとほんのりと温かかったため、抜け出してまだ間もない事がわかつた。

「……………まさかっ!?!」

千冬は一瞬何か考えるような素振りをしたが、突然何か思い当たったのか今度はデュオの寝ている部屋に向かった。

バアンツ!!

「……………な……………!?!」

部屋に入るとそこには一夏と同じで状態でもぬけの殻であり、布団の上には血の滲んだ包帯が捨ててあった。

千冬は布団まで歩み寄り包帯を掴むと、

「あ……………馬鹿者がっ!?!」

ダンツ!!

包帯を握りしめたまま拳を布団に叩きつけむなしく響き渡った。

「ぐっ、うっ……………!」

あの後福音との戦闘は苛烈を極めた。怒り狂って暴走したシャルロットとラウラだが、そこは代表候補生とドイツ軍人。暴走しながらも戦況を見極め、箒達のサポートもあり徐々に福音を追い詰めあと一步のところまで追い詰めたのだが……………

『セカンドシフト  
第二形態』

福音の頭部からエネルギーの翼が生えた瞬間、軍用という言葉で解できないほどのあるまじき性能を福音は発揮し、次々と少女達を撃墜していった。既に鈴とセシリアは蒼海に堕ち、シャルロットと

ラウラはお互いの機体がボロボロで飛ぶだけで精一杯といった状態である。そして箒は、福音に首を締めあげられ絶体絶命のピンチであった。

（これまでか……。情けない……）

福音に首を締めあげられながら箒はそんな事を考えていた。光りの翼がいつせいに輝きが増してきた一斉射撃の準備ができ秒読みが始まったのだ。しかし箒の中では死への恐怖よりもたった一人の事で頭が一杯であった。

（一夏……）

ただ、思い人に会いたかった。会いたいという気持ちだけが心の大半を占めていた。

「いち、か……」

かすれる声でその男の名を口にした。

「一夏……」

輝きが最高潮に達した時、箒は覚悟を決め目を閉じた。シャルロットとラウラの叫び声が聞えるが最早それすらも気にならなくなってしまう。

「イイインツ……！！」

「！？」

突然、福音が箒の首から手を離した。

なぜなら、福音に向かって強力な荷電粒子砲による狙撃で福音が吹き飛ばされたからだだった。

「なにが……？」

目を開いた箒は突然の事で訳がわからなかった。

「俺の仲間、誰一人としてやらせねえ！！」

その声は箒にとって願ひ思つて止まない声だった。視線の先には白く、輝く機体があった。

「あ……あ、ああつ……」

ジワリと目じりに涙が浮かび震える声でその思い人の名を口にした……。

「一夏……」

白式第二形態・雪羅を纏った一夏の姿が涙で滲む幕の前に映っていた。

「一夏、よかった……無事だったんだ……」

「フンッ……当然だろう。アイツは教官の弟だぞ？」

シャルロットとラウラはお互いを支え合いながら、一夏の姿を確認すると安堵した。

「フフッ……そんな事言ってラウラも口元が緩んでるよ……」

「ムッ……」

シャルロットのからかうような声にラウラは口を尖らせながら拗ねるようにそっぽを向いた。

「早く、福音を倒してデュオの所に帰る？」

「ああ、頑張ったんだから嫁にはご褒美を貰いたいところだな……」

「・」

「ご褒美か〜何にしよっかな〜」

そんな軽口を言いあう二人だが、やはり表情を暗い。この場にいらない思い人は無事だろうか？出来れば今すぐこんな場所から退散してあの人の元へ行きたい。

しかし、それ致命的な隙だった……。

「シャルロット、ラウラ！！逃げろーーーー！！！！！！」

「え？」「な！？」

叫ぶ一夏の声に振りかえると福音が猛スピードでこちらに向かい

銀の鐘<sup>シルバー・ベル</sup>とエネルギーの翼を二人に向けていた。福音は現状で一夏に守られている筈を撃墜するよりも弱って身動きの取れない二人を落とす方を優先した。

「くっ!?!」

一夏も後を追うが、なにぶん二人と距離があり荷電粒子砲もチャージが間に合わない。そして……

「!?!」

二人に向かって光りの弾雨が降り注いだ。

シャルロットは咄嗟にラウラに覆いかぶさり身を呈して守ろうとする。例え、そんな事しても結末は変わらないとわかっている……。

しかし、衝撃がやってくる事はなかった。

「あれ?」

「どういうことだ……?」

二人は目を開けて前を見るといまだに光りの弾雨は降り注いでいる。しかし、二人に直撃する攻撃だけ目の前で弾かれている。まるで、目の前に?見えない壁?が存在するかのよう……。

「おまえら、揃いも揃ってなんだよその様は?」

「!?!」

「え……?」

「まさか……!?!」

光りの弾雨が止み二人の目の前の空間が歪み、それと同時に声がし

た。

それは二人にとって掛け替えのない思い人の声だった。

「まったく、やっぱり俺がいねえとな〜心配で戻ってきちまったじゃねえか」

徐々に姿がはつきり見えるようになってきた。悪魔の様な漆黒の翼を広げ、背後には灰色の棺桶を従え、黒とグレーを基調にした装甲、その手には棺桶を思わせるような盾とその機体の象徴とも思える大型のビームシザー。

顔の半分はバイザーで隠れているが見えなくなっただけでわかる。その人物の名は……

「……デュオ!!!」

「おう！死神が地獄の底から舞い戻って来たぜえ!!!」

デュオ・マックスウェルと死神タナトスが地獄から舞い戻ってきた瞬間だった……。

死神と臨海学校、その八く覚醒する白と、舞い戻る死神く（後書き）

もう直ぐ臨海学校編が終わりになって来た・・・。

因みに、タナトスのモデルはフェイト・T・ハラオウンです。  
理由としては武器繋がりで・・・。（安直過ぎ）笑（）

## 緊急アンケート2

いよいよ、臨海学校編もクライマックスに突入しました。  
思えばここまで長かったな……。  
おっと……。感傷に浸る時間も惜しいので、早速本題に入りたいと思います。

アンケート内容は、ズバリ！  
どのヒロインの でいくかどうかです！！  
今まで、どれが正ヒロインにしようか迷っていたのだけれど、本編も丁度アニメ版が終わる頃あいなのでそろそろ正ヒロインを決定しようかと思えます！！

- 1 ・シャルロット・デュノア
- 2 ・ラウラ・ボーデヴィツヒ
- 3 ・織斑千冬
- 4 ・更識楯無
- 5 ・ハーレムwww

の五つの中から選んでください！！  
締め切りは十二月一日を持って締め切りますので……。どうぞみなさんよろしく願います！！



## 緊急アンケート2（後書き）

どうも、最近新しい小説を書いて挫折している神喰いの王です・・・。

さらに懲りずにまた新しい小説を書こうとしています・・・。  
でも、いくら挫折しようともこの小説だけは完結させようと思って  
います!!!

どうぞみなさん応援よろしくお願いします！

死神と臨海学校、完結編へ決着、戦いの終わりと日常への帰還へ（前書き）

なんとか、今年中までに臨海学校編が終わらせる事が出来ました。  
アンケート結果は後書きにて……  
ではどうぞ

死神と臨海学校、完結編へ決着、戦いの終わりと日常への帰還へ

「さうで、と。シャル、ラウラ怪我は無えか？」

「……………」

警戒しながら後ろにいる二人に問いかけるが、二人からの返事はない。

「？おい、大丈夫なのかよ？」

「デュオ……………」

「おう、何だシャル？」

「ほ、本当にデュオか……………」

「おいおい、ラウラ。俺以外誰だつてんだよ？俺は逃げも隠れもするが嘘だけは言わないデュオ・マックスウエルだぜ？」

そう言つてバイザーを収納し後ろの二人に笑いかけると、二人はぶわつと目に涙があふれだした。

「え！？ちょ、おい！どうした？どこかやられたか！？」

慌てて二人の方を向き、異常がないか調べようとしたのだが……

「「デュオ————！！！」」

「ぶふおつ！？」

瞬時加速を使つたかのようなスピードで二人が俺の腹に飛び込んできた。いくらシールドがあるといつても衝撃は防げないので、二人分の衝撃を鳩尾に受け胃の中身が逆流しそうになる感覚を必死で押さえていると二人の肩が震えていることに気づいた。

「ヒッグ…………デュオの馬鹿あ…………心配したんだからあ…………」

「まったく…………夫を心配させるなど、嫁失格だぞ！？…………グズツ…………」

「…………ああ、悪かったよ…………」  
肩を震わせて泣いている二人に俺はなるべく優しく二人の頭を撫でた。

「!!」  
そして、そんな隙を逃すほど福音は優しくは無く無防備な俺の背中を撃とうとするが・・・

「やらせねえ!!」

「!?!」

すかさず一夏が福音に斬りかかり、福音は回避するが一夏は距離をおかれないように追撃していく。

「さてと・・・悪いな。お客さんがお待ち何でちよっくら行ってくるわ」

「行ってくるって・・・デュオ!怪我はもう大丈夫なの!?!」

「そ、そうだぞ!?!アレほどの怪我がそう簡単に治る訳ないだろう!?!?!」

俺の言葉に二人は猛反対してくる。まあ、流石に今回ばかりは俺も死にそうだったけどよ・・・。

「大丈夫だつて!傷はもう塞がってるしアイツ程度なら一夏と協力すりゃあお釣りがくるぜ」

「でも・・・」だが・・・」

「安心しな。無傷で帰ってくるからよ」

『アクティブクローク』<sup>バシ</sup>解除。譲渡者『シャルロット・デ

ユノア』

そう言つて二人に笑いかけ、『アクティブクローク』をシャルに渡した。

「そいつで身を守ってる。今の状態のそれならアイツの攻撃は大抵は防げるからよ」

「うん。・・・デュオ」

「あん?」

シャルに呼ばれ後ろを振り向くと向日葵の様な笑顔を浮かべた彼女は、

「頑張つてね?」

「へッ・・・おう!!」

幼馴染みの激励に背中を押され俺は戦場に向かい飛翔した。

「よお、一夏。手え貸してやろうか？」

「へっ！随分と遅かったじゃないかよデユオ？」

福音と一夏がにらみ合いを続けている中、俺は一夏に気楽に声をかけると一夏も余裕そうに返事をした。

「ワリイワリイ。ちよつと地獄巡りをしててな？知ってたか？本物の死神って結構美人なんだぜ？」

「何だよそりゃ」

俺の言葉に一夏は冗談だと思って苦笑してるが、本当の事なんだけどな〜。

「まあ、んな事よりさっさとこいつを叩きつぶすか」

「おう、もう俺の仲間には指一本触れさせねえ！！」

一夏は雪片を、俺はビームシザーを構えると福音も光の翼を輝かせた。

「さあ、死神と騎士の奏でる二重奏。<sup>デュエット</sup>聞き惚れるなよ？」

「その前に一夏。今からお前に協力してほしい事がある」

「ん？何だよ急に改まって？」

「なあに、簡単なことだよ・・・」

福音に気付かれないように俺はプライベートチャンネルで一夏にある作戦を持ちかけた。作戦の内容を訊いた一夏はかなり驚き、そんな事できるのか？と目線で問いかけてきたが俺は心配すんなと笑みで返した。

『ハイパージャマー』リミッター解除。『ナイトメ

ア』システム、オールグリーン。フルドライヴスタンバイ

「さあ、魅せてやるぜ。ハイパージャマーと隠密用強化パッケージ

『ナイトメア』・・・この二つの真の性能って奴をよ！！」

フルドライブ。イグニッション！！

「な！？」

「え！？」

「何だと！？」

「！！！？」

その場にいた全員が驚いた。何故なら・・・

「どういう事だ。何故デュオだけならまだしも・・・一夏まで分身している！？」

その場にいる全員の疑問をラウラが代弁する。それもその筈だ。何故なら目の前には空を埋め尽くすほどの白と黒いちかデュオの機体で覆われているのだから。

ここでタナトスの単一仕様能力ワンオフアビリティ『ハイパージャマー』について解説しよう。タナトスの『ハイパージャマー』はISのセンサーはもちらんの事、全てのセンサーを騙すほどのステルス性をもった単一仕様能力ワンオフアビリティ。それによって姿が消えたり幻を創れたり出来るほどの性能を誇る。普段はリミッターがかけられていて普段の半分ほどの性能しか出ないが、それでもかなりのものだ。だがしかし、いくらリミッターを解除したと言ってもこんな芸当ができるわけがない。では何故か？簡単だ、この『ナイトメア』のおかげだ。コイツのおかげで俺だけでなく他人の幻覚をそれも複数作れる事ができるようになったのだ。どういう理論かは俺も詳しく知れねえが、ぶっつけ本番にやったにしちゃ出来た。

『お、おい、デュオ・・・大丈夫なのか？』

『あゝ大丈夫じゃね？どうせ直ぐにケリをつけるだ。行くぞ！！』

『おう！！』

「いくぜ・・・絶技

インフィニット・イグニッションブースト  
無限瞬時加速『鏡面地獄』・・・」

俺の言葉を合図に一斉に俺と一夏の分身たちが福音に向けて襲いかかった。

「La！！！！」

福音が翼を輝かせ広域殲滅攻撃を仕掛けようとするが、

「甘いぜ！」

ザンツ！！

「！！？！？」

いきなり背中を斬られ福音が訳もわからず後ろを振り返ると、ビームシザースを振り降ろした状態のデュオの姿があった。

「悪いな。ただの？幻フエイク？さ・・・」

福音が慌てて周りを見渡すとアレほど無数にいた一夏とデュオがどこにもいない。

「悪いねえー福音さんよ。後ろから失礼させてもらっぜ？」

ドスツ！

「！！？？」

「おっと！」

俺はビームシザースをランスモードにして事前に調べておいた福音のシルバールベルの要である中枢回路を突き刺した。

「本当はシャルとラウラを傷つけたテメエを俺が直接叩きのめしてえが・・・」

(今ので完璧に逝ったな・・・)

右腕に走る鈍い痛みには俺は顔をしかめながら、苦笑した。

回路を断絶され福音の銀の翼が輝きを失う。

「だからよオ・・・！！！」

ドガツ！！

俺はカ一杯福音を上空に蹴りあげた。

「おら、行つたぞ一夏あー！！！」

俺の分までぶっ飛ばせえ、一夏あー！！

「うおおおおっ！！！！！」

「！！？？」

福音を蹴りあげた方角に姿を消していた一夏が現れ、イグニッション・ブースト瞬時加速で一気に距離をつめ白式の多種機能武装腕『雪羅』を構え福音に叩きこんだ。

「あああああっ！！！」

「!?!?」

火花を上げ徐々にシールドエネルギーが削られていく福音にデュオは手ごたえを感じたが一つの不安があった。それは、白式の燃費の悪さである。ただでさえ第一形態時では非常に燃費が悪かったのに<sup>セカンドソフト</sup>第二形態移行してその燃費の悪さは解消されたのか? 最悪、更に燃費が悪くなるかの所為もある。それを考慮して短期の奇襲作戦をで挑んだのだが……

エネルギー残量20%。予測稼働時間約一分

「クソッ!このままじゃ……」

「ヤバいな!」

空間モニターに表示された警告文を見て俺と一夏は焦燥した。リミッターなしの軍用ISのエネルギーがどれ程あるかわからないが残り一分で倒せるとは思ってははいない。それにもし、先に白式のエネルギーが切れたら真っ先に殺されるのは一夏だ。

「チイツ!」

慌てて一夏の所に行こうとしたら、横を紅が追い抜いた。

「一夏!」

「箒!?馬鹿、危ない」

「受け取れえ!!」

箒の紅椿が白式の後ろを追走し、紅椿の手が白式に触れた瞬間、白式の全身から黄金の光が溢れだした。

「な、なんだ……?エネルギーが……回復!?箒、これは

」

「今は考えるな!!いつけえー!!!!」

「お、おう!」

エネルギーが完全回復した白式はいったん止めていた雪羅をまた発動し、ブースターを最大出力で上げた。福音は最後の悪あがきが一夏の首元へ手を伸ばしガツチリとその手が喉笛に食い込んだ所で、銀色のISはその動きを停止した。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

アーマーを失いスーツだけの状態になった操縦者が一夏の手から滑り落ち、海へ落下していった。

「しまっ ！？」

「ったく、まだまだ詰めが甘いな〜一夏」

俺は落下してきた操縦者をギリギリでキャッチし事無きを得た。

「デユオ！」

「ったく、すっかり掴んどけよ寝ら〜・・・って、ん？（コイツは・・・）」

俺はその操縦者に見覚えがあった。以前アメリカで世話になった軍人の一人だ。

（ったく・・・それなそうともっと早く言えよな・・・）

俺はため息を吐きながら、この女性に悪態をつき仲間達の元へ飛んでいった。夕闇の朱色がまるで傷ついた俺達を優しく包み込むかのような温かさを秘めていた。

「作戦完了 と言いたいところだが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいる」

「……………はい……………」

あつるえー！！？おかしいな？何で作戦成功して帰還した途端俺ら正座されてんの？何で姉御の説教受けてんの？誰か説明してくれえー！！？

あの後、俺達は旅館に傷つきながらも意気揚々としながら帰った。ただどこかで待ち受けていたのは・・・今日一番の強敵、鬼と化し

た千冬であつた。

「それから、マックスウエル!!」

「はいっ!?!」

「こつちに来い」

急に千冬に呼ばれ俺はビクビクしながら痺れる足を我慢しながら千冬の前に立つた。

そして……

パンツ!!

「っ!?!」

いきなり頬を打たれた。頬にびりびりと痛みが広がるのを感じた。

「何故打たれたかわかるか?」

「……」

千冬の顔は変化こそしないが目だけは雄弁に語っている。

何故あんな無茶をしたのか?何故あんな自殺行為をしたのか?つとそして彼女の目は深い怒りと悲しみに満ちている。

「……ああ」

「なら、もう二度とあのような事はするな。分かったな?」

「りょーかい」

「それと……」

「??!まだなんかあんのか?」

千冬は先ほどまでの表情からは一変してニヤリと意地の悪い笑みを浮かべて俺の右腕を軽く握った。

「イツ ?!?!?!?!」

「やはりな……折れているだろう?その右腕」

ええっ!?!つと俺の後ろで正座している一夏達と千冬の隣にいる真耶ちゃんが驚きの声を上げた。

「お前と織斑の戦闘を見ておかしいと思っていたんだ。あの時福音

の背中を切り裂いた時、お前は少しだが右腕を庇っていたからな。それにお前ならあのまま連続して攻撃を加えられたはずだ」

「あ、あらら〜・・・き、気付いてらしたんで？」

「当り前だ馬鹿者」

ガツンツ！

「あだつ！？」

け、怪我人に本気の拳骨とは容赦ないっすね・・・姉御。

「フンツ山田先生。この馬鹿デュオの治療を頼みます。他の者達はしつかり水分補給をしる。夏は突然体調が悪くなったりするからな・・・ああそれと・・・と千冬がじーつと水分補給をしている俺達の方を睨んできてたが、やがて一言。

「しかしまあ、よくやった。全員よく無事で帰って来たな」

「え？あ・・・」

「へへっ・・・」

「さ、マックスウエル君はこっちで腕の治療をしますね？」

「って真耶ちゃん。医療資格持つてんの？」

「ええ、コレでも先生ですから！」

えっへんと胸を張るとそのデカメロンが大きく揺れた。

ああ、治療中にその胸に触れても事故で済むよな？

そんな事を考えていると・・・

ゾクツ！！

「っ！？」

猛烈な殺気を感じ慌てて振り向いてみると三人の鬼がこちらを見ていた。

「浮気者め・・・」

「どつやら、更に罰則を与えた方がいいみたいだな？」

「・・・(ニツコリ)」

ラウラさん、俺はまだ結婚してないぜ？それと姉御、これ以上罰則喰らったら死んじまうって、それとシャルロットさん、頼むから何か言ってください、それに目が笑ってないからー！ー！？

そのまま俺は三人に睨まれびくびくしながら別室に移った。

あの後、治療が終わり右腕にギプスをはめて包帯で吊るした状態で俺はとある場所に向かっていた。

「よお、お二人さん。いい月夜じゃねえか？」

「デユオ・・・」

「やあ、死神くん」

俺が辿り着いた場所に千冬と篠ノ之束がいた。千冬は俺の登場に多少驚き、柵に腰掛けた束は此方を向き笑いかけた。

「俺がここに来た理由はわかってんだろ？」

「うん。おじーちゃんの事だね？」

「・・・ああ」

「・・・」

俺達のやり取りを千冬は黙って見守っていた。

「あのジジイは生きてんのか？」

「生きてるよ。今も他のおじーちゃん達も、ね・・・」

「・・・やっぱり、な・・・」

束の言葉を聞き俺は驚きよりも納得した。殺しても死なねえようなジジイ共だ。あの？事件？でくたばると思っっちゃいなかった。

「あんまり驚かないね？」

「ん、ああ。あのクソジジイ共がんな簡単にくたばると思っっちゃいなかったからな・・・」

「ふん」

俺の言葉に束はあんまり関心がないのか足をブラブラとさせながら夜空に浮かぶ月を見ていた。

「それより、帰ったらあのクソジジイ共に伝えておけ」  
「??？」

「必ず殺しに行つてやる。だから」

勝手にくたばんなよ？

「……………」

「フツこの天才束さんを伝言板代わりに使うなんて、なかなかやるねえ死神くん？」

「ハッ！んな褒めんなよ。照れるぜ」

「褒めてないだろうが……………」

姉御の呆れた様なツツコミが返つてきたが今は無視。

「ねえ二人とも。今の世界つて楽しい？」

「そこそこだな」

「そこそこなんだ。じゃあ死神くんは？」

「おれは……………」

突然の束の質問に俺は一瞬考えると微笑し、

「まあ楽しいんじゃない？」

「どうして疑問形なの？」

「だってよぉ俺はまだ世界の全部を見て回ってないんだ。それに今の世界も捨てたもんじゃねえ、現に俺はISがあつたからこそして生きてられんだから……………」

「フツ……………そうなんだ」

俺の言葉に束を笑みをこぼすと岬に風が吹きあがり、一度強くうなりを上げた。

「……………」

その風の中、束は何かを呟いたが風の音で良く聞こえなかった。そして、束は消えた。

「デュオ」

「ん？なんすか、姉御？」

束が消えると千冬はため息を吐きながら、こちらに話しかけてきた。

「一度しか言わないから良く聞け」

「??？」

頼むから、もうあんな事はするな・・・

それは普段の彼女から想像もつかないくらい弱弱しいものだった・・・。

「・・・ああ、もうしねーよ。これ以上女の悲しい顔を見るのは  
沢山だからな」

「・・・そうか」

千冬はそれつきり話さなくなってしまった。俺もこれ以上何もいう  
つもりは無いので静かに空を見上げた。

(今夜は満月か・・・)

満天に広がる星の煌きと淡い月の輝きがとても幻想的だ。

「ところで、デュオ」

「？何すか、姉御？」

「夜に旅館を抜け出すのは禁止だと言っ事は知っているよな？」

「・・・(滝汗)」

この後、旅館まで千冬に強制連行+鉄拳制裁を喰らったのは言うまでもない・・・。

俺怪我人なんだけどなあ……

「よお、一夏。生きてるか？」

「なんとかな〜」

朝、臨海学校も終わり帰りのバスの中で俺と一夏はボロボロの状態だった。あの後、姉御に旅館まで強制連行された後、俺を探していたシャルとラウラに見つかり姉御と一緒に説教を喰らった。流石に三人がかりは無いだろお……。そしてどうやら一夏も俺と同じように無断で旅館を抜け出し篁といひ雰囲気まで行っていた所をセシリアと鈴に見つかり命がけのリアル鬼ごっこをして、姉御に見つかり大目玉をくらった。

「あ〜……すまん。誰か、飲み物を持ってないか？」

どうやら一夏はかなりしんどそうだな。しかし帰ってきた答えは、

「知りませんわ」

「自分で調達しろ」

「ごめんね。デュオにあげたのが最後なんだ」

一夏が期待を込めた目でこちらを見てくるが、

「わりい、さつき全部飲んじまった」

俺の言葉に絶望し、最後の望みを込めて篁を見つめるが、

「な、なにを見ているか！」

ボツと顔を赤くしてそっぽを向いてしまった。

「あ〜ドンマイ」

「う〜……」

慰めてやるが一夏はぐったりとして呻いたまま動かなくなってしまった。

(あとで、何か買ってやるか?)  
(そうだね。流石に可哀想だし・・・)  
見かねた俺は、シャルに目配せしシャルも意図を読んだのか頷いた。

「うー……しんど……」

「い、一夏さんっ」

「はい……?」

現在バスはパーキングエリアに止まっており、各自で昼を済ませなきゃいけないのに一夏は不運にも財布を忘れてしまった。これぞ踏んだり蹴つたりだ。

「ねえ、織斑一夏くんっているかしら?」

「あ、はい。俺ですけど」

二人が声を発すると同時に、バスに入って来た見知らぬ女性が近づいてくる。

大体二十歳といったところだろうか。格好のいいブルーのカジュアルスーツを着込んでいる。開いた胸元から除く胸のふくらみが大人の女の色香を漂わせている。

「君がそうなんだ。へえー」

「あ、あの、あなたは……」

「私は『ナターシャ・ファイルス』。『銀の福音シルベリオ・ゴスベル』の操縦者よ」

「え?」

予想外の事に一夏は困惑しているとナターシャは一夏の頬にキスをした。

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う……。?」

「じゃあ、またね。バイ」

「は、はあ……」

ひらひらと手を振りながら去っていくナターシャを一夏は呆然と見送るが、すぐさま不穏な気配を感じて後ろをゆっくり振り返ると、

「一夏さんは行く先々で幸せいっぱいですわねえ」

「謝ろうと思つて来てみれば……またなの？」

「はっはっは」

すたすたと歩いて来る三人の乙女<sup>おに</sup>。

「……はい、どうぞ！」

全力投球の五百ミリペットボトル×3が一夏に直撃した。

「だから、ラウラ。何でわざわざ男子便所にまでついてくんだよ？」

「？何を言っている??その腕ではまともにできないだろう?だから夫である私が手伝つてやろうと言つのではないか。それに怪我をした嫁を看護するのは夫の務めだ」

「いや、ラウラ。何度も言つけどな、俺は嫁じゃないからな」

「フフツでもいきなりラウラがデュオと一緒に男子トイレに行った時はビックリしちゃったよ」

「笑い事じゃねえよシャル。こっちはかなりヤバかつたんだからな」  
一方、デュオとシャルとラウラはパーキングエリアにつくと一夏の飲み物を買うついでにトイレを済ませようとした所、ラウラが男子トイレにまで突入し一混乱があつたがなんとか収まり、デュオは一気に疲労が押し寄せてきた感じがした。

「あらあら、両手に花なんて羨ましいわね、デュオ」

「誰？」

「誰だ？」

「よう。久しぶりだな、ナタル」

三人はバスから出てきたナターシャとぼったり出くわし、シャルとラウラは警戒しながら彼女を睨むがデュオだけは一步前に出て笑いながら挨拶をした。

「さつき白いナイトさんに会って来たわ。まだまだ若いけどイイ男になるわね」

「おいおい、いいお所なら目の前にもいるだろ？」

「フツツそうね」

デュオとナターシャのまるで恋人の様なやり取りに彼の後にいるシャルとラウラは面白くなさそうに段々と表情を険しくした。そして、

「ちゅっ・・・」

いきなりナタルはデュオの頬にキスをした。しかも、かなり唇に近い位置でしたため傍から見れば唇にキスをしたようにみえた。

「ん・・・っていきなりなんだよ？」

「フツツこれはお礼よ、優しい死神くん。縁があつたらまた合いますよ？」

そうしてデュオ達の横を通り過ぎ、最後にシャルとラウラに頑張つてねとエールを送るとそのまま去っていった。

「デュオ・・・」

彼女達はどうしてあの女性があんな事をして、しかもした直後にエールを送ったのか理解できない。しかし、今はそんな事よりも・・・

「ん？どうした二人と、もごっ！？」

目の前でにやけている馬鹿<sup>デュオ</sup>の腹と顔に鉄拳を喰らわせなくちゃ気が済まない。

くオマケく

「ググツ・・・いつてえ〜アイツ等あ〜おもいつきしやりやがって・・・」

「デユオ・・・」  
「ん？どうしたんすか姉御・・・って、なしてそんな怒っているんでらっしゃいますか？」

「なにを言っている？私は怒ってなんかいないぞ？」

「嘘だ！だって滅茶苦茶笑顔なのに目が全然笑ってないもん！」

「所でデユオ・・・」

「な、なんでしよう・・・」

「白昼堂々あんな行為をしたんだ。まだまだ元気があるみたいだな？」

あんなこう言ってナタルのアレか？

「い、いや、実は結構ヤバイ目かな〜って思ったり・・・」

「大丈夫なんだろう？」

「ハイ、ゲンキイツパイデス」

無理です。あんな殺す笑みで迫られたら肯定するしかねえじゃねえか・・・！！

「では、帰ったらお前には懲罰用のトレーニングに加えグラウンド十周」

「・・・（ガクツ）」

どうやら俺は生きて夏休みを迎えられなくなつたみたいだ・・・

チーン



死神と臨海学校、完結編へ決着、戦いの終わりと日常への帰還へ（後書き）

アンケート結果ですが

なんと、シャルと楯無とハーレムが同率の一位という結果に終わりました。

この結果はハッキリ言って作者にとっては完璧に予想外でかなり驚いています。

ですので、さんざん考えた結果、基本はハーレムで行きシャルと楯無は個別endで話を分けようかと思っています。

そして、千冬とラウラに対してはIF で小話に載せようと思います。

アンケートに答えてくださった皆様に深い感謝を・・・

それでは、次回もお楽しみに・・・

**死神と期末テスト〜夏休み編突入！の前の最大関門〜（前書き）**

今回はIS学園の期末テストについて書きました。

原作ではそういった描写は無かったので、つい・・・

点数については自分の独断と偏見です。

## 死神と期末テスト〜夏休み編突入！の前の最大関門〜

夏休み、それは学生にとって最も待ち遠しいモノ。  
夏と言えば、海、水着、お盆、夏祭り、花火大会、なまじetc。  
しかし、その前に俺たち学生にとっては巨大な壁が立ちはだかる！  
ある意味福音よりも恐ろしく、福音よりも手ごわい存在！  
それは……！！

「おい、一夏。急に土下座なんかしてどうした？」  
「頼む！勉強を教えてくれ！！」

それは期末テストだ

「はい？」

いきなりの出来事に俺はしばし思考が止まってしまったが、直ぐに  
ああ、なるほどと納得してしまった。

事の始まりは臨海学校を終えて次の週の月曜日のSHRに遡る。

〈回想〉

「諸君。臨海学校はご苦労だった」

朝のSHRは珍しく千冬が担当していた。何時もは真耶ちゃんにまかせっきりの筈なのに珍しい事もあったもんだ。

スパンツ!

「っくくく!?!な、なにを・・・?」

「今失礼なことを考えていただろう」

「そ、そんなわけ、無いじゃないっすか」

「ほう・・・」

「・・・ゴメンナサイ」

「よろしい」

ううつ・・・千冬の無言の圧力がマジで怖え。

つーか一夏、その憐みの視線を止める。本気で泣けてくるから・・・

「それでは来週の期末テストの話だが・・・」

期末テスト?つてあくもうそんな時期か・・・

「最初に言っておくが、確かにIS学園はISを専門的に教えているが貴様らの本分は学生だ。ISの専門知識だけでなく、基礎知識も備え付けてなくては社会に出た時に役に立たない」

つまりは・・・と千冬が俺たち全員に睨みを利かせると、

「今度の期末で一つでも赤点を取っていたものがいたら、夏休みは補習だけで過ごす覚悟をもっておけ」

それだけ言つと千冬はSHRを終わらせ教室を出ていった。そして、前の隣の席にいる一夏はこの世の終わりの様な顔をしているのが妙に印象的だった。

く回想終了く

で、昼休み。俺はいつものメンバー昼食を取ろうとした時、いきなり一夏が土下座張りに頭を下げてきたのだ。

「で?いきなり勉強を教えろってのはどういう意味だ?・・・まさかお前・・・」

「し、仕方ないだろう！ISの専門知識とか訓練とかでろくに勉強できなかったんだから！」

「一夏、それ言い訳になんないわよ」

俺達のやり取りを黙って見ていた鈴が割って入る、

「そうだ。そもそも、最初にお前が必読と言われた参考書を捨てたのが悪いのだろう」

「それに、ISの訓練は私達も遅くまで一緒にやっていますのよ」

「それに、遅くまで訓練って行っても学業には支障をきたさないレベルでやってるから予習復習はちゃんと出来るよ？」

「フンツ！きちんと自己管理ができないとは・・・教官が聞いたら嘆いてしまうぞ」

「ぐう・・・」

「おいオメエらそろそろやめてやれ。一夏のライフはもうゼロだぞ」  
第達の正論に一夏は精神的にグロッキーになってしまった。

「ったく・・・仕方ねえ。俺もまだ腕の怪我が治っちゃねえし勉強ぐらいなら見てやってもいいぞ」

そうなのだ。あの事件から数日もたっているのに一向に腕の骨折が治らないのだ。それも腕だけではなく制服で隠れているが胸の傷も完治していない。

何時もなら、この程度の傷は二、三日で完全に治るのにな・・・。

「本当かつ！？」

「ああ、ウソはいわねえよ。んじゃあ、放課後、俺の部屋で勉強会だな。シャル達も一緒にどうだ？」

「うん。僕はそれでいいよ」

「うむ。嫁の手伝いをするのも夫の務めだしな」

「ふ、ふんっ！ま、まあ仕方ないな。幼馴染みが補修など不名誉だしな！」

「そ、そうね！まあどうしても言うなら参加しなくてもないけど！？」

「そ、そうですわね！仮にもクラス代表が補修などクラスの恥です

わ！ここは私が直々に指導しますわ！」

「あゝはいはい。ツンデレツンデレ」

シャルとラウラは二つ返事でOKを出し、残りの三人も本当は嬉しくいせに口では嫌々と言っているが顔がにやけているので全然隠せてない。

「んじゃあ、今日の放課後。俺の部屋に集合って事で。あ、あと全員勉強道具と中間テストを持ってこいよな。だれがどの科目を一夏に教えるか決めるからよ」

そんなこんなで放課後俺の部屋。

「・・・で？何だよ一夏これは？」

「え、えつと・・・」

今俺はかつてないほど苛立っている。何でかって？それはな・・・

「ちゅ、中間テストの答案です・・・」

「んな事は聞いてないんだよ。なんで、こんなヒデエ点数なんだよ！？」

一夏の点数が思った以上に悪いんだよ！！

以下、一夏の点数

国語・古典 40点

数学 36点

生物 30点

物理 45点

社会（日本史・世界史） 31点

英語 30点

IS（筆記） 60点

IS（実技） 81点

「お前、これ・・・よく姉御何も言わなかったな・・・」

「ハハツ・・・千冬ねえにはこの後大目玉食らったけどな・・・」

「笑い事じゃねえよ・・・」

俺は頭痛を抑えながらこの一夏<sup>バカ</sup>を睨めつけた。

「つーか、何でこんな点数が悪いんだよ！赤点は無いけど、全部ギリギリじゃねえか！しかも、ISの科目以外全部50点以下ってどんなミラクルだよ！！」

「うるせー！コレでも必死にやった結果なんだよ！」

「ま、まあまあ二人とも。その辺で抑えて、ね？」

取っ組みあいそうになった俺達をシャルが仲裁し、なんとか落ち着いていたが俺は頭を掻きむしりながらこれからの事を考えた。

「しゃーねえ。一夏のバカが予想以上に酷いんで当初の予定を大幅にかえつか・・・」

「ぐっ・・・」

俺の言葉に一夏<sup>バカ</sup>が唸り声を出すが無視。

「つーわけで、一夏の特別家庭教師を紹介する」

国語（古文・漢文）

風鈴音

「まったく、一夏ったらホント馬鹿ね（授業中は一夏と二人つきり！！）」

英語

セシリア・オルコット

「まあ、この科目は私の本場ですか私しかいないでしょう！」

数学

シャルロット・デュノア

「え、えっと・・・頑張ろうね一夏」

社会（世界史・日本史）

篠ノ之箒

「ふ、ふん！まったくだらしがないな一夏！（一夏と二人つきりで授業！）」

IS（筆記・実技）

ラウラ・ボーデヴィツヒ

「ふん、嫁の頼みだから仕方ない（終わったら、嫁のご褒美）」

化学（生物・物理）

デュオ・マックスウエル

「つーか、このメンバーが教えて九十点以下だったら、お前ここに  
いる全員に奢りな」

「悪魔かお前は！」

「悪魔じゃない死神さ」

以上、一夏<sup>バカ</sup>学力upスペシャルチーム。若干数名邪念をもった奴も  
いるが気にしない方向で……。

「そ、それより皆は勉強教えるぐらい頭がいいのか？」

「馬鹿にすんなあー！ー！ー！ー！」

「ぐぶおっ！」

なめた事口にするバカにドロップキックを喰らわせ、前回の成績順  
位表を突きつけた。

「見ろ！」

「ん……なあ！？」

以下、成績順位

20位

篠ノ之箒

16位

ラウラ・ボーデヴィツヒ

15位

風鈴音

10位

セシリア・オルコット

5位

布仏本音

3位

シャルロット・デュノア  
2位

デュオ・マックスウエル

「な、なにー！！？デュオが2位！？しかもほんさんが5位って・・・」

「一夏、それは言っちゃダメだよ」

「え、なんで？」

シャルの言葉に疑問をもった一夏だが、彼女が後ろを指さし直ぐに理解した。

ずーん・・・

すっごい勢いで落ち込む筈だった。

「俺もそれなりに付き合いは長いつもりだったんだが、まさかアイツがここまで頭いいなんてな」

「あ、アハハハッ・・・」

俺の言葉にシャルも苦笑しながら冷や汗をかいていた。

「おっし、んじゃ始めるぞ。お前ら何時までも落ち込んでないでさっさと勉強始めんぞ」

何時までも落ち込んでいる筈達を叱咤し、早速勉強会をはじめた・

の前に

「とりあえず、次の期末は一週間後。幾ら時間があるからと言って油断はできねえ。一夏の馬鹿さ加減も考慮すると短いくらいだ。つ

ーわけで・・・」

「？」

俺は制服の内ポケットに腕を突っ込んで、模造紙を取り出した。

「相変わらずどうなってるんだよ、お前の内ポケット」

「一夏、気にしたら負けだよ？」

「流石は私の嫁だな」

「一夏さん、わたくしのメイドのチェルシーもアレぐらいできますわよ！」

「セシリア、そういう問題じゃないってば」

「所でデユオ。その模造紙は何なのだ？」

「ん、これか？コイツはな・・・」

俺は手にある模造紙を開き壁に貼り付けた。

「一夏<sup>バカ</sup>学力強化スケジュールだ！」

「……………」

「???どうしたみんな？」

いきなり黙り込む皆に俺は首を傾げた。

「あ、あの〜デユオ？」

「何だシャル」

「それは何？」

「なにつて・・・」

シャルが指さすのは模造紙に書かれた内容をもう一度見た。

月曜日〜金曜日

9時半〜17時まで学校（休み時間も勉強）

18時〜6時まで勉強（夕飯の時間は30分）

5時〜8時まで睡眠

土日

8時〜試験当日まで勉強

「何か問題があんのか？」

「……………」  
「本気で不思議がつてるっ!?!?」「……………」

何故かみんな驚いている。

「ちよ、デユオ!いくらなんでもそれはダメだって!」

「何でだ、普通だろ?」

「どこがよ!あんだ、遠まわしに一夏殺す気!?!?」



アレは殺す笑みだった……。  
期末を終えた一夏の感想。

と言う訳で期末テストまでの一夏にとって地獄の一週間は一夏がとも形容しがたい状態になってしまったが大して問題じゃない。というか、うちの作者が高校の内容を覚えてるわけないだろ？だからその描写は小話でな。  
ん？結果はどうなったかって？そりゃ勿論無事に終わったぜ？  
以下その時の順位

- 1位 デュオ・マックスウエル
- 3位 シャルロット・デュノア
- 4位 布仏本音
- 6位 セシリア・オルコット
- 7位 ラウラ・ボーデヴィツヒ
- 8位 風鈴音
- 10位 篠ノ之箒

20位 織斑一夏

まあ、本人は（泣いて）喜んでたみたいだし、前の順位と比べると全体的に上がってるからよしとするか。

死神と期末テスト〜夏休み編突入！の前の最大関門〜（後書き）

次回から夏休み編に入りたいと思います。が、その前に少し休載しようかな〜と思っております。

その辺は活動報告で・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1222r/>

---

インフィニット・ストラトス～死神と呼ばれるIS～

2011年12月27日23時41分発行